

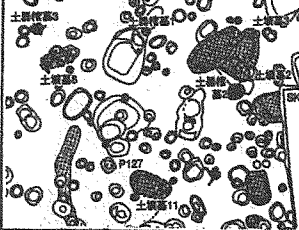
埋蔵文化財調査報告書44

玉ノ井遺跡（第3・4次）

2003

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書44 正誤表

訂正箇所	誤	正
2頁-11行	面しては急斜面	面して急斜面
2頁-14行	段丘西へ向かう小さな谷の谷戸	段丘上を西へ向かう小さな谷の谷頭
2頁第1図	断天山古墳	断天山古墳
3頁第2図	大矢雅彦ほか／調査・編集 1979『庄内川治水地形分類図』建設省中部地方建築局庄内川工事事務所をもとに作成	
5頁-12行	台地の東側、波食台	台地の西側、波蝕台
7頁-9行	東半部を東半区、西半部を西半区	東半分を東半区、西半分を西半区
16頁-4行	後生の生活活動	後世の生活活動
16頁第11図		
21頁-13行	写真45のように	写真13のように
22頁-10行	すぐ上面に上面に	すぐ上面に
26頁-6行	貝の分布は認められず、	貝の分布は認められず、
29頁-25行	人骨にともなう土坑	人骨にともなう土坑
34頁-2行	開始した直度、	開始した直後、
34頁-5行	人骨の取りはずしの際、	人骨の取りはずしの際、
36頁-11行	土器片しかれて	土器片がしかれて
38頁-13行	無紋の土器で	無文の土器で
40頁-15行	G3に位置する	G8に位置する
49頁-2行	縄文時代晩期中葉	縄文時代晩期前葉～中葉
49頁-13行	第2種：二枚貝縄文条痕調整	第2種：二枚貝条痕調整
50頁-27行	土器棺墓13(SK15)	土墳墓13(SK15)
52頁-20行	安行3b	安行3a～3b
52頁-29行	底部は後家庭状	底部は墓筭底状
52頁-35行	第5群の順に	第V群の順に
53頁-12行	縄文、擬縄文なしで沈線、ないし	縄文・擬縄文なしで、沈線ないし
53頁-13行	平行沈線を3状巡らせる	平行沈線を3条巡らせる
54頁-2行	三叉文上に	三叉文状に
54頁-7行	安行3式平行	安行3式併行
54頁-23行	無紋土器である。	無文土器である。
94頁-33行	31はサヌカイト製の	31は粘板岩製の
98頁-40行	石鏃	石剣
98頁-40行	サヌカイト	粘板岩
109頁-14行	須恵器には盤(第 図44)	須恵器には盤(第57図44)
119頁第1図	調査区北西のラインがX=-96390.000、Y23715.000	
122頁第3図	調査区北西のラインがX=-96390.000、Y23715.000	
132頁-8行	依存状況はあまり	遺存状況はあまり
161頁-20行	以降の脇の	遺構の脇の
161頁-28行	土墳墓1は	土器棺墓1は
162頁-3行	谷戸	谷頭
162頁-6行	新宮	真宮
162頁-8行	認められ	認められ
162頁-13行	そのた土墳墓の	そのため土墳墓の
162頁-20行	途中で滅失して滅失して	途中で滅失して
162頁-24行	出土してない	出土していない
162頁-24行	墓塚で無い	墓塚でない
164頁-9行	下内田遺跡	下内田貝塚

埋蔵文化財調査報告書44

玉ノ井遺跡（第3・4次）



2003

名古屋市教育委員会



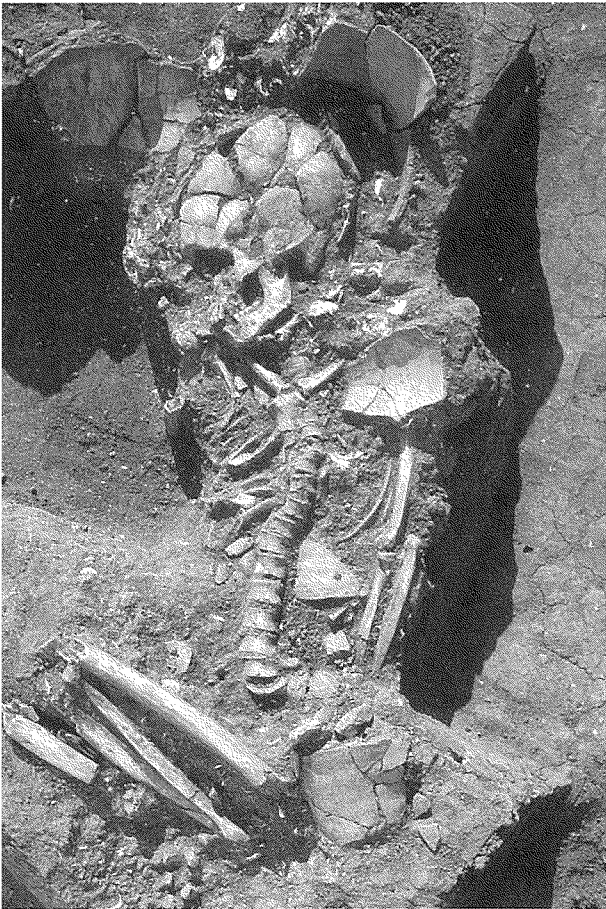
1 東半区全景（北東から）



2 西半区全景（東から） 奥の森が断夫山古墳



3 土壙墓 2 および土器棺墓 2



4 土壙墓 8



5 土壙墓10



6 土壙墓 6



7 土壙墓 4



8 土器棺墓 1



9 土器棺墓 2



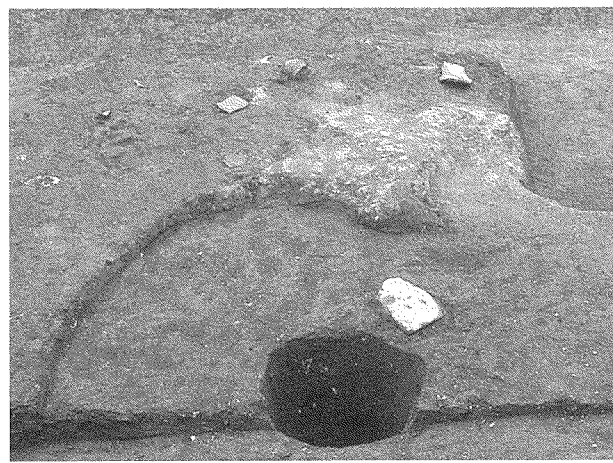
10 土器棺墓 3



11 带状貝層



12 SB02炉址



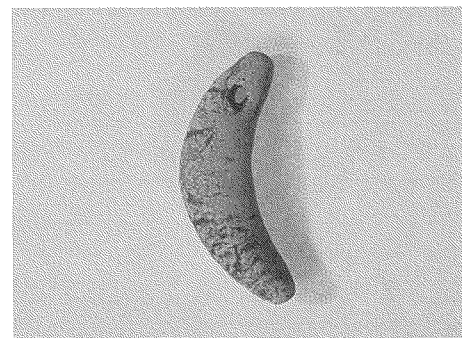
13 SB05炉址



14 出土繩文土器



15 環状土製品



16 牙製垂飾土製模造品

第13図	土壙墓 2 人骨	19
第14図	土壙墓 4	21
第15図	土壙墓 5	23
第16図	土壙墓 6	24
第17図	土壙墓 7	25
第18図	土壙墓 8 (SK52・53)	27
第19図	土壙墓 9	28
第20図	土壙墓10	30
第21図	土壙墓11	31
第22図	土壙墓13	33
第23図	土器棺墓 1	35
第24図	土器棺墓 2	37
第25図	土器棺墓 3	39
第26図	2号住居址	42
第27図	5号住居址	45
第28図	带状貝層	46
第29図	縄文土器 1	55
第30図	縄文土器 2	56
第31図	縄文土器 3	57
第32図	縄文土器 4	58
第33図	縄文土器 5	59
第34図	縄文土器 6	60
第35図	縄文土器 7	61
第36図	縄文土器 8	62
第37図	縄文土器 9	63
第38図	縄文土器10	64
第39図	縄文土器11	65
第40図	縄文土器12	66
第41図	縄文土器13	67
第42図	縄文土器14	68
第43図	縄文土器15	69
第44図	縄文土器16	70
第45図	縄文土器17	71
第46図	縄文土器18	72
第47図	縄文土器19	73
第48図	土製品	92
第49図	石器 1	95
第50図	石器 2	96
第51図	骨角器・貝製品	102
第52図	SB06	105
第53図	SB07	105
第54図	SB08	107
第55図	SD03	111
第56図	遺物実測図	112
第57図	遺物実測図	113
第58図	遺物実測図	114

カラー図版

1	東半区全景 (北東から)
2	西半区全景 (東から) 奥の森が断夫山古墳
3	土壙墓 2 および土器棺墓 2
4	土壙墓 8
5	土壙墓10
6	土壙墓 6
7	土壙墓 4
8	土器棺墓 1
9	土器棺墓 2

10	土器棺墓 3	
11	带状貝層	
12	SB02炉址	
13	SB05炉址	
14	出土縄文土器	
15	環状土製品	
16	牙製垂飾土製模造品	
写真1	調査風景 带状貝層付近	7
写真2	調査風景	8
写真3	調査風景 人骨の取り上げ	8
写真4	土壙墓 1	17
写真5	土壙墓 1 検出状況	17
写真6	土壙墓 1 上面貝層	17
写真7	土壙墓 1・2 および土器棺墓 2	17
写真8	土壙墓 2	19
写真9	土壙墓 2 近景	19
写真10	土壙墓 3	20
写真11	土壙墓 3 人骨	20
写真12	土壙墓 4 上面	22
写真13	土壙墓 4 下面	22
写真14	土壙墓 5	23
写真15	土壙墓 5 完掘	23
写真16	土壙墓 6	25
写真17	土壙墓 6 および土壙墓 7	25
写真18	土壙墓 7	26
写真19	土壙墓 8	27
写真20	土壙墓 8 近景	27
写真21	土壙墓 9	28
写真22	土壙墓 9 および土壙墓10	28
写真23	土壙墓10 人骨	29
写真24	土壙墓10	29
写真25	土壙墓10 出土土器	29
写真26	土壙墓11	31
写真27	土壙墓11 近景	31
写真28	土壙墓12	32
写真29	土壙墓13	32
写真30	土壙墓13 土層	32
写真31	土器棺墓 1	34
写真32	土器棺墓 1 棺内土層	34
写真33	土器棺墓 1 人骨	34
写真34	土器棺墓 1 検出状況	34
写真35	土器棺墓 2 上面	36
写真36	土器棺墓 2 人骨	36
写真37	土器棺墓 2 下面土器	36
写真38	土器棺墓 2 検出状況	36
写真39	土器棺墓 3 人骨 (北から)	38
写真40	土器棺墓 3 下面土器	38
写真41	土器棺墓 3 人骨 (東から)	38
写真42	土器棺墓 3 および土壙墓 8	38
写真43	東半区	40
写真44	西半区	40
写真45	2号住居址床面	43
写真46	2号住居址床面貝層	43
写真47	2号住居址床面出土土器	43
写真48	2号住居址付近完掘	43
写真49	2号住居炉址	43
写真50	西壁貝層 (2号住居址覆土)	43

写真51	5号住居址	44
写真52	5号住居炉址	44
写真53	5号住居址付近完掘	44
写真54	带状貝層 (北西から)	47
写真55	带状貝層 検出状況	47
写真56	貝層部分	47
写真57	带状貝層 (南東から)	47
写真58	SK40	48
写真59	P127	48
写真60	縄文土器 1	74
写真61	縄文土器 2	75
写真62	縄文土器 3	76
写真63	縄文土器 4	77
写真64	縄文土器 5	78
写真65	縄文土器 6	79
写真66	縄文土器 7	80
写真67	縄文土器 8	81
写真68	縄文土器 9	82
写真69	縄文土器 10	83
写真70	縄文土器 11	84
写真71	縄文土器 12	85
写真72	縄文土器 13	86
写真73	縄文土器 14	87
写真74	縄文土器 15	88
写真75	縄文土器 16	89
写真76	縄文土器 17	90
写真77	土製品	93
写真78	石器	97
写真79	骨角器・貝製品	103
写真80	SB06	104
写真81	SB07	104
写真82	SB07竈 (東から)	104
写真83	SB07竈 (南から)	104
写真84	SK04	108
写真85	SD07 (SD04)・SK48 (東から)	108
写真86	SB01・SB03 (東から)	108
写真87	SB03刀子出土状況	108
写真88	土錘(左からSK28、SD04、SD03出土)	110
写真89	SK41	110
写真90	SD03	110
写真91	弥生土器	115
写真92	弥生土器	115
写真93	円筒埴輪	115
写真94	須恵器 坏蓋	115
写真95	須恵器 坏蓋	115
写真96	須恵器 坏身	115
写真97	須恵器	115
写真98	須恵器	115
写真99	須恵器・土師器	116
写真100	須恵器 硯	116
写真101	土師器 甕	116
写真102	須恵器 把手付瓶	116
写真103	灰釉陶器 段皿	116
写真104	中世陶器 坏	116
写真105	中世陶器 山茶碗 碗	116
写真106	中世陶器	116
写真107	中世陶器 古瀬戸 瓶	116

表 1	石器計測表 1	98
表 2	石器計測表 2	99
表 3	骨角器・貝製品属性表	101

玉ノ井 4次

第 1 図	調査区全体図	119
第 2 図	基本層序	120
第 3 図	竪穴住居址	122
第 4 図	SB01平面図および土層図	124
第 5 図	SB01・09出土土器	125
第 6 図	SB06平面図および土層図	128
第 7 図	SB06出土土器	129
第 8 図	住居址出土遺物	131
第 9 図	SZ01	132
第10図	SZ01出土遺物	133
第11図	SZ02	133
第12図	SZ03平面図および土層図	134
第13図	SZ03出土遺物	134
第14図	SK01出土遺物	135
第15図	SK01平面図および土層図	135
第16図	その他の遺構および遺構外出土遺物	137
写真 1	調査風景	118
写真 2	SB01	126
写真 3	SB01床面検出遺構	126
写真 4	SB01周辺	126
写真 5	SB01・09竈	126
写真 6	SB01出土土師器	126
写真 7	SB01出土須恵器	126
写真 8	SB01出土縄文土器	126
写真 9	SB01出土石鏃	126
写真10	SB06	130
写真11	SB06床面検出遺構	130
写真12	SB06遺物出土遺構	130
写真13	SB06竈	130
写真14	SB06竈出土須恵器	130
写真15	SB06竈出土土師器	130
写真16	SB06出土須恵器	130
写真17	SB06・SX01出土長頸壺	130
写真18	SB06出土土錘	130
写真19	住居址出土遺物	131
写真20	SZ01	132
写真21	SZ01青磁出土状況	132
写真22	SZ01出土青磁	133
写真23	SZ01出土土器	133
写真24	SZ01出土土器および宋銭	133
写真25	SZ02	133
写真26	SZ03	134
写真27	SZ03出土石器	134
写真28	SK01	136
写真29	SK01遺物出土状況	136
写真30	P08遺物出土状況	136
写真31	P98出土遺物	137
写真32	SK14出土遺物	137
写真33	包含層出土遺物	137
写真34	包含層出土遺物	137
写真35	包含層出土遺物	137
写真36	縄文土器	137

測量標準の世界測地系移行について

平成14年（2002年）4月1日、測量法が改正され、測量の基準が日本測地系から世界測地系へと移行した。これにより、日本経緯度原点の原点数値が変わり、経緯度の数値やこれに基づく国土座標数値も変更された。本項は、新基準（世界測地系）実施年度の報告書作成にあたり、今後あり得る混乱に対して、基本的注意を促すことを目的に、書き留めるものである。

平成14年4月以降は、測量は世界測地系に基づいて行われることとなり、埋蔵文化財の調査に伴う測量も例外ではない。この結果、平成14年3月以前の旧基準による測量データは、4月以降の新基準によるものとは同じ数値が別地点を示すこととなった。今後は、世界測地系に統一され、旧データは、変換しなければ基本的に使用できなくなる。

本書で収録した玉ノ井遺跡では、3次調査は13年度、4次調査は14年度にそれぞれ実施したが、4次調査については3次調査時の基準点を移設し用いたため、両地点とも旧基準に準じた座標値を使用している。今後の調査や、今年度の他遺跡の調査では、今年度から実施された新基準に従って測量を行い記録を保存することになるが、旧データとの対比が必要となる場合も考えられる。例えば地図類は、旧基準で作成されたものを用いざるを得ない場合がある。平成13年度までに近接地で実施した調査との位置関係を示すには、いずれかのデータに統一する必要がある。原則的には、すべての従来記録を新基準に変換・改訂すべきであるが、膨大な作業を直ちにおこなう余裕がない。また、すでに報告書等の印刷物に掲載された記録類の使用に際しては、旧基準であることを理解し、必要に応じて変換せねばならない。

玉ノ井遺跡3次調査地点の場合は、同じ座標値の示す点（調査区南東の仮基準点）がX座標で南へ約349.088m、Y座標で東へ約271.014m、「移動した」ことになる。実際には新データの点を、旧データで作成した地図にそのまま示せば、まったく異なる位置にずれてしまう。逆に、平成13年度以前の旧基準による測量データを、新基準の地図に落とした場合、位置は北西にずれるのである。

上述のように経緯度原点の数値が変わったので、緯度・経度も当然同様に変更された。玉ノ井遺跡第3次の上記地点を例にとれば、昨年度まで北緯35度7分48秒、東経136度54分35秒であった地点は、今年度からは北緯35度7分50秒、東経136度54分24秒となった。

新・旧基準では、楕円体としての地球の形状が異なることもあり、数値変換は単純な数値の加減では無い。国土地理院によって変換方法が公開されているが、調査当時の測量方法等によっては、正確な復元（変換）が困難な場合もある。ただし、変換あるいはこれに準ずる作業を経ずに、新基準の地図に旧データの位置を、あるいは旧基準の地図に新データの位置を示せば、全くかけ離れた位置を示すことになる。

今後、平成13年度以前の測量成果（調査記録や報告書類）を用いる場合は、こうした経緯を理解した上で、何らかの処置が必要である。

玉ノ井遺跡
(第3次)



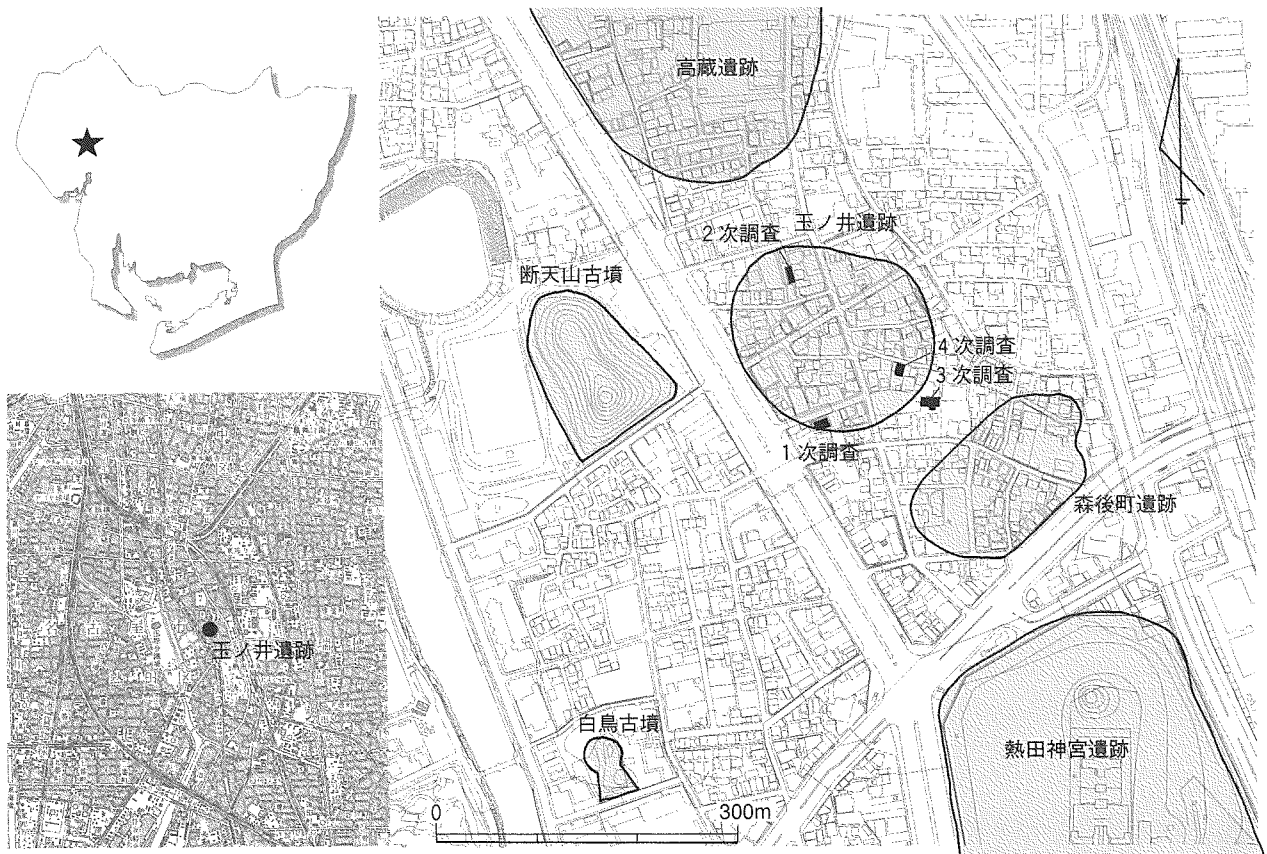
第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡周辺の自然環境

愛知県西部に位置する名古屋市は、北および西側に庄内川・矢田川によって形成された沖積地がひろがり、東には鳴海丘陵、南は伊勢湾に面して低地がのびている。丘陵から海拔0m地帯まで同じ市内であっても多様な自然環境が認められる。そんななかで市の中央部はそのほとんどが熱田台地上に立地している。熱田台地は北は名古屋城付近から南は熱田神宮付近までと南北15kmほどの長さで、広いところでは約3kmほどの細長い台地である。西側は波蝕されており東から西にむかって緩やかに低くなっている。また北から南にかけても順に下がっており、熱田神宮の門前は近世前半まで海に面していた様である。

玉ノ井遺跡は、熱田台地南端に立地している。遺跡付近の台地は、東西幅約600mをもち、遺跡はほぼその中央東よりにあたる。遺跡付近の標高は約12mを測り、遺跡の東側は標高約9mで旧精進川流域の沖積地に面しては急傾斜面をみせる。西側は標高約7mで平坦な面が300mほど続き、比高差約5mの崖で濃尾平野に面している。したがって付近では最も高い位置に立地している。

第3図に示したように、台地上にはわずかな起伏が存在しており、調査地点付近は台地上でも東側に位置するが、ちょうど調査地点付近は段丘西へ向かう小さな谷の谷戸にあたる。現在削平がすすみ微地形の読み取りは困難であるが、この谷はやや南にふれながら、台地の西側に向かって開折されていたようで、断夫山古墳の前方部脇につながっている様子である。断夫山古墳の築造にあたってこの微地形を利用して可能性も考えられる。遺跡の東側にはすぐに段丘崖に面しており、往時にはあゆち瀉に面して見晴らしのきく地形であったと想像される。縄文時代には遺跡の眼下に遠浅の干潟が広がっていたと考えられる。



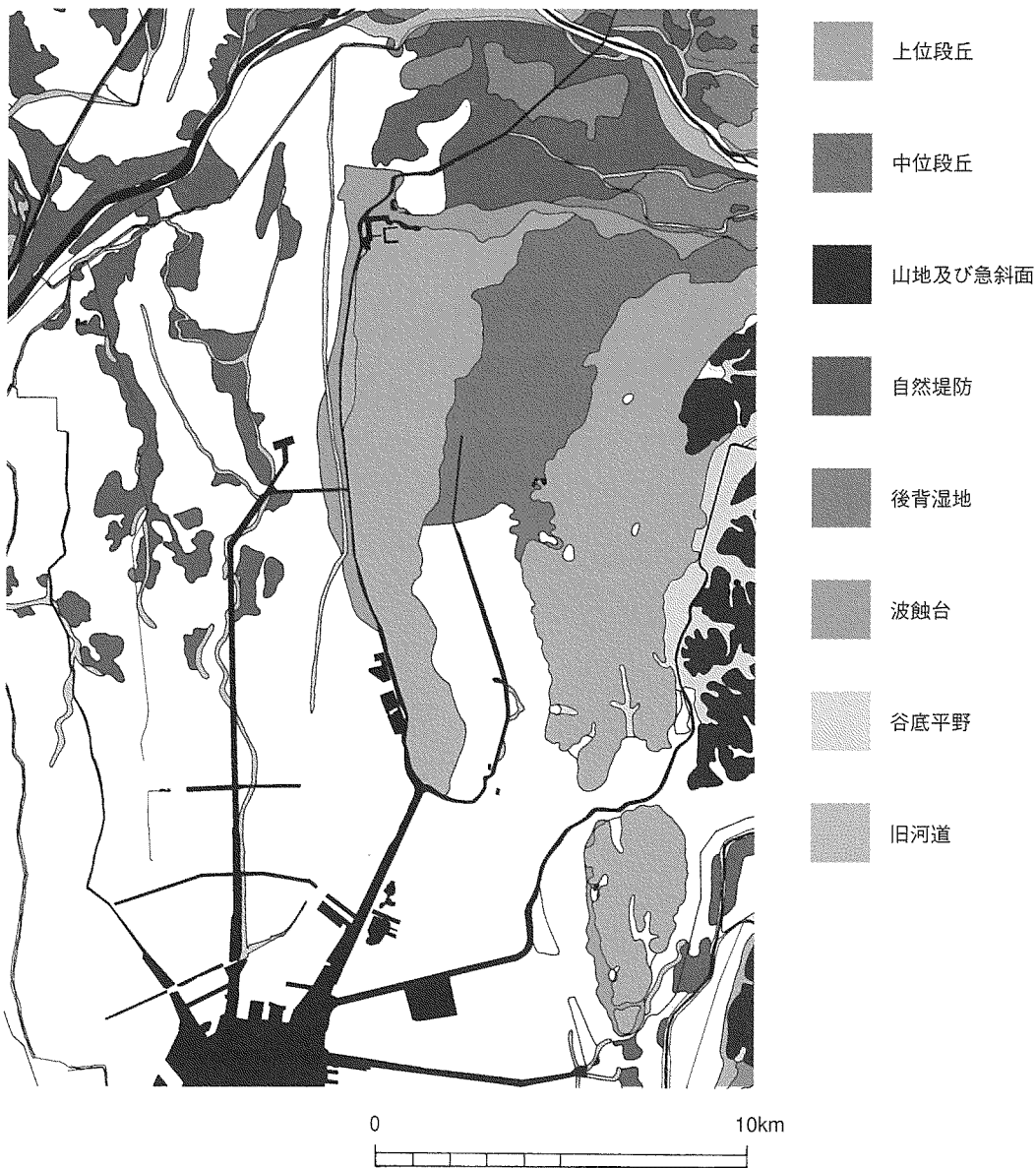
第1図 調査位置図

玉ノ井遺跡の名称のもととなった「玉の井」であるが、水質のよい井戸があったことから「玉のような井戸」としてこの地名がついたというが、縄文時代以来、東側の段丘崖付近の湧水点が生活用水として重要であったと考えられる。台地上にはこのような台地の上面に降った雨を集める小さな流れが多数存在すると考えられ、遺跡周辺でも「沢上」などの地名としてその痕跡を残している。

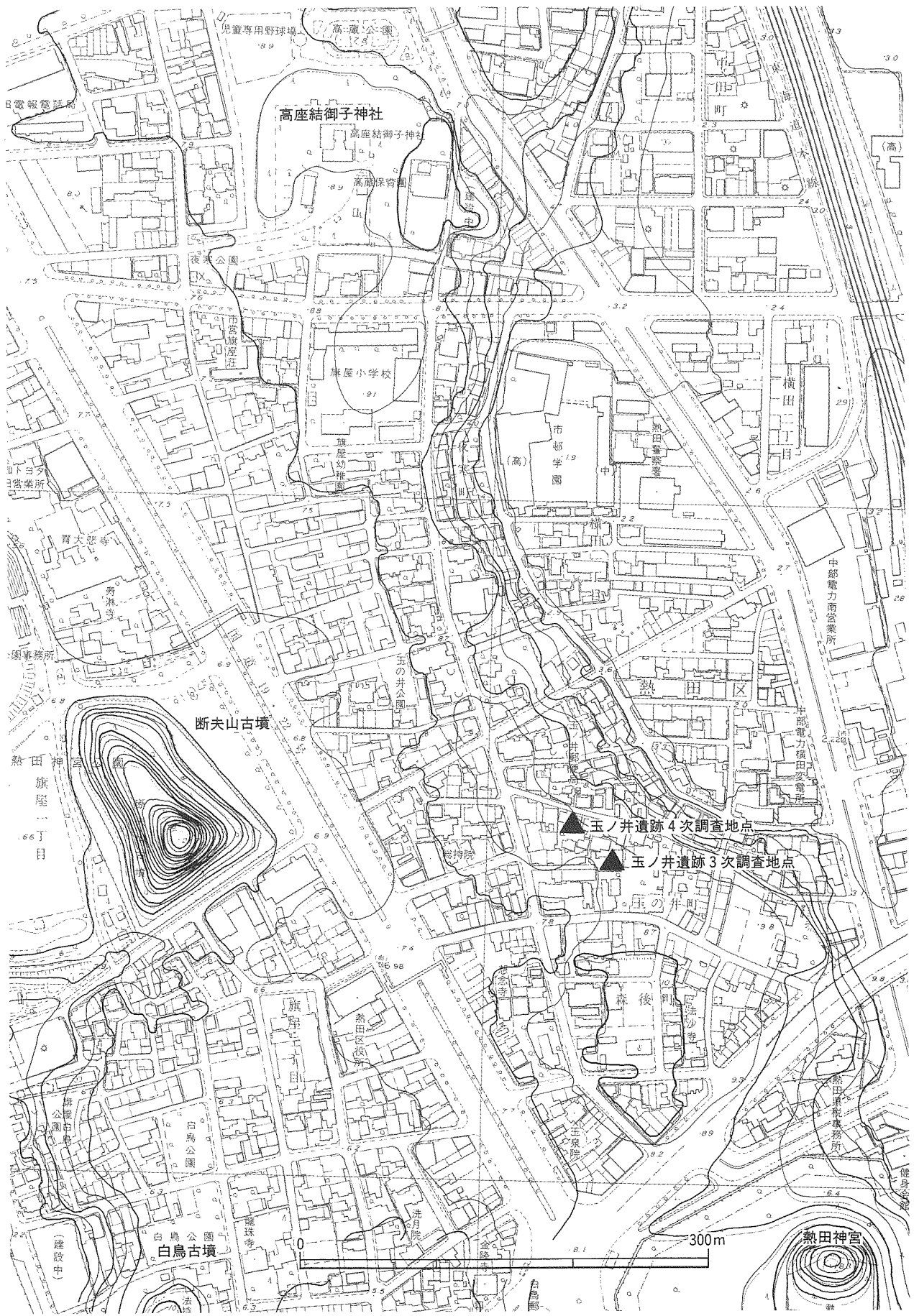
遺跡の推定範囲は、直径約190m、面積約28,000㎡であるが、北側の高蔵遺跡や南側の森後町遺跡とは約60mしか離れておらず、隣接する遺跡とも極めて密接な関係があることが想像される。

当地の南方わずか250mのところには、熱田神宮の社叢があり、近世において熱田の宮宿として栄えたところである。当地付近は名古屋城下との往来にあたり町屋が形成されていたが、明治40年に熱田町が名古屋市に編入されて以後次第に市街化がすすんでいったものと思われ、昭和戦前期にはすでに台地上は長屋が密集した状況であった。

高蔵遺跡が、明治40年に遺跡の中心部に大津通が拡幅されたおり、多量の弥生土器の出土とそれに注目した鍵谷徳三郎により中央学会に報告されたことから知られるようになり、以後考古学的な調査が行われ



第2図 熱田台地周辺の地形



第3図 遺跡周辺の地形

たことに対し、玉ノ井遺跡や森後町遺跡は、玉ノ井遺跡が1942（昭和17）年頃、森後町遺跡は1970（昭和45）年に発見されるまで宅地の中に埋もれたままであった。

第2節 周辺の遺跡

玉ノ井遺跡の周辺の熱田台地上には多くの遺跡が残されている。先述の通りすぐ北にあたる高蔵遺跡は名古屋でもその規模、内容ともに有数の遺跡である。玉ノ井遺跡に近接する旗屋小学校は高蔵遺跡の南端に位置するが、平成13・14年度中に校舎の立て替えに伴って調査が実施され、弥生時代から古代にかけての住居址と古墳などが検出され、魍龍文鏡の出土がみられたことで注目を集めた。すぐ南の森後町遺跡は調査事例は少ないが、弥生時代から中世の遺物が採集されている。南には熱田神宮が広がっているがここも熱田神宮内遺跡である。玉ノ井遺跡のすぐ西側には、東海地方の後期古墳としては最大の墳長151mの規模を誇る断夫山古墳が築造されており、周辺の白鳥古墳とともに、尾張大首長の墓域を形成している。

熱田台地上の縄文時代の生活痕跡はまれであるが、台地上の遺跡の調査を行うと、数点の破片は採集される。台地の東側、波食台に向けて下る地形の中には、台地上の遺跡から流れ込んだためか、縄文時代早期以来の遺物包含層が検出されることがある。中区の旧紫川遺跡や、豎三蔵通遺跡などがこうした遺跡である。台地上での遺構検出される遺構自体は少ないが、東区の片山神社遺跡において縄文時代中期の炉址が検出されている。熱田台地でも北側、台地の縁辺部には長久寺貝塚や片山神社遺跡などには縄文時代中期の遺跡が立地している。

熱田台地の東側、旧精進川（現在の新堀川）をはさんで同じ熱田面に対応する瑞穂台地周辺にも、縄文時代の遺跡は立地する。大曲輪遺跡では瑞穂運動場の建設にもなって前期の住居址、晩期の土器棺墓、土壙墓で構成される墓域が検出された。また、瑞穂遺跡では中期後葉の住居址が検出されている。

市域では天白川流域鳴海丘陵際にも縄文時代の遺跡は多い。上ノ山遺跡や鉾ノ木遺跡では貝塚が形成されており、同じ鳴海丘陵の縁辺には南側に雷貝塚があり、墓壙群が検出されている。

第3節 これまでの調査

玉ノ井遺跡は、名古屋市熱田区玉の井町に所在する。1942（昭和17）年ごろ、玉の井町内の民家の床下に防空壕の掘削中、人骨が出土している。北北東に頭部を向けた伸展葬であったとの報告がなされている。この地点は3次調査地点の西に広がる駐車場のさらに西側にあると考えられる。4次調査地点から西に50mほどの地点である（註1）。1951（昭和26）年頃、道路工事中に条痕の施された土器や弥生後期の土器が発見され、遺跡の状況が明らかになった（註2）。また、道路切通し断面には弥生時代後期の住居跡も見えたという（註3）。

1990（平成2）年になり、当該地に隣接する玉の井町9-38において、工事中貝層から縄文土器、石剣が出土したという情報もたらされた。これらの縄文土器は、晩期前葉のものであることが明らかになった（註4）。

名古屋市教育委員会は、1994（平成6）年、玉の井町802・803地内において第1次調査を実施した。約300㎡の調査区からは、古代に埋まった弧を描く溝、中世のクランク状に屈曲する断面形V字溝1条をはじめピット多数が検出された。主要な遺物としては、古墳時代（5世紀後半～6世紀前半）の埴輪、6世紀

後半～7世紀初頭の須恵器、7世紀後半～8世紀前半の須恵器、12・13世紀の中世陶器、14世紀後半から15世紀の中世陶器がある。中世陶器等の分析から14世紀後半～15世紀頃は、町屋があったと推定されている(註5)。

2000(平成12)年、第2次調査として玉の井町1-21において約50㎡を対象に実施した。狭い範囲ではあったが、弥生時代中期の溝、後期の溝および竪穴住居跡が出土した。このほか縄文時代晩期の土器、埴輪、古代の須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世陶器、近世頃の陶器等が出土している(註6)。

註

- 1 坂重吉「玉の井出土の人骨に就いて會員諸賢へ報告」『尾張の遺跡と遺物第44号(昭和17年)』復刻版 昭和57年 下巻
愛知県郷土資料刊行会
- 2 紅村弘『東海の先史遺跡 綜括編』1963年
三渡俊一郎『熱田・瑞穂区の考古遺跡』1981年 名古屋市教育委員会
- 3 田中稔「熱田台地の考古学資料の紹介」『ライブラリーあつたNo.89』1968年名古屋市熱田図書館
- 4 『特別展 名古屋の縄文時代 資料集』1993年 名古屋市見晴台考古資料館
- 5 『石神遺跡 玉ノ井遺跡 高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書』1995年 名古屋市教育委員会
- 6 『埋蔵文化財調査報告書37 高蔵遺跡(第26次～30次) 玉ノ井遺跡(第2次)』2001年
名古屋市教育委員会



第4図 調査区区割図

第4節 調査の経緯

2001(平成13)年、熱田区玉の井町921番地において、既設住宅を取り壊して新たに住宅を建てる計画が市教育委員会にもたらされた。当該地は、名古屋市遺跡分布図では玉ノ井遺跡範囲の東南部と森後町遺跡の間の地であったが、前述したように1990年に工事中に貝層が露呈し、縄文土器、石器が発見された地点の隣接地であった。そのため、土地所有者と協議し埋蔵文化財の調査に理解していただいたことから、発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は、約228㎡である。

調査は、2002(平成14)年1月15日から3月15日までの予定で行った。調査区は、任意にグリッドを切り、北東をG1、その南をG2と呼ぶようにし、南西G9まで計9に区画して調査を進めることとした。調査は、排土置場の都合から、調査範囲の東半部を東半区、西半部を西半区として2回に分けて実施した。

前半区は、G1～G5までで、1月24日から表土除去を開始したが、初日早々から破碎貝層と縄文土器が出土するところとなった。表土下わずか10cmで検出される破碎貝層は、東南部を中心に広がっており、部分的に純貝層の塊があった。この破碎貝層中からは古代の須恵器が出土することから、この頃に掘られ縄文時代の貝層や土層を攪乱したものであることが明らかになった。

G1とG2と境に試掘溝をあけたところ、純貝層中から人骨が出土し、ほぼ完全な1体が埋まっていることが明らかになった(SK01b)。純貝層は、土坑内に廃棄されたものと思われたが、掘り込みは、ほぼ現地表に近いところからであった。これは貝類が多量に含まれていることから検出がしやすいからで、貝層を含まないような遺構は、地山面まで掘り下げ、検出しなければならなかった。貝層をのこして掘り進めていったため、日に日に貝殻の塊が地面から浮き出るような状態となっていった。

地山面での遺構検出、掘削と貝層の掘削を進めていくと、あちらこちらから人骨が姿を見せ始めた。古代や近現代の掘り込みによって削り取られ一部が欠損したものもあるが、よくその埋葬状況を知ることができた。

結局、確実なものだけで土壙墓13基、土器棺墓3基を検出した。土器棺墓には幼児骨がよく遺存していた。東海地方での土器棺墓に人骨が遺存する例は、安城市堀内貝塚、豊川市麻生田大橋遺跡等に散見されるが、土器棺墓3(SK51)ほど良好な例は稀ではないと思われる。

G4、G5では、貝層が弧状に検出され、浅い溝状遺構に貝類、獣骨、縄文土器が出土した。その性格については関心がもたれるところである。

名古屋市博物館写真技師杉浦秀昭氏には、全景及び人骨出土状況の写真撮影をしていただいた。

後半区は、G6、G7では古代の掘り込みにより地山面まで縄文時代の包含層はほとんど失われていた。



写真1 調査風景 带状貝層付近

G 8、G 9では縄文時代の包含層及び貝層を検出した。調査区北西端では良好な純貝層の塊を2か所検出した。その間は破砕貝層であったため先に掘削したところ、竈跡があり、平安時代（K90号窯式期）の住居跡であることが明らかになった。ところが、この竈跡に並んで地床炉が2箇所検出された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡の廃絶後貝類を廃棄し、その後平安時代の竪穴住居をほぼ同じ位置に構築したものであった。したがって2か所の貝層は、同一遺構内のものであった。貝層中からは、黒色磨研土器が出土している。またこの南側は、掘り込みのベースとなる黒色土であるが、この層中からは、晩期前葉の土器が出土した。

前半区同様、全景写真撮影及び住居跡について杉浦秀昭氏に写真撮影をしていただいた。

出土遺物は、縄文土器、須恵器、土師器等コンテナケース約73箱である。また、ブロックサンプルで採集した貝類のほか任意で採集した貝類等2トン車1台分がある。



写真2 調査風景



写真3 調査風景 人骨の取り上げ

第2章 調査概要

第1節 基本層序

調査地は、既存の宅地であったため平坦地である。調査地南壁の層序は、表土層は5～10cm、その下層は黒褐色土層で28～30cmを測る。この黒褐色土層は、古代の遺物包含層である。破碎貝を多く含む。縄文時代の溝状遺構は、表土直下で検出され、大半は純貝層で下位に黒褐色土が堆積する。その下位は地山ブロックを多く含む黒褐色土層で、約10cm堆積し熱田層に至る。

西半区は縄文時代のほか、弥生時代から平安時代にかけての各時期に住居址をはじめとした遺構が構築されており、地山の熱田層の黄褐色土が直接露出するが、弥生時代以降の土地利用が少なかった東半区の北よりでは、熱田層の上面にのる黒褐色から赤褐色の漸移層が検出された。その漸移層を掘り込む形で、縄文時代の遺構が構築されている。東半区の北よりの場所においては、地山に掘り込んだ縄文時代の遺構覆土はこの赤みの強い土壌もしくは黒味の強い土壌によく似たものである。土壙墓などの一部の遺構は貝や破碎貝を含んだ覆土であるが、貝を含まないピットから縄文土器の出土が多い傾向にある。

一方で、東半区の南側から西半区にかけての範囲には破碎貝がまじった混貝土層が広がっている。この混貝土の貝はハマグリやアカニシが主体で、ほとんどが縄文時代の貝層由来の物であると考えられるが、土層中には、縄文土器も一定量含まれているが、弥生時代から平安時代までの須恵器等の遺物が多い。おそらく弥生時代以降平安時代までの間に形成された破碎貝層であるといえよう。

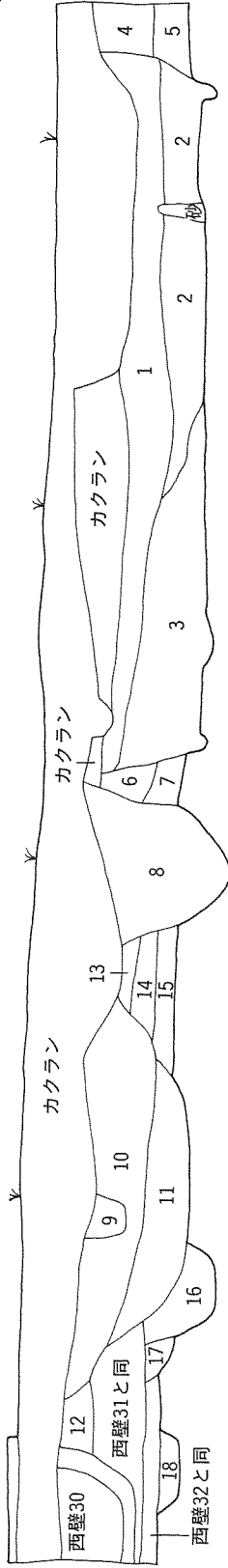
このように混貝土層が表面をバックするように広がっているため、弥生時代以降の遺構覆土中にはかなりの確率で破碎貝が含まれているといえる。逆に貝の廃棄時期は縄文時代であっても縄文時代の遺構覆土やピットには貝の混入しないものも多い。貝の含有具合が絶対の判断基準ではないが、現場段階での遺構の時期判断においては非常に有効であった。

本調査地点では、後述する縄文時代の各遺構の検出面が高いことを考えると、縄文時代以降の生活面がそれほど現在と変わっていないことがわかる。また当地点での遺構および包含層の遺存状況が良好であったことが判断できる。中世以降の生活痕跡が少ないことと、明治期以降の建物の建て替えが行われてこなかったことが、遺存状況に大きな影響を与えていることがわかる。もちろん台地のトップに近い環境で、土壌の堆積作用が低調であることを考え合わせても、現在の地表面と、縄文時代の生活面、平安時代の生活面がそれほど差をなくして存在することは非常に興味深い。

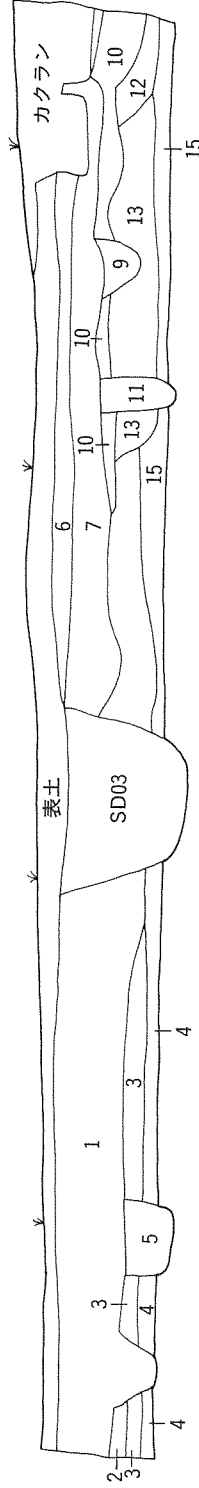
ただしこうした状況も逆に調査時には作業の進行方法の判断において、正しい判断を困難にしたのも事実である。縄文時代の遺構を他の時期と区別することが非常に困難であった。各時期の遺構検出面が同じであるということは、お互いの切り合い関係がないかぎり、検出面の違いなどから時期の峻別をつきにくくしている。先述の貝の含有具合や遺物の状況をみながら慎重に遺構の時期を決めてゆかなくてはならなかった。

調査地点全体を見渡すと、多少上面の攪乱の受け方は異なるが、概して遺物包含層や遺構の遺存状況は良好であったといえる。

第6図 土層図2

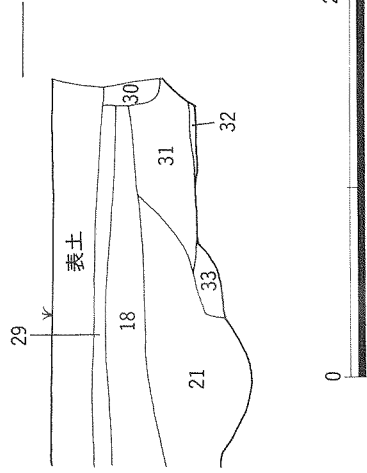
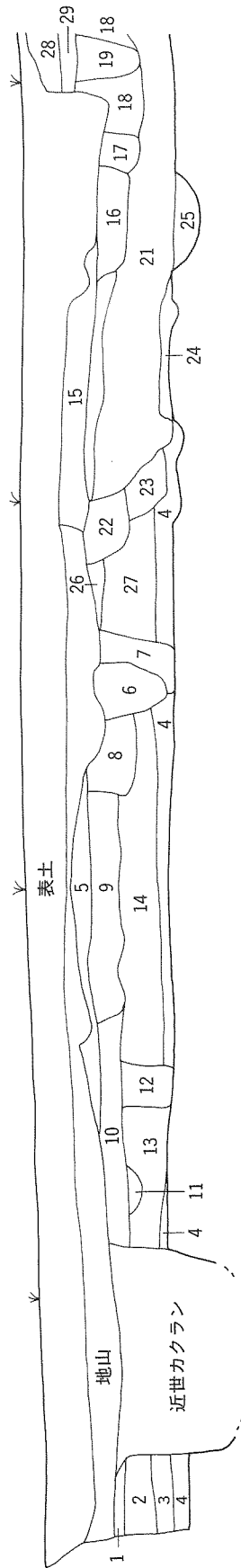


- 西半区北壁
1. 褐色土 (やや赤みがかかる) : φ 1~2 cmの地山土ブロックをごく少量含む。焼土粒をごく少量含む。φ 2~3 mmの炭化物。焼土粒をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 2. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 1~2 cmの地山土ブロックをごく少量含む。φ 2~3 mmの炭化物。焼土粒を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 3. 褐色土 (黒味がかる) : φ 1~2 cmの地山土ブロックを多く、やや明く見える土層。
 4. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 1~2 mmの炭化物の他は混入物少ない。粘性、しまりともにやややあり。
 5. 4層より黒味が強く、φ 1~2 cmの地山土ブロックを少量含む土層。
 6. 4層に同
 7. 5層に同だが、5層よりも地山土の比率が高い。
 8. 灰褐色土 : 近代の層乱れ。焼土、瓦片が多い土坑層。
 9. 褐色土 (黒味がかる) : φ 1~2 cmの目を10%ほど含む。φ 5 mmほどの炭化物粒を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 10. 褐色土 (黒味がかる) : φ 1~2 mmの炭化物をごく少量含む。ほかは、混入物が少ない土層。粘性、しまりともにやややあり。
 11. 褐色土 (黒味より明るい) : φ 1~2 mmの炭化物を5%ほど含む。φ 2~3 mmの炭化物粒、焼土粒をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 12. 褐色土 : φ 5 mmほどの炭化物。焼土粒を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 13. 褐色土 (やや黒味がかる) : 混入物少ない。粘性、しまりともにやややあり。
 14. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 5 mmほどの目を少量含む。φ 2~3 mmの炭化物粒をごくまめに含む。粘性はややあるもの、しまり弱い。
 15. 褐色土 (黒味が強い) : φ 2~3 mmの炭化物。焼土粒を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 16. 褐色土 (灰黒い) : φ 5 mm未満の細かい目を1~2%含む。その他の混入物少ない。粘性、しまりともにやややあり。
 17. 褐色土 (やや赤みがかかる) : φ 2~3 mmの炭化物粒をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 18. 褐色土 (やや赤みがかかる) : φ 2~3 mmの炭化物粒をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。



- 西半区西壁
1. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 2~4 cmの土器片を多量に含む。φ 2~3 mmの炭化物をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 2. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 1~2 cmの目を1~2%含む。粘性、しまりともにやややあり。
 3. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 1~5 cmの目を多く、少ないところ30%ほど含む。粘性、しまりともにやややあり。
 4. 褐色土 (やや赤みがかる) : φ 1~2 cmの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 5. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 1~2 cmの地山土ブロックを5%ほど含む。φ 3~5 cmの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 6. 褐色土 (黒味が強い) : φ 5 mmから3、4 cmの目を少量含む。φ 5~10 mmほどの炭化物を多量に含む。φ 1~2 cmの炭化物粒を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 7. 褐色土 (6層より黒味が強い) : φ 3~5 mmの炭化物をごく少量含む。φ 3~5 mmほどの目を少量含む。(1%未満) 粘性、しまりともにやややあり。
 8. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 2~3 mmの焼土粒、炭化物粒をごく少量含む。φ 1~2 cmの目を少量(5%ほど)含む。
 9. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 2~4 cmの目をやや多量に含む。(30%ほど) φ 2~3 mmの炭化物、焼土粒をごく少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 10. 褐色土 (黒味より暗い) : φ 1~2 mmの炭化物。焼土粒をごく少量含む。φ 5~10 mmの目をごく少量(φ 1~2%)含む。粘性、しまりともにやややあり。
 11. 褐色土 (黒味より明るい) : φ 5 mmほどの目をごく少量含む。(1%未満) φ 2~5 mmの焼土、炭化物粒を少量含む。φ 5~10 mmほどの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 12. 褐色土 (黒味が強い) : φ 5 mmから3、4 cmの目を少量含む。φ 5~10 mmほどの炭化物を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 13. 褐色土 (黒味より明るい) : φ 5 mmから3、4 cmの目を少量含む。φ 5~10 mmほどの炭化物を少量含む。粘性、しまりともにやややあり。
 14. 褐色土 (13層より明るい) : φ 2~3 mmの炭化物をごくまめに含む。他は混入物少ない。粘性、しまりともにやややあり。
 15. 4層に同
 16. 褐色土 : φ 5 mmほどの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともにやややあり。

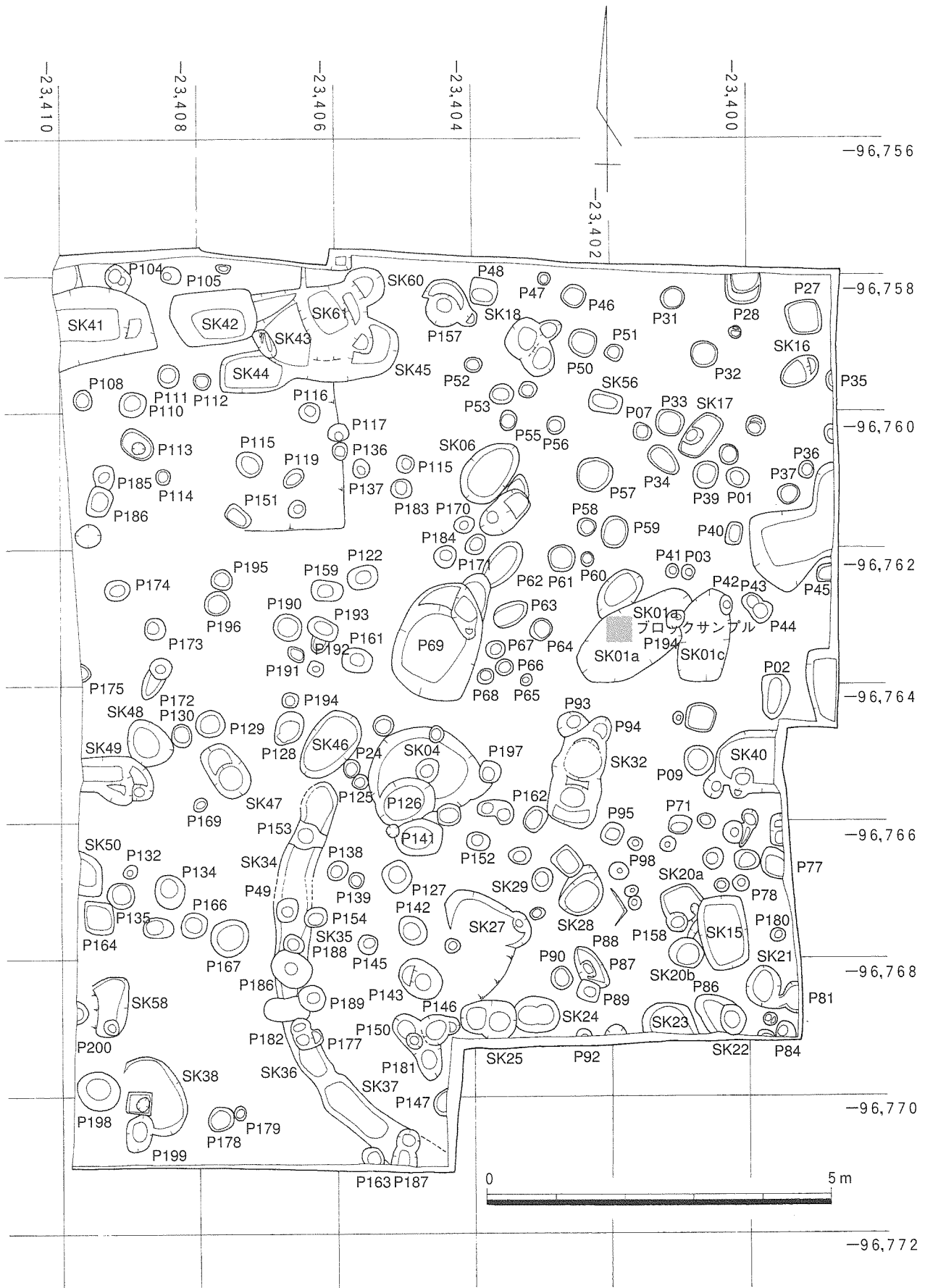
第7図 土層図



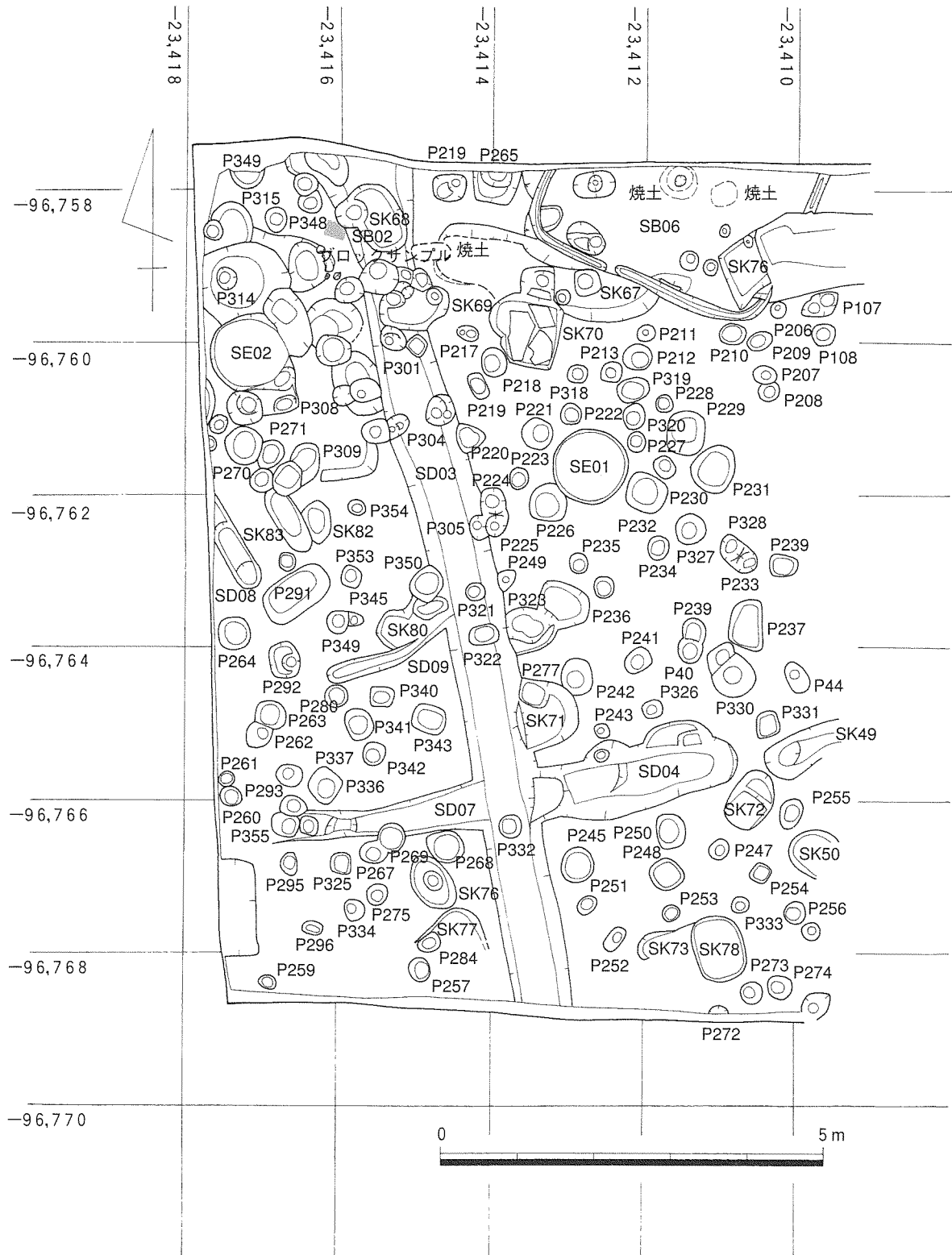
- 西半区西壁
- 1 = 南壁16
- 2 = 南壁10
- 3 = 南壁12
- 4 = 南壁15
- 5. 褐色土 (やや黒味が強い) : φ 2 ~ 3 mmの炭化物粒、焼土粒をごく少量含む。粘性、しまりとも弱め。
- 6. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 3 ~ 5 cm大の貝を多量(30%ほど)含む。土器片も含む。粘性ややあり、しまり弱め。
- 7. 褐色土 (27より明るい) : φ 1 ~ 2 cm大の貝をごく少量、1 ~ 2%含む。粘性、しまりともややあり。→SD07?
- 8. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 5 mmの炭化物を少量含む。粘性、しまりともややあり。φ 3 ~ 5 mmの貝を10%ほど含む。
- 9. (2層に類似) : φ 3 ~ 5 cm大の貝が特に多い土層 (40%以上)
- 10. (2層と同)
- 11. 褐色土 (10層より明るい) : φ 2 ~ 3 cm大の貝を10%ほど含む。粘性、しまりともややあり。
- 12. (13層と類似する) : φ 5 mmほどの貝を1 ~ 2%ほど含む。粘性、しまりともややあり。
- 13. 褐色土 (9、10層と比べてかなり黒味が弱い) : φ 5 mmほどの貝を上層を中心に1%未満含むが、全体に貝が少ない土。粘性ややあり、締まりあり。
- 14. (13層と同じ)
- 15. 褐色土 (黒味がかる) : φ 5 mmほどの焼土を少量含む。(貝無し) 粘性、しまりともややあり。
- 16. 褐色土 : 15層に類似するが、黒味が強く、焼土の量が多い。
- 17. 褐色土 (やや砂質がかる) : φ 5 ~ 20mmの貝を1 ~ 2%含む。粘性、しまりともややあり。
- 18. 褐色土 : 20層に類似するが貝が少なくない。
- 19. 褐色土 (17層に類似) : 17層と比べてφ 5 mmほどの炭化物が少量含まれる。
- 20. 褐色土 (15層と類似するが黒味が強い) : φ 5 mmほどの焼土粒、炭化物粒をごく少量含む。φ 2 ~ 3 cmの貝を部分的にごく少量含む。粘性、しまりともややあり。灰軸陶器片など多い。
- 21. 褐色土 (黒味がかる) : φ 2 ~ 3 cm大の貝 (破砕) を多量に含む。(30%) ガサガサとしてすきま多い。φ 2 ~ 3 mmの炭化物、焼土を少量含む。粘性、しまりとも弱い。
- 22. 破砕貝主体の層 : φ 2 ~ 3 cm、60%ほど、破砕貝が多い。粘性、しまりとも弱い。
- 23. 褐色土 (やや明るい) : φ 5 mmほどの貝をごく少量、1 ~ 2%含む。φ 2 ~ 3 mmの焼土粒、炭化物粒を少量含む。φ ~ 10mmの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともややあり。
- 24. 4に同
- 25. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 5 ~ 10mmの貝をごく少量 (1 ~ 2%) 含む。φ 2 ~ 3 mmの地山土をブロック状にやや多量に含む。φ 2 ~ 3 mmの炭をごく少量含む。粘性ややあり、しまり弱い。
- 26. 褐色土 (やや黒味がかる) : φ 2 ~ 3 mm炭化物をごく少量含む。粘性、しまりともややあり。22と似た土だが、貝の量が異なる。
- 27. 14層と似るが、黒味が強く、貝を少量 (φ 1 ~ 2 cm、2 ~ 3%) 含む。粘性、しまりともややあり。
- 28. 黄土 (アスファルト直下)
- 29. 地山土と漆喰の攪乱
- 30. 攪乱 (兩層ハイブなどあり)
- 31. 純貝層 - ハマグリ、アカニシなど主体
- 32. 褐色土 (黒味が強い) : φ 2 ~ 3 mmの炭化物をごく少量含む。(貝は少ない)。粘性、しまりともややあり。
- 33. 4層に同じ



第8図 調査区全体図



第9図 東半区遺構平面図



第10図 西半区遺構平面図

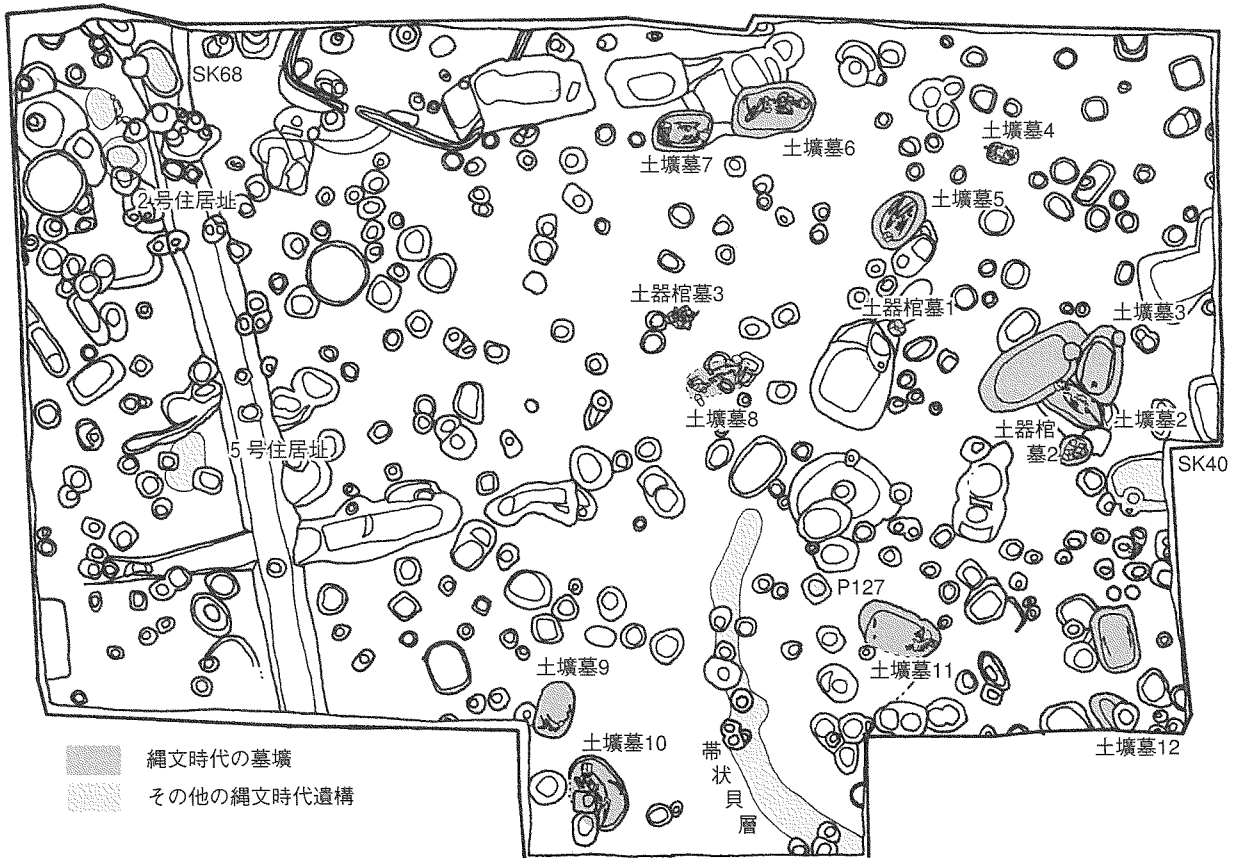
第2節 遺構と遺物

(1) 縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構が良好に残存しており、貝層が検出された。検出された貝層の大部分は後生の生活活動によって、攪乱を受けたものであるが、部分的に良好な包含層とともに、遺構が残されていた。縄文時代の遺構としては、東半区において土壙墓、土器棺墓、溝状遺構、小穴等を検出した。上面の破碎貝層の影響からか、墓壙内の人骨の残りは良好で、人骨が出土した土壙墓は13基、土器棺墓が3基検出された。このほかにも人骨の出土はみられないものの、形状から墓壙と考えられるものがいくつか認められる。また遺構に伴わない人骨も少なからず出土しており、現在までに壊されたものも含めると、かなりの数の墓壙が調査区東半に集中していたようである。墓壙以外にも東半区では帯状の貝層が検出されている。この帯状の貝層は、溝状の施設に貝が投棄されたものであると考えられるが、類例が少なく性格は不明な部分が多い。

調査区の西半では、弥生時代以降の土地利用が盛んであり、縄文時代の遺構は少ない。遺物の出土量も東半と比較して少ない。その中で、平安時代の住居址に大部分を壊されてはいるが、縄文時代の竪穴住居址、2号住居址 (SB02) を検出した。また、炉址付近のみの検出であるが、平地式と考えられる住居址、5号住居址 (SB05) も西半区で検出した。

以下、縄文時代の主な遺構について、墓壙、住居址、その他の遺構の順に述べていくこととしたい。



第11図 縄文時代の遺構位置図

1. 墓壙

土壙墓 1 (SK01a)

〔調査経緯〕 東半区表土剥ぎの際、表土上面から10cmほどの高さで、破碎貝層が広がっており、その範囲を記録しながら、包含層掘削を進めたが、G 1の南側中央に破碎貝層の範囲の中でも特に貝の集中が目立つ場所にたいしてSK01の遺構名を与えた。結果的に3基の墓壙の重複であったが、検出の契機となった貝層は、土壙墓 1 (SK01a) のものである。

〔規模・覆土〕 遺構の形状は長円形(隅丸長方形)を呈し、長さ約1.55m、幅約0.8m、深さ約30cmを測る。さらに底部中央は5～10cmほど一段深い。埋土は、混土貝層で褐色土はわずかで大半は貝殻である。上面には貝層が形成されており、かなり遺存度が高く、また魚骨も多く含む。覆土下半については貝はやや少なめになるが、非常に柔らかな土質で、魚骨の残りもよかった。SK01aの覆土中よりブロックサンプルを採集した。詳細については付編を参照されたい。

〔人骨〕 遺構の底面からは人骨の出土が認められることから、遺構の性格が土壙墓であることは間違いないと思われるが、出土した人骨は、足首付近と胸骨、手の指骨とバラバラの状況であった。上面の貝層の状況から人間が埋葬されていた場合、かなりの確率で全身の骨が残るものと考えられ、実際出土した人骨も遺存状態は非常によかった。貝層も含み上面からの攪乱されている状況は考えにくいいため、再葬等の可能性も考えなければならないが、足首の骨は関節がつながった状況であり、また土壙の形状からも単純な再葬墓とはいえないと思われる。

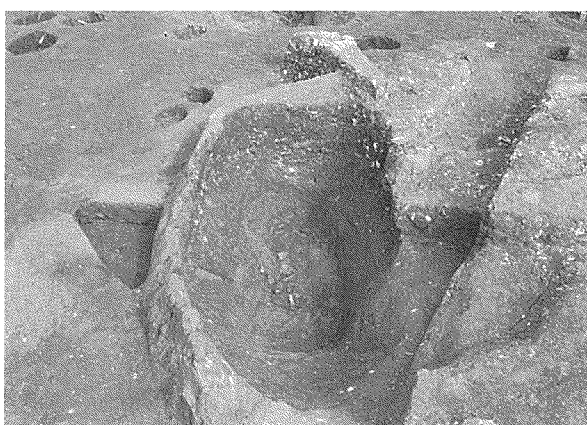


写真 4 土壙墓 1



写真 5 土壙墓 1 検出状況



写真 6 土壙墓 1 上面貝層

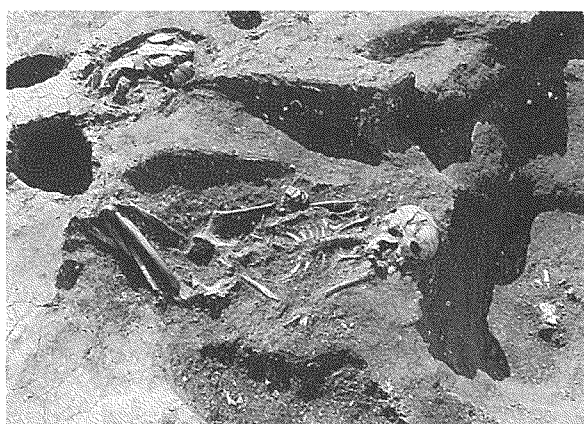
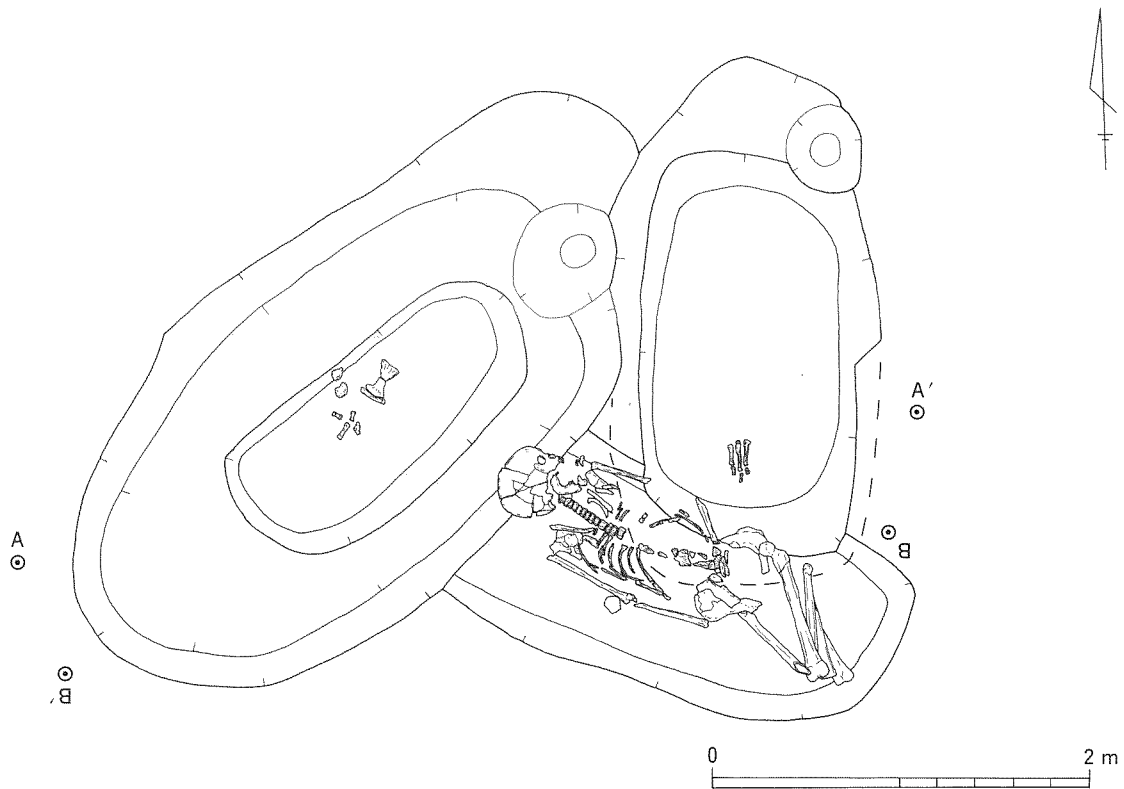
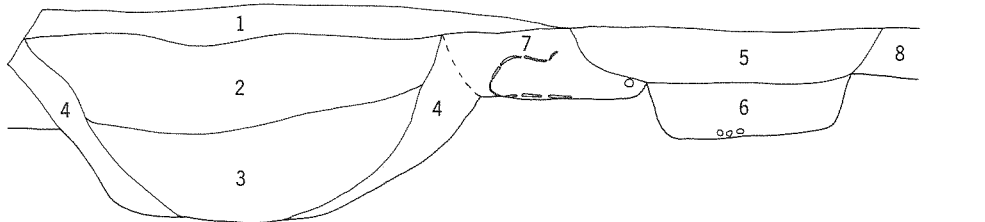


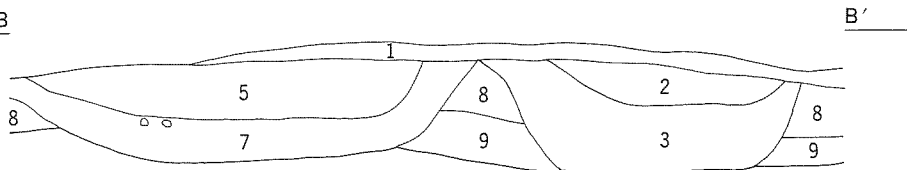
写真 7 土壙墓 1・2 および土器棺墓 2



11.900 A



11.900 B



1. 褐色土：遺存度のやや高め（ ϕ 2～3 cm）の破砕貝を多量に含む。粘性しまりとも弱め。
2. 痕土貝層：遺存度の高い貝を中心とした土層。縄文土器を含む。混入土は褐色土で粘性しまりとも弱い。
3. 褐色土： ϕ 1～2 mmの炭化物を少量含む。2層と異なり、 ϕ 2～3 cm大の破砕貝をやや多量に含む土層。粘性しまりともやや弱め。
4. 褐色土： ϕ 5 mm～10 mmの破砕貝を5%ほど含む。 ϕ 1 cm大の地山土ブロックを少量含む。粘性しまりともあり。
5. 褐色土：1層よりも貝の遺存度が高いが含有量は少ない。 ϕ 2～3 mmの炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。
6. 褐色土： ϕ 5～10 mmの破砕貝を10%程含む。ねんせいしまりともややあり。
7. 褐色土： ϕ 5～10 mmの破砕貝を10%程含む。 ϕ 2～3 mmの炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。
8. 褐色土（やや明るい）： ϕ 2～3 mmの炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり
9. 褐色土（やや赤味強い）：地山との漸移層

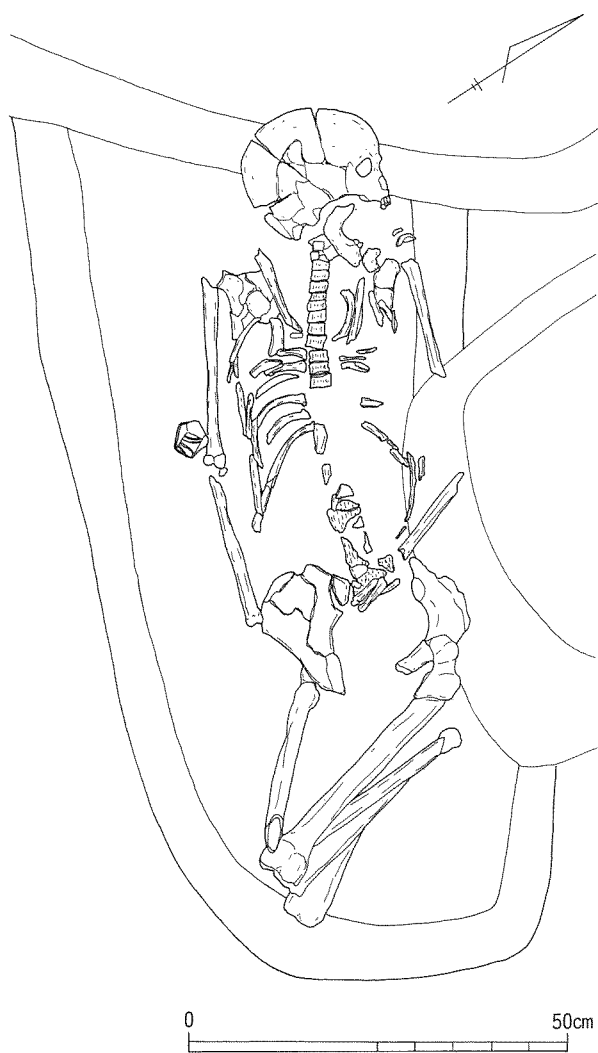
第12図 土墳墓1～3

土壙墓 2 (SK01b)

[調査経緯] 土壙墓 1 (SK01a) の検出後、G 1—G 2 間に土層観察用のベルトを設定し、ベルトの北脇、すなわち G 1 側にトレンチを掘削した。その際土壙墓 1 の南東側で人骨の出土が認められた。そのため、それまで SK01 としていた遺構のうち、貝の集中の認められる中心を SK01a、人骨の出土した掘り込みを SK01b とした。土層を検討した結果、純貝層を壊して破砕貝層が堆積しており、この破砕貝層中に人骨が含まれていた。そのためこの人骨を SK01 として、調査を進めた。後、純貝層は土坑に廃棄されていることが明らかになったため、先行する土坑を SK01a として、本遺構を SK01b とした。

[規模・形状] プランは、周辺土壌にも破砕貝が含まれており、上位層の古代の破砕貝層と区別できず検出することは困難であった。ベースとなる土壌は破砕貝が少なく、その差で判断した。おそらく長円形(隅丸長方形)を呈し、規模は、長さ推定約 1.2m、幅約 0.55m を測る。深さは、プラン検出面からは 7~10cm ほど窪んでいる。

[人骨] 人骨は土壙墓 1 上面の貝層に頭がくい込むような状況で出土している。遺存状況は非常に良好であり、頭部を北西に向け、仰臥姿勢で腕は伸ばし、脚は膝を重ねるように体の右側に向き、足首を骨盤付近に接するように屈折させていた。顔面はほぼ体の左側を向き、北東の方位を向いている。左腕は腰の上



第13図 土壙墓 2 人骨

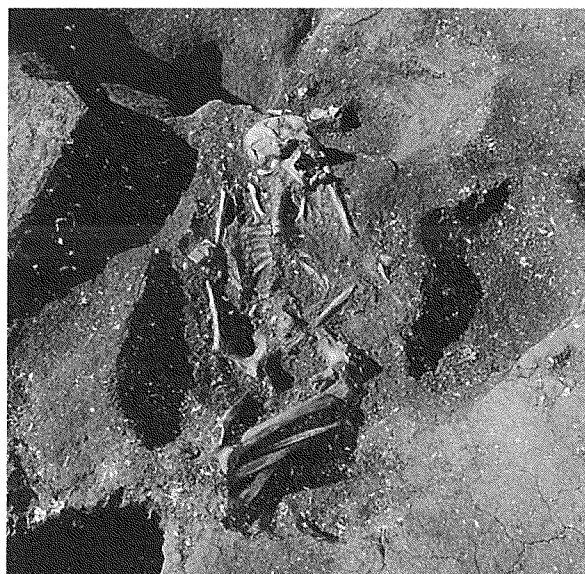


写真 8 土壙墓 2



写真 9 土壙墓 2 人骨

あたりにあるが、両手を組んでいたかは判断できない。土壙墓3 (SK01c) に遺構の上半を切られており、足首および左手の肘付近は失われている。頭骨顎付近の残りはあまり良好ではないが、抜歯の痕跡が認められる。性別は女性である (付編毛利論考参照)。

[時期] 遺構の時期については明確ではないが、人骨の右肘付近から、元刈谷式期の土器片が出土している。小破片で直ちに遺構の時期が確定できるものではないが、土壙墓1の貝層中から、巻貝条痕調整を施し、口縁部が丸く作られた深鉢が出土しており、その遺構を切って構築されている本遺構は、元刈谷式期ないしそれ以降に構築された遺構であるといえよう。

土壙墓3 (SK01c)

[調査経緯] 土壙墓2の人骨を取り上げ後、周辺の破碎貝層を掘り下げてゆく過程で、遺構のプランを検出した。土壙墓2のプランを一部壊して掘り込まれている。二段の掘り込みをもち、上段の掘り込みがやや広がっており、その上段の掘り込みが土壙墓2 (SB01b) を壊している。土壙墓2を壊して土壙墓3が構築されているが、土壙墓2、3および周辺の包含層に破碎貝が含まれており、遺構の先後関係を誤ることとなった。土壙墓3については北側部分で遺構の底面が地山まで掘り込んでいることが確認できたため、底面の地山を広げてゆくと結果的に破碎貝を含む土がはずれ、土壙墓2の底面として考えていた部分も壊していることがわかった。土層の状況等から土壙墓2→土壙墓3の順は確実であるといえるが、土壙墓2の人骨の一部は土壙墓3の掘り方内に入る状況が認められる。こうした状況は、土壙墓6や土壙墓10を切る攪乱でも同様に認められる。構築時期が近接するため骨の遺存度が高く、掘削時に骨が露出した状況であったのか、新しい遺構内に古い時期の人骨が落ち込むためなのか、詳細は不明である。いずれにせよ、平面図のみから遺構の先後関係を読み取ることは危険である。

[規模・形状] 遺構の形状は長方形を呈し、長さ約1.0m、幅約0.65m、深さ約30cmを測る。埋土は、褐色土で貝殻を含む。人骨は指骨を検出した。この遺構からも右足首のみの出土である。土壙墓2の人骨の足首付近は土壙墓3により掘り込まれているためであろうか残存しないが、土壙墓3の人骨は関節が正しい位置関係で出土しており、土壙墓2の人骨由来のものとは考えにくい。

[時期] 土壙墓3の時期も遺構の切り合い関係から、元刈谷式期以降と考えられる。上面から突帯文期の土器片が出土しているが、小破片でありまた破碎貝層に伴うものであることから、直ちに土壙墓3の時期を表すものとは考えにくい。



写真10 土壙墓3



写真11 土壙墓3 人骨

土壙墓 4 (SK56)

[調査経緯] 先述の通り、G 1 付近では表土直下に破碎貝層が広がっており、その範囲を記録しながら貝の薄い部分から順次包含層の掘り下げを進めた。特にG 1 の北側は部分的に破碎貝のまとまりが認められるものの、比較的貝の量が少ない場所であったため、はじめに掘り下げを進めた。その掘り下げ作業中、縄文土器の深鉢胴部破片で、やや大きなものが、立った状態で検出された(第14図平面図の南側の土器第44図511)。この時点で土器棺墓 1 の上面が検出されていたこともあり、土器の周辺約 1 m 四方を島状に掘り残した。その上で、平面プランと、土器片をかけてトレンチ状に掘削を試みたが、平面においても断面においても、遺構の掘り方は検出できなかった。そのため島状に残っていた包含層を掘り下げたところ、人骨の出土がみられ、土壙墓として検出した。

[規模・覆土] ベース面での掘り込みは、方形を呈し長さ約 0.5 m、幅約 0.3 m、深さ約 4 cm である。墓壙の覆土はやや赤みの強い褐色土である。遺構覆土には破碎貝はほとんど含まれない。遺構の底面は地山の熱田層に掘り込んでおり、人骨の遺存する環境としてはそれほど良好ではないが、周辺環境からカルシウムが供給されるためか、遺存状況は良好である。写真 45 のように肋骨も比較的良好に確認ができています。

頭部は胸側に折れた姿勢であるが、これは腐敗後になったものであろう。

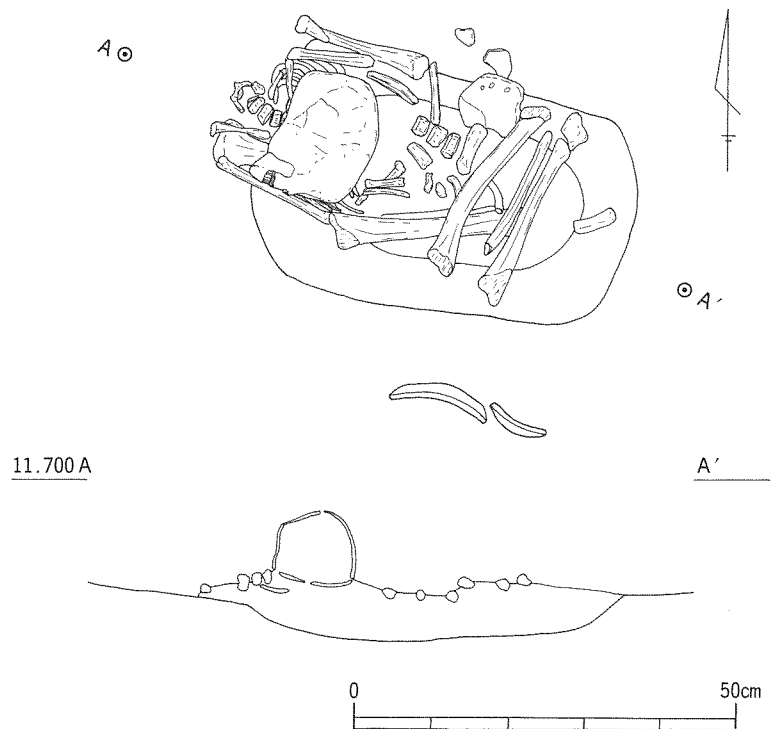
[人骨] この土壙墓内の人骨の頭位は西北西を向く。一見盤状集積骨のように見えるが、すべての骨格が正しく関節しており、頸椎も 180° 近く曲がった状態で確認している。大腿骨は体に対してほぼ 90° の角度で出土しており、人骨の出土した状態を、被葬者の死後短い時間の間でこうした姿勢に曲げることはほぼ不可能といえよう。おそらく土壙内に両膝を屈めた状況で、座葬に近い形で埋葬されたものではなかろうか。

頸部が不自然なまでに曲がっているのも、座葬の姿勢から首が落ちたものと考えられる。死体の腐敗が進む過程で、土圧により現在の状況のように変化したものと考えられる。確認された状況では、頭骨は東南東を向き、顔は南側に向けてほぼ 90°

近く曲がっているが、本来の姿勢では、東側を向いての座葬であろうか。

[時期] 遺構の時期を示す土器は土壙墓内からはほとんど出土していない。

問題となるのは上面で検出した土器(第44図511)である。巻貝条痕調整の深鉢片で、元刈谷式期前後の時期の土器であることが考えられる。直接墓壙に関連した施設であるならば、土壙墓の時期を表しうる土器となる。



第14図 土壙墓 4



写真12 土壙墓 4 上面



写真13 土壙墓 4 下面

土壙墓 5 (SK06)

[調査経緯] G1の包含層掘削にあたり、前述のように破碎貝層の上面レベルからG1・G3間南北セクションベルトの東側にサブトレンチをいれた際、周辺よりも貝の混入量の多い混貝土の範囲として検出した。サブトレンチの上面掘削時には貝の多い部分として確認していたが、はじめは人骨の出土はみられなかったため、掘り下げを進めたところ、トレンチ内で頭蓋骨を確認し墓壙と確認した。破碎貝の広がりでも再度検出を行い、遺構プランを確認し、その後掘削をすすめたところ、ほぼ全身の骨格が遺存していることが確認された。

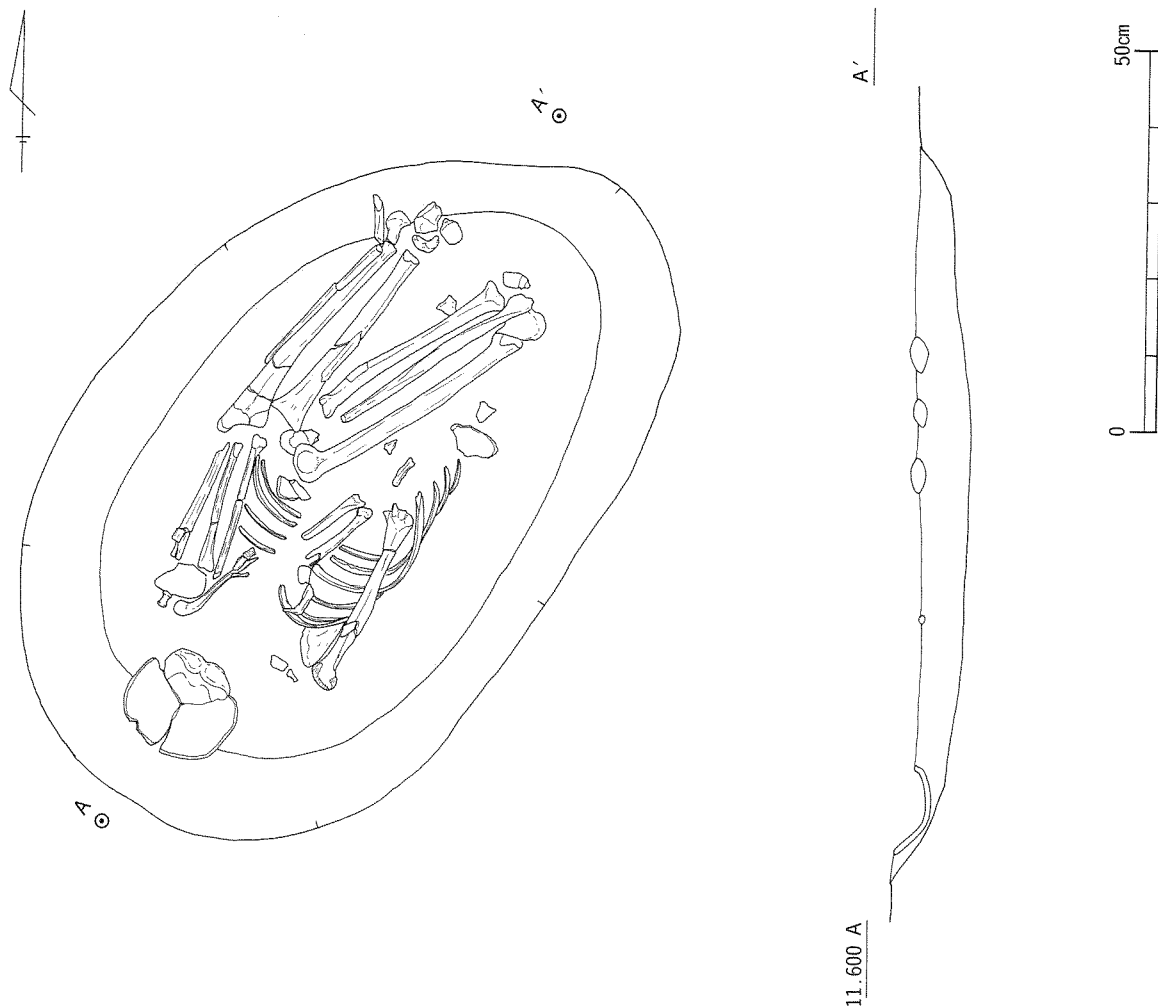
土壙墓5の付近は、地山の熱田層の上面のやや赤みの強い褐色土が残っている場所で、土壙墓5もこの熱田層の上面土を掘り込んでいる。セクションベルト脇での検出であったために上面からの掘り込みを確認したが、すぐ上面に上面に破碎貝の混入した混貝土層が広がっており、立ち上がりは確認できなかった。平面プランは地山面での検出は容易であったが、セクション同様上面からの検出は破碎貝の混入した混貝土が上面を覆っており困難であった。

遺構覆土は ϕ 1cm前後を中心に比較的に大型の貝も含む混貝土である。やや黒みのある褐色土である。

[人骨] サブトレンチ掘削作業中に頭蓋骨の前面については破損してしまった可能性が高い。頭骨自体も遺物として取り上げてしまったが、後頭部が残存しており、取り上げていた頭骨については位置の復元を行うことができた。そうした状況から頭部の詳細については判断が難しいが、顔面はほぼ真上を向いていたことが想定される。頭位は南西を向く仰臥屈葬の姿勢である。腕、脚とも際立って曲げた姿勢をしている。膝の位置、手首の位置もそろっており、検出時、頭骨のみ検出地山面で検出したように頭部がやや上の位置にあるといえるであろうか。膝頭がやや西側によってはいるが、よく屈葬姿勢を示している。

[規模・形状] 掘り込みは、楕円形を呈し長さ約1.05m、幅約0.65m、深さ5～9cmである。地山の熱田層に掘り込んでいたことと、貝を遺構覆土中に多量に含んでいることから、遺構底面等の確認は容易で、また埋葬人骨自体もほぼ遺構床面に接するような形で埋葬されていたようである。

土壙墓5は顔面を除くと遺存状況は良好で、埋葬姿勢を検討する上で一つの指標となるものであろう。



第15図 土墳墓 5



写真14 土墳墓 5



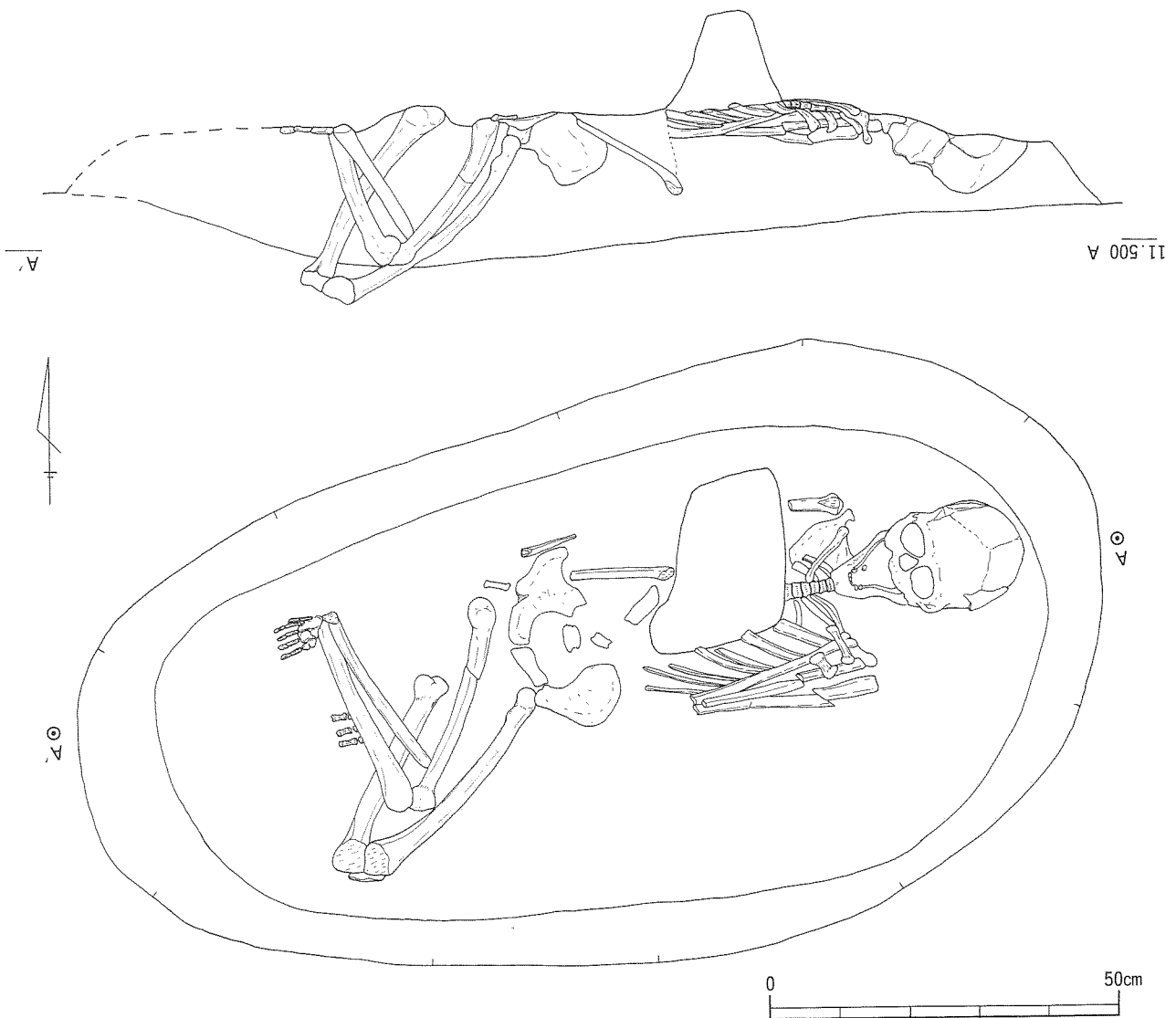
写真15 土墳墓 5 完掘

土墳墓 6 (SK45)

[調査経緯] G 3 北側については比較的破砕貝の混入量が少なく、地山熱田層までの間に遺物包含層が形成されていると判断していた。G 1・G 2 間のベルトからも地山熱田層の上面の漸移的な変化の様子が読み取れたため、順次掘り下げを進めていった。掘り下げを進めてゆくと地山自体が西北側に緩やかに下っ

ていることが判断された。そのやや下りかける部分において、掘り下げ途中に大腿骨らしき人骨の出土が認められた。この時点で墓壇の存在が想定されたが、周辺で遺構プランの検出を試みる物の、なかなか検出に至らない。仕方なく人骨の表面が顔を出すように掘り下げを行い、地山近くの高さでようやく遺構としてのプランを確認した。周辺の土壌は先述のようにわずかな凹み状の地形に位置するためであろうか、湿り気の多い土壌で、乾燥すると堅くしまる土であった。

〔規模・形状・人骨〕 遺構の形状は楕円形プランを呈し、長さ約1.3m、幅約0.85mを測る。人骨は頭部を東に向けた仰臥屈葬である。地山面からの土坑の深さは、脚部を収めるため西側がやや深く29cmを測る。しめった土壌のためか、破碎貝の分布からはずれるためなのか、人骨の遺存状況は、余りよいとはいえない。埋葬姿勢の胸部分は、近代以降の攪乱により失われている。人骨の検出が膝の部分であったことからわかるが、やや膝を立てたような姿勢となっており、検出が早かったことから、頭部付近を慎重に掘削することができた。



第16図 土壇墓6



写真16 土壙墓6

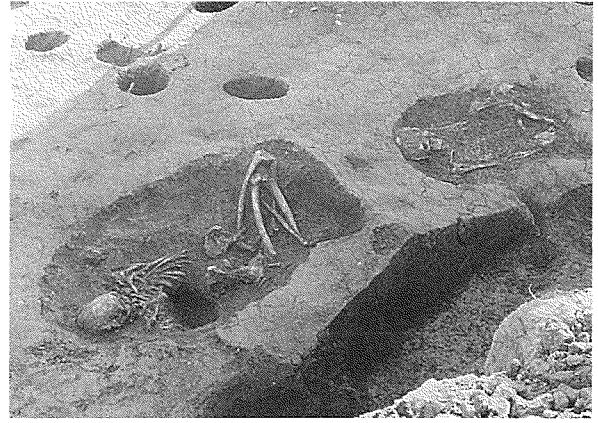
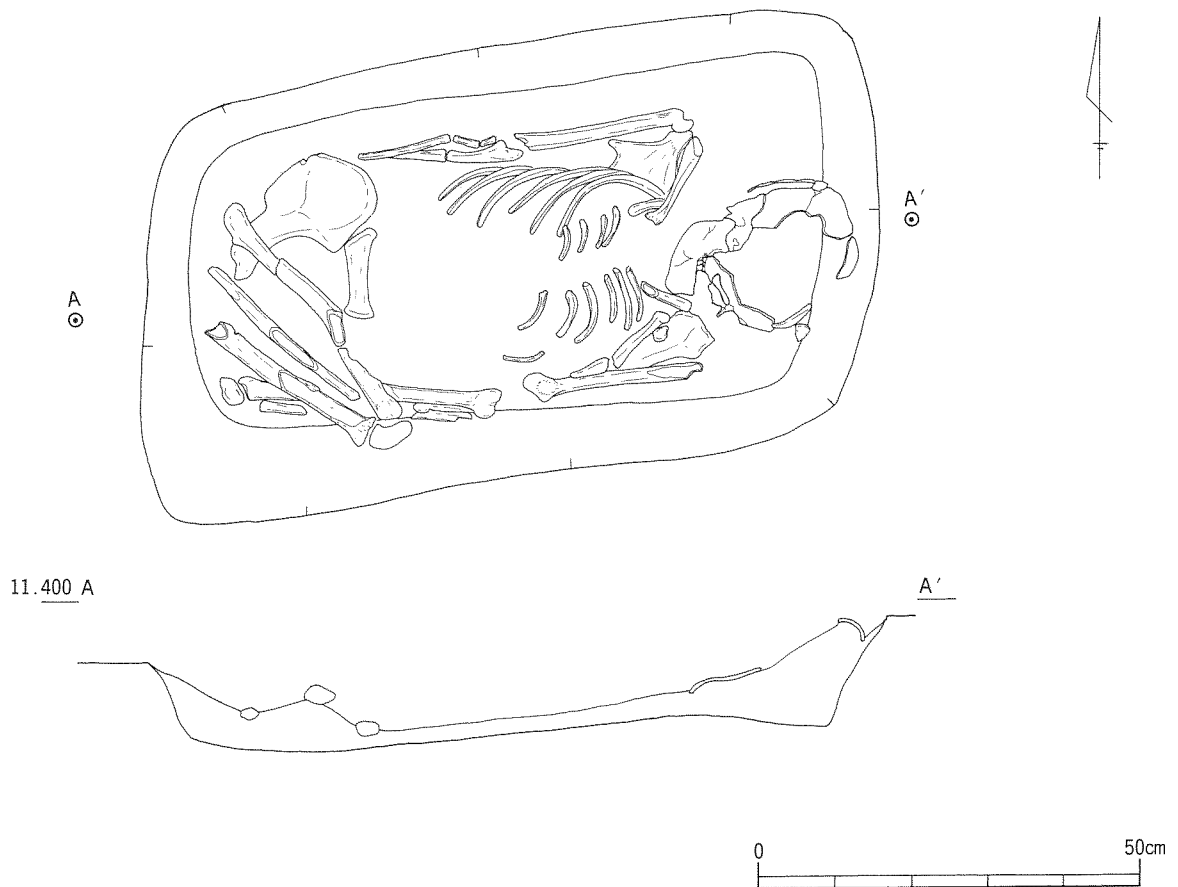


写真17 土壙墓6および土壙墓7

土壙墓7 (SK44)

G 3の北西、土壙墓6 (SK45) の西側で検出した。地山近くまで掘り下げた面で頭部付近を検出し遺構プランも確認した。長方形プランを呈し、長さ約0.95m、幅約0.55mを測る。地山面からの深さは、約14cmを測る。頭部を東に向けた仰臥屈葬である。両足は膝がきれいにそろっている一方で、両腕は体の横に添えられており、のばしたままで埋葬されている状況が伺える。顔面付近の遺存状況はよくないが、左下、すなわち南西方向を向いている。当遺構付近は、先述のように谷状の微地形にありまた、家屋裏の庭に位



第17図 土壙墓7

置しており、植樹時の掘削により、土壌が軟質になっていたことから、人骨の遺存状態は極めて悪く脆弱であった。同様に水分のためからか、遺構底面付近はややシルト化しており、地山に直接掘り込んでいるにも関わらず、遺構の底面のがわかりにくい状況であった。覆土中に貝の分布は認められず、遺構覆土はやや灰色がかった暗褐色であった。人骨頭部付近から縄文土器の出土がみとめられたが、小破片であり遺構の時期を直ちに確定しうる性格のものではない。



写真18 土壙墓7

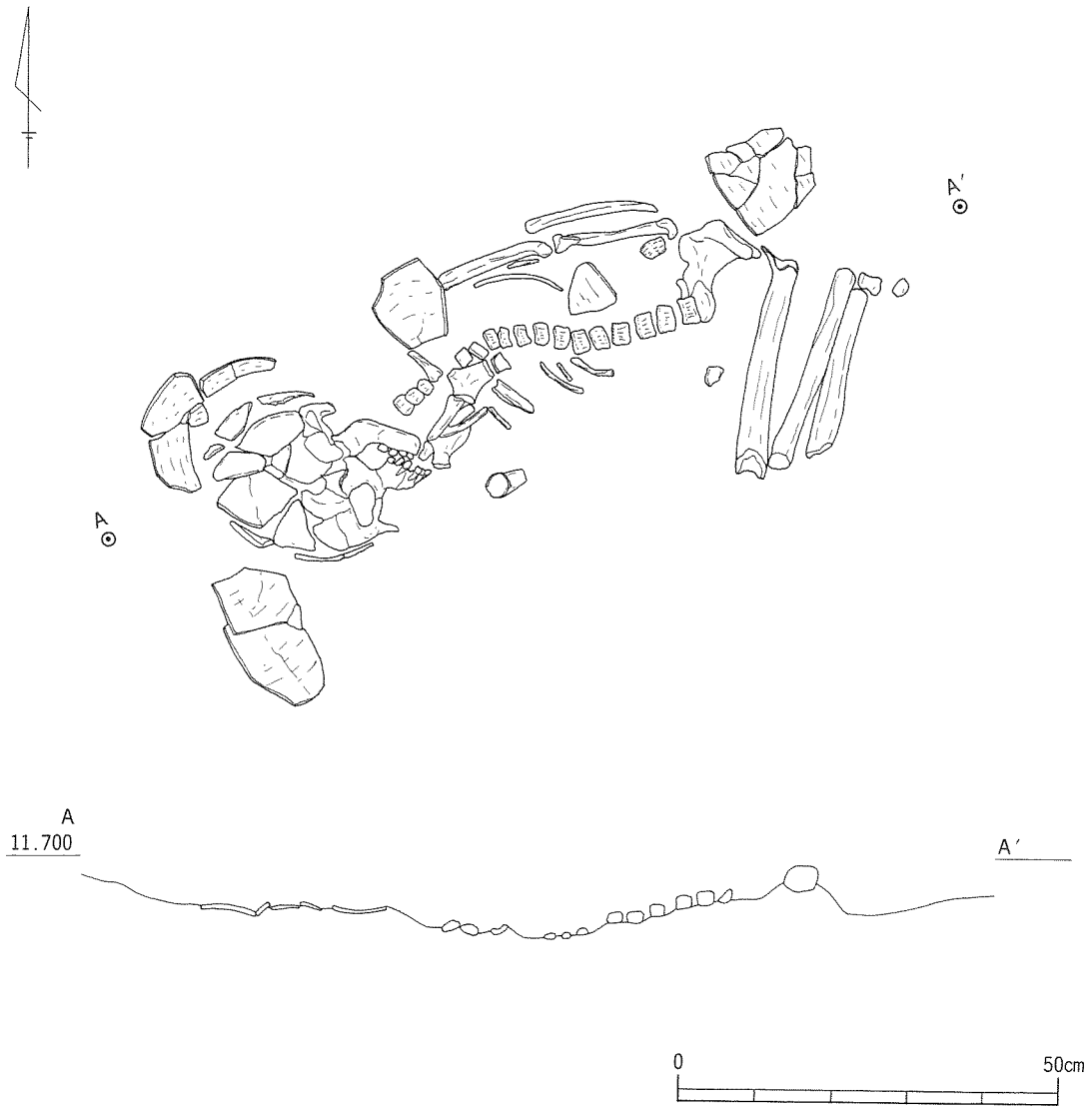
土壙墓8 (SK52・53)

〔調査経緯〕 G3の南側については、その上面に混貝土層が認められるが比較的薄い堆積であり、G2・G4ほど弥生時代以降の遺物も認められなかった。そんな中で、混貝土と遺物が集中する地点が何ヶ所あり、そのうちのG3の南西に位置する一群にSK52とSK53との遺構名を与えた。検出時には破砕貝の含量が異なっており、2遺構と判断した。この破砕貝の集中は表土除去直後の検出の際に認められた物で、この遺構の周辺のみをのこして、包含層掘削をすすめた。結果的にSK52とSK53の周辺のみが島状に残ってしまう結果となった。その後順次遺構の掘り下げをすすめたところ、遺構内から人骨が認められ、2遺構としてとらえていた物が、1遺構であることが判明した。そのため、この遺構を現地の段階ではSK52・53とすることにしたが、その遺構が土壙墓8である。

〔人骨〕 人骨は、頭部を西に向け、横位屈葬である。顔は南東方向を向いている。足については折りたたまれているが、膝は体の前方すなわち南側を向いている。腕は体の側縁に位置し、のばしたまま埋葬されている。人骨の遺存度は比較的良好であるが、頭部は土圧で平たく押しつぶされている。遺構全体の状況を見ても、人骨全体が比較的同一のレベルで広がっている。遺構の掘削は地山に及んでおらず、遺構形状はつかめなかった。

〔遺物〕 本遺構で目を引くのは出土人骨に伴う縄文土器である。頭部の下及び頂部周辺の土器片は、頭部を覆うように意図的に置かれたものと思われる。特に頭の周辺の土器は、頭に沿うような形で立位の状況で出土している。背部や腰部付近の土器も大部な破片であったがどのような意図を持っているのかは不明である。土器を接合すると頭部付近の土器(第30図48)と腰を中心とした土器(第30図49)となる。両個体とも非常によく似た作りの土器であり、ほぼ同一時期の土器と考えてよいであろう。外面の削り調整が顕著で、口縁部にかけてやや薄く作り、口唇部を平坦に面取りしている。土器の時期は無文土器のため細かく決めることはできないが、晩期前半元刈谷式期から中葉の稻荷山式期にかけての時期を与えられるであろうか。出土状況から土壙墓の構築時期を指し示す可能性のある土器と考えられる。

非常に特徴的な埋葬方法の土壙墓であると考えられるが、隣接する土器棺墓3とともに検出面が高く、遺構の掘り方の検出は難しかった。



第18図 土壙墓 8 (SK52・53)



写真19 土壙墓 8

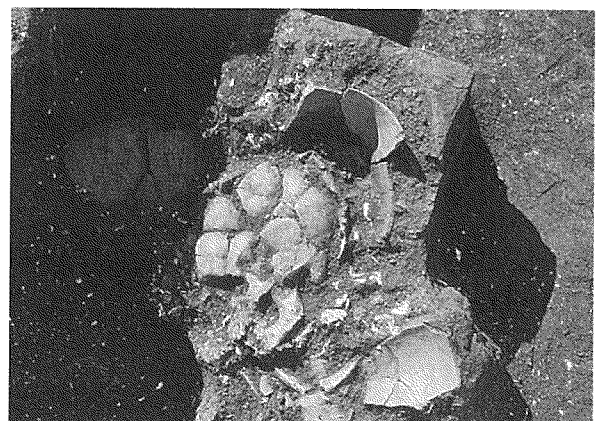


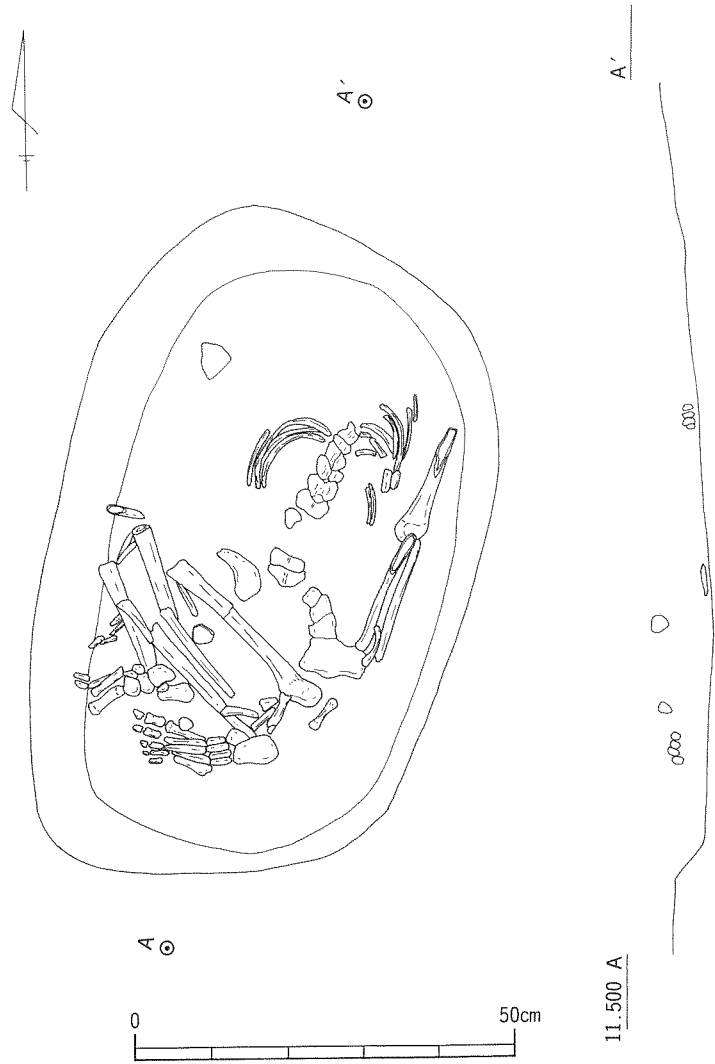
写真20 土壙墓 8 近景

土壙墓 9 (SK58)

G 4・G 5の境界一番西端で検出した。この付近は弥生土器の出土が多く土坑なども検出されている。弥生時代の住居址床面の可能性を考へて包含層掘削をおこない地山面まで掘り下げた。地山面に達した時点で検出したのが土壙墓 9 (SK58) である。弥生時代の掘削深より下に当たる部分のみが遺構として残っていたといえよう。

人骨は頭部および上半身が失われていた。しかし、脚部の遺存状況は良好で足首よりも先の遺存状況は特に良好である。肋骨と椎骨の関係から頭部を北に向けた仰臥屈葬であることが想定できる。地山面に掘り込んでおり、検出時に遺構プランについても検出された。

平面形は、長方形を呈し、長さ約0.9m、幅推定約0.5m、深さ約5cmを測る。遺構覆土中に破砕貝の混入は少ない。



第19図 土壙墓 9



写真21 土壙墓 9



写真22 土壙墓 9 および土壙墓 10

土壙墓10 (SK38)

〔調査経緯〕 G4・G5は古代末の遺物をともなって破砕貝が広がっていた。その中でも貝の混入量が多い場所と少ない場所とがあり、混貝土を掘り下げていくと混貝土の密度の差によって検出される遺構が存在した。後述する帯状の貝層や、この土壙墓10がそうした遺構である。この土壙墓はかなり上面から混貝土の集中として検出されており、土壙墓1に似た状態であった。この遺構に対して現地の段階でSK38の名称をあたえた。貝がまとまって出土していることから、プランの検出は容易であったが、検出面が比較的高く、周辺の掘り下げにともなって、遺構周辺が島状に掘り残されてしまう結果となった。この島状に残された貝層の掘り下げを進める中で人骨を検出した。この人骨は、遺構内に掘り込まれた近代の建物基礎による攪乱の壁面でも検出されている。

〔規模・形状〕 当初貝の集中からみて東西に長いプランと判断し掘削を進めたが、途中人骨を検出しその姿勢にそって遺構の掘削をすすめていった結果、人骨にともなう墓壙自体は南北方向に主軸が向くことが判明した。また人骨の周辺の遺構覆土は破砕貝を含むものの、細かな物で、上面でプランを確認したような遺存度の高い貝のまとまりは認められない。墓壙と上面の貝の比率の高い土壌のあいだに前後関係が認められる可能性もある。

墓壙の平面形は、検出が困難ではっきりしなかったが、長さ約1.25m、幅約0.7mを測る。深さは検出面から約0.5mを測る。

〔人骨〕 埋葬人骨は頭部を北に向けた仰臥屈葬である。顔面は顎を引く様な格好で南を向いている。基礎の攪乱のため、右尺骨、橈骨・右手は失われている。埋葬姿勢は足を折り曲げた屈葬であり、腕は腰あたりまでのびている。

〔遺物〕 人骨の脇には土器が底部を上にして斜めに立った状況で出土している。この土器は巻貝条痕を施した深鉢の胴下半である。内面には炭化物の付着が認められた。この土器は掘りあがった状況で人骨にともなう土坑に切られたような格好に見えるが、土器の内面の土と人骨の周りの土を分けることはできなかった。



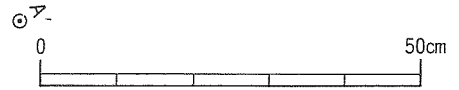
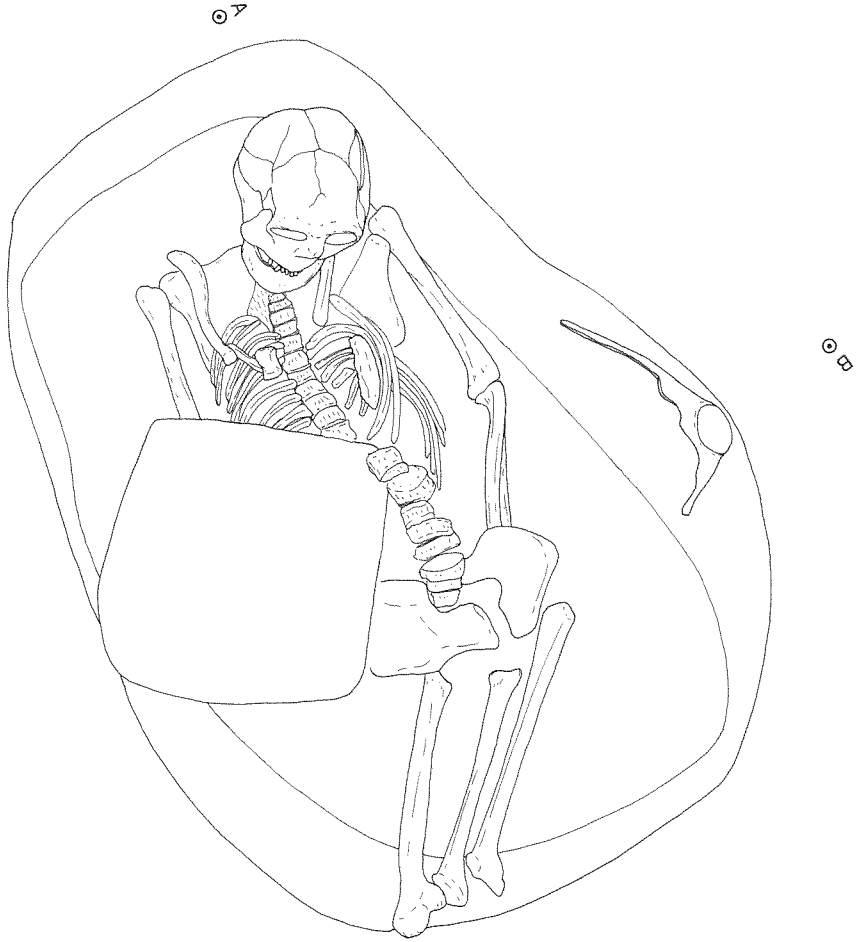
写真23 土壙墓10 人骨



写真24 土壙墓10

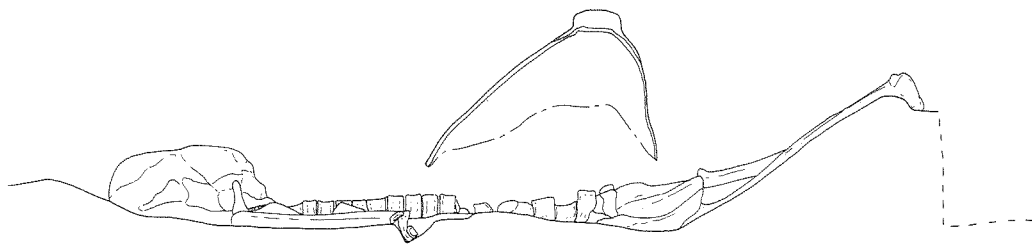


写真25 土壙墓10 出土土器



12.000 A

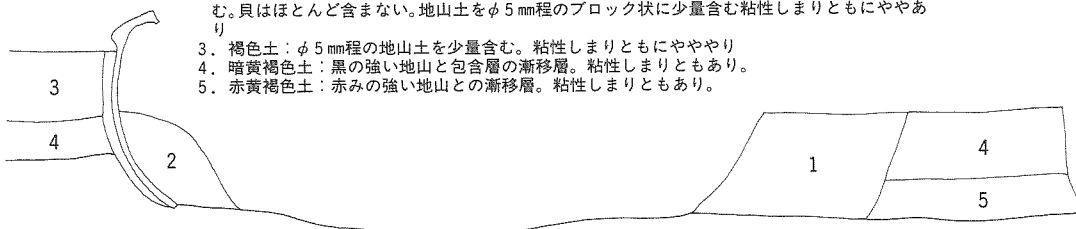
A'



12.000 B

B'

1. 褐色土：φ 1～2 mm前後の微細な炭化物をごく少量含む。φ 5 mmほどの地山土ブロックをごく少量含む。貝はほとんど含まない。粘性しまりともにややあり。
2. 褐色土（やや黒みが強い）：φ 5 mm程の破砕貝を5%ほど含む。φ 5 mmまでの炭化物を少量含む。貝はほとんど含まない。地山土をφ 5 mm程のブロック状に少量含む粘性しまりともにややあり。
3. 褐色土：φ 5 mm程の地山土を少量含む。粘性しまりともにややあり。
4. 暗黄褐色土：黒の強い地山と包含層の漸移層。粘性しまりともあり。
5. 赤黄褐色土：赤みの強い地山との漸移層。粘性しまりともあり。

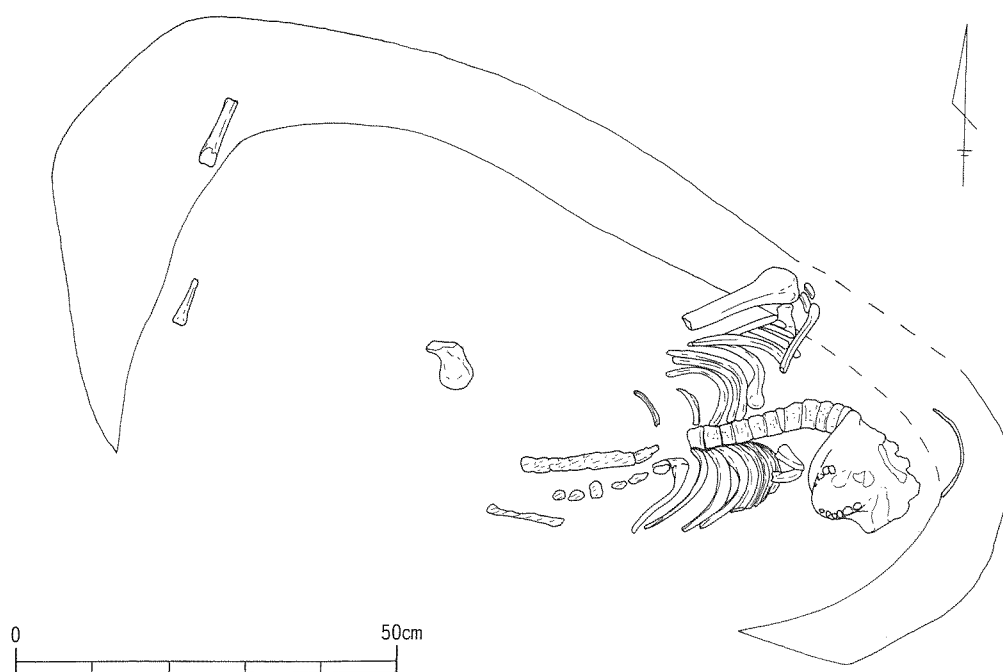


第20図 土壙墓10

土壙墓11 (SK27)

土壙墓11はG 2の南西において検出した。周辺は破碎貝層が堆積し、古代の須恵器等が多量に出土していたために古代の遺構として掘削を行ったが、底面で人骨を検出した。土葬の観察から上面を古代の土坑に削り取られた縄文時代の土壙墓の存在が確認されたため、SK27とした。その遺構を土壙墓11とした。土壙墓の大部分は削平され、人骨も頭骨前部及び下半身が失われていた。頭部を東に向けた仰臥屈葬と推定される。後の攪乱で動かされている可能性も考えられるが、土壙墓のプランに対する椎骨の並びかたが偏っているのも屈葬されているためであろう。上半身の骨格は攪乱を受けながらも、正しい位置関係にあり、肩胛骨、鎖骨、上腕骨が組み合った状況が観察できる。頭部上半部分はほとんど、壊されているが下顎は残されており、歯の並びについても観察することが可能である。

平面形は、長さ約1.3m、幅約0.6m、深さは5～11cmを測る。遺構の南側については上面の古代の土坑により壊されており、立ち上がりが確認できなかった。



第21図 土壙墓11



写真26 土壙墓11



写真27 土壙墓11 近景

土壙墓12 (SK22)

G 2 の調査区南壁際で確認した土壙墓である。直径約40cm×35cm、深さ約34cmの小穴であり、土壙墓にしては非常に小振りである。地山上面まで掘り下げた後に地山面で確認した遺構である。検出時には人骨は確認されておらず、遺構の掘削の過程において埋土中より人骨が検出された。遺存状態は悪く頭骨の一部、歯などが出土した。遺構底面付近から頭骨が出土しておりやや軸を南側にずらしたピットに人骨ごと切られている。隣接するSK23は方形の掘り込みであり墓壙らしい形状をしているが人骨の出土は認められない。

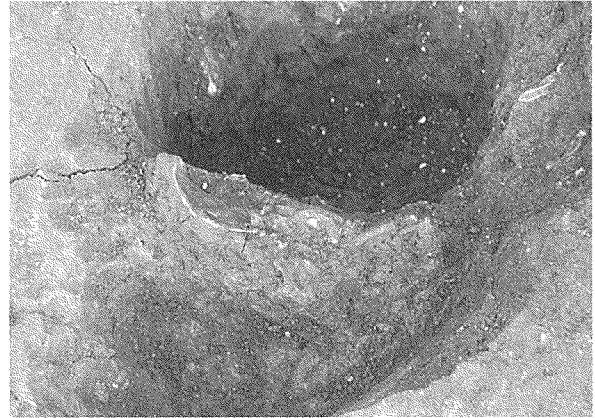


写真28 土壙墓12

土壙墓13 (SK15)

G 2 のほぼ中央で検出した土坑である。遺構の上面には破砕貝が集中しており、この遺構をかけてG 2 のサブベルトを設定した。長方形プランを呈し、長さ約1.1m、幅約0.7m、深さ約0.4mを測る。埋土は、褐色土で下位層は地山土を含みやや黄味が強い。中位層は破砕貝を含み黒味が強い。上位層は、混貝土で古代の遺物を含む。当初は上面の破砕貝を含む土層より、明らかに新しい時代の遺物が出土していたために、古代の遺構の可能性も考えたが、下位の土層からは新しい時代の遺物は出土しないため、縄文時代の墓壙であると判断した。

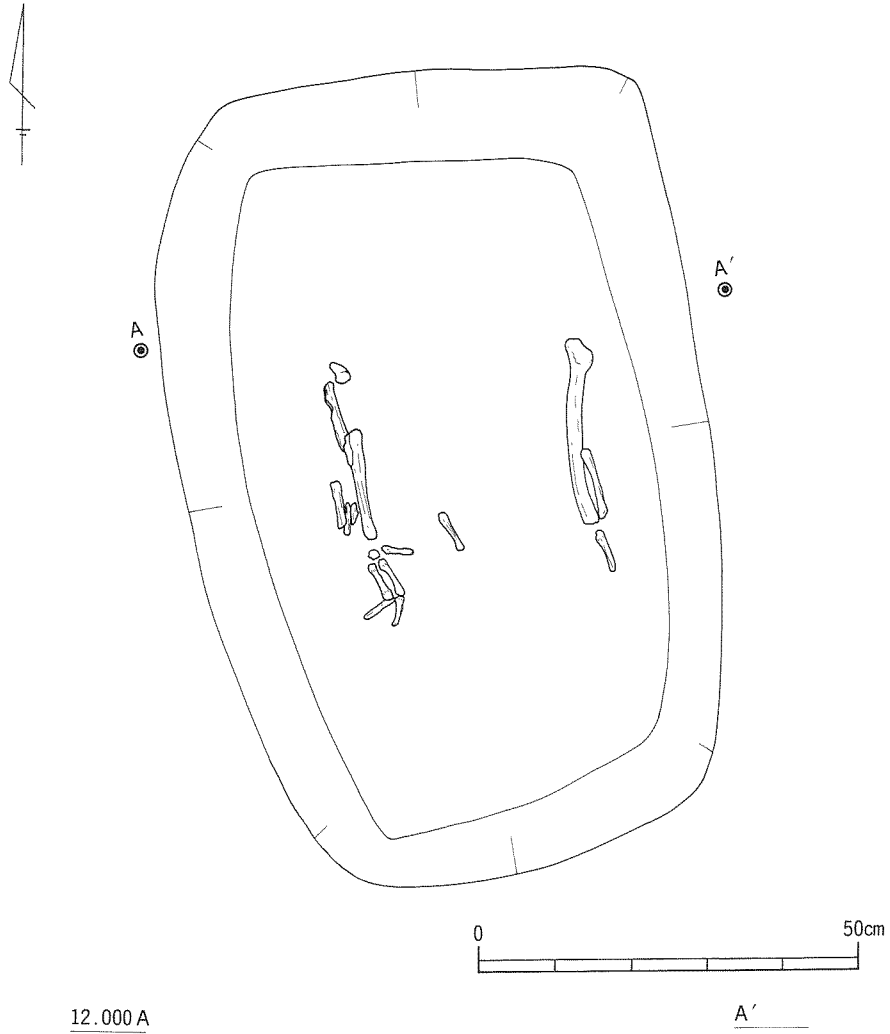
底面で人骨の一部上腕骨を検出した。壁よりやや内側に左右そろって人骨の上腕骨が並んでおり、遺構の形状と大きさを考えあわせると、埋葬人骨は屈葬姿勢で埋葬されたと考えられる。遺構の残りは地山を掘り込んでおり、底部付近からの出土遺物には、縄文土器がある。



写真29 土壙墓13

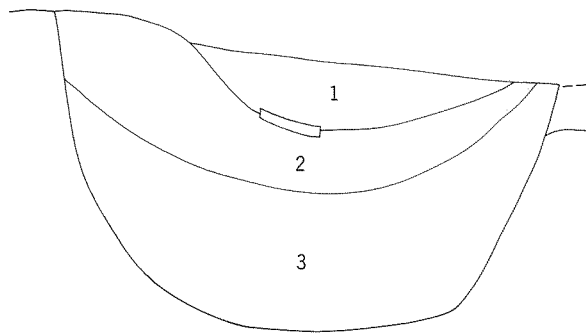


写真30 土壙墓13 土層



12.000 A

A'



1. 黒褐色土：破砕貝を多量に含む土層。須恵器も混じる。粘性しまりともにややあり。
2. 褐色土：やや遺存状況のよい貝を多量に含む。粘性しまりともにややあり。
3. 褐色土：貝をφ1cmほどの大きさで、5%未満含む。地山土をやや大振りなブロック状に多量に含む。粘性しまりともにややあり。

第22図 土壌墓13

土器棺墓1 (U1)

[調査経緯] G1・G3間の土葬観察用のベルト東脇にトレンチを設定し、混貝土の掘削を開始した直度、混貝土の上面から10cmほどの高さにおいて、土器が立位で埋設されている状態で検出した。土器片で蓋状に覆った、立位の縄文土器が出土した。内部を精査したところ底部付近で人骨が検出された。体部の骨の上に頭部の骨がのり、押しつぶされた状態である。人骨の取りはずしの際、肋骨が土器の壁面に沿うように確認できた。当初の埋葬姿勢は確実なことはいえないが、おおよそ土器内に手足縮めて座るような形で埋葬されていたことが想定される。土層セクションの観察から、土器は直径約0.6m、深さ約0.5mのピットを掘り納めている。

[遺物] 土器棺の土器(第31図63)は条痕調整を同上半では横方向に、下半では縦方向に施文しており非常に特徴的な視覚効果を持つ土器である。器内面は幅の大きく丸みの強い削痕が残っているが、この工具はハマグリ等の二枚貝の貝殻腹縁によるものであろうか。土器の上下を打ち欠き、筒状の状態です器棺に用いられている。蓋として用いられている土器は(第31図62)、擦痕調整のみの土器で、口唇部は平坦に面取りされている。すべての個体が接合していないが、ほぼ口縁部を含む板状の破片を土器棺の蓋として用いているようである。

土器棺墓1は現地表面からさほど低くない面で検出されている。縄文時代の生活面も現在の地表面とさほど変わらないものと考えられる。



写真31 土器棺墓1



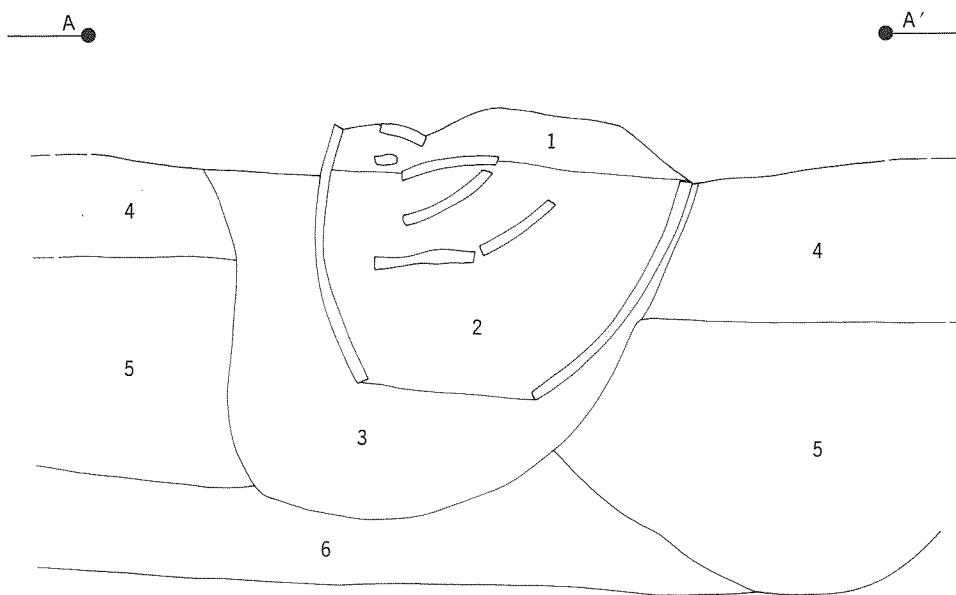
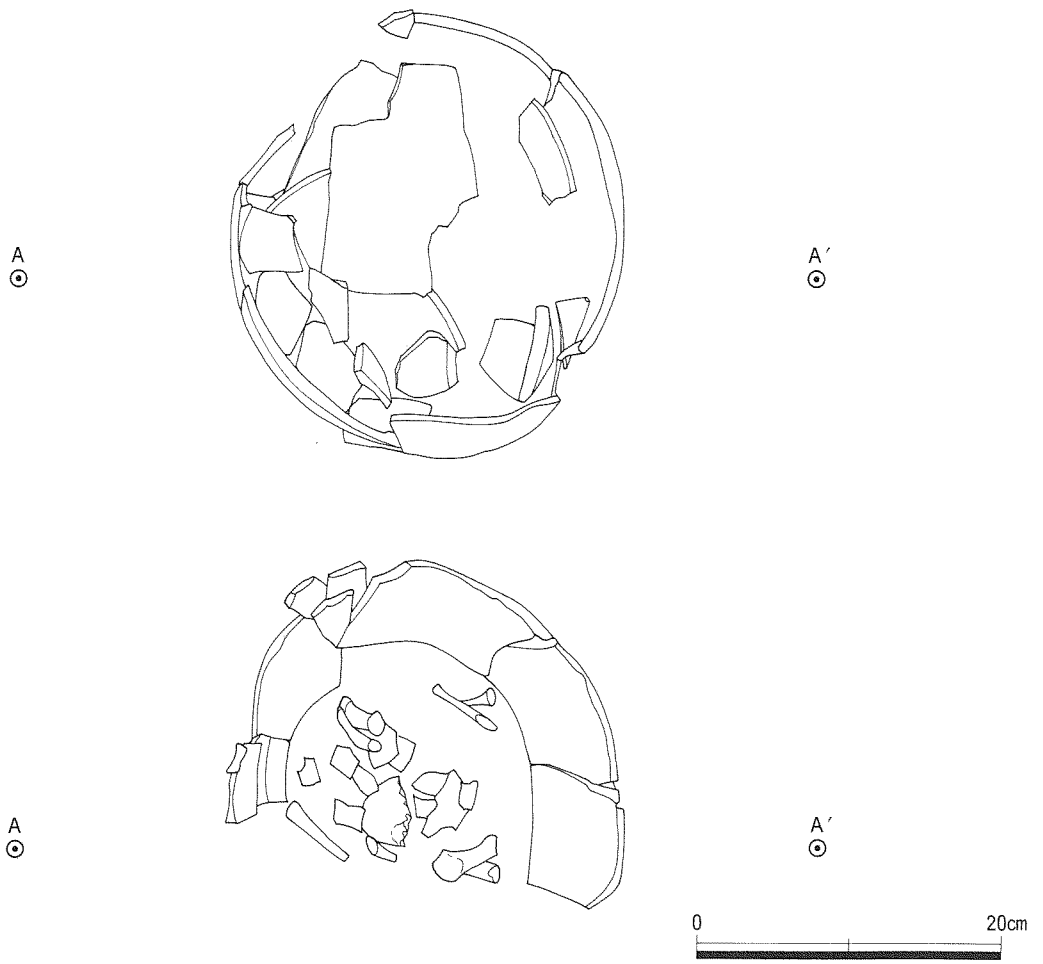
写真32 土器棺墓1 棺内土層



写真33 土器棺墓1 人骨



写真34 土器棺墓1 検出状況



第23图 土器棺 1

土器棺墓 2 (SK55)

[調査経緯] G 2 で検出した。調査開始直後東半区において、表土除去作業後の遺構検出作業中に、晩期前半元刈谷式期の土器がつぶれたような状況で出土した。破碎貝層の上面と同一レベルで検出した土器棺墓である。土器棺の土器は、横位で口縁部を東、底部を西に向けている。

検出時には 1 個体の土器が多少攪乱を受けながらもそのままの場所につぶれているものと考えていたが、整理作業において、接合作業を進めると、2 個体の組み合わせであることが判明した。口縁部破片を含む個体の方がやや多くの破片を用いているが、2 個体ともそれぞれ全体の半分強の破片のみが土器棺墓として用いられている。板状の破片を組み合わせた土器棺墓である。

[人骨] 東北部分が一部攪乱され失われている。上面に広がっていた土器をはずし、内部を精査したところ頭部を東に向けた屈葬した姿勢で幼児が埋葬されていた。胸部付近の骨は失われていたが、脚部の遺存は良好である。頭部付近には別の土器片しかれており、頭骨もその下に一部ではあるが遺存していた。

[遺物] 土器棺に用いられている土器は巻貝条痕により外面を調整し、内面はケズリ調整を施している。口縁部には粘土の貼り付けによる縁帯が施され、棒状工具の刺突列が施されている。底部には木葉痕が認められる。このように土器棺を組み合わせて土器棺墓を構築する方法は東海地域に広く認められる方法で、市内でも牛牧遺跡などで類例が認められる。

本遺構も表土直下の遺構であり、現地表面からも 10cm～20cm の深さにあたる場所での検出であり、土器棺墓 1 同様、縄文時代の生活面と現地表面の高さに差がないことになる。



写真35 土器棺墓 2 上面



写真36 土器棺墓 2 人骨



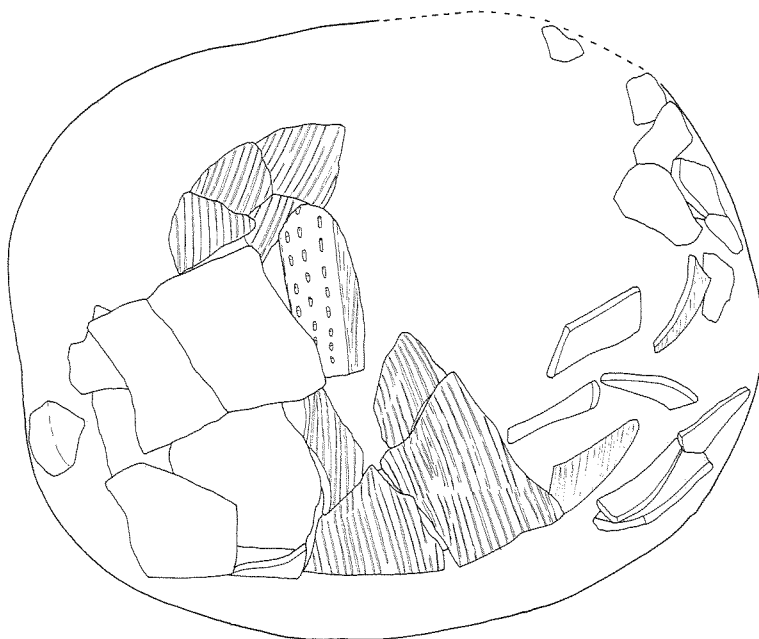
写真37 土器棺墓 2 下面土器



写真38 土器棺墓 2 検出状況

上面検出

㊦

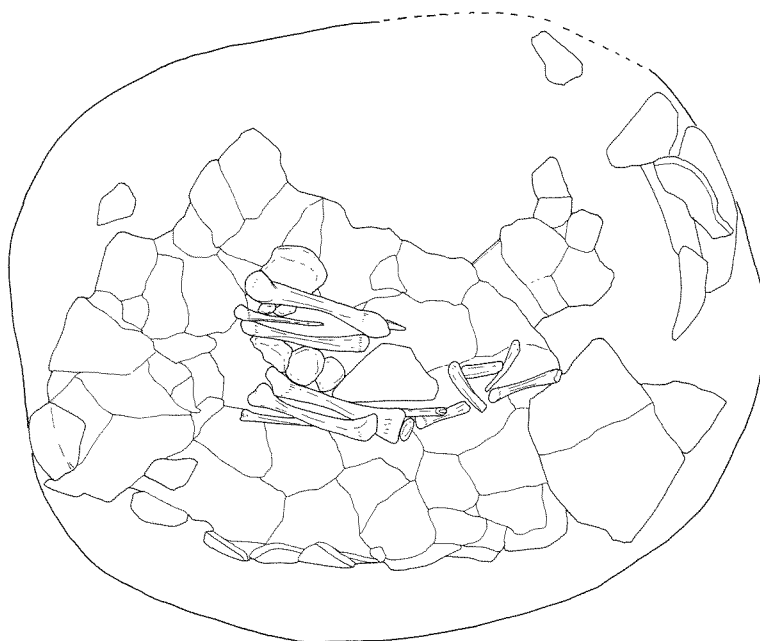


㊦



下面

㊦

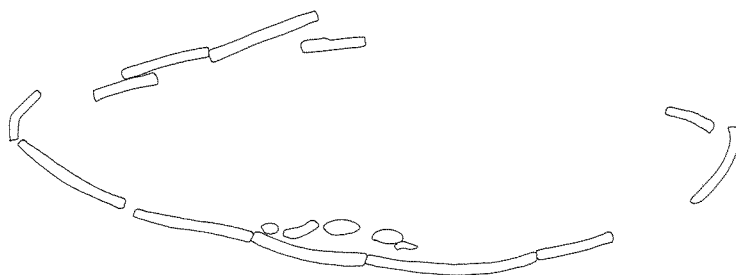


㊦



A
11.800

A'



第24図 土器棺墓 2

土器棺墓 3 (SK51)

[調査経緯] G 3 で検出した遺構である。土壙墓 8 についての記述でものべたが、G 3 において検出した混貝土と遺物が集中する地点のうち、土壙墓 8 の北西に位置する物に対して SK51 の遺構番号を与えた。掘り下げを進めるとほぼ関係の土器が横倒しでつぶれるような状況で確認された。周辺の包含層掘削を平行して行ったため、土器のみが浮き上がるような格好となってしまう、遺構の掘り方のプランは検出できなかった。しかしながら土器の遺存状況は良好で、土器の精査を進めていくうちに、人骨がともなっていることが判明した。

[人骨] 土器棺に用いられている土器は深鉢形土器で底部を西、口縁部を東に向けていた。土器の一部を取りあげ内部を精査したところ、幼児骨 1 体が良好な形で遺存していた。頭部を西に向けた仰臥屈葬である。すなわち、土器の底部方向に頭部をいれたもので、屈葬状態で土器に頭から入れられている状況である。屈葬されているため、人骨は上半身と下半身の骨が重なるようにして出土しているが、腰部は土器からはみだしていた。全長約 0.65m、幅約 0.37m を測る。

[遺物] 土器棺の土器は無紋の土器で、胴部付近から緩やかなカーブで立ち上がり、口縁部付近は緩く内湾した器形である。表面はケズリが施されており、内面もへらによるナデが施されている様である。口縁部はやや細く作られており、内面は直線的に、外面は丸みが強く仕上げられている。外面からの押さえは少なく、元刈谷式から稲荷山式にかけての時期の土器であるといえよう。



写真39 土器棺墓 3 人骨 (北から)

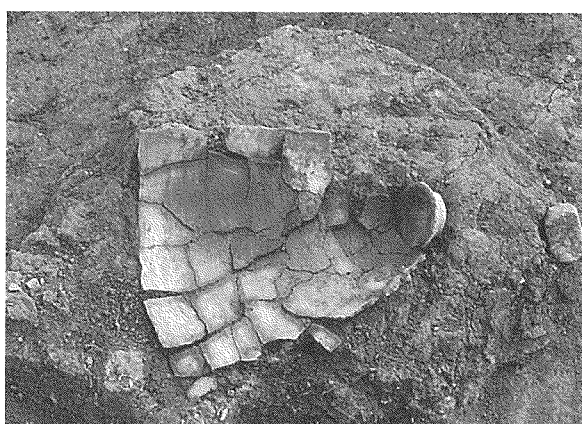


写真40 土器棺墓 3 下面土器



写真41 土器棺墓 3 人骨 (東から)

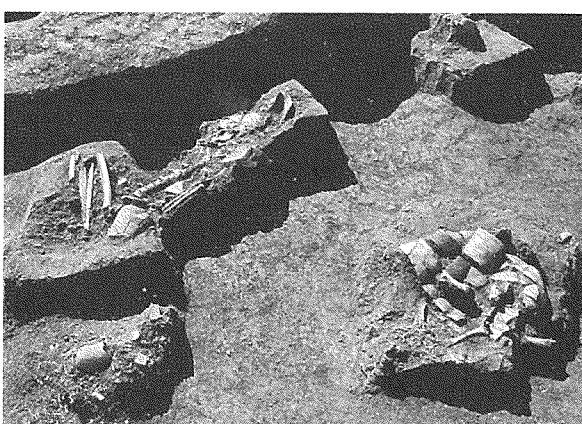
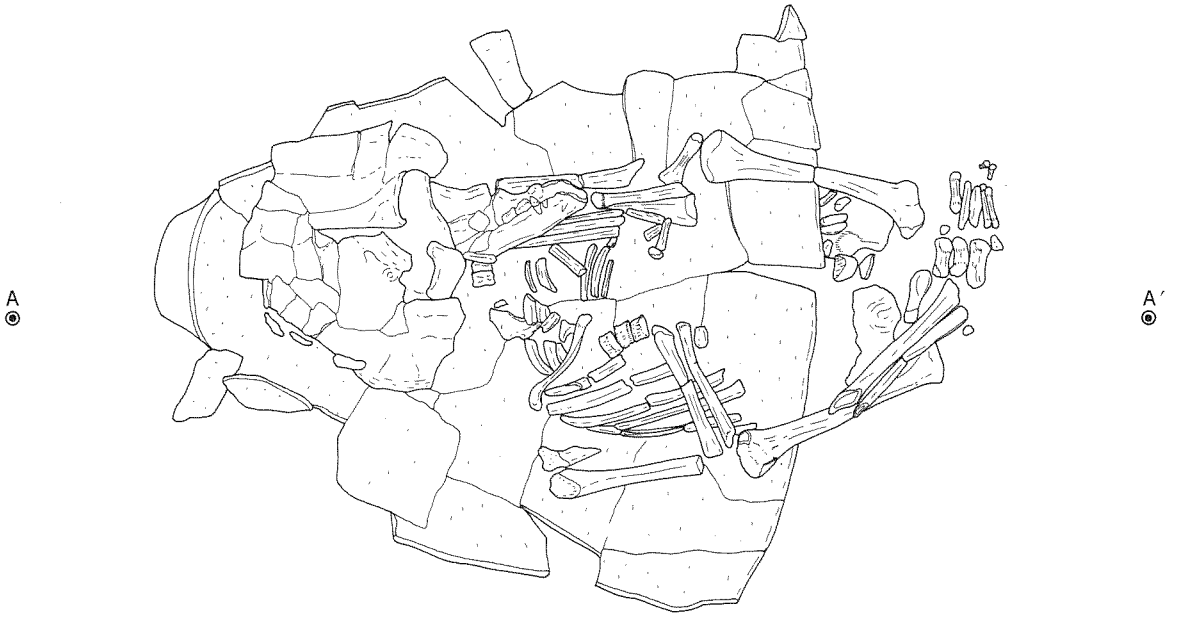
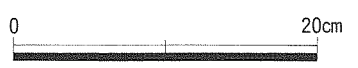
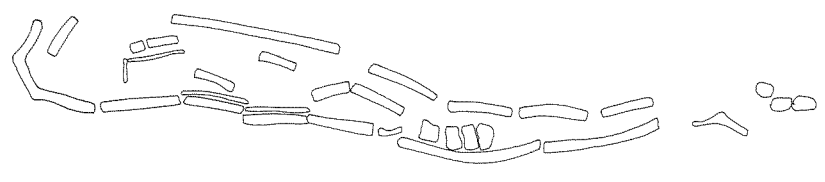


写真42 土器棺墓 3 および土壙墓 8



11.700 A

A'



第25图 土器棺墓 3

その他墓塚の可能性のある土坑

以上のように人骨の出土が認められ、明らかに縄文時代の墓である遺構は土壙墓13基、土器棺墓3基である。しかしながらそれ以外にも小片であるが、人骨の出土が認められた遺構がある。土壙墓の可能性のある遺構としてここで紹介する。

SK54

SK54はG3の南側、土壙墓8、土器棺墓3の西側にあたる場所である。土壙墓8、土器棺墓3と同様に、包含層中に破砕貝と遺物の集中としてとらえた遺構であるが、掘り下げを進める中で掘り込みが地山熱田層まで達しておらず、遺構の形状のつかめなかった遺構である。

土壙墓8、土器棺墓3とも包含層の上面において検出しているが、遺構底面が地山まで達していない。両遺構とも人骨の残りが良好で、土器をともなっていたために遺構として掘りあげられているが、土坑の掘り方は検出できていない。SK54についても縄文時代の土壙墓である可能性があるといえよう。ただし土壙墓が壊されているためであろうか、遺構としては掘り方がうまくつかめなかった。人骨は包含層からも出土しており、遺構として断定することはできない。

SK68

土壙墓・土器棺墓群がいずれも東半区に分布しているのに対して、SK68についてはG3に位置する遺構である。G8グリッドの北側に位置する。中世溝であるSD03の底面で検出された遺構で、覆土は底面付近にわずかに残るのみであった。出土遺物が少ないため、確実に縄文時代の土壙墓であるとは言い難いが、少なくとも中世以前の遺構であり、骨の破片の出土は認められた。

検出された遺構の規模は、長軸で0.6m、短軸で1.0mの楕円形の形状をしており、主軸は北北西から南南東に向く。おそらく2号住居址と重複する関係になるが、SK68自体が中世溝によって上面を完全にとばされているため、相互の切り合い関係は把握できない。遺構底面は2号住居址の床面より低く、地表面からかなりの深さまで掘り下げられたことが想定される。



写真43 東半区



写真44 西半区

2. 住居址

今回の調査で確認された縄文時代の住居址は2遺構である。2号住居址(SB02)と5号住居址(SB05)で、2号住居址は添え石炉のある竪穴住居址、5号住居址はおそらく平地式の住居になると考えられる住居址である。

2号住居址(SB02)

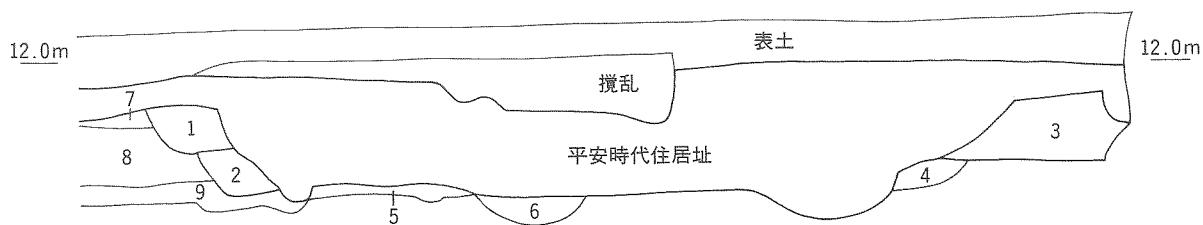
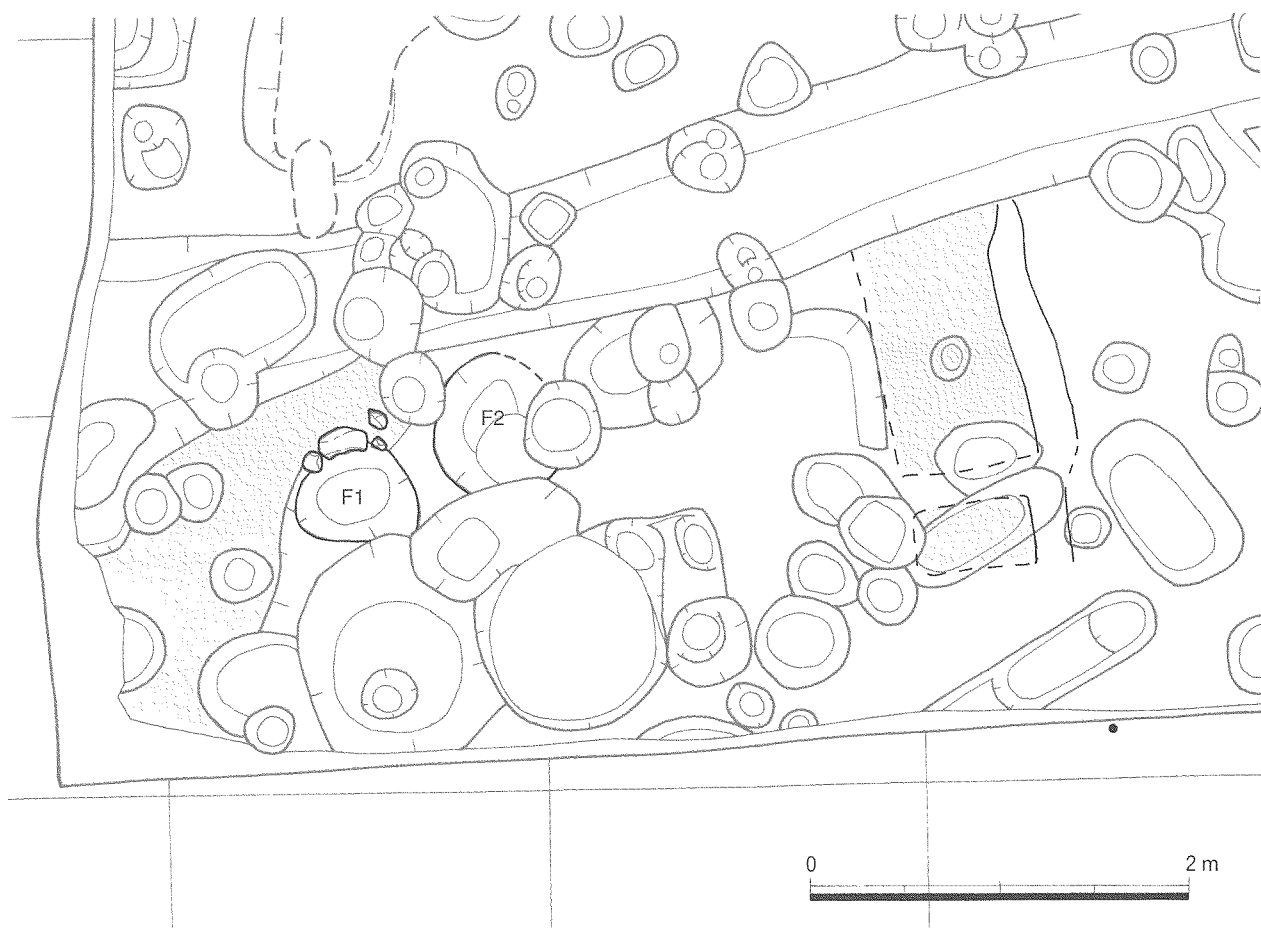
G8で検出した。既に調査経過で述べたとおり、西壁付近で破砕貝を含む古代の包含層を掘削し、地山面で遺構検出したところ、焼土面を3か所検出した。このうち南側の焼土は、竈跡(F3)で古代の住居跡であることが明らかとなった。残りの2か所の焼土面は、炉跡(F1、F2)で北側の炉跡(F1)には熱を受け赤化した石が置かれていた。この炉の存在から、この炉跡の南と北にある貝層(南側貝層はSK63とした)がこの住居跡の廃絶後廃棄されたものであることが明らかになった。この炉跡の東側は中世溝SD03が南北方向に走っているため、住居跡の壁は滅失していた。従って、この住居のプランは明らかでない。検出面(標高約11.80m)から床面までの深さ(壁の立ち上がり)は、約30cmを測る。床面は地山面より約10cm高く、褐色土で貝はほとんど含まれていない。F1の被熱範囲は、東西約44cm、南北約57cmを測り、中央が窪む。東側に上面が平滑な石を置いている。F2は、F1の南側約20cmのところであり、被熱範囲は直径約70cmで中央が窪むが、赤化しているのは北よりで多くは白色化している。石はない。F2からF1へ移動したものと思われる。

住居址覆土にあたりと考えられるSK63および住居址の北側覆土の貝層からは、元刈谷式期から稲荷山式期にかけての時期が想定される遺物が出土している。特に貝層内からは、大型の破片が出土している。貝層の貝の遺存状態も良好であり、おそらく廃絶住居址への貝および土器の投棄後、大きな攪乱を受けていない様子である。貝層と住居址覆土と床面の間には非常に柔らかなやや黒みの強い褐色土が1~2cmほどの厚さで堆積していた。この土の中には掘削時に肉眼で確認できるほどの魚骨が確認できた。また貝層直下のこの土層には、比較的遺物がまとまっており、写真47のように黒色磨研土器も出土している。穿孔された土玉もこの土層から出土した物である。

炉石4点のうち3点は、くぼみ石と石皿であった。遺跡全体でのくぼみ石、石皿の出土量が少ない中で、かなり高い確率で炉石としての転用がはかられていることは石材の利用方法として興味深い。河川等の石材供給地から距離のある熱田台地の先端に位置する本遺跡において、資源利用がいかに行われていたかを考える上で非常に興味深い事例である。

2号住居址の時期であるが、おそらく墓域が構成されてゆく晩期前半段階にあたりと考えられる。上面の貝層中からは少量であるが縄文時代晩期末の土器も出土している。しかしながら晩期末の時期の住居址に貝を投棄し、その際にそれ以前の土器が混入したと考えるには、晩期前半と考えられる土器の遺存度高すぎると思われる。

墓域と住居が混在する状況は晩期前半においてそれほど珍しくない。岡崎市の新宮遺跡例なども住居形態は多少異なるが、2号住居址の時期と同じ段階であると考えられる。



1. 破碎貝主体の層：φ 2～3 cm、60%ほど、破碎貝が多い。粘性、しまりともに弱い。
2. 褐色土（やや明るい）：φ 5 mmほどの貝をごく少量、1～2%含む。φ 2～3 mmの焼土粒、炭化物粒を少量含む。φ～10 mmの地山土ブロックを少量含む。粘性、しまりともにややあり。
3. 純貝層→ハマグリ、アカニシなど主体
4. 褐色土（やや赤みがる）：φ 1～2 cm大の地山ブロックを少量含む1。粘性、しまりともにやや強め。地山漸移状
5. 褐色土：φ 1～2 cm大の地山ブロックを少量含む1。粘性、しまりともにやや強め。
6. 褐色土：φ 5～10mmの貝をごく少量（1～2%）含む。φ 2～3 mmの地山土をブロック状にやや多量に含む。粘性ややあり、しまり弱い。
7. 褐色土（やや黒味がる）：φ 2～3 mm炭化物をごく少量含む。粘性、しまりともにややあり。22と似た土だが、貝の量が異なる。
8. 褐色土：φ 1～2 cm大の地山ブロックをごく少量含む。粘性、しまりともにやや強め。
9. 褐色土（やや赤みがる）：φ 1～2 cm大の地山ブロックを少量含む1。粘性、しまりともにやや強め。地山漸移状

第26図 2号住居址



写真45 2号住居址床面



写真46 2号住居址床面具層



写真47 2号住居址床面出土土器



写真48 2号住居址付近完掘

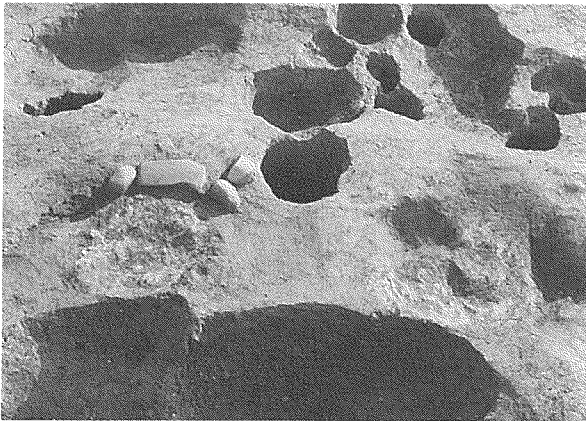


写真49 2号住居炉址



写真50 西壁貝層(2号住居址覆土)

5号住居址 (SB05)

G7で検出した。地山面より約30cm上位で焼土面(標高約11.70m)を検出した。検出面は2号住居の検出面とほぼ同じで遺物包含層上である。焼土は約1.0×0.5mの範囲で確認された。土層断面の観察から、上面から約10cm下まではやや黄味がかっている部分と赤みがかっている部分があり、硬く焼け締っている。その下位は、赤褐色土、褐色土となり地山に至る。この焼土周辺から出土した縄文土器は、寺津式などがある。この焼土は、住居内の炉跡と考えられるが、2号住居址と異なり掘り込みは確認されないので、平地式住居であった可能性が高い。

炉跡周辺で縄文土器と考えられる遺物が出土した小穴(Pit)は、P264(規模は約40×40cm、地山面からの深さ約42cm、出土遺物は土器片7点)、P263(同約40×35cm、同約43cm、土器片9点)、P337(同約35×30cm、同約17cm、土器片3点)、P294(同約20×25cm、同約14cm、土器片2点)、P267(同約35×25cm、同約26cm、土器片2点)、P277(同約33×40cm、同約31cm、土器片5点)、P350(同約39×43cm、同約27cm、土器片11点)である。さらに深さが地山面から30cm前後の小穴は、P262(規模は約32×30cm、深さ約31cm)、P336(同約40×40cm、同約35cm)、P269(同約35×38cm、同約26cm)、P332(同約30×30cm、同約25cm) P322(同約38×26cm、同25cm)、P321(同約25×22cm、同約30cm)などがある。P336からは土器片12点出土している。これらの小穴のいくつかは柱穴であったとすれば、直径約4mのプランが想定される。

2号住居址の床面と、5号住居址のレベルの差は、20cmほどである。床面出土と考えられる土器は縄文時代後期末から晩期初頭の土器であるため、住居址の時期は5号住居址→2号住居址の順であることが判断される。断定はできないものの、墓壇群で確実に後期末晩期初頭以前の構築が考えられる住居址がないことから、本住居址は墓域の構成ができあがる前の住居址である可能性が高い。



写真51 5号住居址

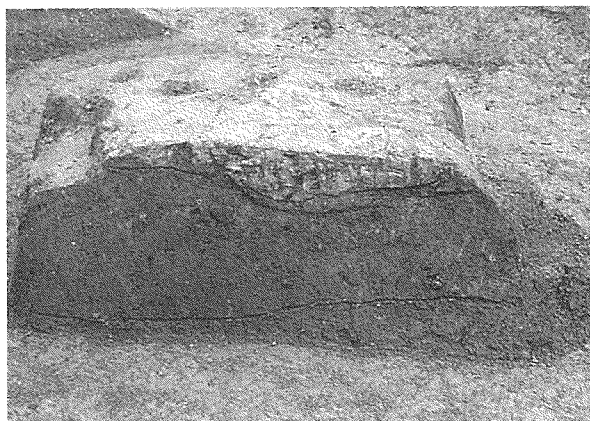


写真52 5号住居炉址

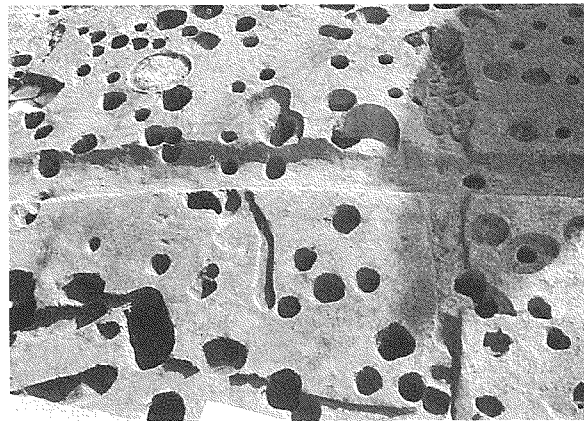
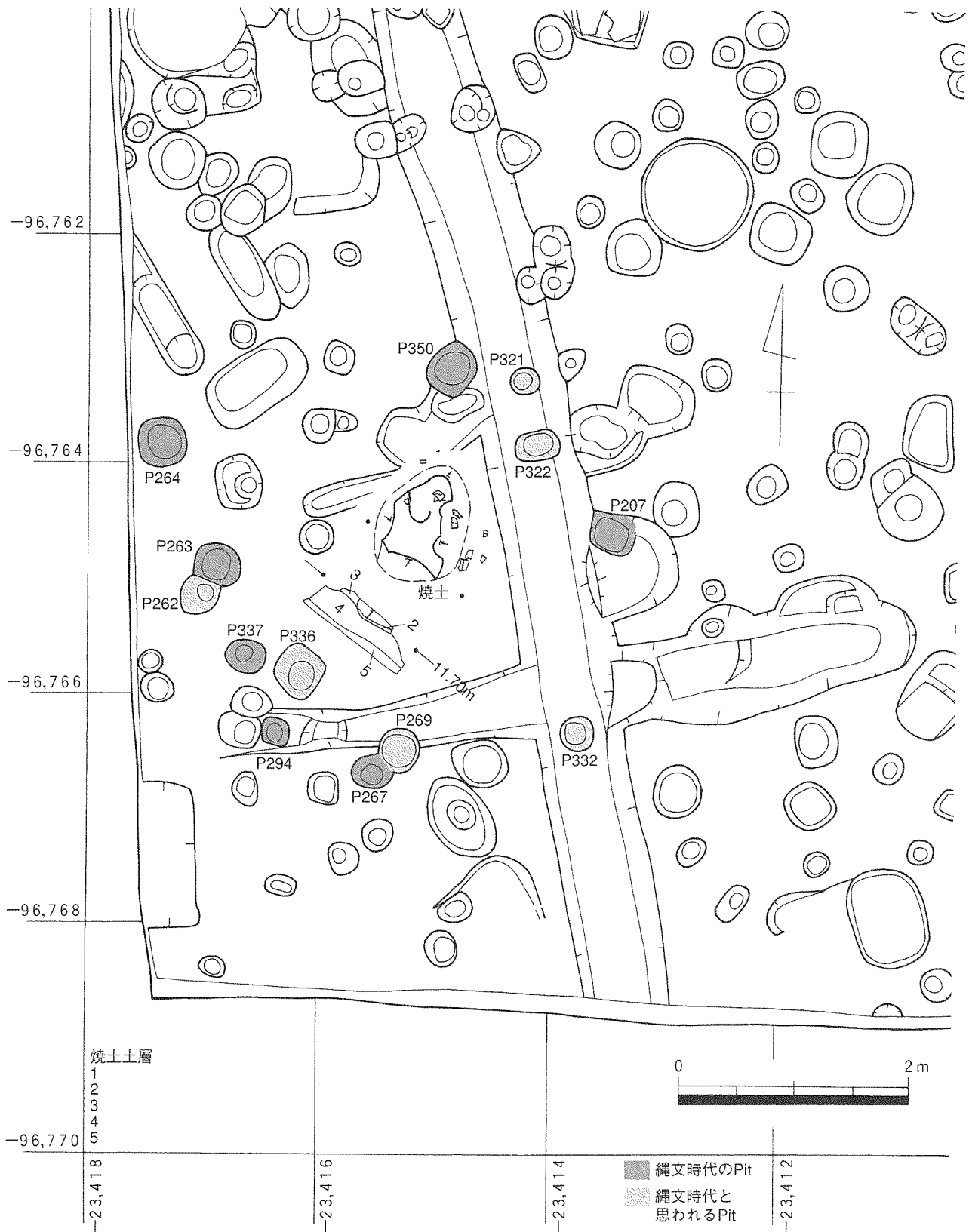


写真53 5号住居址付近完掘



第27図 5号住居址（焼土）

焼土 断面

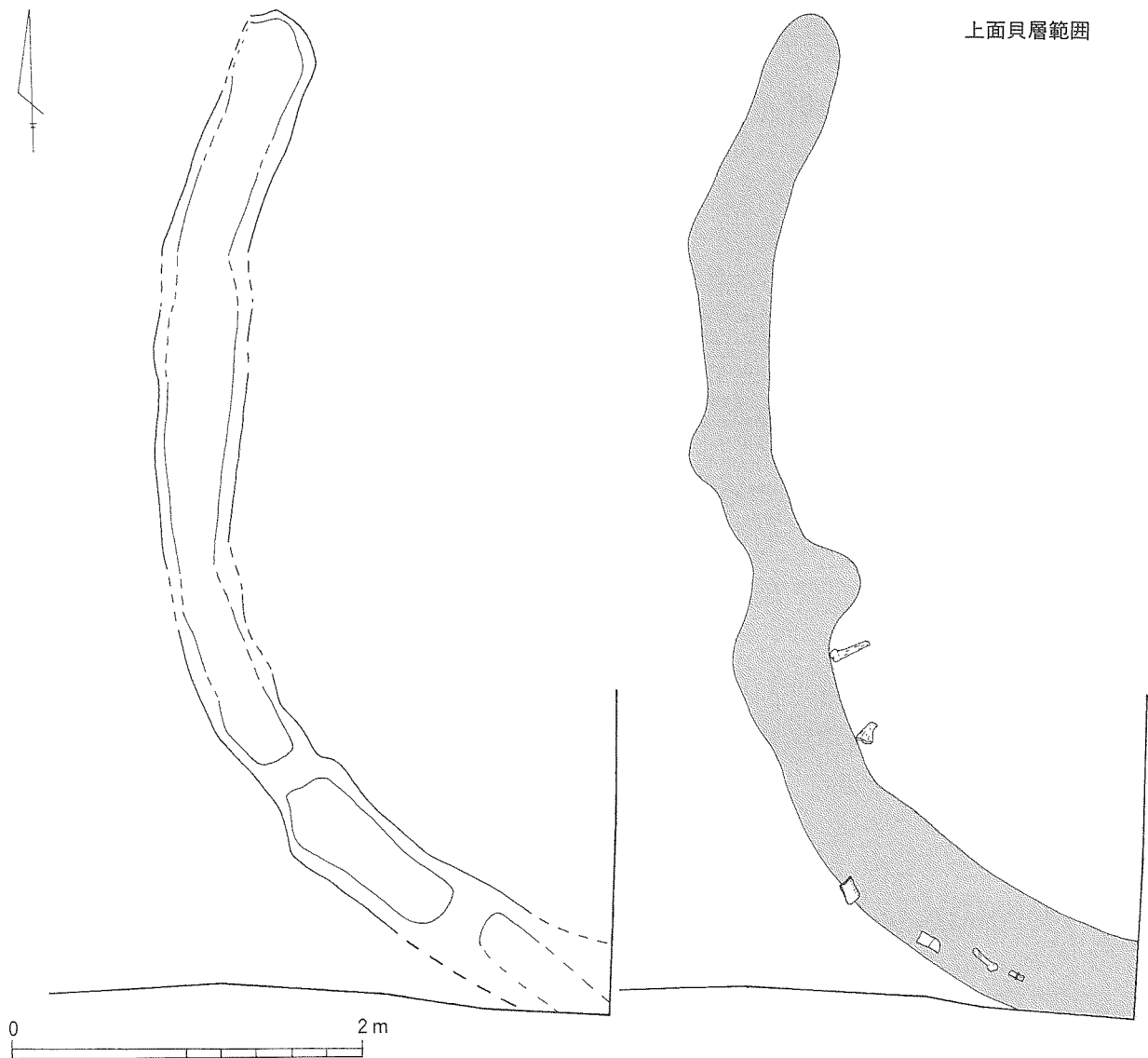
- | | | |
|---|------|---------------------|
| 1 | 焼土 | やや黄味がかかる 貝を少量含む |
| 2 | 赤褐色土 | 焼土との漸移的な土 4層が被熱を受ける |
| 3 | 焼土 | 赤味が強い 1層と基本的に同じ |
| 4 | 褐色土 | 炭化物、焼土粒をごく少量含む |
| 5 | 褐色土 | 地山ブロックを少量含む。 |

3. その他の遺構

帯状貝層 (SK33~37)

G 4・G 5 付近は表土直下に破碎貝を含む混貝土層が広がっていることは先述の通りであるが、その破碎貝層を順に掘り下げてゆくと、特に貝の遺存度が高く、貝の割合の高い部分が弧状に連なる状況で検出された。検出された時点で、土壙墓 1、土壙墓 2 はすでに確認していたため、この溝状にのびる貝の集中を、土壙墓との関連がある可能性があるものとして、G 4 の東西サブベルトより北側部分を北から SK33、SK34 とし、サブベルトより南についても同様に SK35、SK36、SK37 と呼ぶことにした。貝層を掘りあげた時点で、溝状の遺構であることが判明したが、調査段階で貝層としてとらえていたため、ここでは帯状貝層と呼称する。

この帯状貝層はその南端が、調査区を越えさらに南に延びる。検出長約 6.3m、幅 40~60cm を測る。南壁土層断面では、溝の深さ約 28cm のうち、貝層は上位約 20cm に堆積し、下位層は黒褐色土で貝殻を少し含む。地山面まで達していない。北端から 1.4m 付近での土層観察では分層は困難であった。貝層は、ほぼ純貝層



第28図 帯状貝層



写真54 帯状貝層（北西から）



写真55 帯状貝層 検出状況

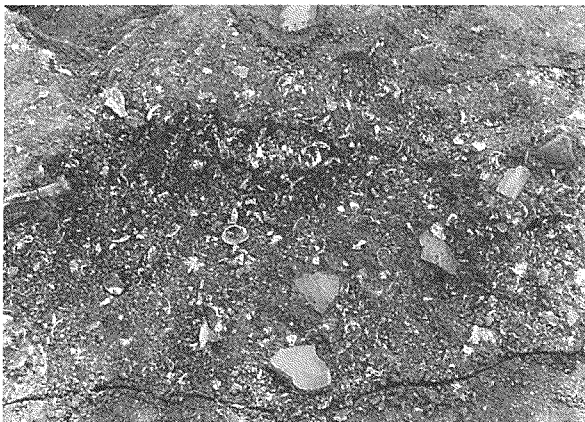


写真56 貝層部分

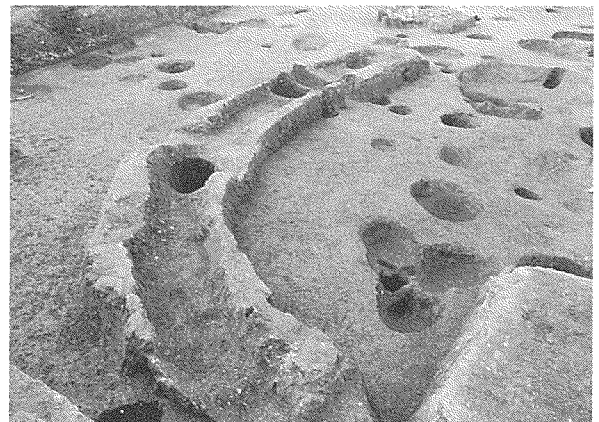


写真57 帯状貝層（南東から）

で縄文土器、獣骨を含む。この貝層を掘削すると溝状となったが、底面が立ち上がる場所もあり、いくつかの長方形の土坑が連続している可能性もある。しかしながら遺物の出土状況から土壙墓の可能性は低いと考えられる。

この溝状貝層であるが、掘り込みの確認面が表土直下にあたるため、新しい時代の遺構である可能性も考えたが、貝の遺存状態の良好さと、周辺の破碎貝を含む混貝土中には平安時代の遺物がかなりの量含まれているのに対し、本遺構から出土するのは縄文土器のみで、しかも比較的遺存状態のよい大型の破片が多い。このため縄文時代に掘削された遺構であると考えられる。

こうした遺構の類例は管見の限り少なく、遺構の性格は不明である。

SK40

SK40はG 2の北東側の調査区壁際で検出した遺構で、壁面の観察から、周辺の土器棺墓2と同様に現在の地表に近い高さから掘り込まれていることが確認された。この土坑は東側が調査区外に出てしまい、遺構全体の形状は判断できないが、おおよそ隅丸の長方形であると考えられる。短辺が約90センチほどの平底の遺構である。この土坑の特長は遺構底面から小破片の縄文土器が多量に出土していることである。他の遺構にもなつての出土する土器片よりもかなり小破片化が進んでいるが、接合してみると比較的大型の破片にまで接合できる個体もあり、また接合しないまでも、同一個体の可能性の高い破片が多かったりと、元々小破片であった土器を集めてきたとは考えにくい構成となっている。無文の破片が多いが、元刈谷式の口縁部破片が含まれておりこの時期以降に掘り込まれた遺構であることがわかる。

この遺構内からも人骨の小片が出土しており、土壙墓の可能性も否定できないが、直ちに遺構の性格を決定することはできない。

P127

G 4の北東に位置する土坑で、土壙墓11の西に位置するピットである。このピット中からは、比較的まとまった量の土器が出土している(写真59)。ピットの形状はほぼ正円で、地山を掘り込んでいる。遺物の出土はピット埋土の上面に集中しており、柱穴としてのピットではないと思われる。遺構の性格については不明である。

P151

G 3の中央部に位置するやや細長いピットである。このピットの上面からも土器の大型破片が出土している。鉢形の器形の土器が全周の約1/3ほどの大きさ残存しており、土圧をうけて割れているが、ほぼそのまま押しつぶされたような形で出土している。このピットからは人骨等の出土はみとめられなかった。

出土土器は平底の鉢形土器で、器面の調整は顕著ではない。時期は決めにくいだが、おそらく晩期前半に位置づけられるものであろう。



写真58 SK40



写真59 P127

縄文土器

本調査地点では、縄文時代晩期中葉（元刈谷式～稻荷山式期）を中心とした時期の遺物が多く、後期末から晩期前葉と晩期末の土器も出土している。出土遺構ごとに第29図～第47図に示した。なお本地点で中心となる晩期中葉は、晩期縁帯文系の土器から、無文の土器へと変化してゆく段階であり、図示資料の選択にあたっては、無文や器面調整のみが認められる個体であっても、口縁部破片はできる限り図示することとした。

第Ⅰ群土器 有文深鉢形土器

第1種：後期末から晩期初頭の土器（下別所・寺津下層式）

第2種：晩期前葉の土器（寺津式）

第3種：晩期中葉（元刈谷式）

第Ⅱ群土器 器面調整のみの深鉢形土器

第1種：巻貝条痕調整

第2種：二枚貝縄文条痕調整

第3種：その他の条痕文

第Ⅲ群土器 無文深鉢形土器

第1種：器面ナデのみ

第2種：輪積痕を残すもの

第Ⅳ群土器 異系統の土器

第1種：東日本系土器

第2種：西日本系土器

第3種：その他の土器

第Ⅴ群 深鉢以外の器種

遺構出土の土器

土壙墓Ⅰ（SK01a）

SK01は土壙墓であるが、上面に混土貝層が広がっており、その中から、土器が出土している。第Ⅰ類の有文土器は少ない。1～4・6の個体は波状口縁に沿って、2本の沈線を巡らし、モチーフを描出している。内面はナデ調整だが外面の調整は口縁部破片のみということで、判断できない。口唇は軽く面取りがほどこされている。9は地文として単節縄文のRLを施し、その上を棒状工具によってチーフを描出する。12は半截竹管状工具の集合させたような条線を口縁部付近に施し、直行するように同じく条線を施しており。器形は緩やかに湾曲しながら、内屈しており、寺津式に近い時期が考えられる。残りはほとんどが第Ⅱ、Ⅲ群土器である。外面ナデないし巻貝条痕を施すものが目立つ。口縁部形態は丸いものが多いようだが、ひらく面取りしてあるものや、やや三角形状にとがるものも認められる。32は二枚貝条痕を施した深鉢であるが、やや時期が下り、晩期末の土器といえよう。混入したものであろうか。

土壙墓Ⅵ（SK45）

土壙墓Ⅵからの出土遺物はあまり多くない。34の土器は内外面とも二枚貝条痕調整を施し、竹管状工具の先により、2条の刺突列を口唇部直下に巡らしている。35は土壙墓Ⅰ同様、平行沈線間を刺突するものを、口縁部から少し間をおいて巡らしているが、土壙墓Ⅰのものと異なり、平行沈線は多条に施されている。こちらの土壙墓からも第Ⅱ・第Ⅲ群の土器が主体をしめる。いずれもナデ調整や・巻貝条痕調整の個体が主体であり、口縁部付近ではやや厚みがあり、丸い作りの口縁部となっている。

土壙墓Ⅶ（SK44）

土壙墓Ⅶは土壙墓Ⅷより土器の出土量は少ない。44はやや外に開き気味の器形で、口縁部外縁に丸みの強い貼付けを施しており、貼付上には擬縄文が施される。45は波状口縁を持つ個体である。凹線の崩れたような沈線が2条巡らされたようで、一番下の沈線と波状口縁部分との間に三角形条の空間ができるよう

だが、その部分には、沈線間に刻みを施し、埋めているようである。長野県方面の隆帯文土器の影響を受けた土器であろうか。

土壙墓 8 (SK52・53)

土壙墓 8 については人骨にともなって土器が確認されているが、SK52・53の脇に沿うように出土したのが、48・49の土器である。48が頭部付近に敷かれるようにして、そして49は人骨の腰付近から出土した土器である。両個体ともによく似た作りの土器で、焼成具合も類似している。48は輪積痕を残すように整形されており、口縁部から3段目付近の輪積痕付近から指頭などにより斜めにナデられている。部分的にミガキ状の効果が認められる場所もある。口縁部付近は縦方向のナデが及んでいないためであろうか、横方向のナデ痕が輪積に沿って認められる。内面はきれいに整えられており、ヘラ状工具による調整痕跡がよく見える。土器の作りは全体に薄目の作りであるが、特に口縁部にかけての部分は、胴部と比較して際だって薄くなってはいない。口唇部は平らに面取りが施されている。

49の土器もやや小振りであるが、ほぼ同様な作りである。49の底部付近には部分的に棒状工具を使ったようなミガキ痕が認められるが、まとまった一点のみである。47は土壙墓 8 の清掃中に検出した土器である。口縁部の小波状部分である。口縁部から少し間をおいて刻みを施した、隆起帯を巡らしている。甲信地域に分布する隆帯文土器と考えてよいと、百瀬長秀氏からご教示頂いた。

土壙墓10 (SK38)

土壙墓10からは、57の深鉢胴下半部の個体のほかに、出土遺物は少ない。57は土壙墓の東よりに、底部を上にした斜位の状態で出土した土器である。胴部外面は、胴部中程までは横位の巻貝条痕を施している。胴下半にはミガキ様に観察できる調整が縦方向に施されているが、底部付近では巻貝条痕状に観察できることから、巻貝を工具としたミガキであるといえよう。胴部内面は工具幅15mmほどのハケ状工具による調整が施されており、内面底部から約10cm強にわたって炭化物の付着が認められ、煮沸具としての利用履歴が確認できる。59は直線的に開く器形で、半截竹管状工具による平行沈線列を3条巡らし、モチーフの区切りには、竹管状工具による刺突を施している。

土壙墓11 (SK27)

上面を攪乱されていたため遺物量が少ないが、内面に巻貝条痕を施した深鉢の口縁部破片(60)が出土している。

土器棺墓13 (SK15)

上面に平安時代の攪乱を受けていたこともあり、比較的掘り込みが良好に残っていたにも関わらず、遺物の出土量は少ない。巻貝条痕を施した胴部破片(61)をしめした。

土器棺墓 1 (埋設土器 1)

嬰兒骨を埋葬した土器棺である、63と63の中から蓋状に出土した62の土器を図示した。62は土器棺内に蓋状に伏せられていたものであるが、外面はケズりに近いナデが施されており、砂粒の脱落が観察される。調整方向は口唇直下では横方向で、口縁部より3cmほど下から縦方向に変化する。内面はハケ状工具による横方向の調整が施される。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口唇端面はやや細くなり、平坦にナデられる。この土器の胎土は特徴的で、 $\phi 1 \sim 2$ mmの石英を多量に含み、雲母も含むことから、光が当たるときらきらとする。63が土器棺本体の土器である。胴部の中央部から下半部にかけてが残存しており、底部

は打ち欠かれていた。胴部は全体に縦方向の条痕が施されており、原体は確定できないが部分的に単位内に筋状の痕跡が認められることから、巻貝条痕である可能性がある。胴部の中位には横方向の条痕が施されているが、これは先述の縦の条痕の後に施されていることが観察できる。2本1組の沈線が並ぶため、半截竹管状工具による平行沈線を重ねた条痕であると判断できる。底部付近にはミガキ状の調整が確認できる。1個体の土器に3種類の調整が確認できる。原体については横の条痕とミガキが同一工具である可能性も考えられるが、最低でも2種は用いていることになる。内面の調整はまた異なった工具が考えられる。丸みのある工具により、ケズリ取られたような調整だが調整の単位間の切り合いがはっきりと確認でき、稜が認められる。確定はできないがハマグリなどの二枚貝の腹縁による調整の可能性がある。

土器棺墓2（埋設土器2）

土器棺墓2は67の土器と68の土器を破片として組み合わせていた。67は元刈谷式の土器で、口縁部には縁帯が貼り付けられ、縁帯上に、竹管状工具による刺突列を3条巡らしている。胴部は巻貝条痕によって調整され、胴上半は横位に、下半は縦位にそれぞれ施されている。内面は荒いナデ調整である。底部には木葉痕が確認できる。

68も67とよく似た作りの土器であり、調査現場段階では同一個体と考えていた。復元作業をすすめると、2個体になることが確認された。内面調整の荒さがやや異なるようである。

土器棺墓3（SK51）

土器棺墓3は64の個体が横につぶれたような状況で出土した。外面は粗い指ナデでケズりに近い状況である。口縁部はやや内屈気味で、口唇端部は外そぎの形となる。器外面には輪積み痕は明瞭ではない。口唇部付近において、外面からの押圧は加えられていない。65・66の土器は、土器棺墓3の周辺から出土した土器片である。

2号住居址（SB02）

2号住居址のうち、床面近く、貝層の下から出土した土器を、69～85に示した。69は西日本系の黒色磨研土器である。内外面に炭素の吸着をうけて、黒みが強い。内外面ともよく磨き上げられており、ミガキ痕が確認できる。その他床面付近からは第II群土器が多く確認されている。72は内外面に巻貝条痕が施されている。半截竹管状工具の腹による押し引きが施されており、元刈谷式の終わりに近い段階の土器であろう。第II群の中でも第1種巻貝条痕の土器が多いようである。上面の貝層および、SK63から出土した土器は、127のように先述の72に類似する土器などが含まれる他は、第II群、第III群の土器がほとんどである。床面に比べて二枚貝条痕を施す第II群2種の土器が多い傾向にある。

5号住居址（SB05）

この住居址は平地式であると考えられるが、炉址付近から比較的まとまった土器が出土している。164は口縁部を厚く作り、その上に擬縄文を施し、半截竹管状工具による平行沈線列によりモチーフを描出している。165も同様な口縁部作りであるが、こちらは口縁部に擬縄文を施すのみで、平行沈線によるモチーフは描かれない。胴部は巻貝条痕で調整されている。170は、164よりも短く屈曲し、平行沈線も短く対向弧線文を描いている。しかしながら擬縄文は施されない。胴部は巻貝条痕によって調整され、内面はナデ調整が施される。166は後期末の凹線文土器の終末に位置づけられる土器であろうか。こうした組成は寺津下層式～寺津式にかけての時期に位置づけられるであろう。同部破片はほとんどが巻貝条痕を施したもので、

第II群第1種がそのほとんどを占めている。

帯状貝層

帯状貝層からの出土遺物は、有文のものは少ない。180は寺津式に比定される土器で、縄文地文に半截竹管状工具による平行沈線でモチーフを描出している。222はいわゆる櫃原式文様の土器である。第II群土器がほとんどであるが、第1種の巻貝条痕のものが比率的に高いが、二枚貝条痕の土器も少なくない。

SK40

SK40内から出土した土器は小破片であったが、接合作業を行うと、245や246のように大きく復元できる個体もあった。246は隆起帯を頸部に貼り付けた土器で、隆起帯上を押圧している。器形がやや異なるものの、類例もあり、晩期前半の土器であると判断される。247、248、253はほぼ同様の作りの土器で、半截竹管状工具の平行沈線でモチーフを描出し、単位部分には、竹管状工具により刺突を施す。第I群以外には、第II群1種と第III群土器が多い。巻貝条痕調整のものと、粗いナデ調整の個体がほとんどで、この遺構内の破片については二枚貝条痕の個体は少ない。

P127

P127も土器がまとまって出土している。285は内外面とも巻貝条痕調整の土器で、286は鉢に近い器形の土器で、内外面とも粗いナデ調整を施している。有文土器は287、289があたりが、287は半截竹管状工具により連続押し引きを施したもので、口縁部は三角形状に作られている。289は全体に厚くはなっているが、明瞭に縁帯を構成してはいない。半截竹管状工具による平行沈線で、対向弧線文を描いている。

その他の遺構

P151からは鉢状の土器が出土している。この個体もナデ調整のものであるが、286のものよりも表面の調整はなめらかである。SK23からは安行3bと考えられる土器が出土している。帯状の区画に追廻の渦巻繋ぎ弧文を配し、隙間を三叉文で埋めている。モチーフ内を細い原体の単節縄文RLで埋めている。

SK31の312は凹線文の土器の最終末の土器であろうか。SK43の土器は縁帯を有するものの、上端に向けて集約されつつある状況をあらわしているといえよう。SK63の332の土器は半截竹管状工具による刺突列と平行沈線を段違いで配した土器である。口縁部は直線的に立ち上がるが、内面がやや薄くない幅広く内削ぎ状の口縁部となっているが口唇端面は平坦である。SK74は小破片が多いが二枚貝条痕の資料が多い。361のように突帯文土器も認められることから、晩期末の遺構の可能性はある。

SD03、04ともに縄文時代より新しい時代の遺構であり、直接遺構と土器の関係はない。364は口唇端面に縄文を転がした鉢状の土器で外面は斜めのケズリ状のナデが施されている。輪積み痕が明瞭に残されている。P189からはほぼ完形に復元できた小型の深鉢が出土している。底部は後家底状になっており、外面は縦方向のナデ調整が加えられているが、胎土は良好でしっかりとした焼きとなっている。P243からは大洞BC平行と考えられる土器(430)と寺津式期のものと考えられる土器(431)が出土している。431は土壌墓1の12の土器と非常によく似た土器である。

遺構外出土の土器

包含層中や表土除去時に検出された土器を第43～47図に示した。第I群と第IV群を第43図に示し、時期的な問題を考慮し、第II群第1種、第III群、第II群第2種、第5群の順に示した。

434～438は地文に縄文ないし巻貝による擬縄文をほどこした上に、半截竹管状工具による平行沈線でモチーフを描出する。小破片がほとんどであるため、モチーフ等の細かな判断はつかないが、434は緩い波状文の連続であり、436、438は大きな波状を呈するようである。口唇部の形状はやや丸みをもった方形状のものが多いが、436、438などは口唇部にかけてやや細くなる。436の内面の貼り付けは、164のように波状口縁をなすためであろう。おおよそ寺津式ないし寺津下層式の土器であるといえよう。

439・440の個体は口縁部に貼り付けを施した上に擬縄文を転がしている。肥厚させる幅は比較的狭く、肥厚部にのみ擬縄文を転がす。440の貼り付けは丸みが強く、482・487などの土器とよく似た口唇部形状となる。擬縄文を転がす事を評価するならば寺津式を中心とした時期の遺物といえようか。

442は比較的直線的に開く器形であるが、口縁部附近に単節縄文を帯状に施文している。破片であるため全体の状況の把握はできないが、おそらく縄文施文が施されるのは、口縁部附近のみでと考えられる。おなじく寺津式を中心とした時期が想定される土器である。

441・443～459までは、縄文、擬縄文なしで沈線、ないし半截竹管状工具でモチーフを描出する土器である。443は単沈線を3状巡らせる土器であるが、凹線文土器の流れを汲む土器であるのか、半截竹管状工具による平行沈線が単純に沈線に置き換わってしまったものであるのか判断できない。444は半截竹管状工具による平行沈線により楕円状のモチーフを描出している。こうしたモチーフは164に通じるものであるが、擬縄文は施されていない。対向弧線状のモチーフも寺津式で一般的に認められるものであるが、451は半截竹管状工具によるものであるが、同じ対向弧線文でも446の土器は単沈線でモチーフを描出している。

460から465は半截竹管状工具による平行沈線であるが、押し引き状の刺突が加わるものである。対向弧線状のモチーフを施すものが一部には認められるが、押し引きが加えられる土器についてはほとんどが平行沈線を口縁部附近に何条か巡らしている。460もそうした土器の一つであるが、この個体の平行沈線はかなり深く、仕上がりの質感は半隆起帯状である。

466・467も半截竹管状工具で横方向の平行沈線を巡らせる土器であるが、器面調整との区別がつきにくい。

468～475は口縁部に縁帯を貼り付け、その上に刺突列を巡らす元刈谷式の土器片である。棒状工具による刺突列のみを巡らすものと、471のように沈線と刺突列の組み合わせによって構成されるものがある。476～480については、縁帯を持たないで、刺突列のみを巡らせる土器である。479のように刺突列が近接し、口唇部に近く集中するものはより新しい様相としてとらえられるものと考えられる。

481～489は縁帯を有するものの、刺突列を持たない土器である。439・440の土器は擬縄文を転がしていたが、同様に481・485のように縁帯上のみをナデ調整するものや、482・487のように巻貝条痕調整を縁帯上にも施したりするものがある。

490は土壙墓7から出土した45の土器と酷似した土器である。器面調整のためかつぶれかけた沈線で波状のモチーフと水平線を描き、波頂部と水平線の間でできる三角形上の部分に沈線による刻みを加えている。隆帯文土器の影響が考えられる土器であろうか。

491も3本の波状沈線を口縁部に巡らせる土器である。口縁部附近で大きく内湾する器形であり、口縁部は丸く収まる。内外面とも巻貝条痕調整である。

495・497は隆起帯を持つ土器である。495は壺状の器形になるのであろうか、やや低め断面三角形の隆

起帯上に円形の刺突が加えられている。497は性格不明の土器である。495同様刺突を伴う隆起帯を巡らす土器であるが、隆起帯より上には三叉文上に切れ込みが認められる。東日本系の土器の影響が考えられるものであろうか。外面の調整は巻貝条痕調整である。

498・499も詳細が不明な土器である。498は原体不明の条痕調整を施した上から、横方向に沈線に近い刺突列を口唇からやや幅を置いて施している。499は口唇部近くに同様の沈線に近い刺突列を巡らしているようである。

502～505はすべて東日本の安行3式平行の土器であると思われる。502は沈線で区画し、単節縄文RLを重点している。503も同様であるが、503の沈線の方が幅が広く深い。504は渦巻き文、505は雲形文が描出されている。

507～510は突帯文期の土器であろう。507はおそらく深鉢の口縁部でよいものと思われるが、外面は縦方向の二枚貝条痕調整を施し、内面口唇直下に突帯状の貼り付けが施されている。508～509は突帯文土器の口縁部破片で、509がやや古く位置付けられる個体であろうか。

第44図以降には器面調整のみの個体や、無文の土器を図示した。第44図から第45図の607については非二枚貝条痕の土器を示した。最も多いのが巻貝条痕調整を施したものである。

511は土壙墓4の南側から破片の状態ですたまま出土した土器である。外面をナデ調整したのちに、横方向の条痕によって調整を加えている。この条痕の原体であるが半截竹管状工具のようである。原体がバラバラで施文されていることから、工具を集合させて一遍に調整を行うということは無いようである。内面は刷毛目状の調整痕跡が確認できた。土器の作りとしては、土器棺墓1の棺に用いられていた土器(63)に近いものである。

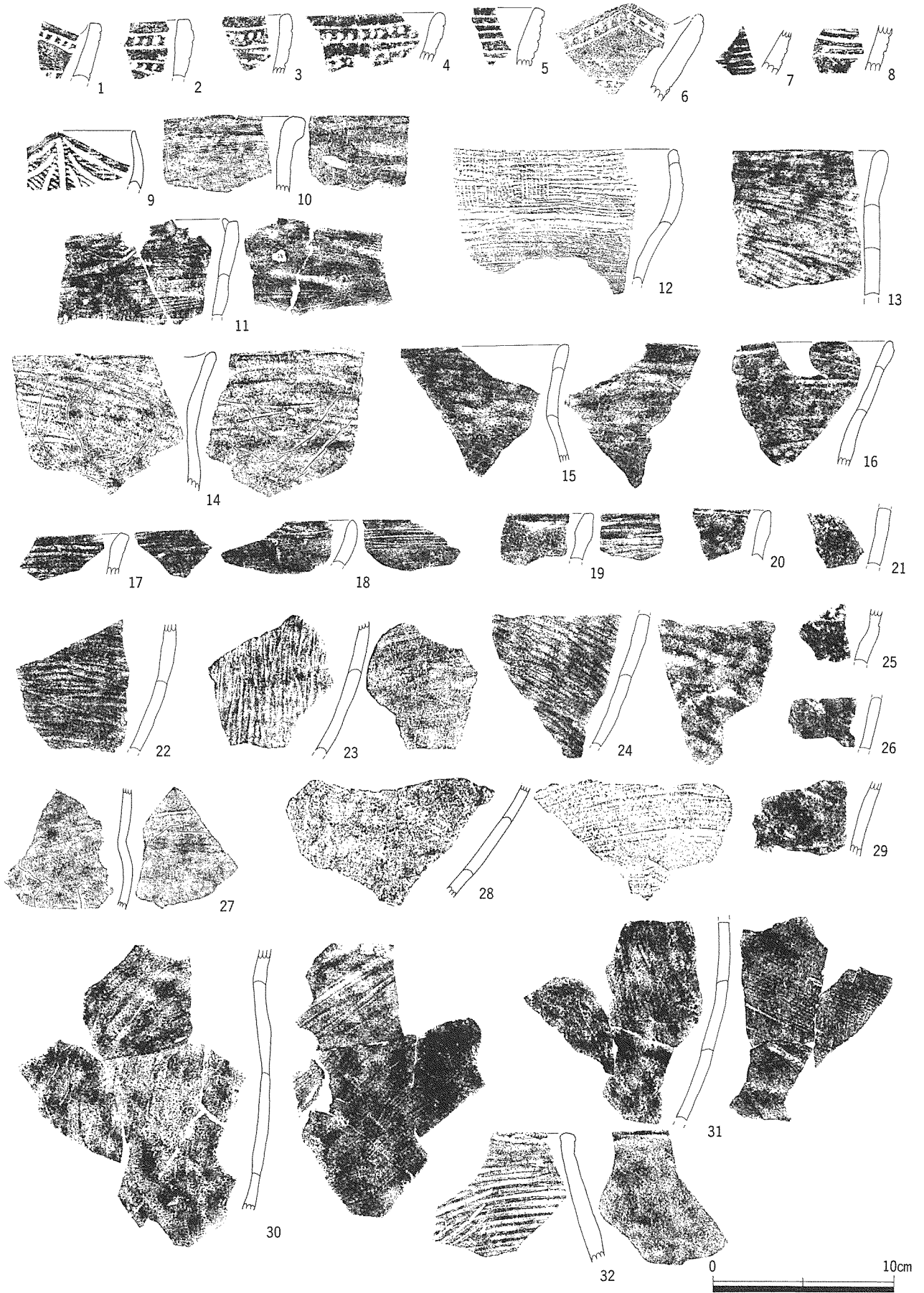
二枚貝以外の条痕文調整の土器については様々な口縁部形態が認められる。口唇部の刻みについては579～583に認められるが、いずれも工具を用いての刺突を施したものである。口縁部附近では横位の条痕を施すものがほとんどである。

608以降は表面がナデや磨きなどが認められるだけの無紋土器である。その中でも器面がきれいにととのったものと、輪積み痕を残したままのものがある。また粗いナデ調整で、ミガキ状に砂粒の動きの観察できるものがあるが、このうち口縁部付近のみ短く横方向に調整し、以下は垂直方向に調整する土器(617など)が一定量認められる。また621～623のように、薄手のつくりで胎土が精緻であり、やや小振りの土器が認められる。口唇部がとがるように薄く作られた土器で、622の個体には口縁部付近に二つの穿孔が認められる。

700以降が二枚貝条痕の土器であり、晩期前半の土器も一部含むが、ほとんどが晩期末の土器であると考えられる。口縁部は平坦につくられる傾向が高いが、工具による刺突や指頭による押さえも認められる。

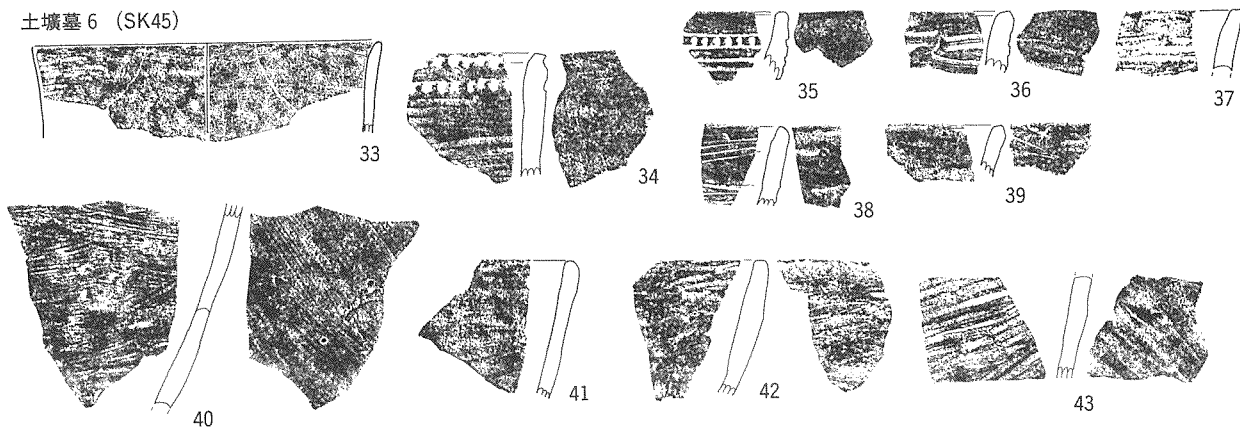
742以降には深鉢以外の器形をあげた。浅鉢や鉢状の器形の土器が一定量含まれるようである。鉢状の器形の土器については、表面が磨き調整のものが多い。

土墳墓 1 (SK01 a)



第29図 縄文土器 1

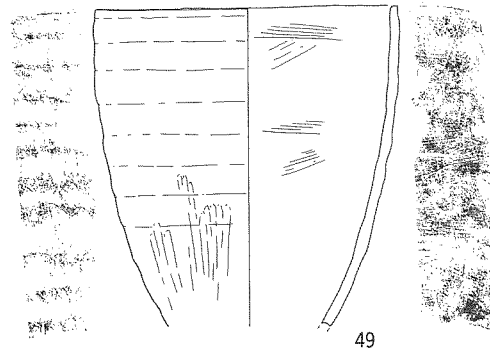
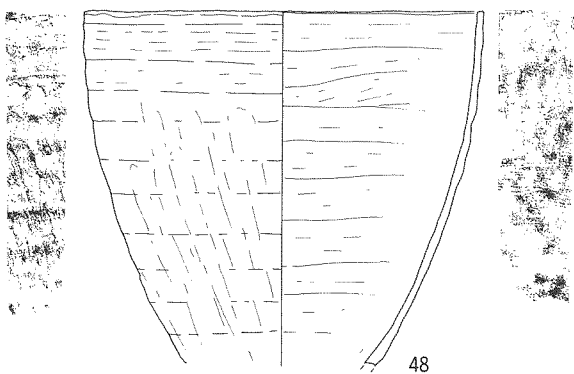
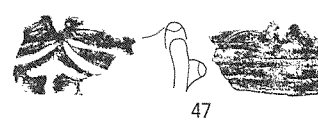
土墳墓 6 (SK45)



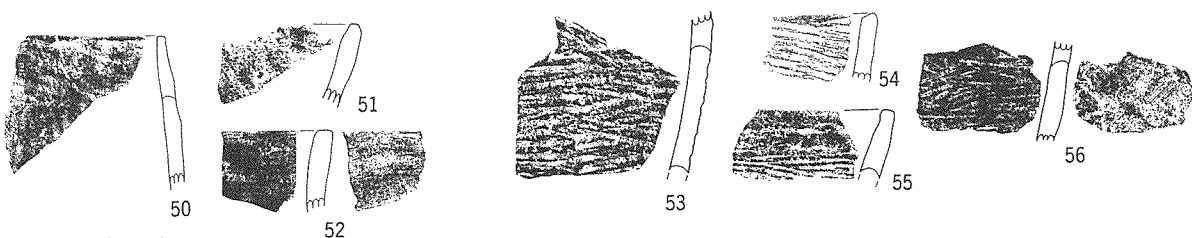
土墳墓 7 (SK44)



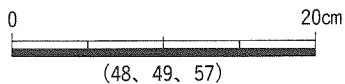
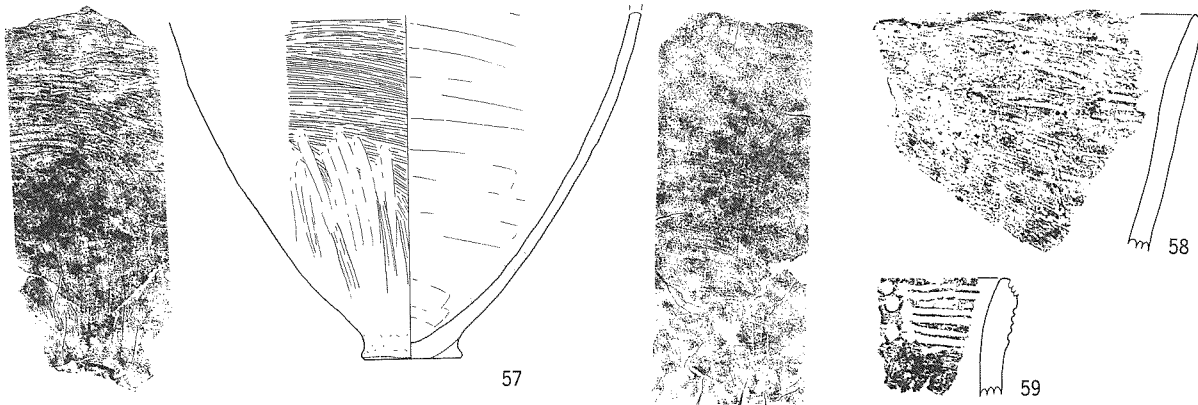
土墳墓 8 (SK52・53)



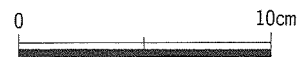
土墳墓 9 (SK58)



土墳墓 10 (SK38)



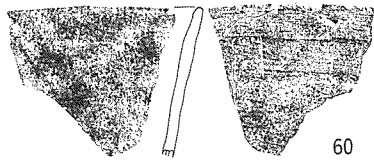
(48、49、57)



(37~47、50~56、58、59)

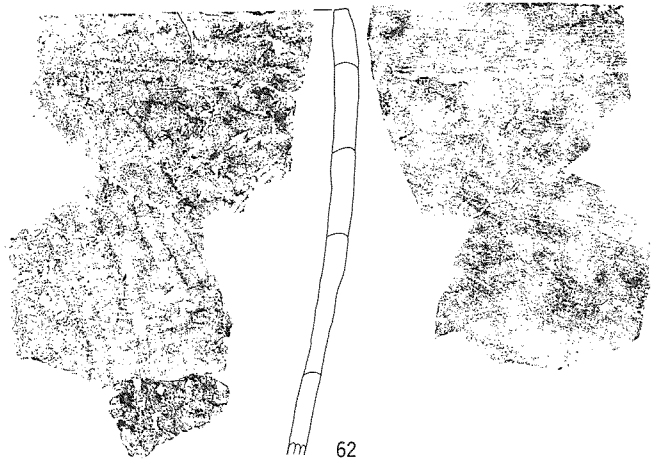
第30図 縄文土器 2

土墳墓11 (SK27)



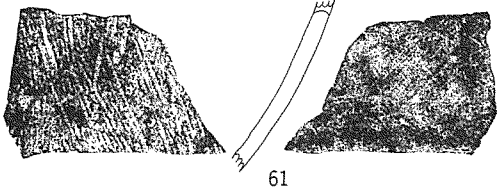
60

土器棺墓 1

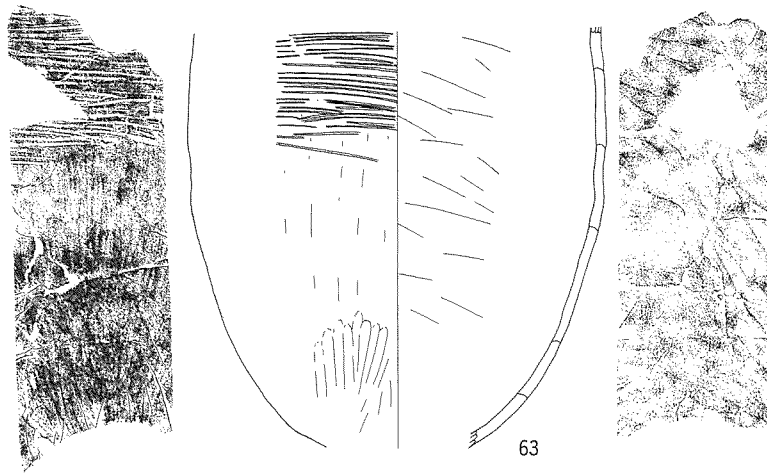


62

土墳墓13 (SK15)

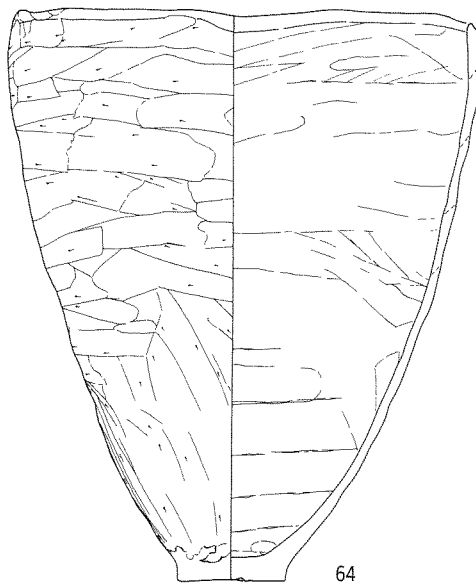


61

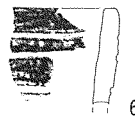


63

土器棺墓 3



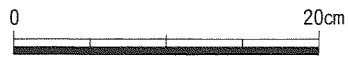
64



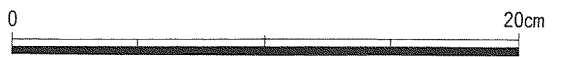
65



66



(63, 64)



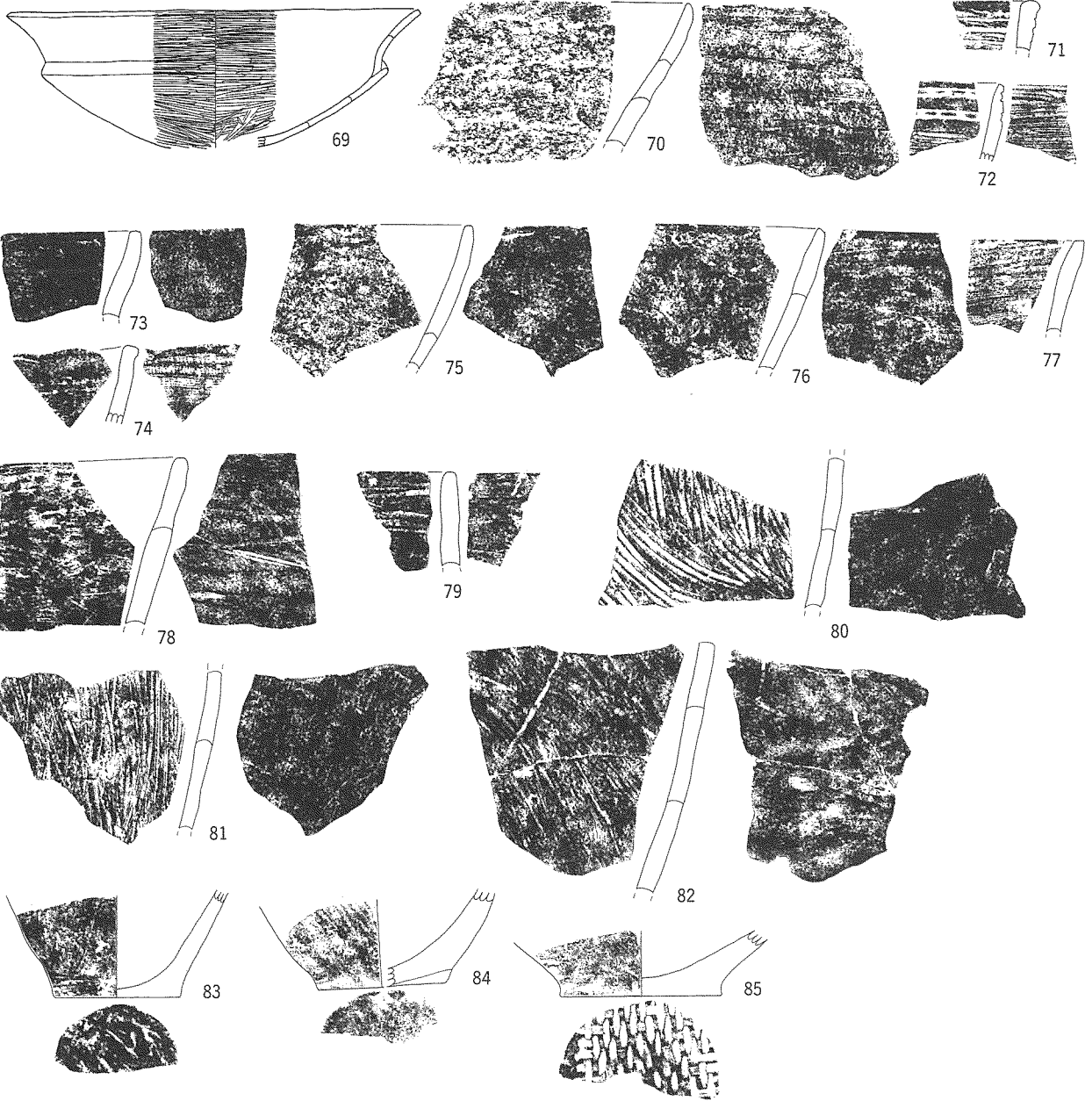
(60~62, 65, 66)

第31図 縄文土器 3

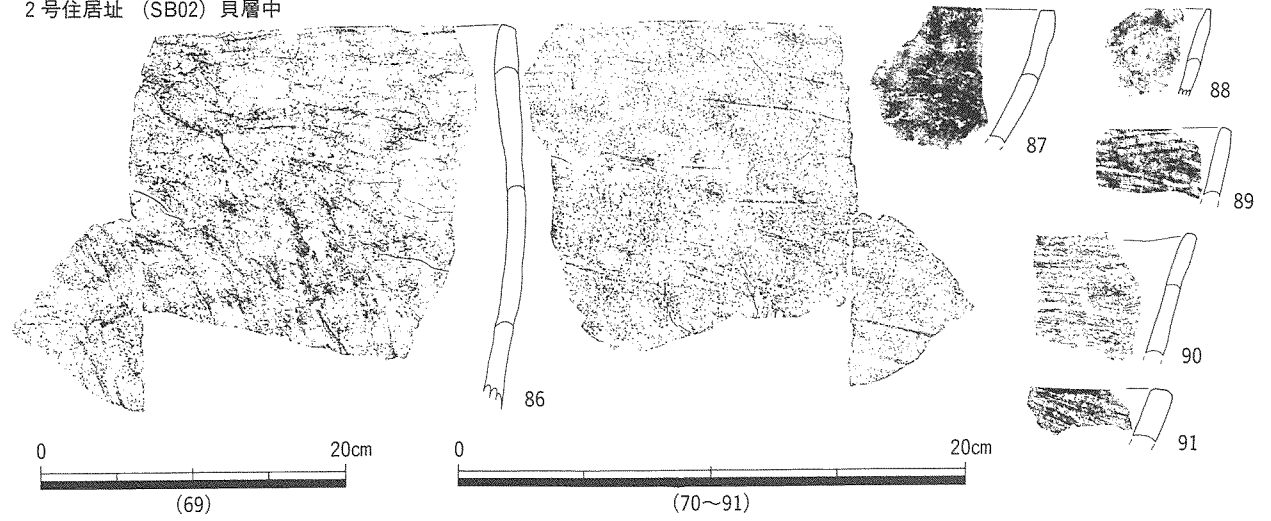


第32図 縄文土器 4

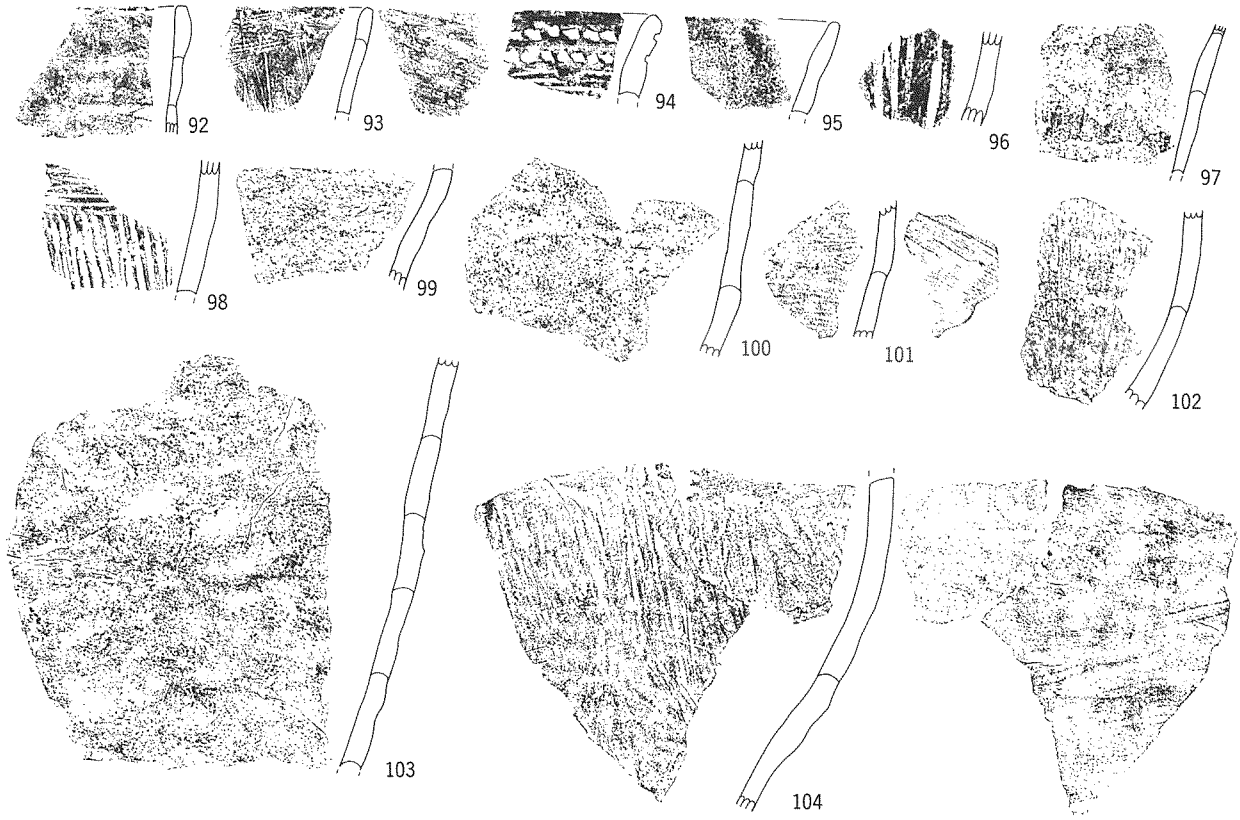
2号住居址 (SB02) 床面



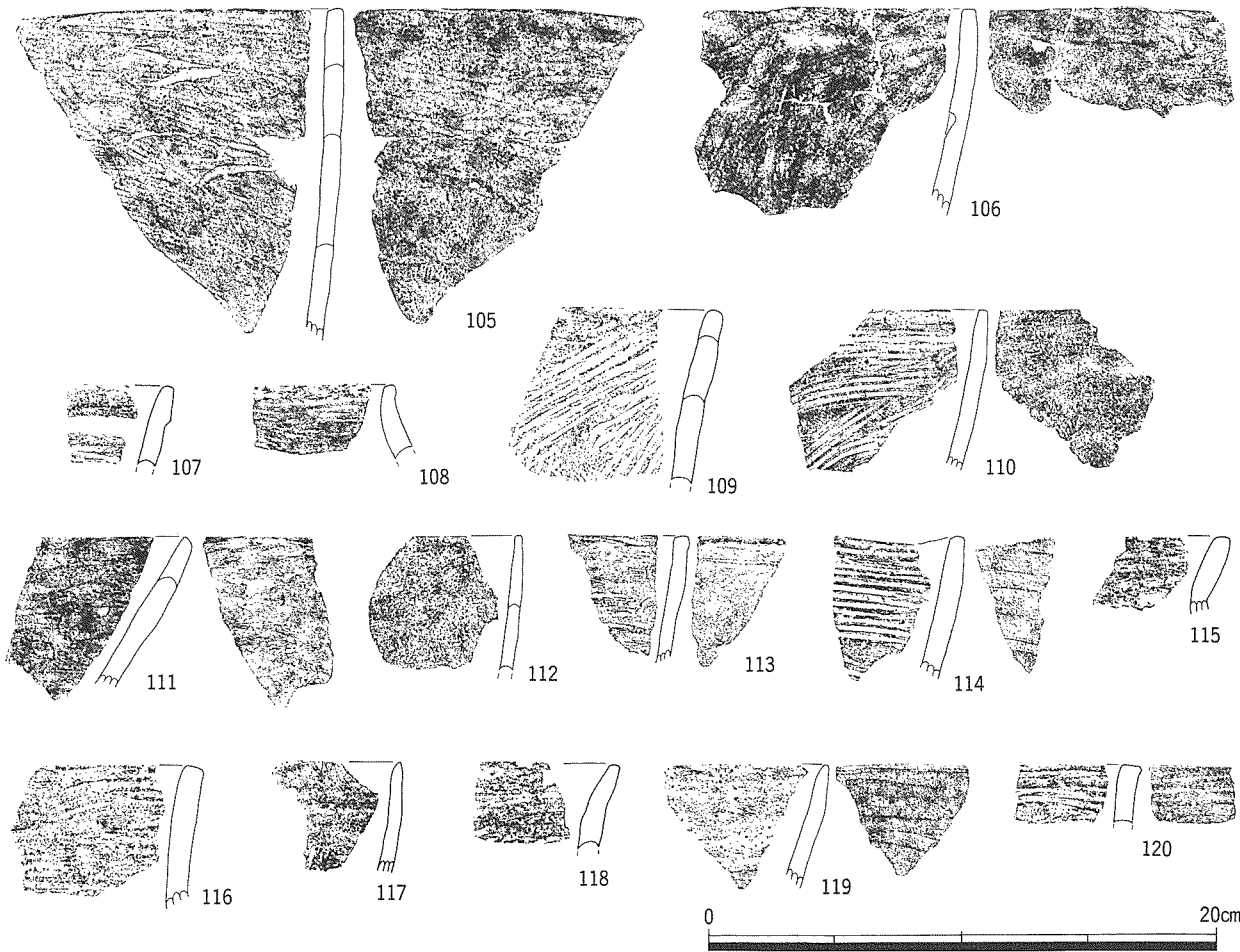
2号住居址 (SB02) 貝層中



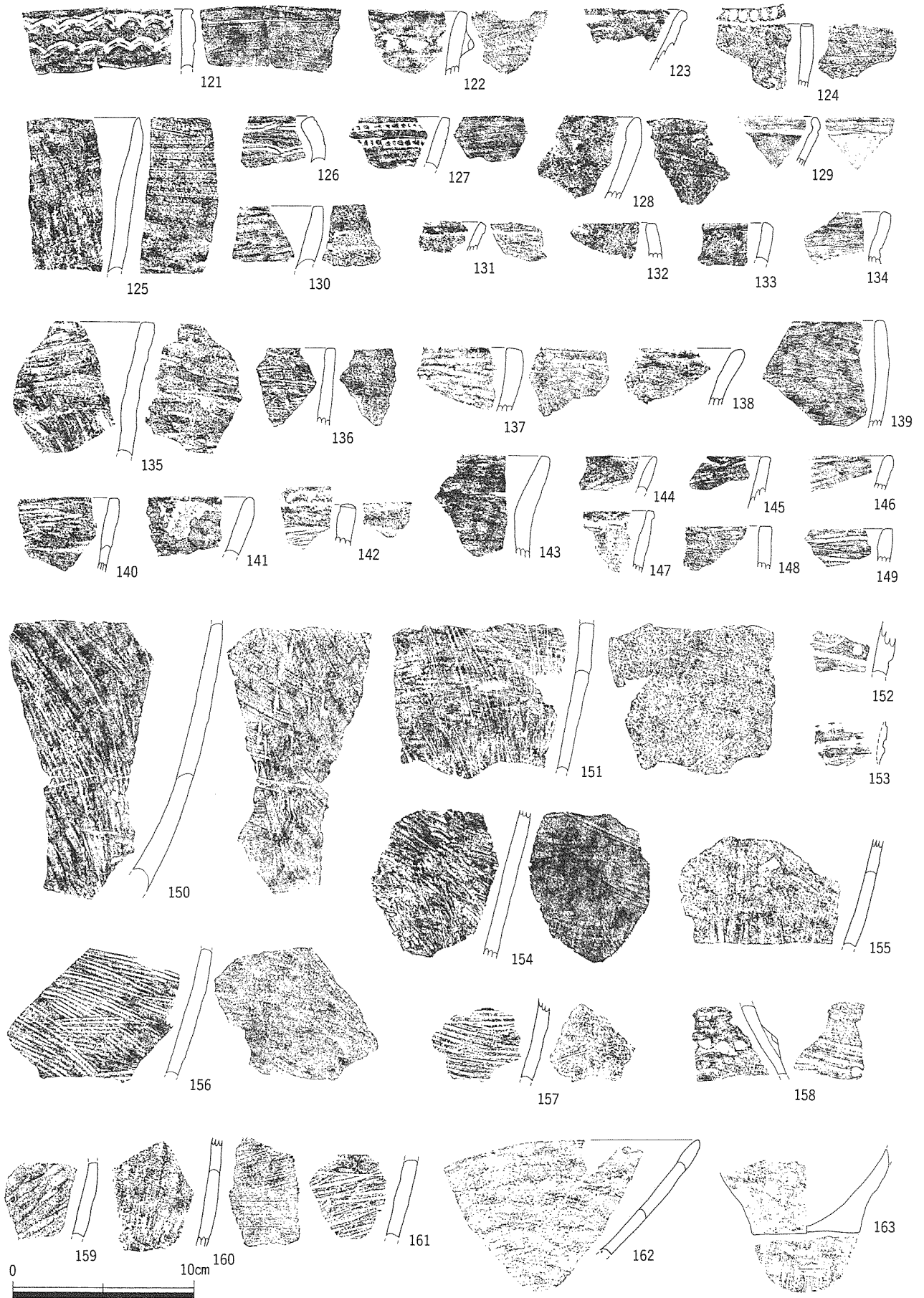
第33図 縄文土器 5



2号住居址 (SK63)

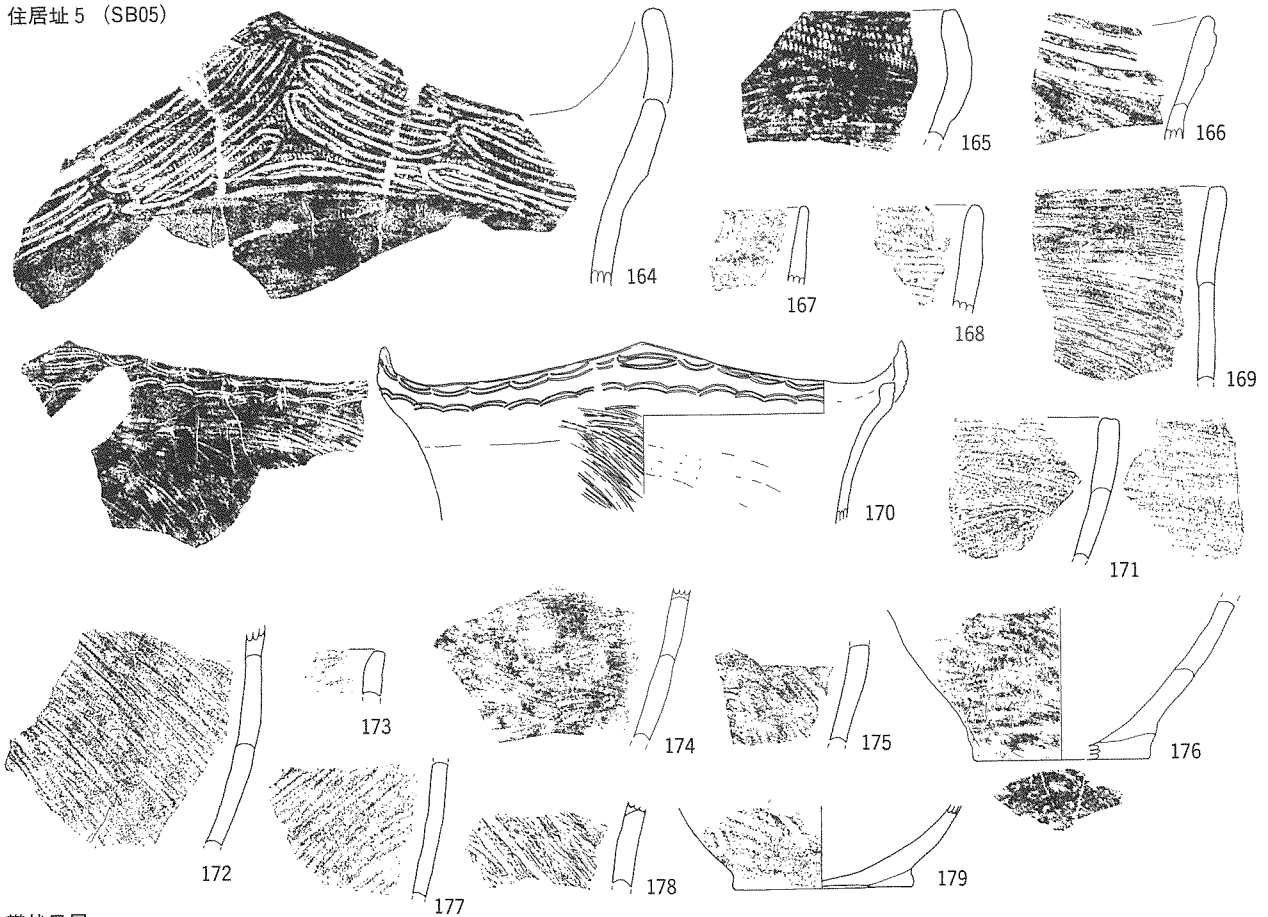


第34図 縄文土器 6

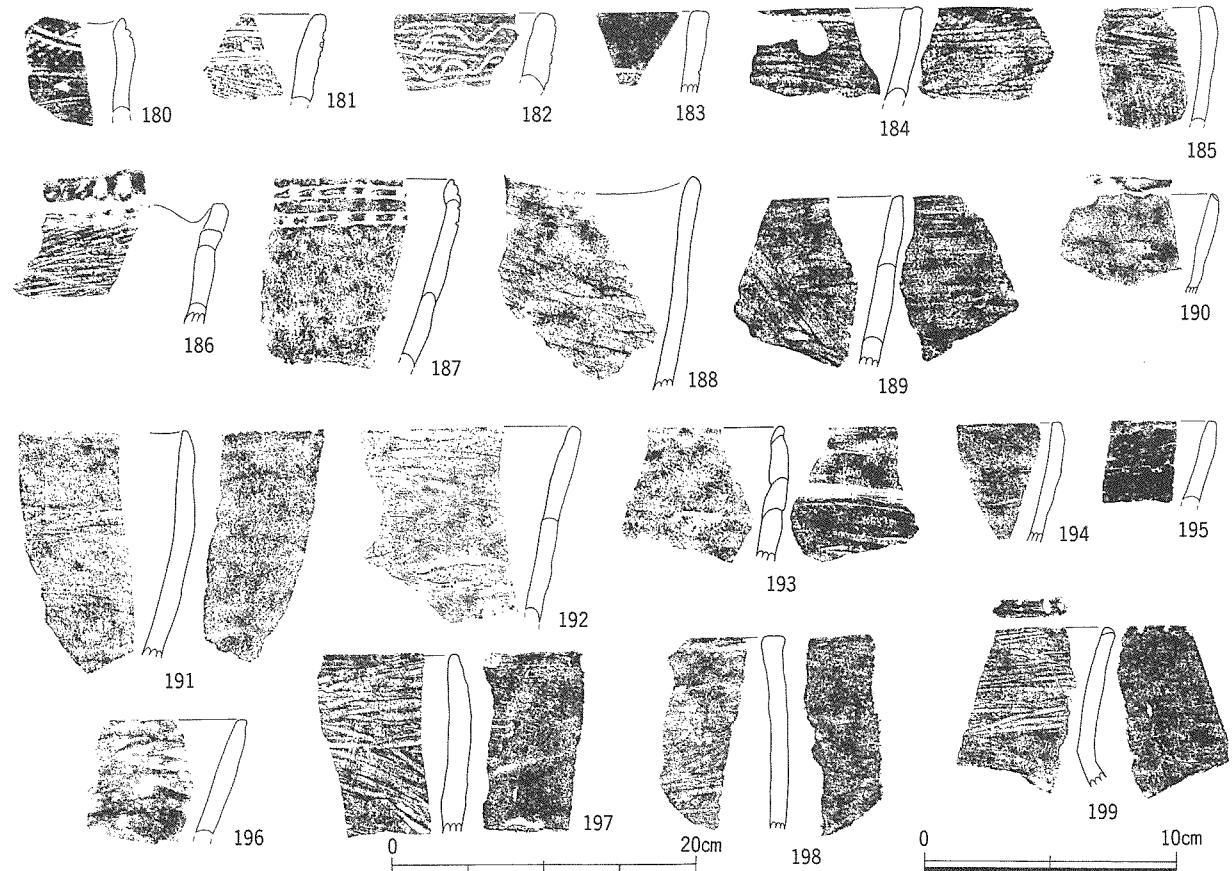


第35図 縄文土器 7

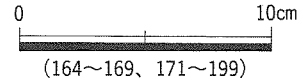
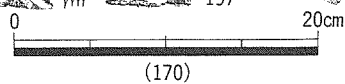
住居址 5 (SB05)

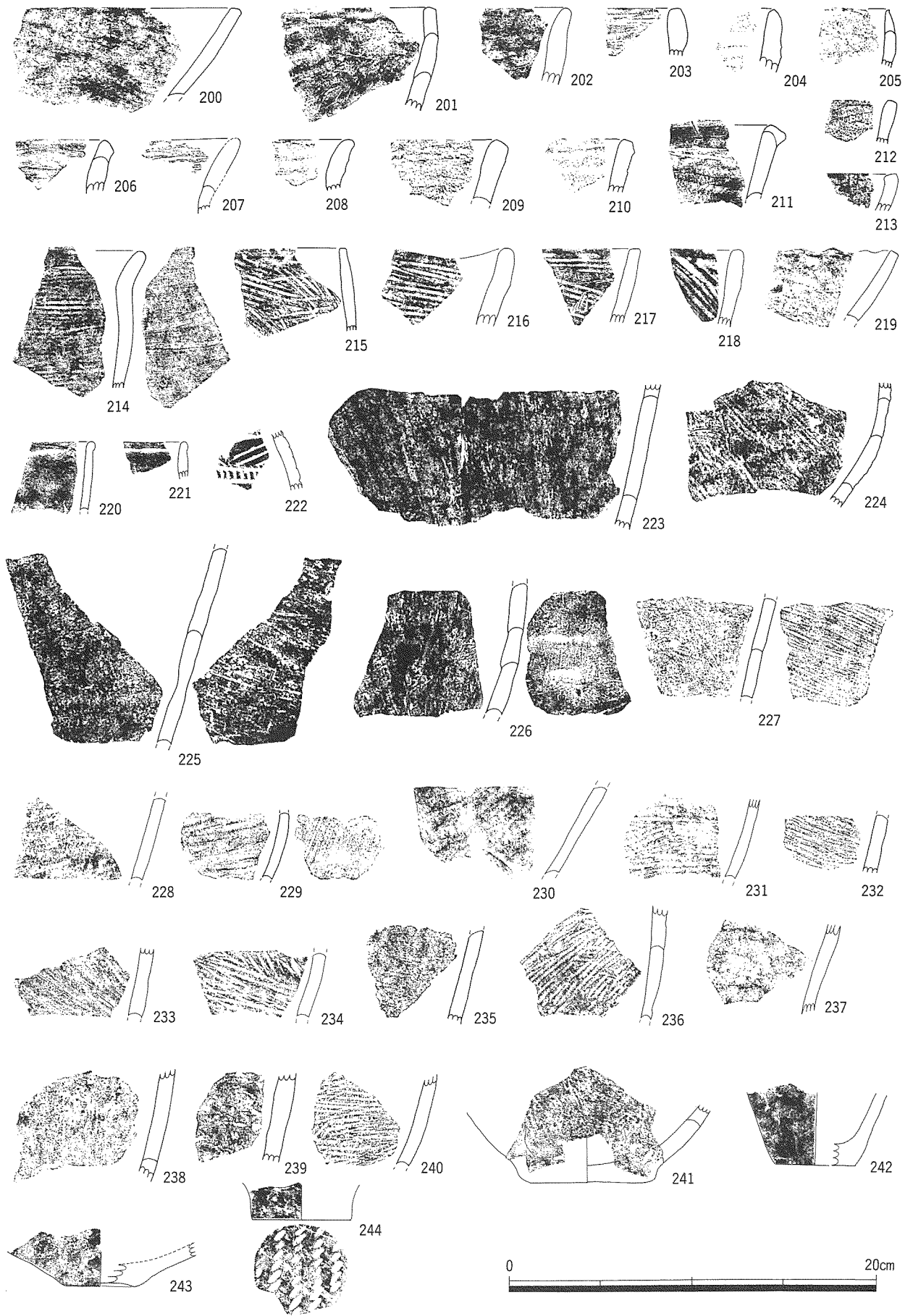


带状貝層



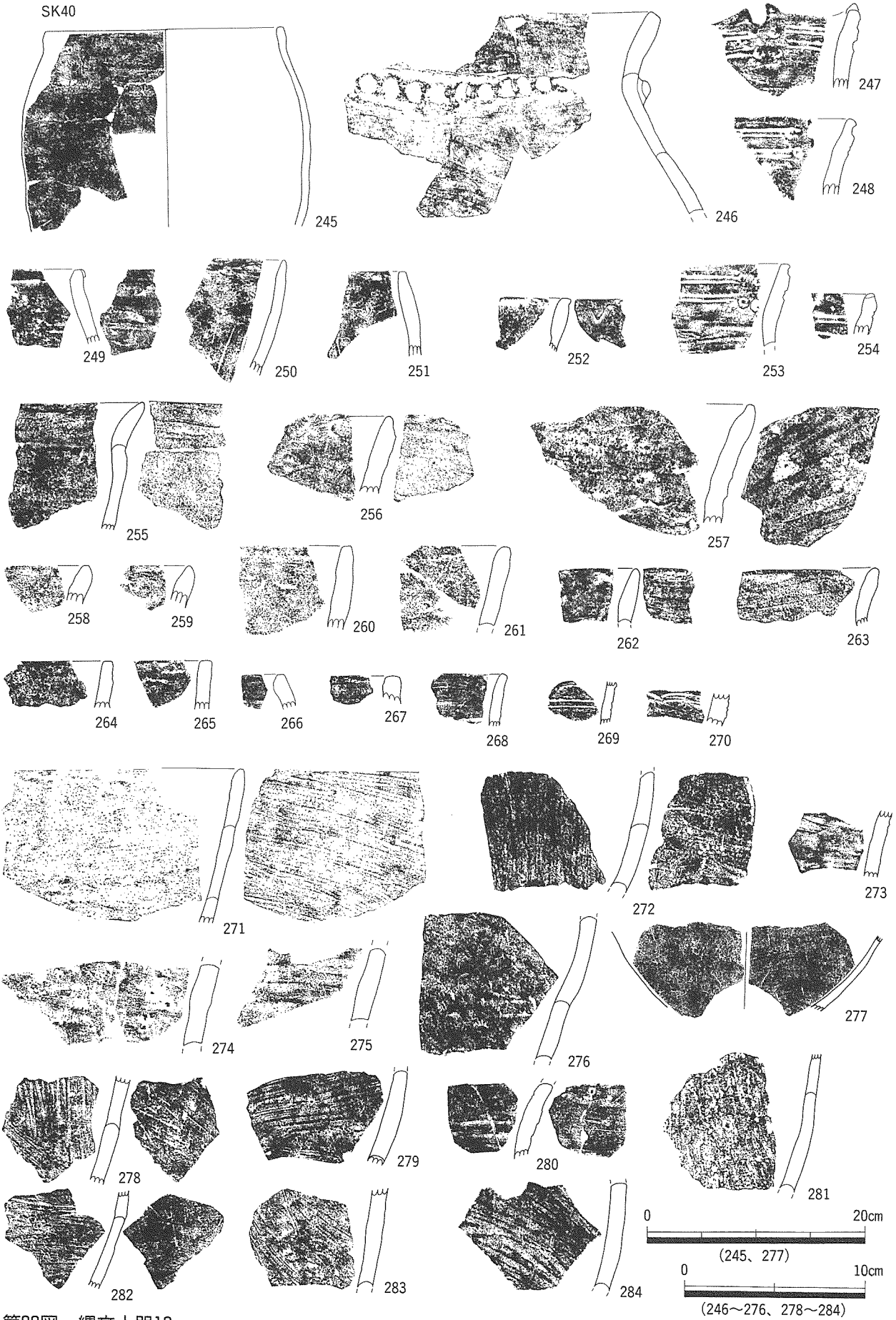
第36図 縄文土器 8





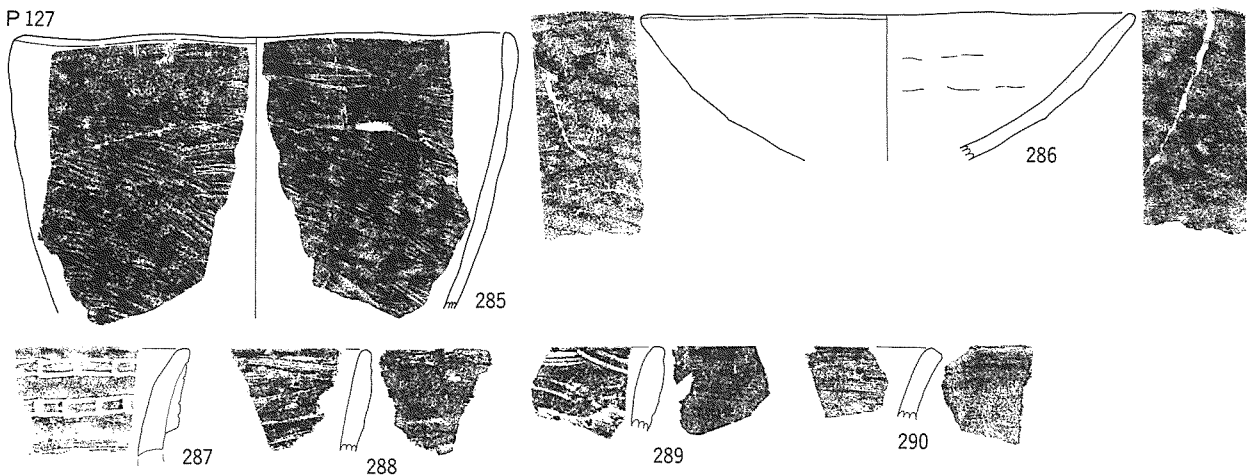
第37図 縄文土器 9

SK40

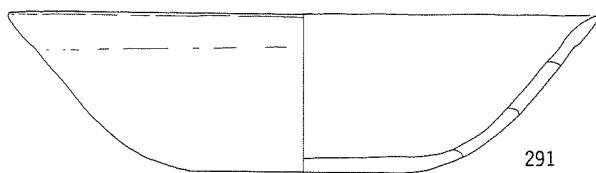


第38図 縄文土器10

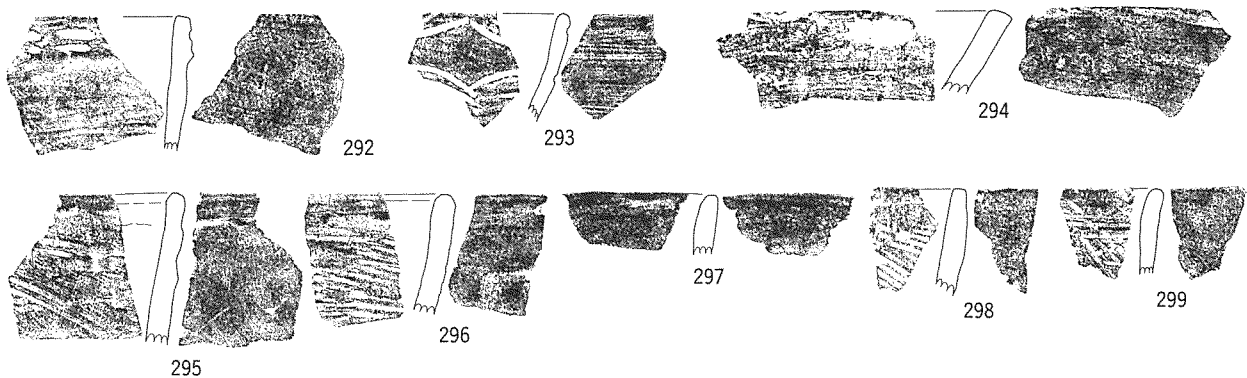
P 127



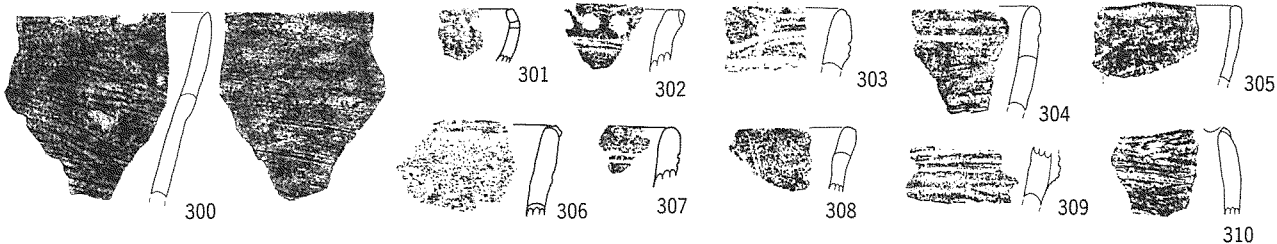
P 151



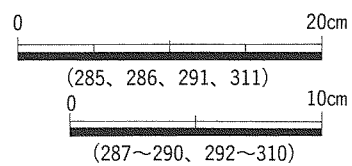
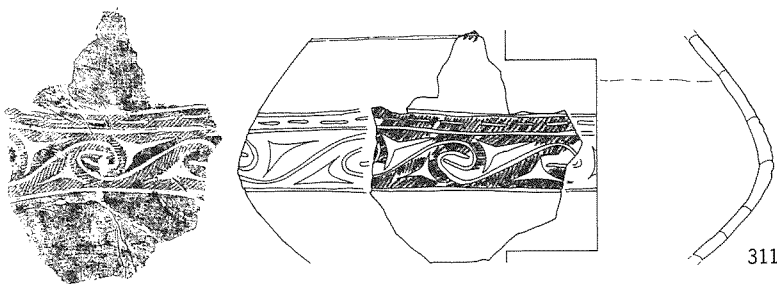
SK03



SK04

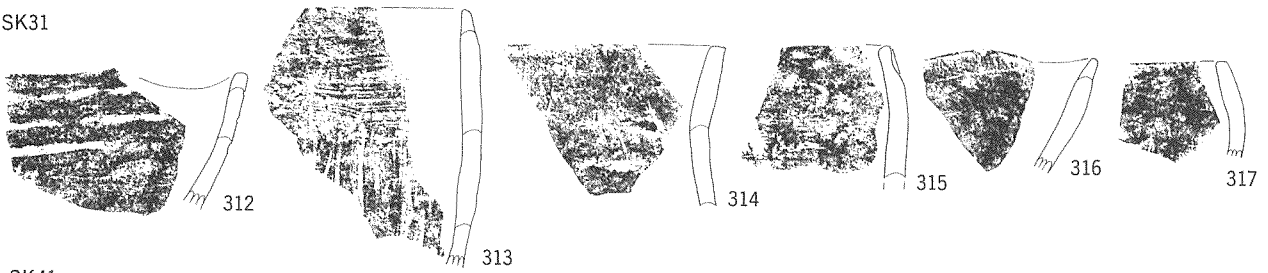


SK23

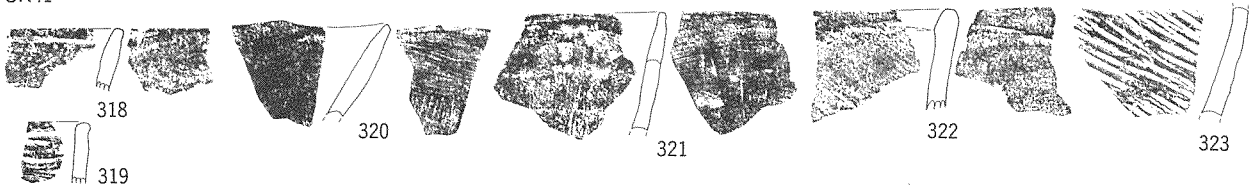


第39図 縄文土器II

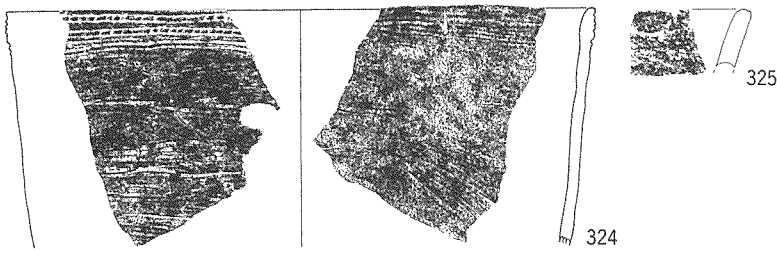
SK31



SK41



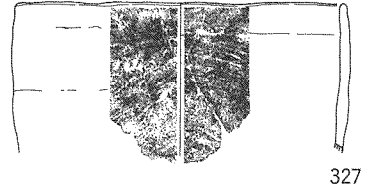
SK43



SK46



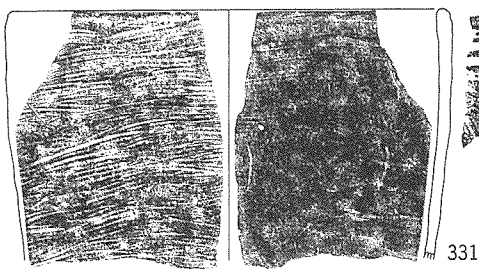
SK47



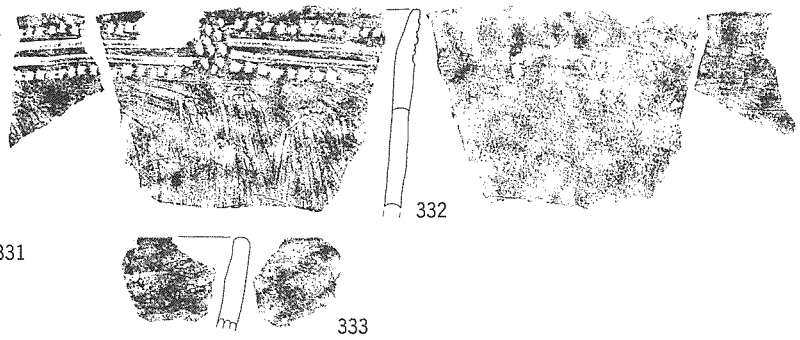
SK49



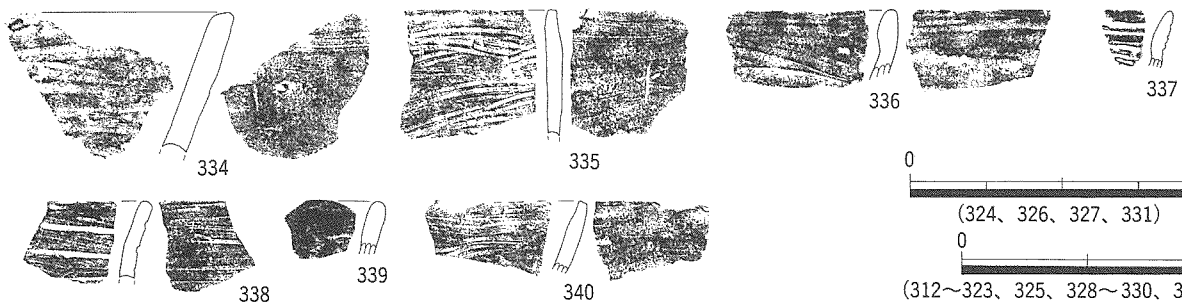
SK61



SK62



SK64



0 20cm

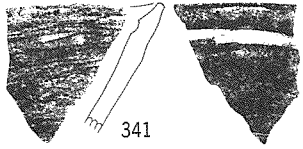
(324, 326, 327, 331)

0 10cm

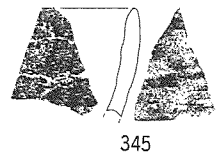
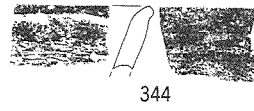
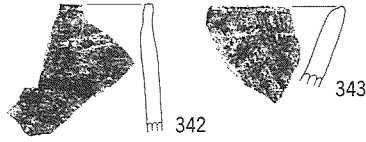
(312~323, 325, 328~330, 332~340)

第40図 縄文土器12

SK65



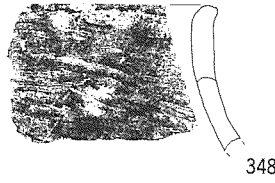
SK67



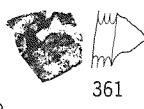
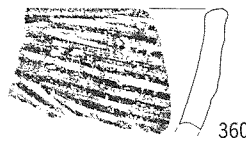
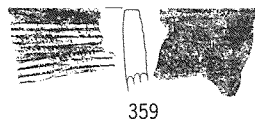
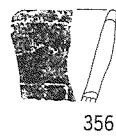
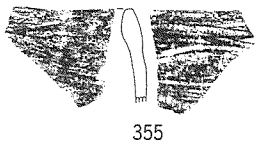
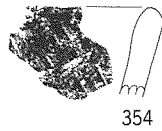
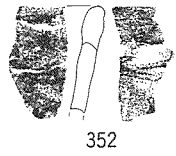
SK74



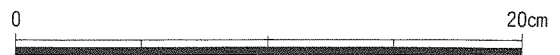
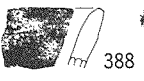
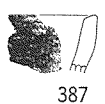
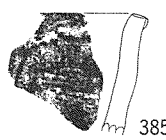
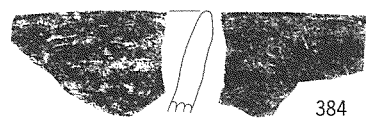
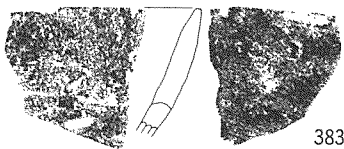
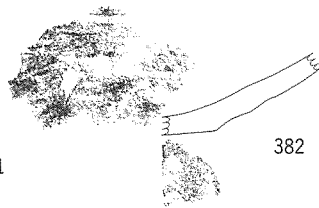
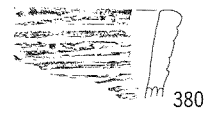
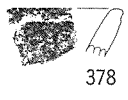
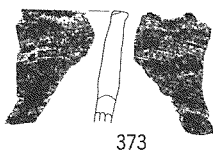
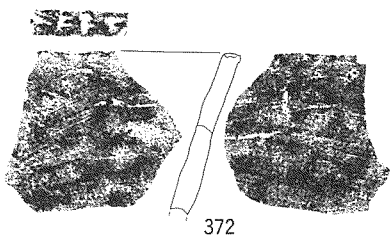
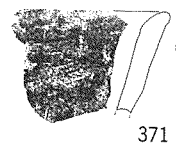
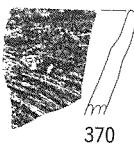
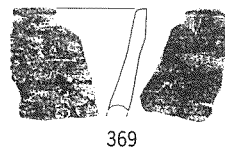
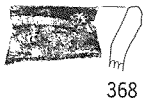
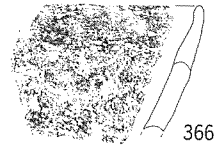
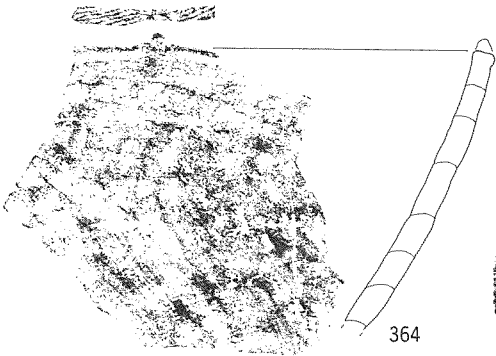
SK75



SB03

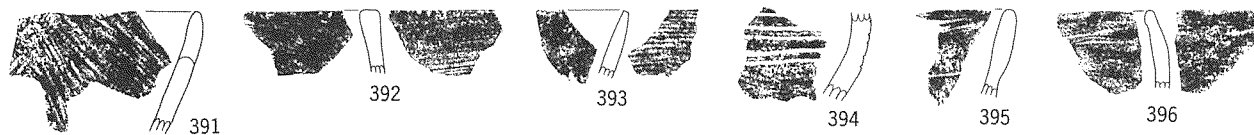


SD03



第41図 縄文土器13

SD05



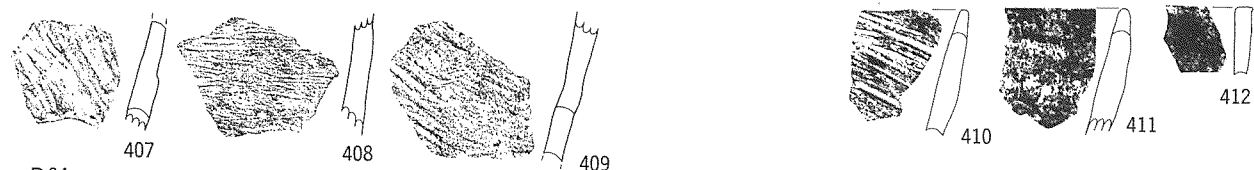
SD07



P 04



P 69



P 84

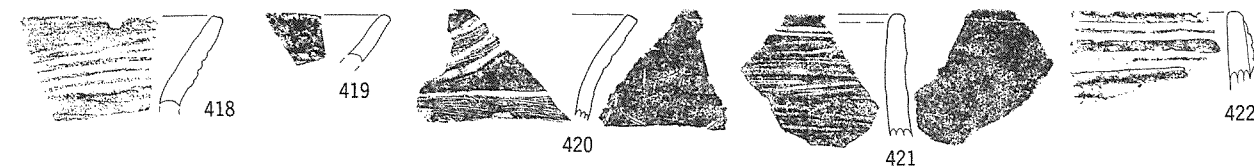


P 103

P 113

P 115

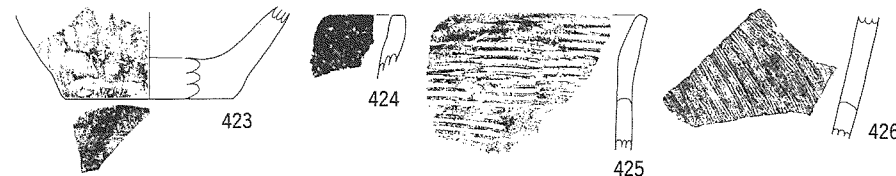
P 134



P 137

P 147

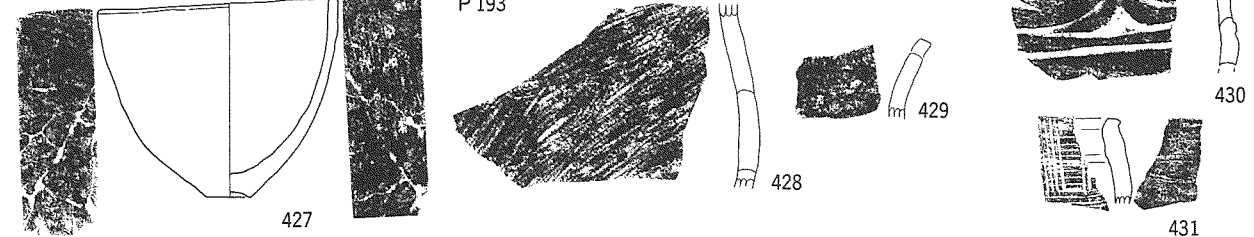
P 173



P 243

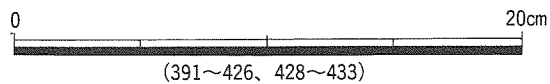
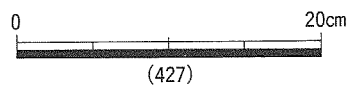
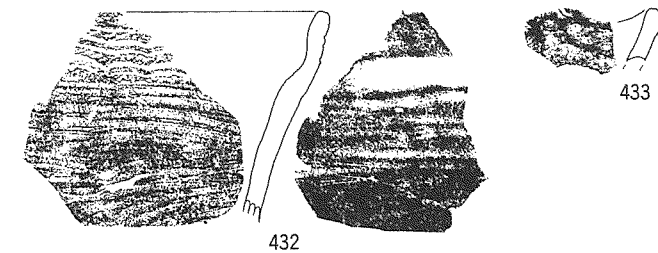
P 189

P 193



P 54

P 277



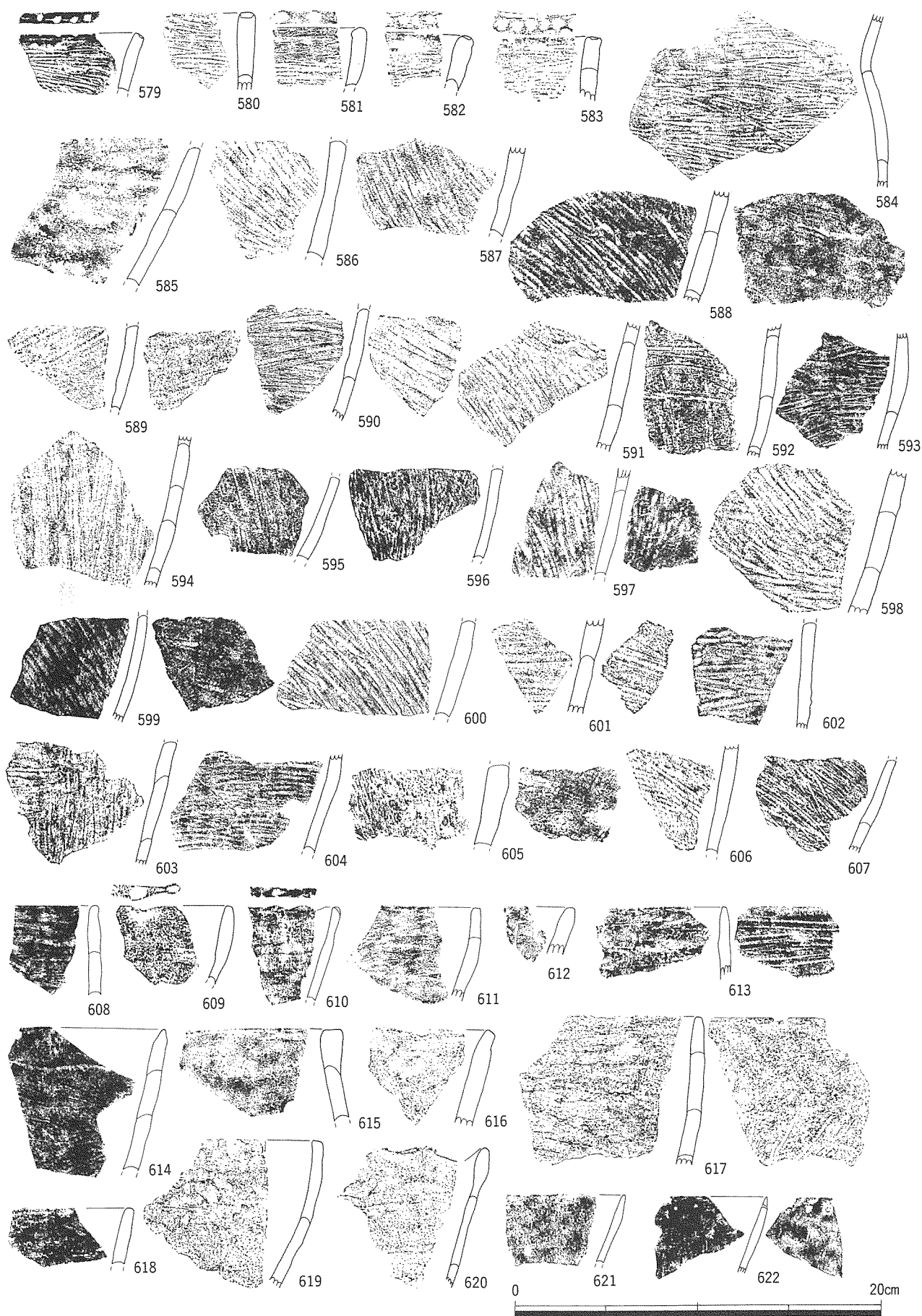
第42図 縄文土器14



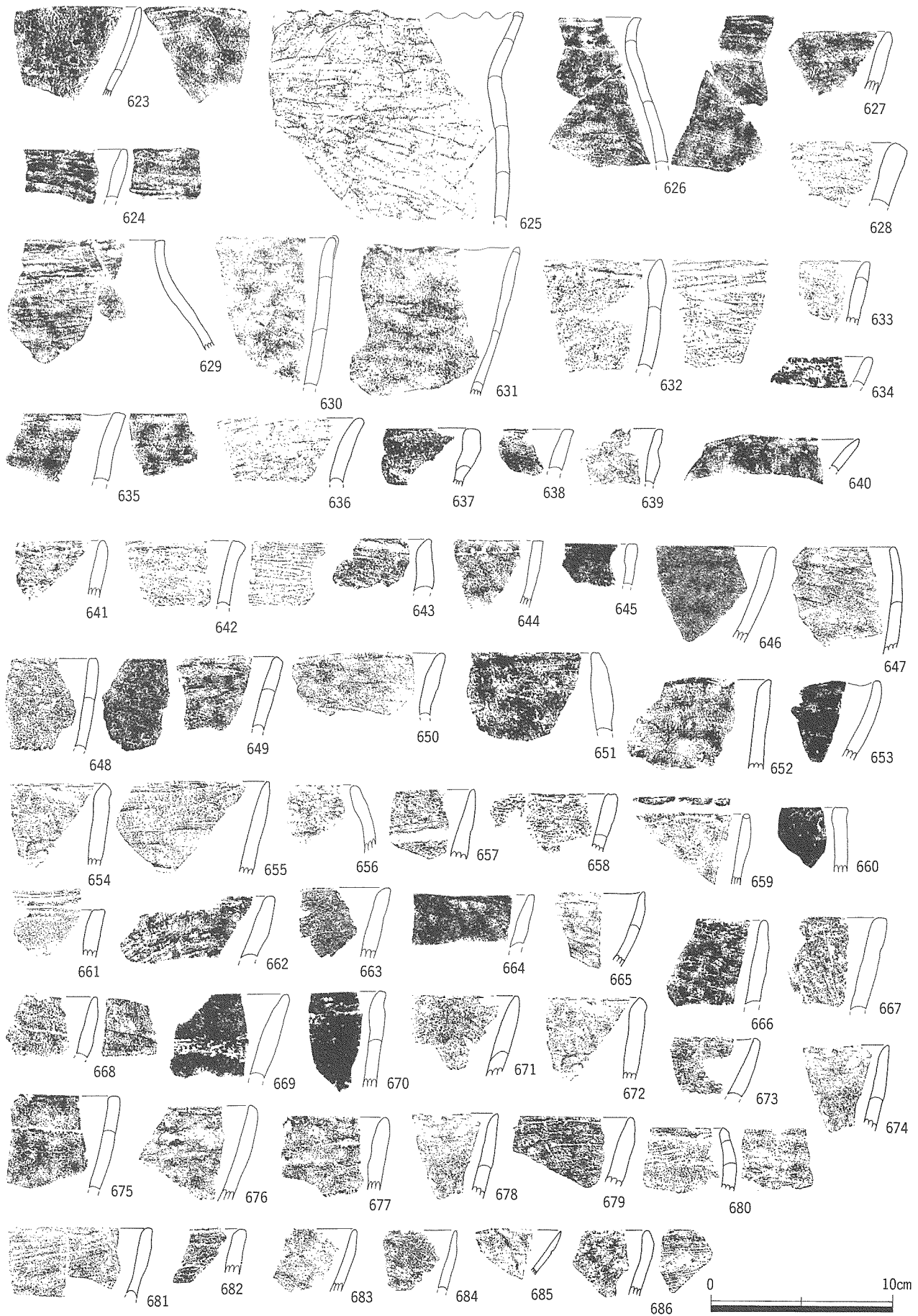
第43図 縄文土器15



第44図 縄文土器16



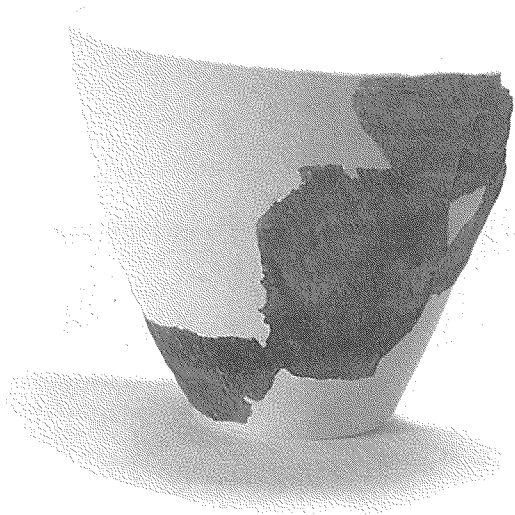
第45図 縄文土器17



第46図 縄文土器18



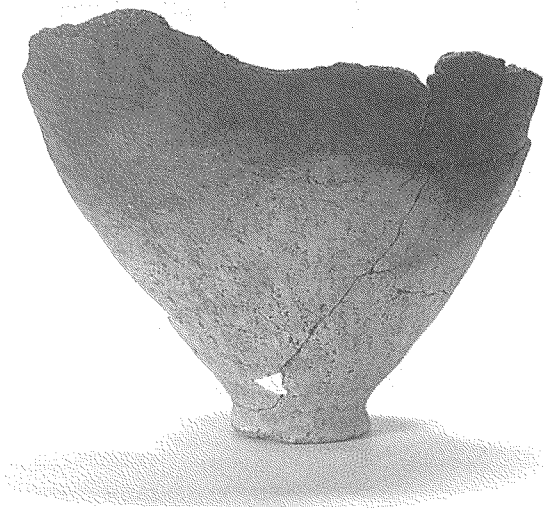
第47図 縄文土器19



48



49



57



63



64



67

写真60 縄文土器 1

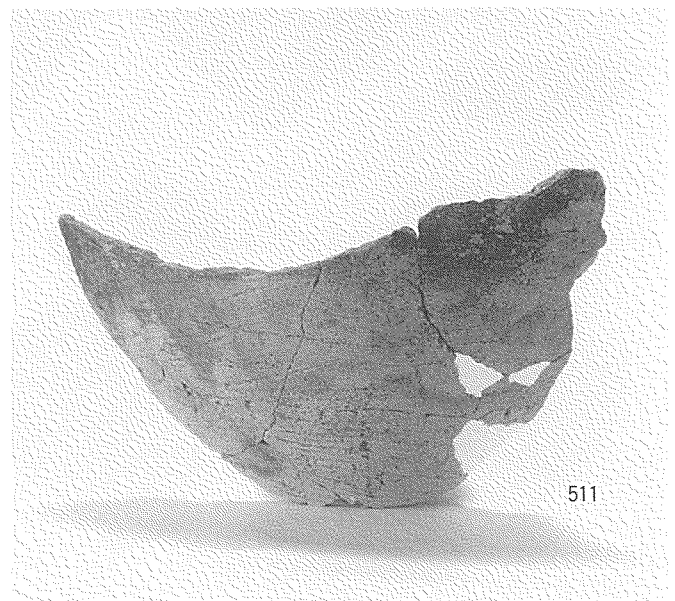
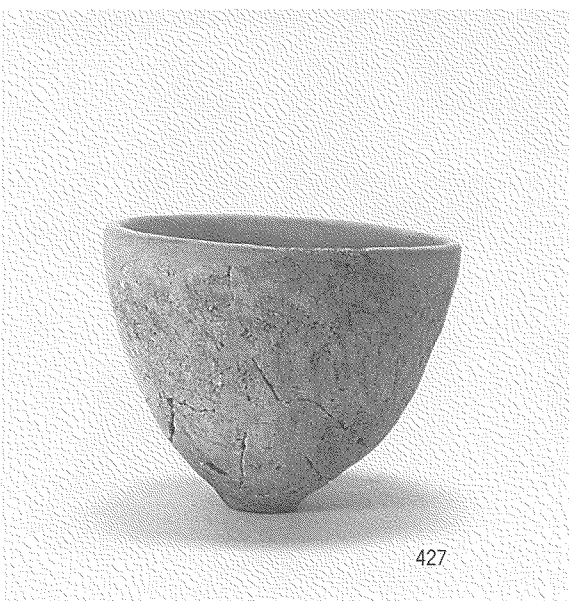
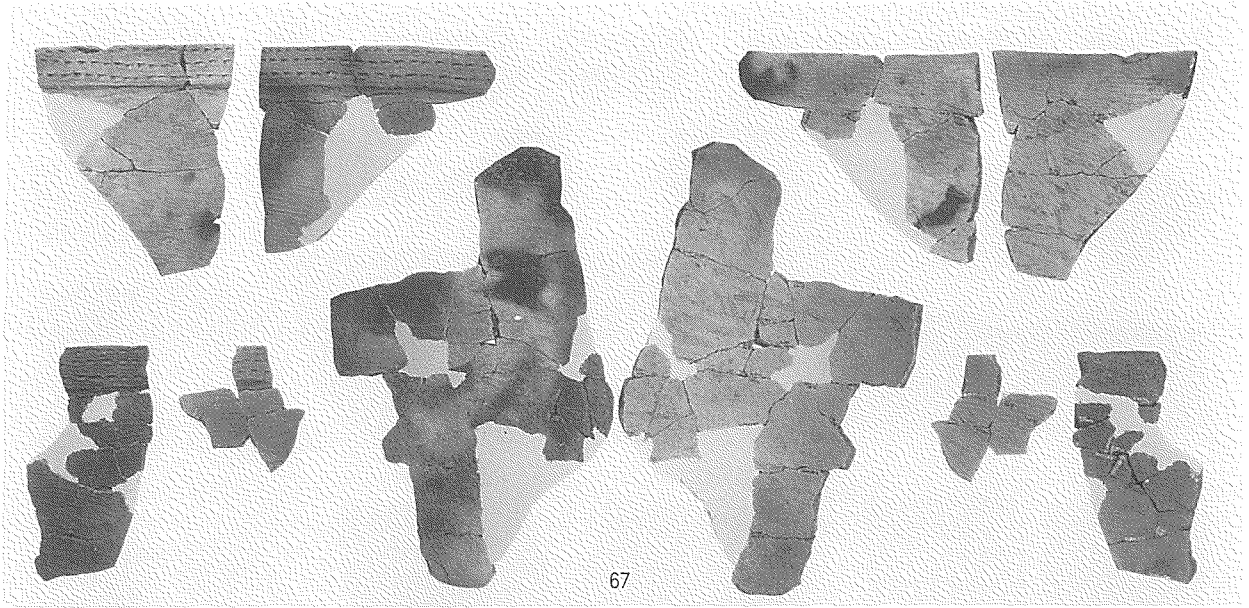


写真61 縄文土器 2

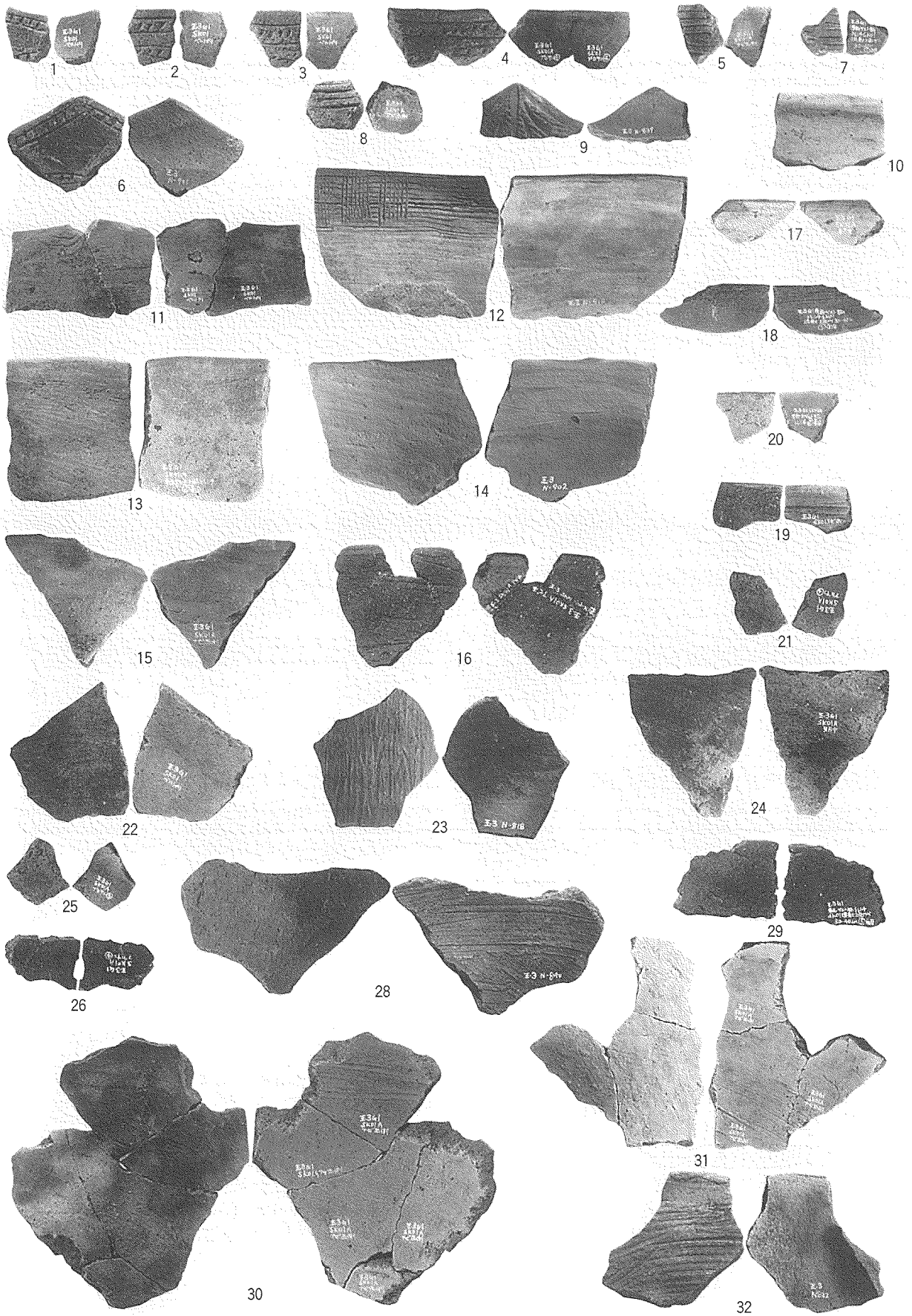


写真62 縄文土器 3

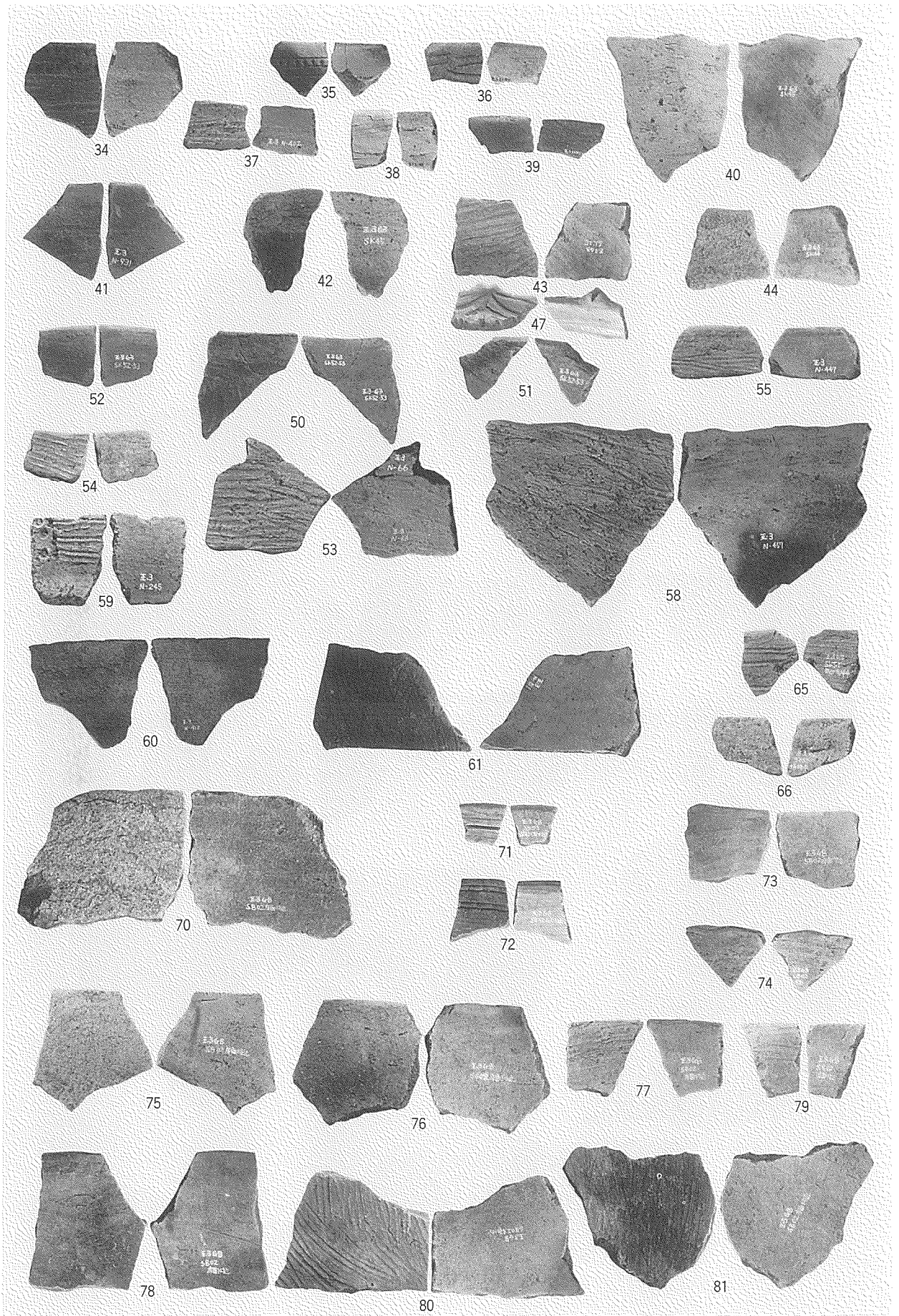


写真63 縄文土器 4

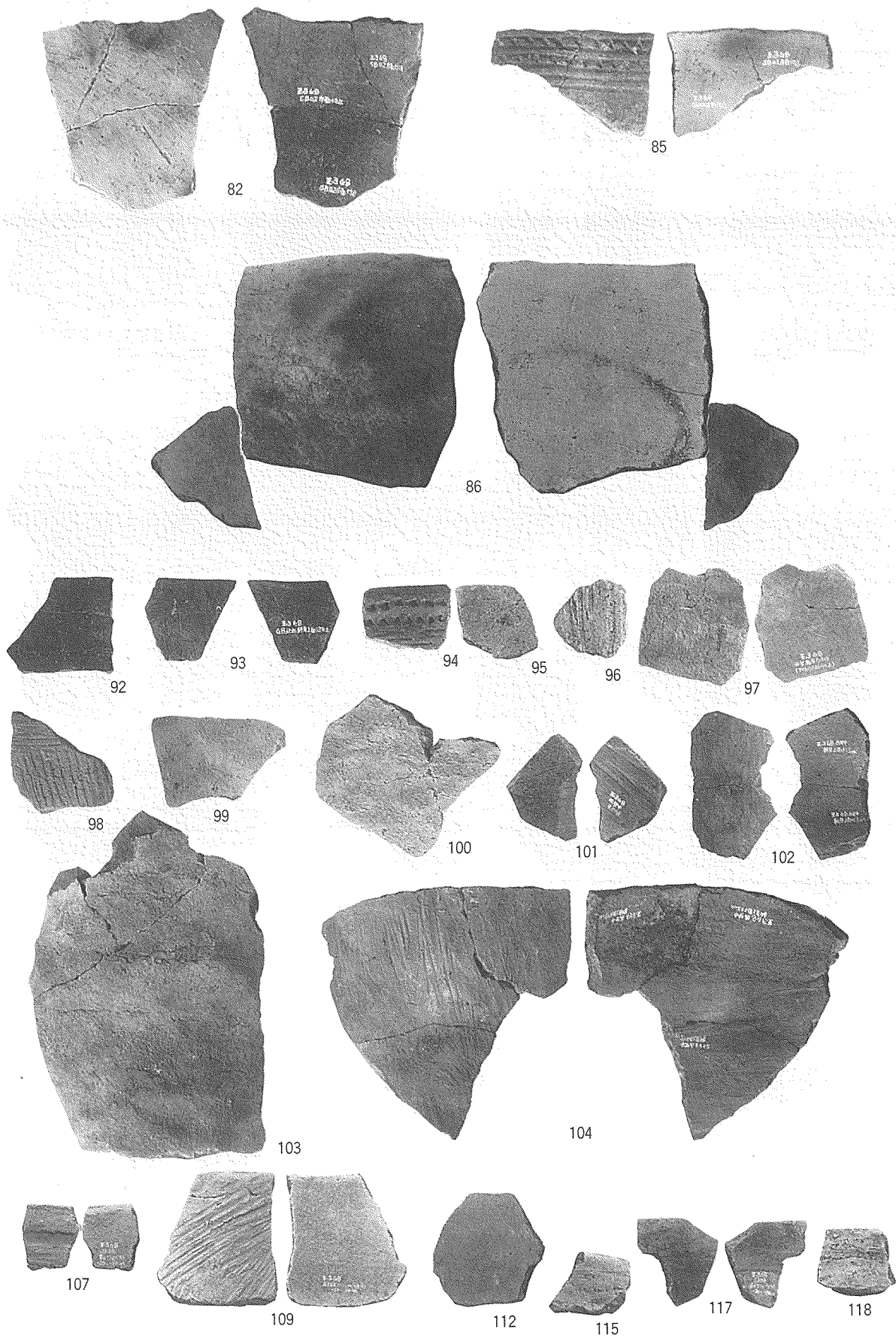


写真64 縄文土器 5

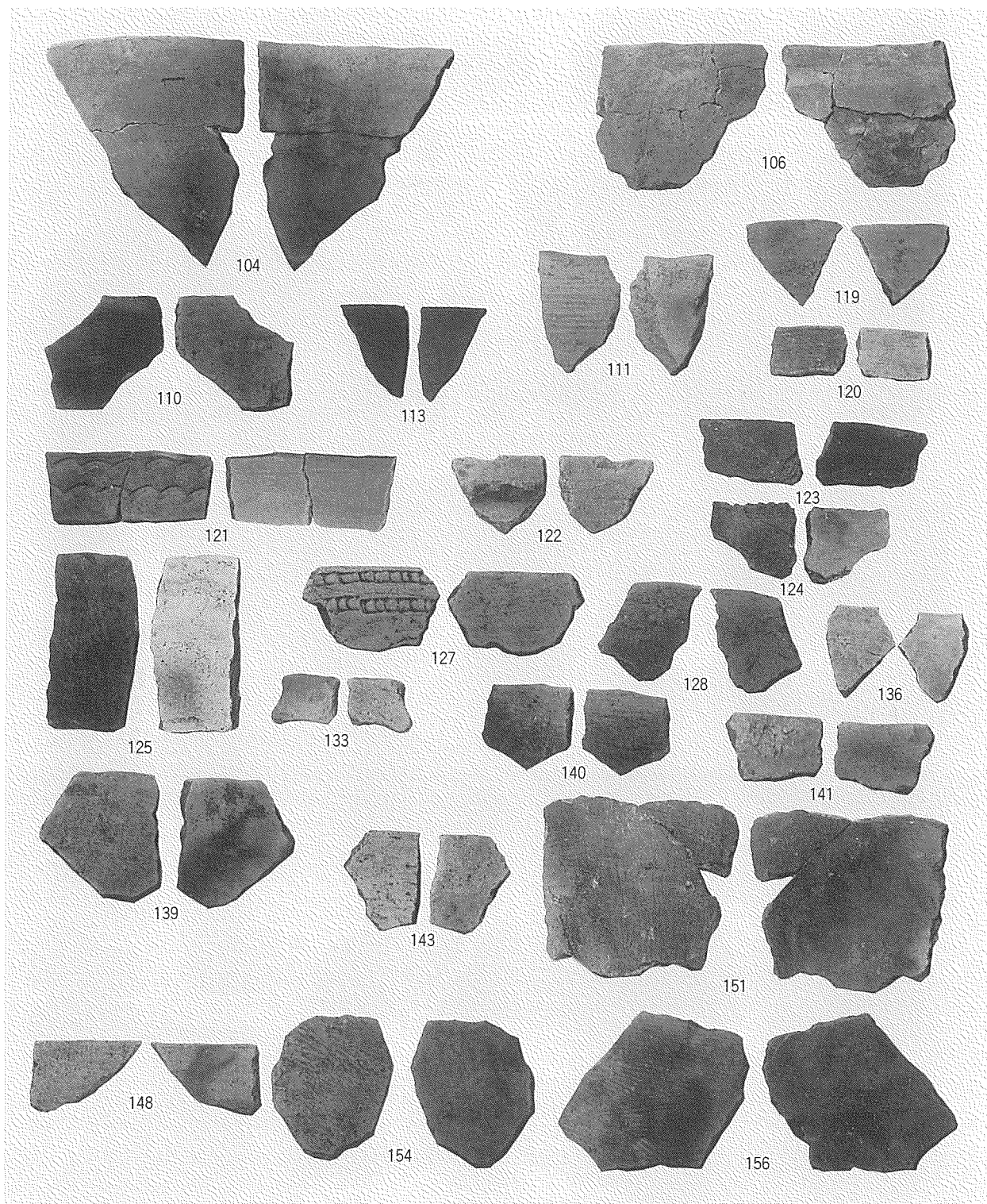


写真65 縄文土器 6

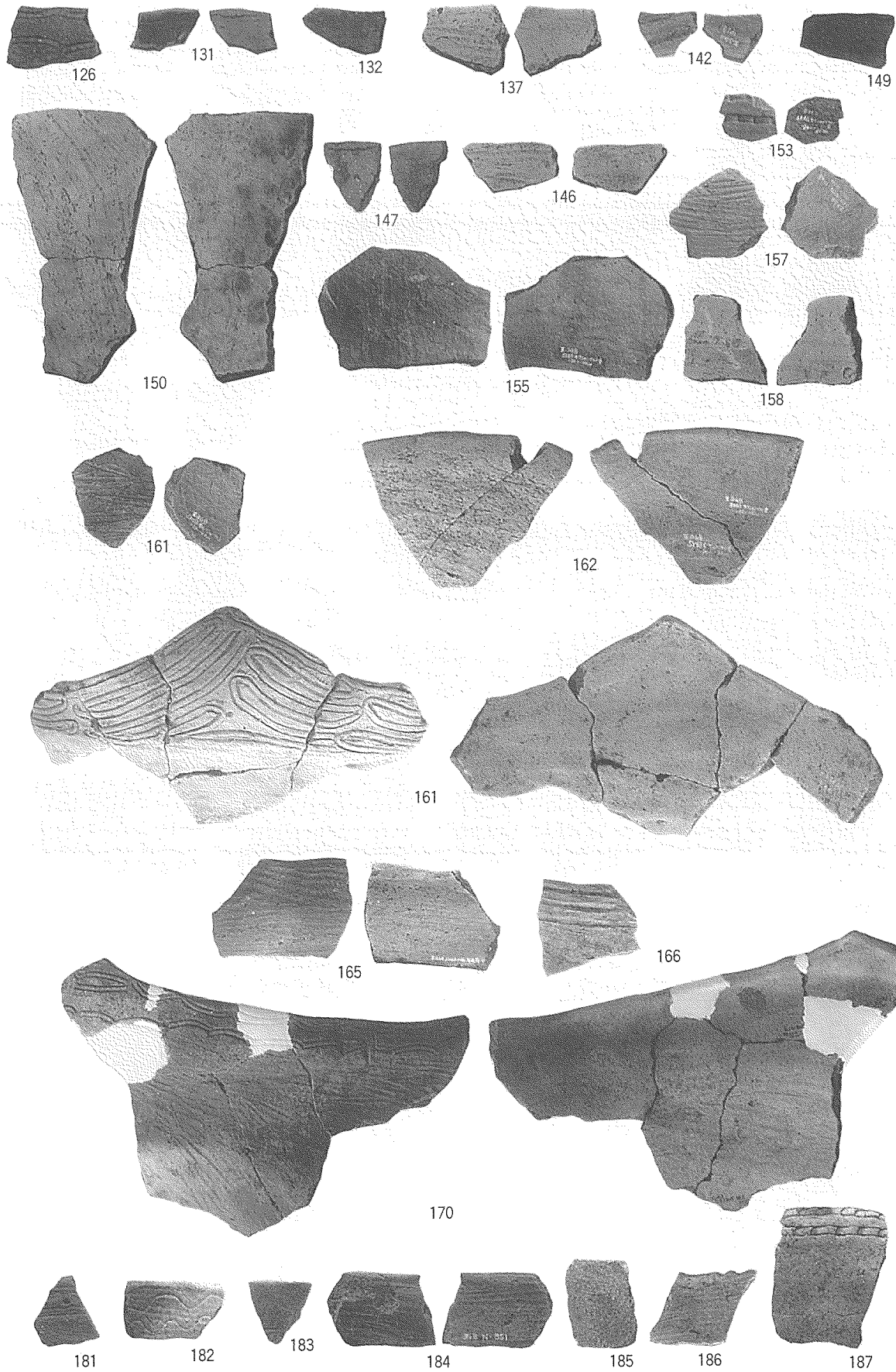


写真66 縄文土器 7

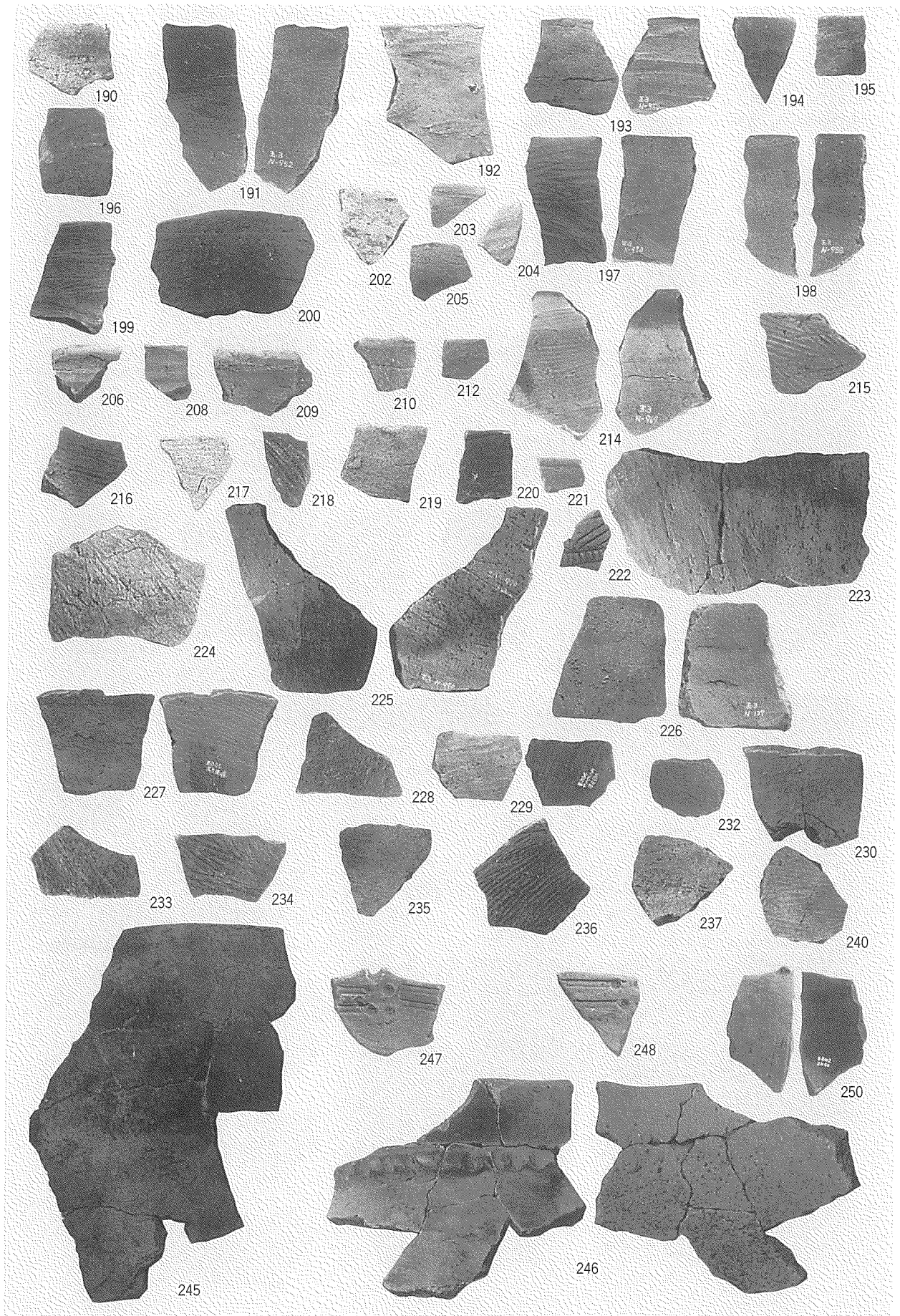


写真67 縄文土器 8

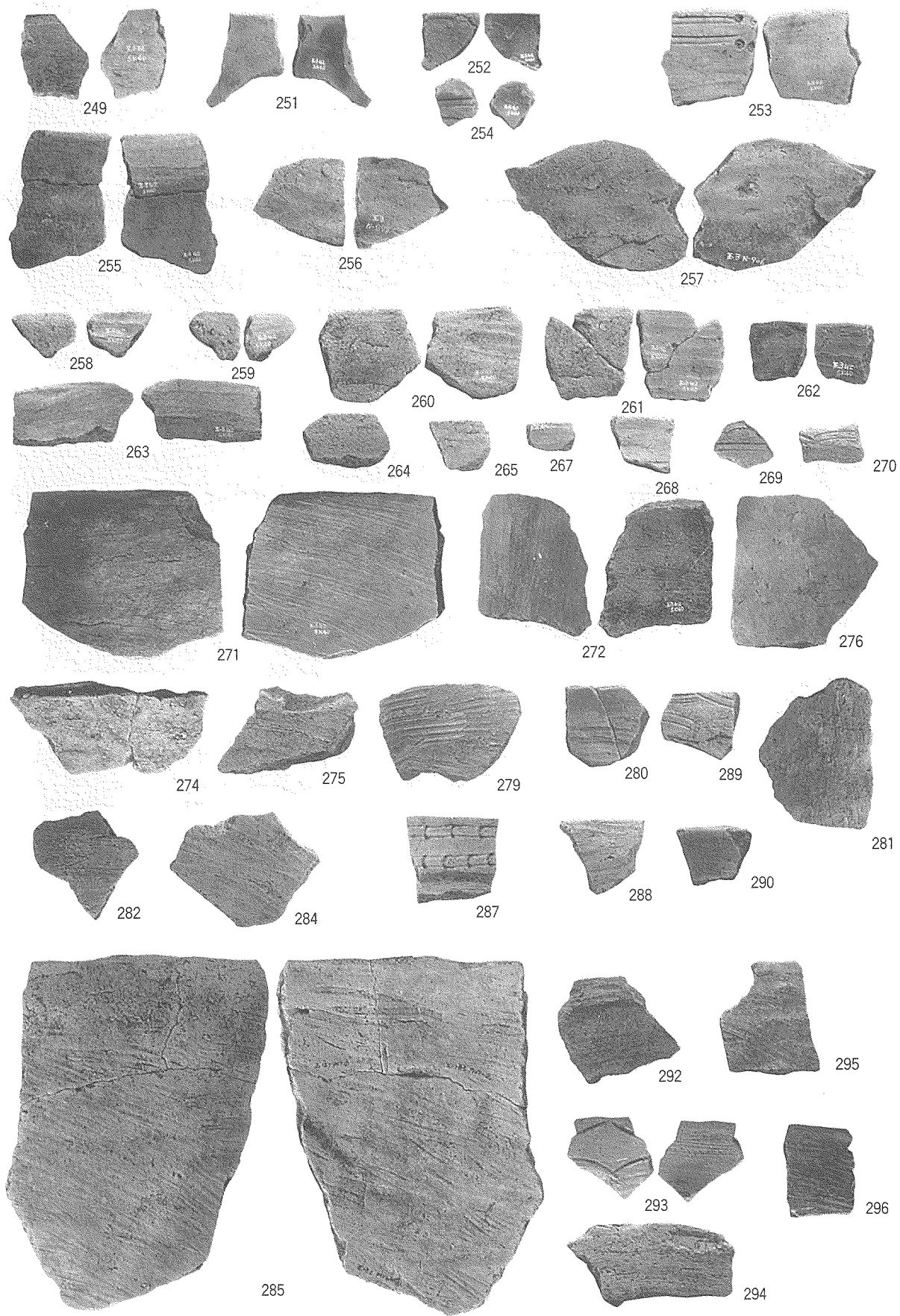


写真68 縄文土器 9

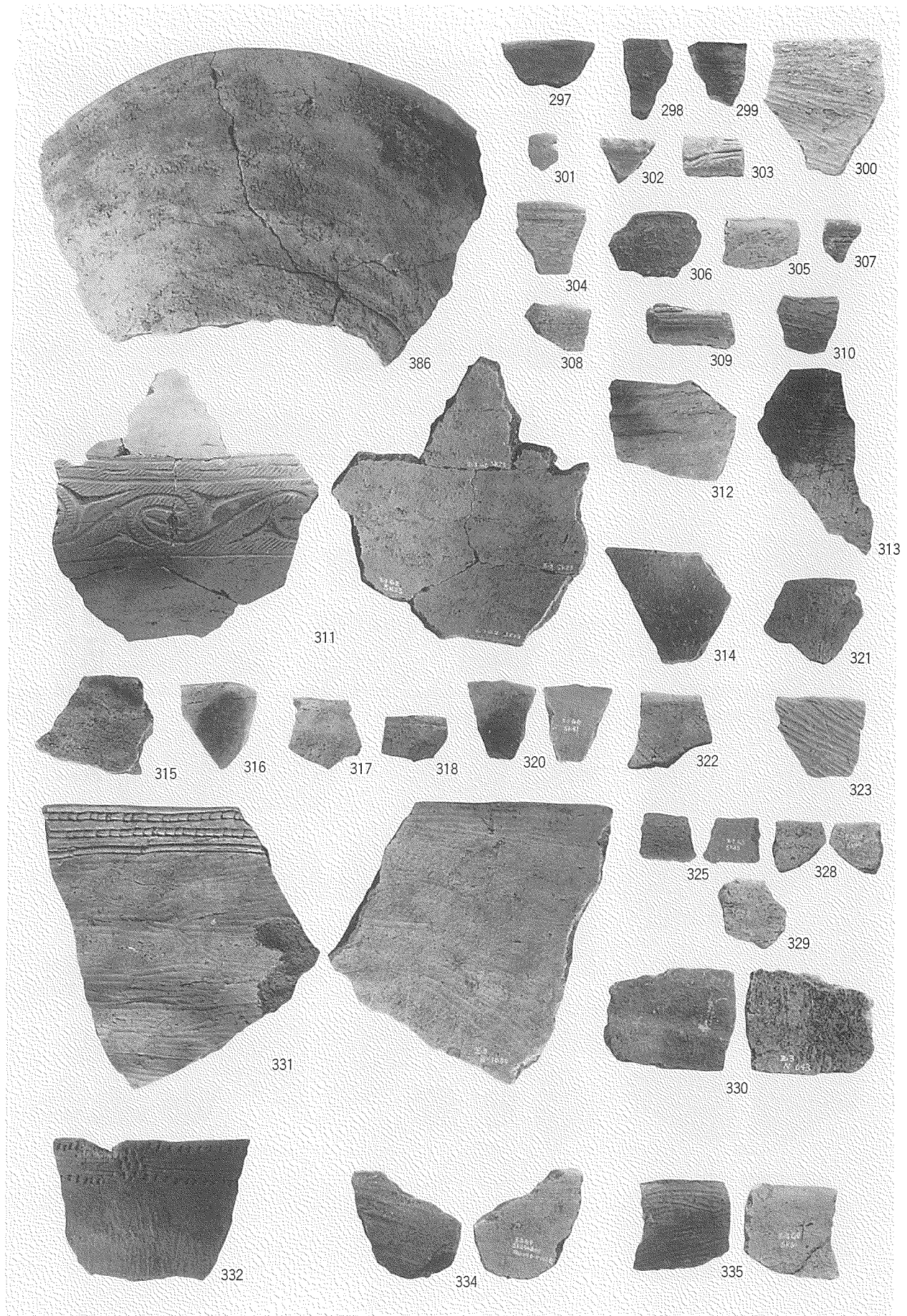


写真69 縄文土器10

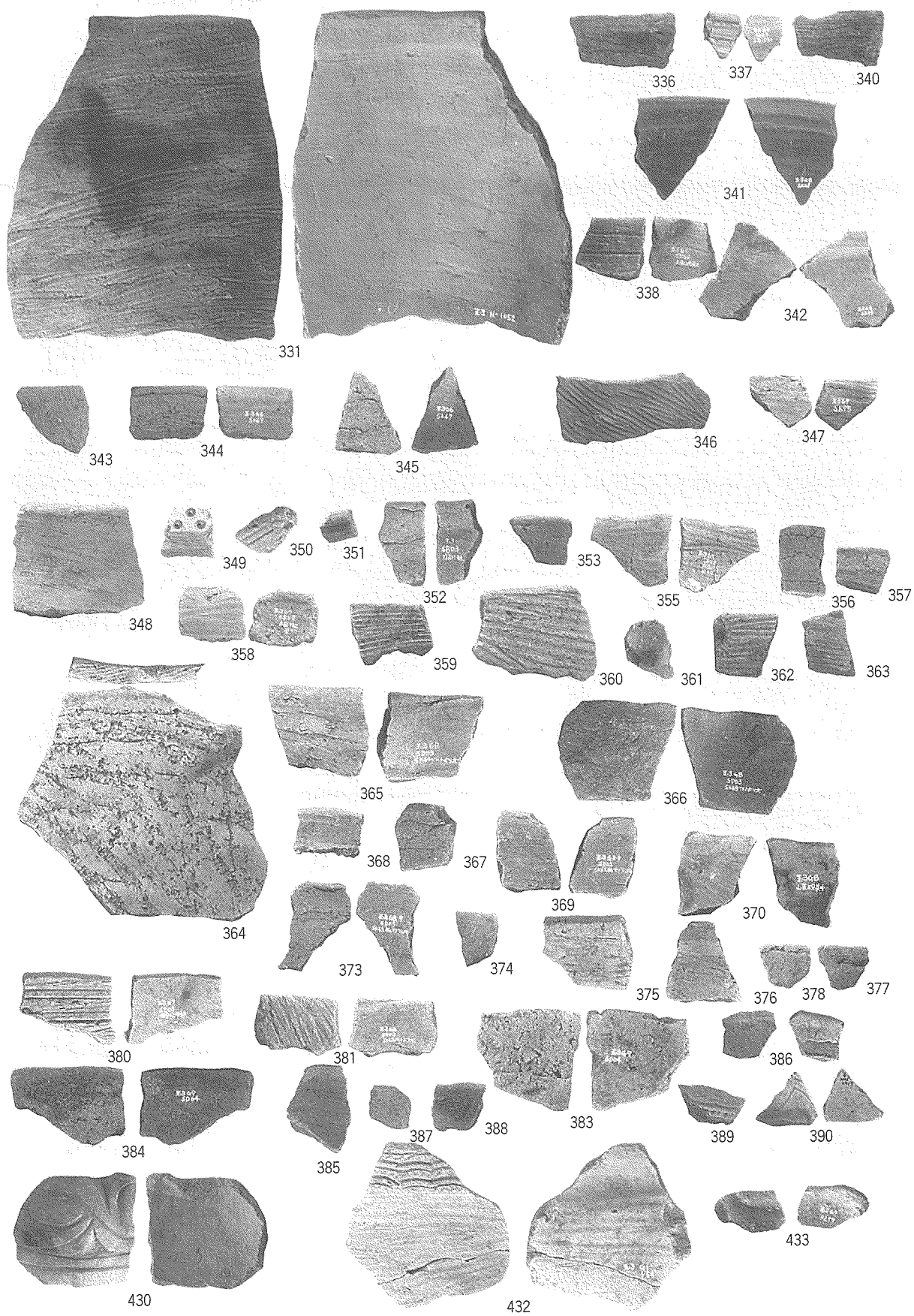


写真70 縄文土器11

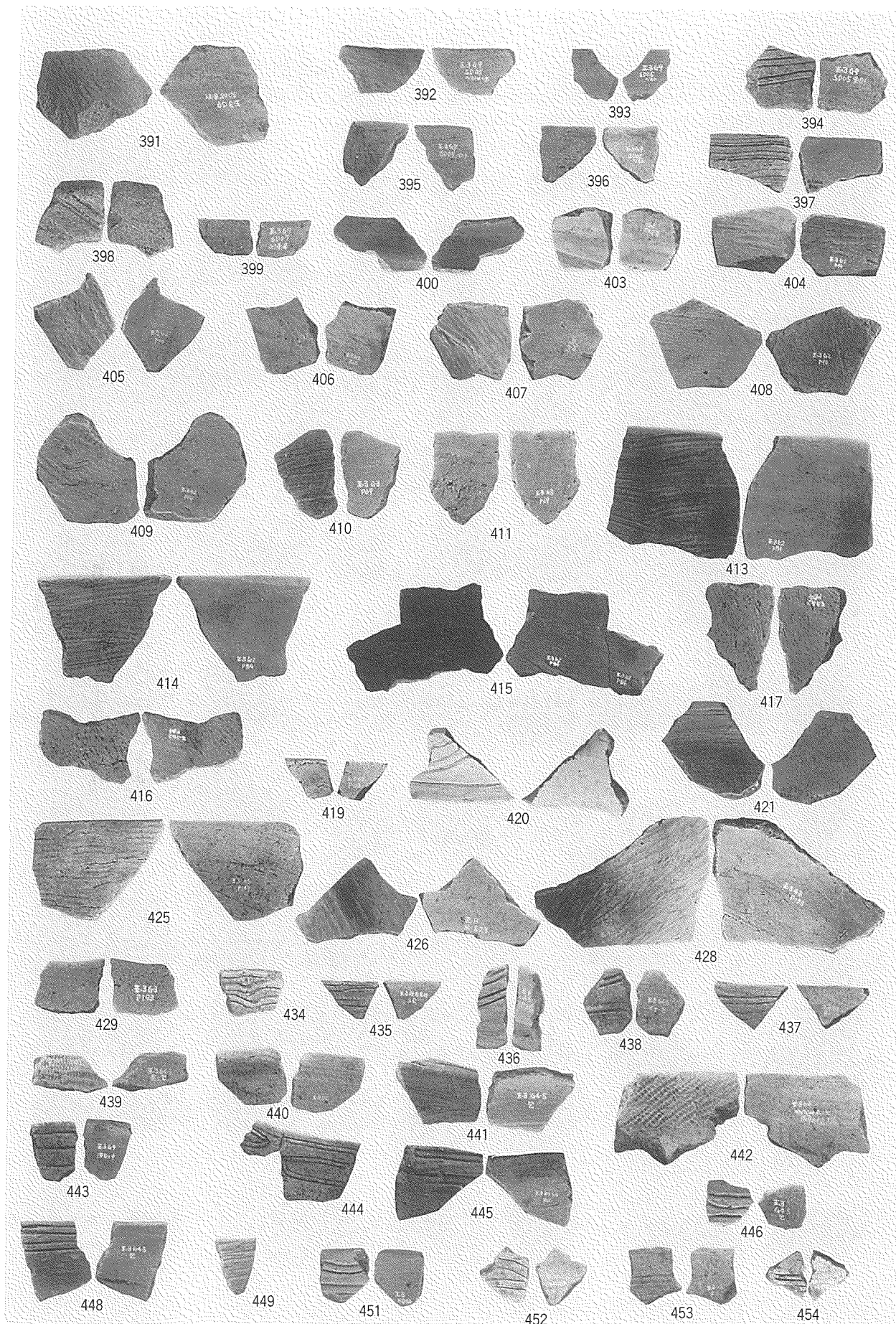


写真71 縄文土器12

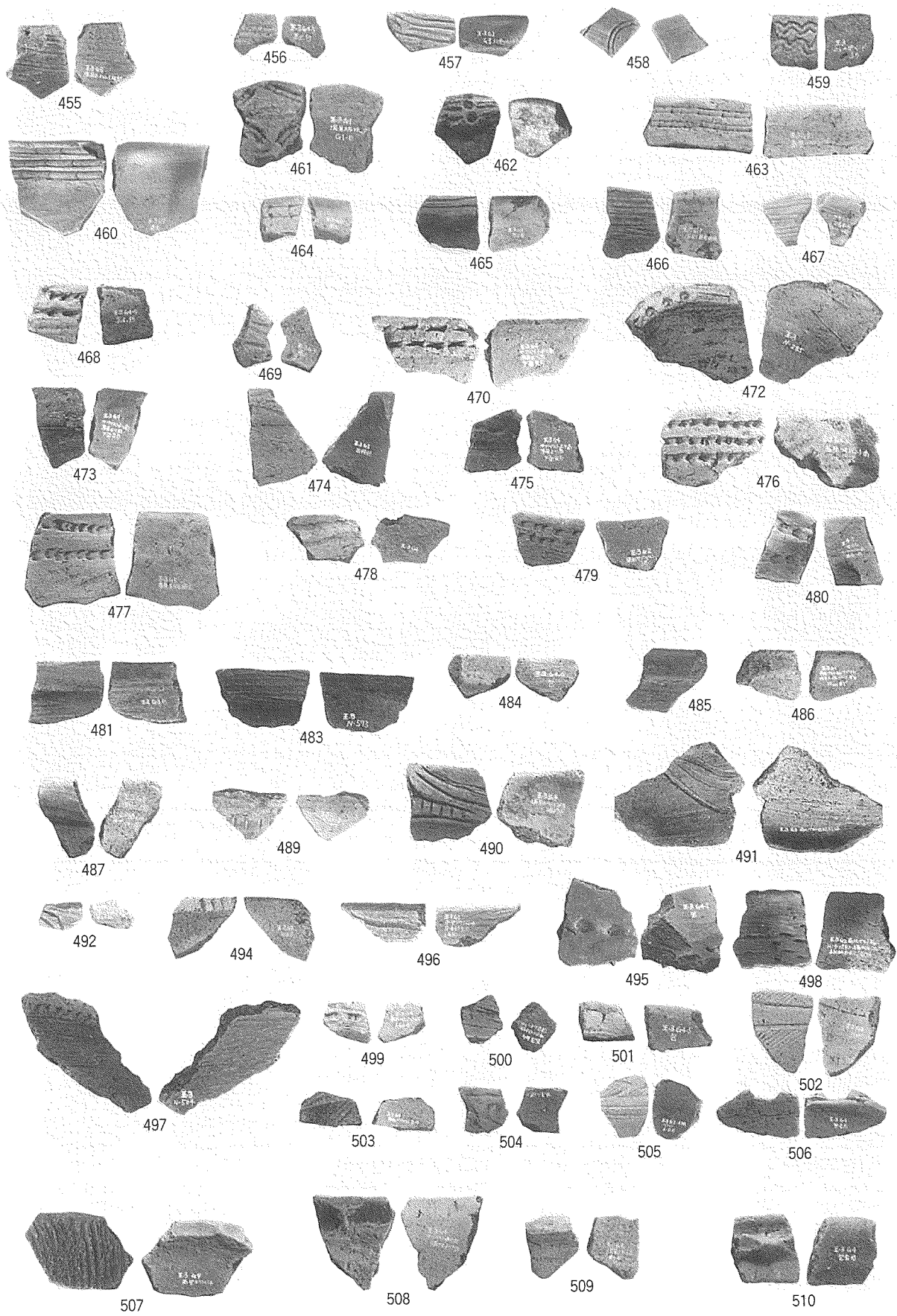


写真72 縄文土器13

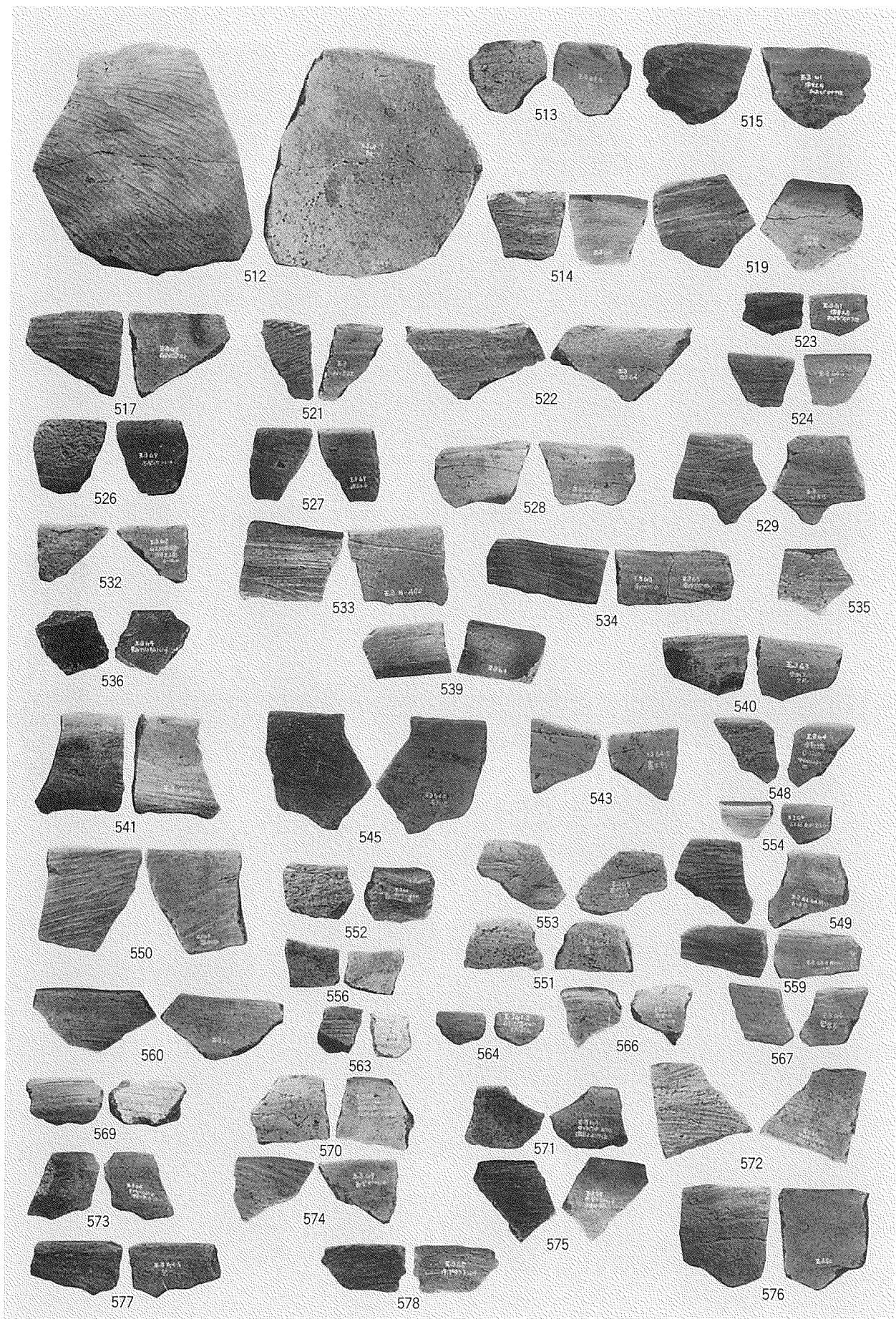


写真73 縄文土器14

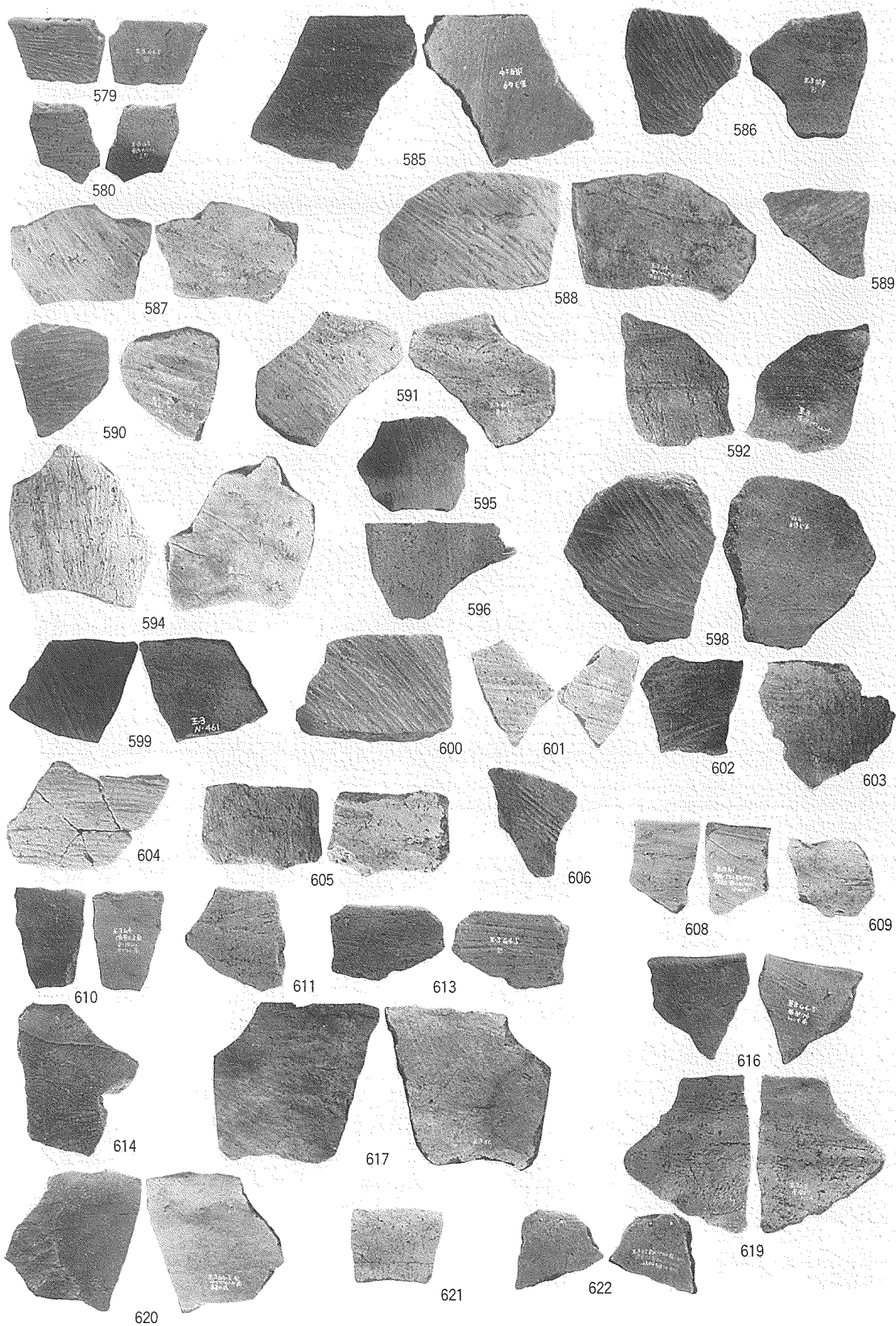


写真74 縄文土器15

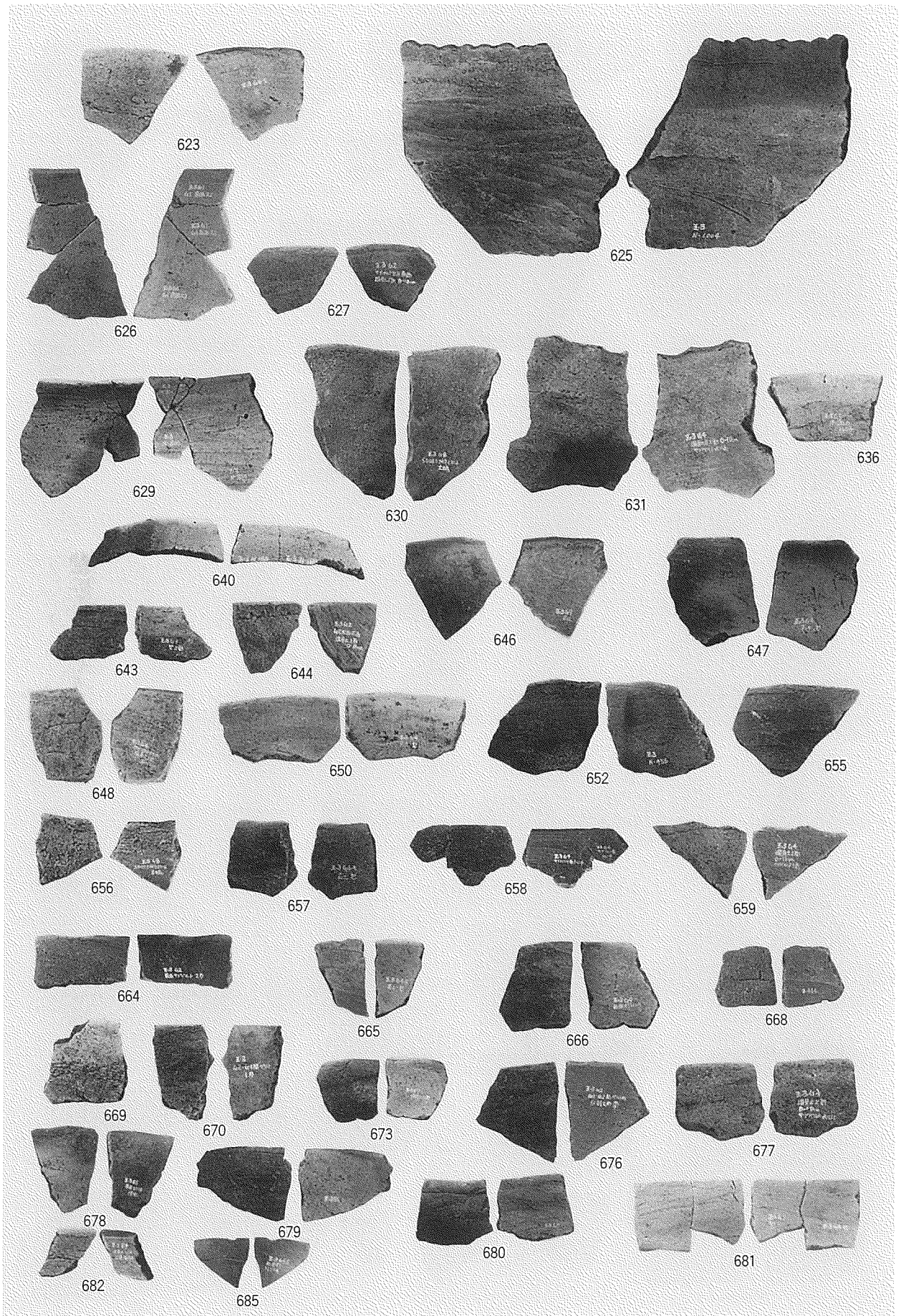


写真75 縄文土器16

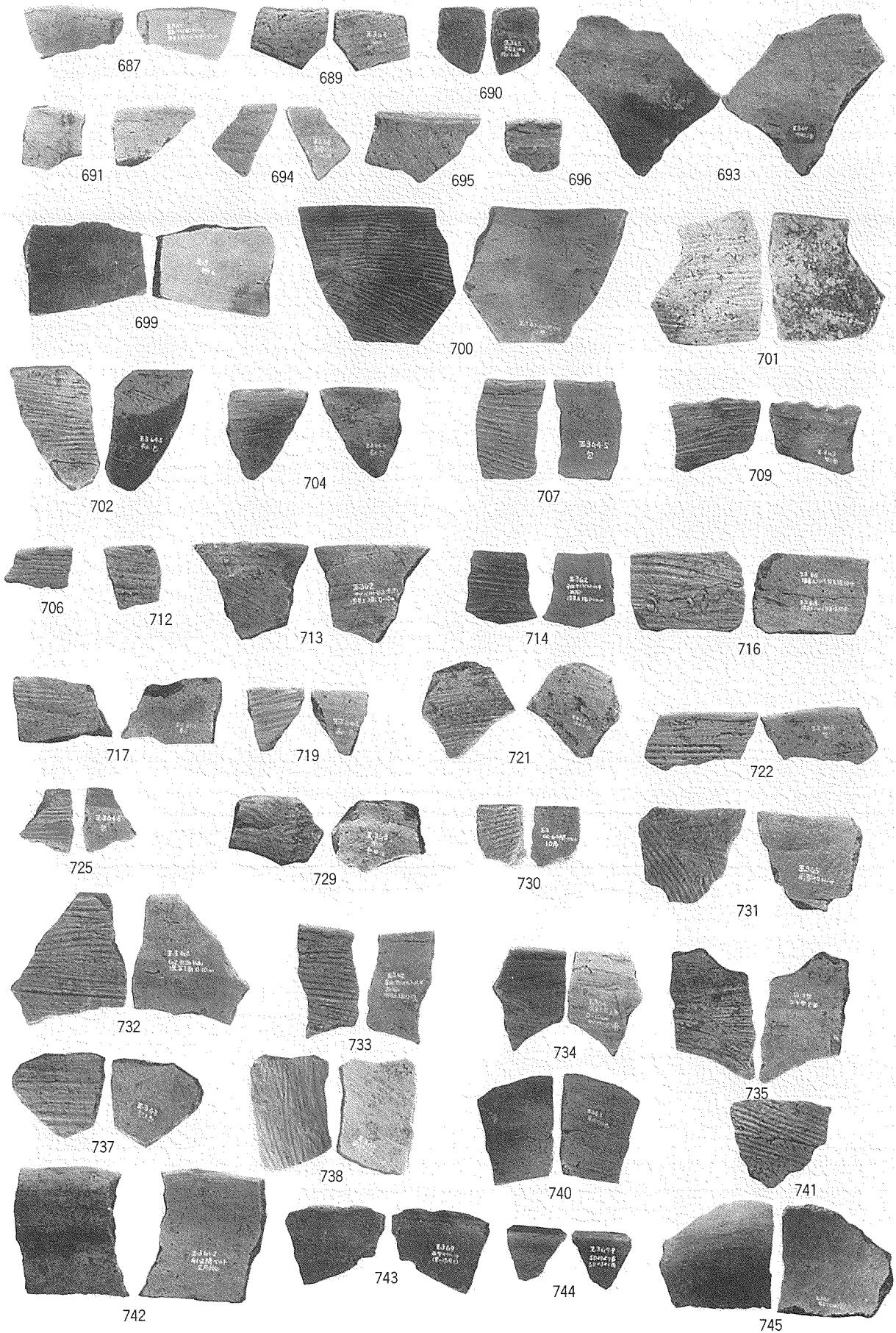


写真76 縄文土器17

土製品

本調査地点から出土した土製品はそれほど多いものではない。しかし性格等の判断が困難な製品もあり、多様な内容となっている。確実に墓壙にともなう製品は認められない。

土偶（第48図1、写真771）

土偶は1点出土している。G7付近の表土除去の際に出土した。頭部の前半部が残存している。顔面はほぼ完存しており、眉と鼻を表現する貼り付けが連結して表現されており、鼻腔と口腔は穿孔されて表現されている。目の表現は爪を立てて押さえることにより、横長の沈線を描出している。耳はふくらみとして表現されているが、両耳をつなぐように貫通孔が認められる。穿孔の表面には植物の茎と考えられる痕跡があり、軸を通したまま焼成したことが判断される。表土除去時の出土であり、詳細な時期は判断できないが、表現方法は晩期後半の特長を持つようである。

牙製垂飾土製模造品（第48図2、写真772）

東海地方の晩期貝塚において、動物の犬歯に穿孔し磨き上げた垂飾品が散見されるが、本製品はその牙製垂飾の土製模造品である。市内守山区の牛牧遺跡でも似た形状の製品があるが、厚みがあり勾玉の模造品であると考えられる。上下端が細くなり、穿孔位置が上端に近いこと、そしてカーブが緩やかである点などの特長から、牙製垂飾の土製模造品であると推定した。土壙墓8の西側、G3・G4間のベルト中からの出土であるが、直接土壙墓との関係があるのか不明である。

土玉（第48図4、写真774）

2号住居址床面、黒色磨研土器とともに床面から出土した。ほぼ球状に粘土を丸め、中央に穿孔している。

ミニチュア土器（第48図5、写真775）

G5の南壁際トレンチ内より出土した。浅鉢状の製品のミニチュア土器である。本調査地点でミニチュア土器は2点出土しているが、もう1点は焼成具合等から弥生時代以降の製品であると考えられる。

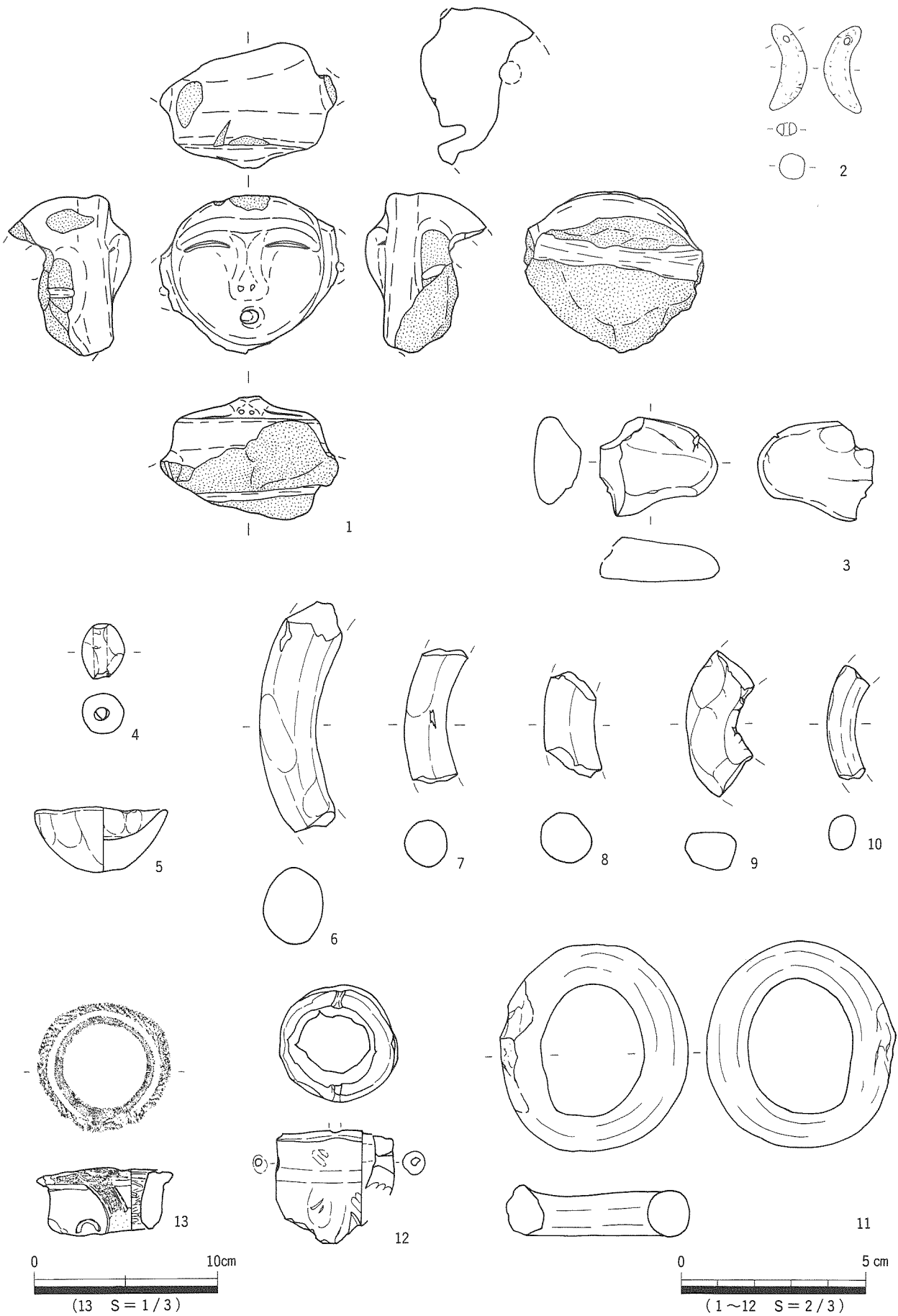
環状土製品（第48図6～11、写真776～11）

本調査地点では完形品、破損品を含めると6点の環状土製品がある。性格は不明であり、類例も管見の限り見あたらない。11の製品はほぼ完形である。前面に赤彩が施されている。接合部がやや厚くなっているが、それ以外の形態上の特長は少ない。6～10も環状土製品の破損品である。7については赤彩の痕跡が確認できる。

その他の不明土製品

第48図3は不明土製品である。扁平な形に形成されており、厚くなった部分で本体部分と接合するようである。12も性格不明の土製品である。上下ともに破損している。図の上半にあたる部分には穿孔が4カ所認められる。穿孔箇所は全周の1/4ずつ位置に配置されているが、向かい合った穿孔同士が同じ高さで1組ずつ同じ高さでそろい、2段の構成になっている。図版の下半についてはやや器壁が厚くなる。

13は土器の把手ないし口縁であるとかんがえられる。SK40からの出土であるが、沈線間に単節縄文RLを充填しており、文様要素からみると後期の様相を表すものである。ややゆがんだ形をしており、図の背面部分がやや平らになっている。前後の判断はつきそうだが上下左右の関係は判断できない。



第48図 土製品

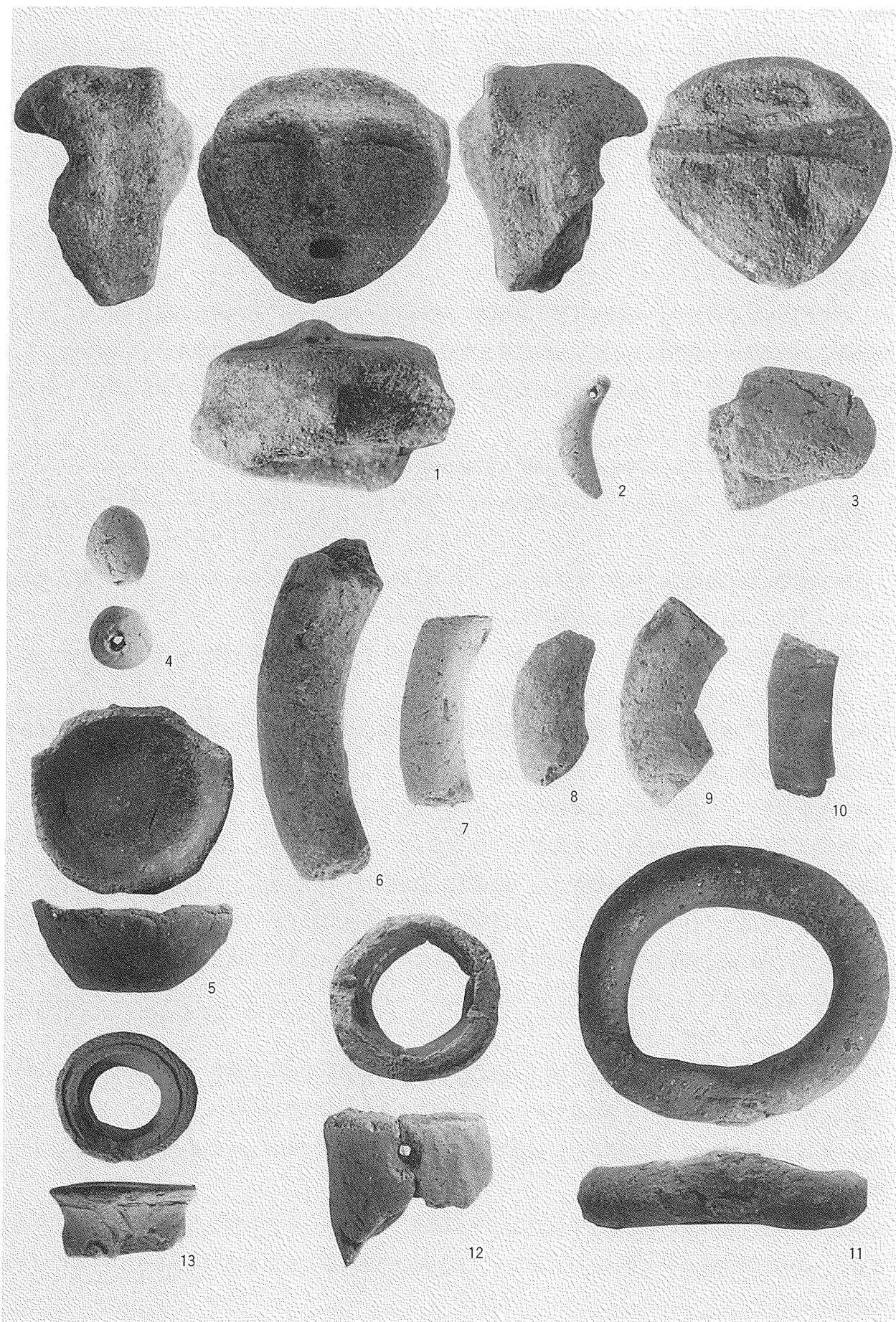


写真77 土製品

石器

石器は角錐状石器 1 点・石鏃14点・石鏃? 6 点・石錐 2 点・石匙 1 点・スクレイパー 2 点・楔形石器13 点・打製石斧 3 点・磨製石斧 2 点・RF 7 点・UF 3 点・剥片38点・石核 3 点・磨石 3 点・凹石 2 点・石皿 1 点・台石 1 点・磨製石製品 6 点・石剣 1 点の総数109点出土している。石材は下呂石61%・チャート11%・サヌカイト 7%・塩基性岩 8%・砂岩 5%・軽石 4%・礫岩 2%・安山岩 2%・黒耀石 2%・瑪瑙 1%・白色風化石材である。

角錐状石器

1 は横長剥片を素材とし、主剥離石器の裏面側に先端部から胴部にかけて平坦な剥離を施こしたあと、両側縁に主剥離面から調整加工を施し、断面を三角形に整えている。また背面に作り出された稜からも、微細な剥離が施されている。基部に礫面を残し石材は、白色風化石材である。同出土地点から、チャート製の剥片(2)が出土している。

石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・楔形石器・打製石斧・磨製石斧

石鏃(4~15)は、凹基無茎 9 点・平基無茎 4 点・凸基有茎 1 点で、石材は下呂石・サヌカイト・チャートである。

石錐は両面に加工を施し、明瞭な柄を作り出したもの(16)と、明瞭な柄をもたず、比較的長い刃部をもつもの(17)がある。石材は前者が下呂石、後者がチャートである。

石匙(18)は横長の剥片を素材とし、両面に加工が施されている。左右対称形で、明瞭な柄が作り出され、刃部は横刃である。石材は、下呂石である。

スクレイパーは横長の剥片の側縁に、背面から加工を施したもの(19)と、大形の剥片の側縁に背面から調整加工を施したもの(20)がある。石材は両者とも安山岩である。

楔形石器(3)は、背面が礫面に覆われており石材は下呂石である。

打製石斧は、両面に加工を施した短冊形のもの(21)と、剥片を素材とし、周縁に調整加工を施した短冊形のもの(22)がある。石材は両者とも、緑泥片岩である。

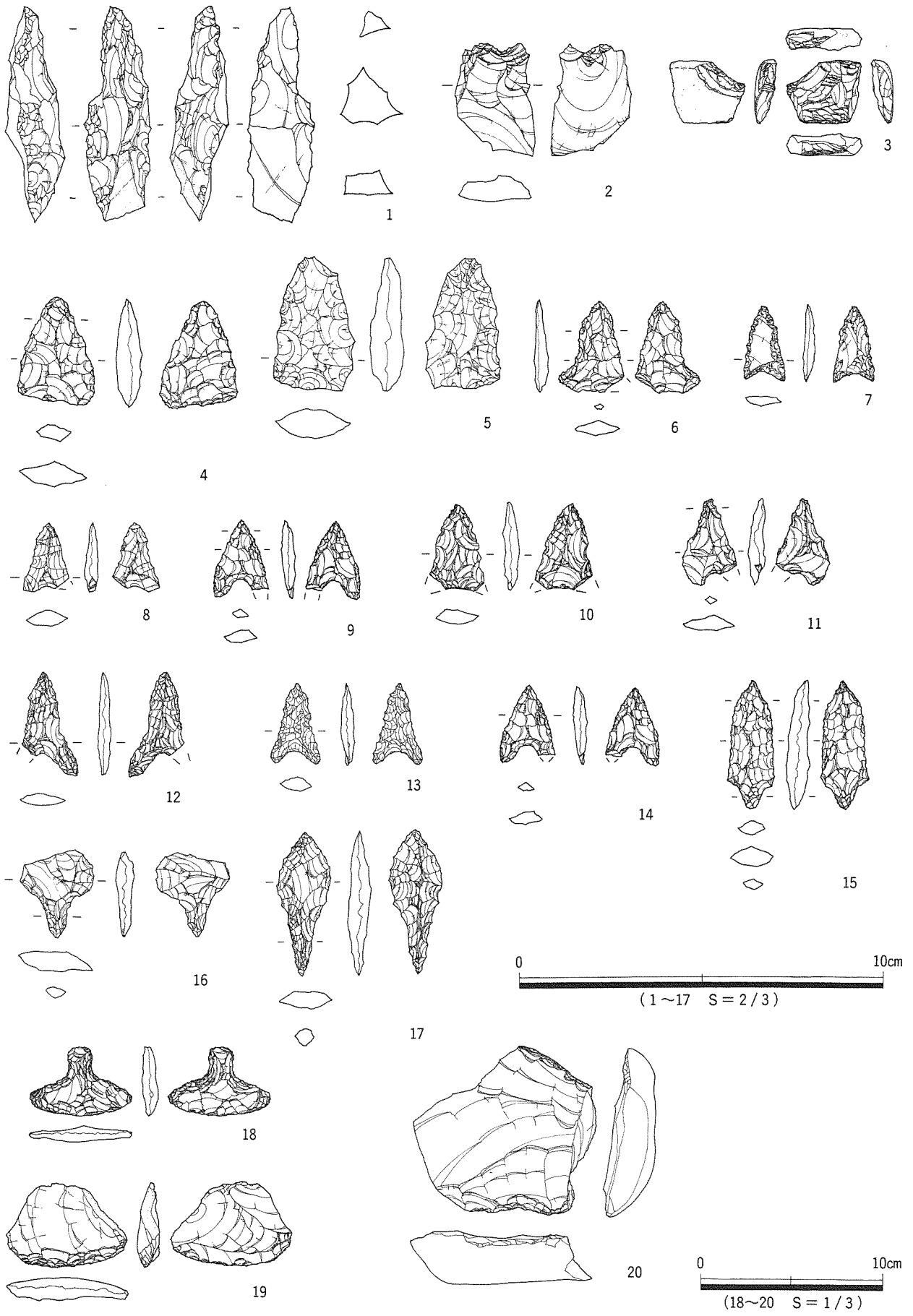
磨製石斧は剥離と敲打で調整したのち、刃部を中心に研磨を施したもの(24)があり、両刃で乳棒状を呈する。23は敲打痕と研磨痕を全面に残し、偏平な撥形に整えられた両刃の磨製石斧である。刃部に最大幅をもち、扁平である。

凹石・敲石・磨石・石皿・台石

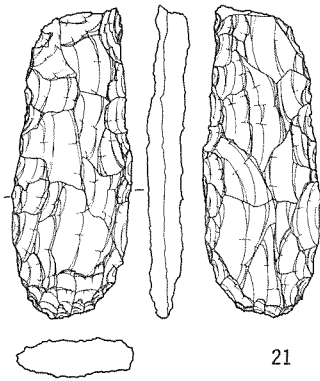
25は両面に凹みを残す凹石である。26は全面に磨面をもち多面体を呈する磨石で、裏面の中央部に凹みと端部に敲打痕がみられる。28は両面が研磨された磨石である。27は両面に凹みがみられる台石である。29は、両面と側面の一部に研磨痕が残る石皿である。石材は、28が礫岩で、その他が砂岩である。

磨製石製品・石剣

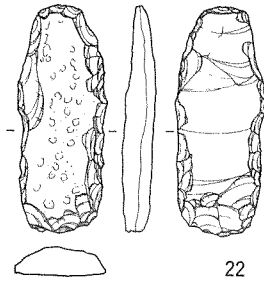
30は黒耀石製で、両面に調整加工を施したのち、研磨により細長い指状に整えた石製品である。32は砂岩製で、研磨で両側縁の中央部にくびれを作り、表裏面を平坦に整えた石製品である。31はサヌカイト製の石剣である。



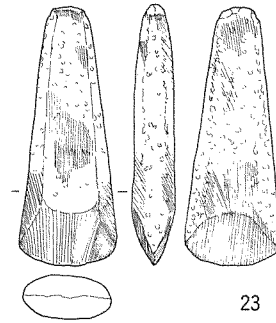
第49图 石器 1



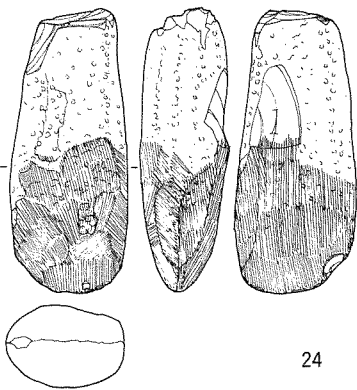
21



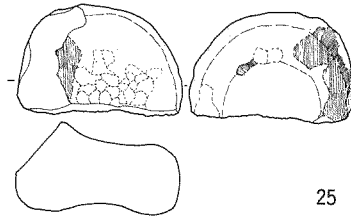
22



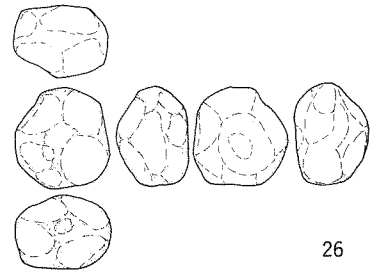
23



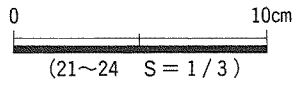
24



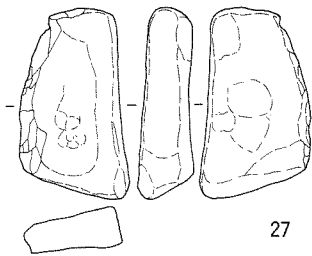
25



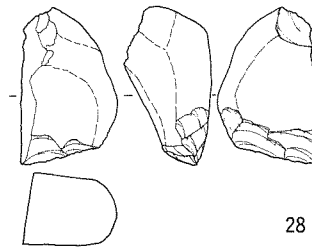
26



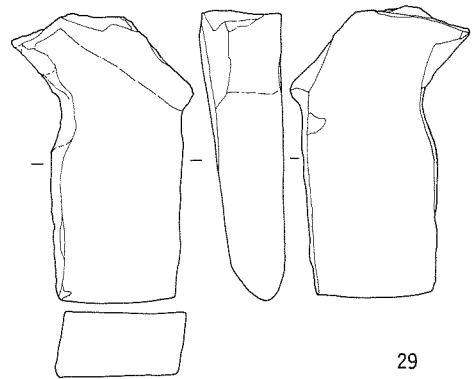
(21~24 S = 1/3)



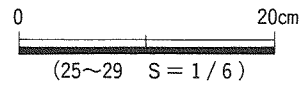
27



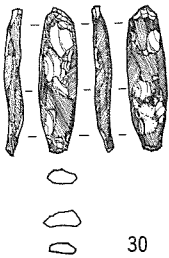
28



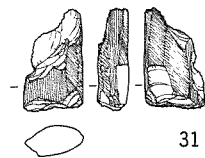
29



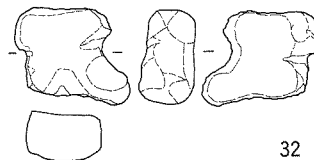
(25~29 S = 1/6)



30



31



32



(30~32 S = 2/3)

第50図 石器 2

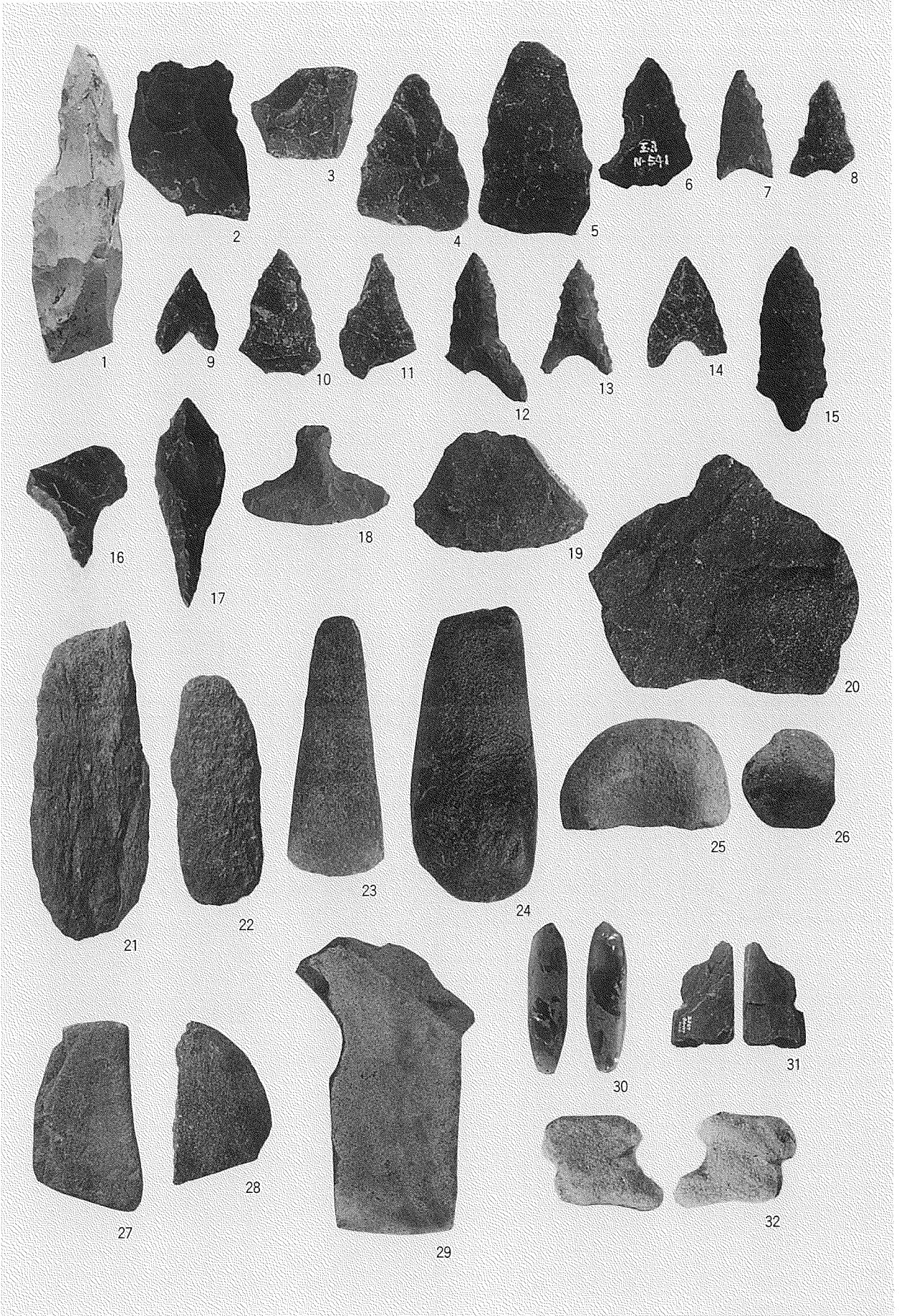


写真78 石器

図版番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	形態	石材	欠損部位	注記	備考
1	角錐状石器	58.0	(17.6)	14.7	(10.8)	—	白色風化石材	左側縁	G3・G4ベルト間セクション4層中心	横長剥片素材/旧石器
2	剥片	(30.2)	22.2	6.7	(4.2)	—	チャート	先端部	G3・G4ベルト間セクション4層中心	旧石器?
13	石鏃	21.4	13.5	3.7	0.7	凹基無茎	青チャート	なし	G8	弥生?
12	石鏃	(28.3)	(16.1)	3.2	(0.9)	凹基無茎	赤チャート	左脚部	?	
9	石鏃	(21.1)	(15.1)	3.6	(0.8)	凹基無茎	下呂石	右脚部	N-255	
11	石鏃	(23.0)	(14.8)	5.2	(1.1)	凹基無茎	下呂石	右脚部	N-339	
8	石鏃	(17.7)	(12.7)	3.7	(0.5)	凹基無茎	下呂石	右脚部	G4	
14	石鏃	15.9	(11.9)	3.8	(0.5)	凹基無茎	下呂石	右脚部	G5	
7	石鏃	20.7	(10.7)	(2.6)	(0.5)	凹基無茎	下呂石	先端部	G4 混貝土層	
	石鏃	21.2	14.8	2.8	0.7	凹基無茎	下呂石	なし	1G SK01A	弥生?
10	石鏃	(24.0)	(15.7)	4.0	(1.2)	凹基無茎	下呂石	右脚部	G2 混貝土層中	
	石鏃	(22.5)	(17.3)	4.5	(1.1)	凹基無茎	サヌカイト	右脚部	N-697	
15	石鏃	34.6	13.3	7.2	3.0	凸基有茎	サヌカイト	なし	N-487	
4	石鏃	28.3	21.3	8.0	3.6	平基無茎	下呂石	なし	G2 P72	
5	石鏃	35.9	21.0	8.4	5.9	平基無茎	下呂石	なし	表土除去	
6	石鏃	24.4	(18.0)	4.2	(1.2)	平基無茎	サヌカイト	右脚部	N-541	
	石鏃?	23.1	14.4	5.2	1.9	—	下呂石	なし	チ 混貝土上面 0-10 まで	
	石鏃?	(19.6)	20.5	5.3	(1.9)	—	下呂石	一部	N-692	
	石鏃?	(18.5)	(18.5)	3.5	(1.0)	—	下呂石	一部	N-696	
	石鏃?	16.5	13.6	4.1	0.7	—	下呂石	なし	N-205	
	石鏃?	20.2	(19.3)	(3.7)	(1.4)	—	下呂石	先端部	N-779	
	石鏃?先端部	(28.7)	(12.7)	(6.6)	(1.8)	—	青チャート	基部	N-486	
20	スクレイパー	(101.6)	(92.7)	(25.1)	(310.0)	—	安山岩	右側縁	G3 P159	
19	スクレイパー	65.0	46.3	12.5	43.6	—	安山岩	なし	N-91	
16	石鏃	21.6	20.0	4.9	1.5	—	青チャート	なし	G6	
17	石鏃	39.0	14.4	5.7	2.6	—	青チャート	なし	G4 P185	
18	石鏃	37.8	55.6	9.2	13.4	横刃	下呂石	なし	G3 P107	横長剥片素材
21	打製石斧	(124.0)	46.0	14.2	(110.0)	短冊形	緑泥片岩	なし	G7 表土除去	
22	打製石斧	90.4	35.8	12.3	62.0	短冊形	緑泥片岩	なし	G7 表土除去	
	打製石斧	(39.3)	(35.8)	(13.9)	(21.8)	?	緑泥片岩	刃部	N-853	
24	磨製石斧	(114.0)	47.4	32.7	(285.0)	乳棒状	塩基性岩	基部	G9 P292	
23	磨製石斧	101.7	38.0	16.1	98.5	撥形	塩基性岩	なし	?	
	磨製石製品	(17.5)	(33.7)	(19.1)	(11.4)	—	下呂石	先端・末端部	G4 サブベルト内 帯貝部分	
32	磨製石製品	(37.1)	(47.7)	21.9	(24.0)	—	砂岩	左側縁	N-909	
30	磨製石製品	(28.4)	7.6	3.6	(1.0)	—	黒曜石	先端部	表土-	
	磨製石製品	(25.1)	(18.3)	(14.6)	(4.1)	—	軽石	半分	層	多面・敲打痕
	磨製石製品	51.7	35.8	27.2	15.6	—	軽石	完形	N-514とN-614	横長の剥片素材
	磨製石製品	32.9	27.1	28.6	11.8	—	軽石	破片	N-550とN-559接合	横長の剥片素材
31	石鏃	(40.2)	(24.2)	(13.6)	(14.0)	—	サヌカイト	先端部・基部	G7 南壁際トレンチ	
	RF	(16.6)	16.9	8.6	2.2	—	下呂石	末端部	G3 SK57	
	RF	22.7	45.3	12.0	9.9	—	下呂石	なし	G4 サブベルト内 帯貝部分	
	RF	(22.4)	(21.4)	(6.8)	(2.7)	—	下呂石	末端部	G4包 サブベルトより 北	
	RF	32.0	32.2	9.2	8.5	—	青チャート	なし	G5 南壁際トレンチ	
	RF	(15.4)	(25.1)	(7.6)	(3.4)	—	下呂石	端部	N-852	
	RF	(24.1)	(22.5)	(10.8)	(6.1)	—	下呂石	末端部	玉3	
	RF	51.4	37.2	12.2	24.2	—	青チャート	なし	N-946	
	UF	(26.9)	(16.2)	(8.4)	(3.7)	—	下呂石	末端部	G3・間ベルト1層	
	UF	(17.3)	(19.1)	(7.1)	(1.1)	—	サヌカイト	右側縁	N-537	
	UF	(17.6)	(15.0)	(4.3)	(1.0)	—	下呂石	打面	N-539	
	縦長剥片	39.7	(20.3)	19.8	(8.2)	—	下呂石	側縁部	G1 P04	
	縦長剥片	(39.2)	(16.1)	(11.2)	(5.7)	—	下呂石	なし	G3 4119 ベルト3層	
	縦長剥片	(39.2)	(16.1)	(11.2)	(5.7)	—	下呂石	側縁部	G3 4119 ベルト3層	
	縦長剥片	44.3	29.4	13.7	10.2	—	下呂石	なし	G3 表土除去	
	縦長剥片	48.2	39.3	12.9	18.8	—	下呂石	なし	G3 表土除去	
	縦長剥片	22.4	11.1	6.2	1.2	—	下呂石	打面・末端部	G4・5サブベルト	
	縦長剥片	38.1	(37.8)	(9.7)	26.5	—	下呂石	末端部	G4SK04 トレンチ内	

表1 石器計測表1

図版番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	形態	石材	欠損部位	注記	備考
	縦長剥片	33.0	13.5	10.4	3.5	—	下呂石	なし	G4含サブレンチより北	
	縦長剥片	37.5	13.4	14.8	6.1	—	下呂石	なし	G9表土	
	縦長剥片	(39.0)	(26.3)	(7.9)	(6.7)	—	下呂石	側縁部	N-229	
	縦長剥片	(28.3)	(7.7)	(4.8)	(0.9)	—	下呂石	側縁部	N-725	
	縦長剥片	16.2	23.4	4.4	1.5	—	下呂石	なし	帯貝	
	縦長剥片	33.0	21.3	7.9	4.7	—	瑪瑙	なし	G3 表土除去	
	横長剥片	21.6	37.1	17.7	16.2	—	赤チャート	なし	G4・5包サブベルト	
	横長剥片	20.7	32.0	7.3	2.9	—	下呂石	なし	G2 SK40	
	横長剥片	(24.8)	40.9	9.9	7.3	—	下呂石	打面部	南	
	横長剥片	43.6	59.1	13.6	21.6	—	下呂石	なし	N-140	
	横長剥片	28.2	26.2	7.3	3.9	—	下呂石	打面・側縁部	N-141	
	横長剥片	23.3	32.4	6.6	4.1	—	サヌカイト	なし	G4	
	横長剥片	22.1	29.1	7.1	4.5	—	変成岩	なし	N-642	
	剥片	(22.2)	(24.8)	(11.7)	(6.4)	—	赤チャート	末端部	G4包 サブベルトより北	
	石核	34.8	25.8	23.4	26.0	—	赤チャート	なし	G3 P107	
	剥片	(27.3)	(21.9)	(12.3)	(6.0)	—	下呂石	打面部・側縁部	?	
	剥片	(21.3)	(14.2)	(5.9)	(1.2)	—	下呂石	打面部	G2 混貝上面O-10cm	
	剥片	(11.2)	(15.0)	(4.0)	(0.9)	—	下呂石	打面部・側縁部	G3 下層	
	剥片	(24.5)	22.2	4.8	(2.1)	—	下呂石	末端部	G4・5 帯貝写真	
	剥片	(25.2)	(29.7)	(10.1)	(5.4)	—	下呂石	打面部	G6・7遺構検出	
	剥片	(31.4)	(23.7)	(7.0)	(3.9)	—	下呂石	打面部	G9 SB05 焼土上面から-20まで	
	剥片	(39.1)	(29.3)	(13.8)	(12.0)	—	下呂石	打面部	N-772	
	剥片	11.8	10.8	2.2	0.3	—	下呂石	なし	N-775	
	剥片	(25.1)	(27.3)	(8.7)	(5.7)	—	下呂石	打面・末端部	N-786	
	剥片	(10.4)	(19.1)	(4.4)	(0.9)	—	下呂石	末端部	SK04トレンチ	
	剥片	(41.7)	(18.9)	(11.3)	(7.8)	—	下呂石	側縁部	玉3	
	剥片	(19.0)	9.0	2.6	(0.4)	—	下呂石	打面部	N-625	
	剥片	(26.2)	(25.2)	(10.6)	(6.4)	—	下呂石	打面部	N-629	
	剥片	(22.6)	(13.9)	(7.6)	(1.9)	—	下呂石	左側縁	N-657	
	石核	20.0	35.6	13.3	6.4	—	下呂石	なし	N-554	
	剥片	(13.6)	(13.1)	(4.7)	(0.7)	—	黒曜石	打面部	N-540	
	石核	25.7	19.2	19.2	10.0	—	チャート	なし	N-610	
	剥片	(25.2)	(25.6)	(5.6)	(2.9)	—	粘板岩	打面・側縁部	G4 東西サブベルト8層	
3	楔形石器	(35.8)	(41.7)	(11.0)	(17.6)	—	下呂石	打面下部	G4 SK35・36付近	
	楔形石器	31.4	24.3	6.9	5.9	—	下呂石	なし	G2 SK07	
	楔形石器	27.3	27.6	10.1	8.3	—	下呂石	なし	G3・間ベルト1層	
	楔形石器	33.1	8.9	5.8	2.1	—	下呂石	なし	G4	剥片素材
	楔形石器	23.4	28.4	9.5	5.7	—	下呂石	なし	G4 SK04トレンチ	
	楔形石器	29.2	40.7	15.3	19.0	—	下呂石	なし	G4 SK35(貝層半)	剥片素材
	楔形石器	40.9	15.4	7.8	5.1	—	下呂石	なし	G4 サブベルトより北	
	楔形石器	34.3	25.5	11.3	8.4	—	下呂石	末端部	G4 東西サブベルト4層	剥片素材
	楔形石器	38.5	28.0	10.3	10.2	—	下呂石	なし	G4 包	
	楔形石器	48.9	31.7	9.0	14.2	—	下呂石	なし	G7 南壁際トレンチ	剥片素材
	楔形石器	21.3	26.2	9.3	4.6	—	下呂石	側縁部	N-719	
	楔形石器	29.4	19.7	7.7	3.7	—	下呂石	側縁部	N-858	
	楔形石器	25.6	23.9	12.2	6.8	—	下呂石	なし	N-560	剥片素材
26	磨石	77.6	74.3	53.4	440.0	多面	砂岩	なし	SK49	
	磨石	(82.3)	(49.8)	(44.7)	(94.5)	—	礫石	半分	G7 南壁際トレンチ	
28	磨石	(15.4)	(7.8)	(6.9)	(780.0)	—	礫岩	半分	G8 SB02 炉体	
	凹石	(51.5)	(75.0)	(46.4)	(259.9)	両面	礫岩	半分	SC	
25	凹石	(13.1)	(8.7)	(7.1)	(1060.0)	—	砂岩	半分	G8 SB02 炉体	
29	石皿	(23.7)	(14.3)	(6.5)	(2150.0)	—	砂岩	ほぼ完形	SB02 炉体	
27	台石	(15.1)	(8.8)	(4.4)	(750.0)	—	砂岩	ほぼ完形	G4サブベルトより北	

表2 石器計測表2

骨角器・貝製品は30点出土しており、その内容は根ばさみ4点、骨角製鏃1点、刺突具14点、骨角製針2点、ヘラ1点、スクレイパー1点、装身具3点、刀子の柄1点、器種不明3点である。これらの資料はすべて発掘時に採集されたものであり、縄文時代晩期に属するものが多いが、弥生時代以降のものも含まれていると考えられる。器種分類は機能・用途によって行い、実測図にはなるべく多くの資料を、写真にはすべての資料を掲載することとした。また、表3には全資料の属性を示した。

a. 根ばさみ (表3-1~4)

先端に石鏃を装着するためのスリットを持ち、基部は矢柄につけるために細くなっている。4点出土しており、いずれも器体中央部と基部は明瞭に区別され、鹿角製である。1・2・4は破損後に再加工されたために、最初の製作時よりも長さが短くなっていると思われる。縄文晩期の東海地方の貝塚では多く出土する器種である。

b. 骨角製鏃 (表3-5)

刺突する道具のうち、矢の先端につけて使用されたと考えられ、器体中央部と着柄部が区別されるものを骨角製鏃とした。1点出土しており、鹿角製である。先端部にはスリットの痕跡がかすかに残っており、初めは根ばさみだったが、破損後に鏃に再加工されたものと考えられる。先端が尖っていないためにあまり実用性はないと思われ、練習用の鏃などとして使用されたのであろうか。

c. 刺突具 (表3-6~19)

刺突する道具のうちで、骨角製鏃と次に述べる骨角製針を除いたものを刺突具とした。14点出土している。6・7は先端と基部の区別が難しい。8・9は先端部の再加工が著しい。10は鹿角製で、組み合わせ式のヤスの基部であろう。11~14はシカの中手・中足骨後面の左右の緻密質が厚い部分を利用しており、原材の形をよく残している。このタイプの刺突具は伊川津遺跡で大量に出土している(西本1988)。先端は使用のためによく磨滅し、基部には整形時の擦痕が残っている。11は先端の再加工を繰り返して短くなったのであろう。17はシカの中手・中足骨の前~側面を利用しており、先端から2.3cmほどまでがよく磨滅している。18・19はエイ類の尾棘を利用したもので、基部を削って薄くしている。18の先端は磨滅している。

d. 骨角製針 (表3-20・21)

刺突する道具のうち断面が円形で、器体全体がほぼ同一の断面を持つものを針とした。破片が2点出土している。20は中間部破片で、焼けて一部が黒色になっている。21は先端部破片である。

e. ヘラ (表3-22)

破片が1点のみ出土した。シカの中手・中足骨の後面を利用していると思われる。

f. スクレイパー (表3-23)

イノシシ雄獣の下顎犬歯の先端部を切り取り、急角度の刃部を作り出しているもので、1点出土した。犬歯の後面を主に加工して刃部を作っているが、前面にも少し加工が見られる。刃部には使用による磨滅が見られる。

g. 装身具 (表3-24~26)

3点出土した。24は鳥骨を切断して作った玉である。25はサメ類の椎骨中央部に穿孔した垂飾であり、

椎骨の側面は一部を切り取っている。26は鹿角の角座部分を利用した腰飾りである。内面の海綿体は削り取られ、外面も全体がよく研磨されている。2孔があげられており、破損部分にもさらに孔があったかもしれない。この2孔の間には紐ずれ? 状の磨滅が見られる。

h. 刀子の柄 (表3-27)

1点出土した。金属製の刃部が着柄された状態で出土している。鹿角(いわゆる一本角)の角座部分を利用して柄頭とし、内部に盲孔をくり抜いて刃部を差し込んでいる。表面には金属器による加工痕が見られる。

i. 器種不明 (表3-28~30)

加工品であるが器種のわからないもので、3点見られた。28は使用部位が破損した錐の柄部の破片かもしれない。29は鹿角を削って整形しており、表面には擦痕が見られる。30はイタボガキの左殻に穿孔したものである。

まとめ

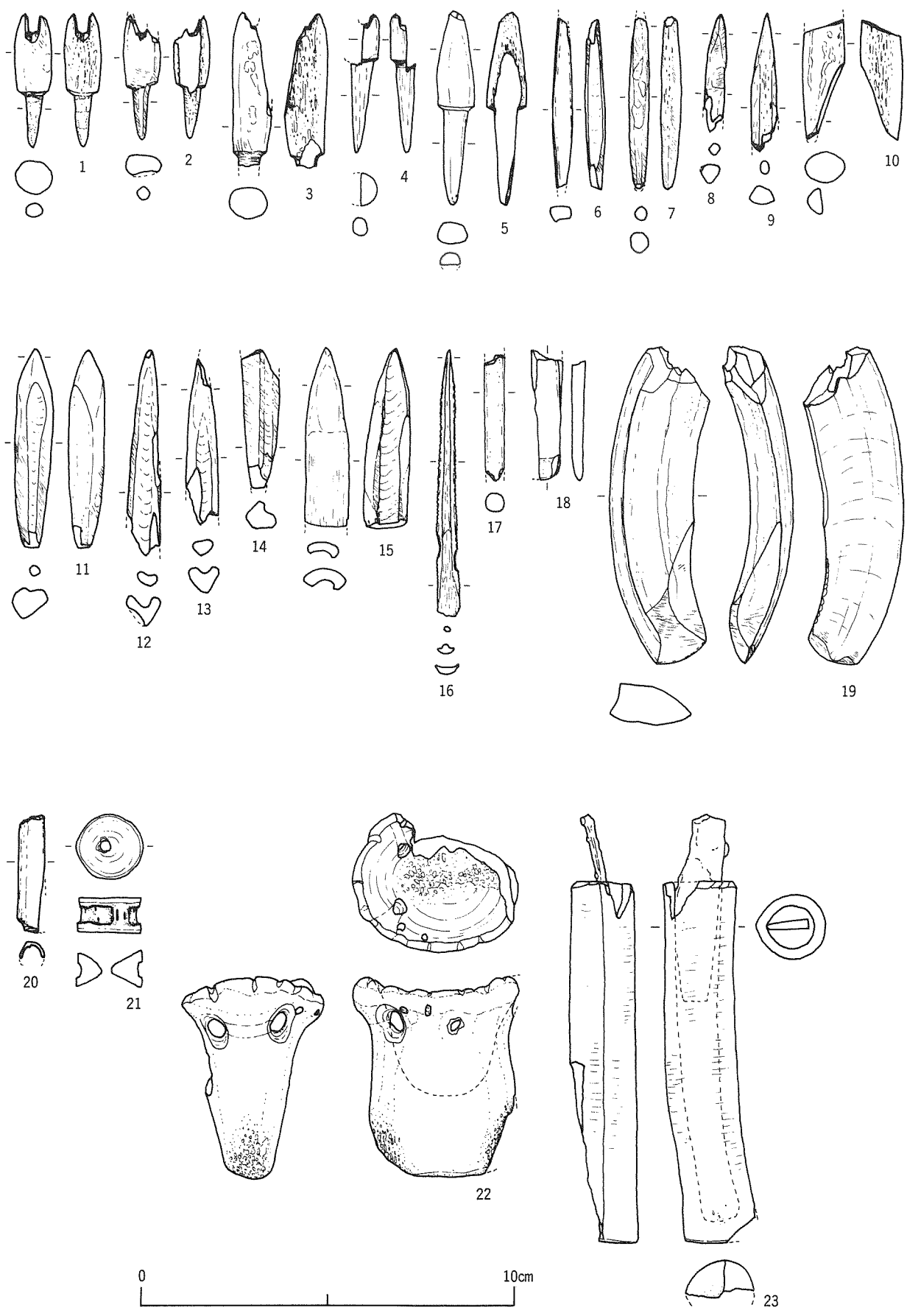
当遺跡出土の骨角器・貝製品30点は、根ばさみ・骨角製鋸は縄文晩期に属するが、刀子の柄は古墳時代~中世のものと考えられ、縄文期よりも新しい時代の資料も含んでいることは確実である。刀子の柄以外にも刺突具の一部など、形態から見て縄文期のものではないと思われる資料があり、縄文時代~中世の資料が混在して複雑な構成となっているのが特徴である。

<引用文献>

西本豊弘 1988「骨角器」『伊川津遺跡』渥美町教育委員会、186-214頁

No.	器種	原材	残存状態	長さ(mm)	出土遺構など	図No.	写真No.	備考
1	根ばさみ	鹿角	ほぼ完存	35.0	P185	1	1	
2	根ばさみ	鹿角	一部欠	32.7	SK63	2	2	
3	根ばさみ	鹿角	一部欠	40.9	SK03	3	3	
4	根ばさみ	鹿角	半欠	36.5	P72	4	4	
5	骨角製鋸	鹿角	半欠	51.1	SK15	5	5	根ばさみの再加工品か
6	刺突具	シカ中手/中足骨	一部欠	45.0	带状貝層	6	6	先端・基部逆かもしれない
7	刺突具	鹿角	先端?欠	45.6	G4	7	7	先端・基部逆かもしれない
8	刺突具	シカ中手/中足骨?	破片(先端?)	30.6	SK01C	8	8	
9	刺突具	鹿角	破片(先端)	36.2	G2	9	9	
10	刺突具	鹿角	破片(基部)	32.1	SB03	10	10	
11	刺突具	シカ中手/中足骨	ほぼ完存	52.6	SK01A	11	11	
12	刺突具	シカ中手/中足骨	半欠	54.3	SK40	12	12	
13	刺突具	シカ中手/中足骨	破片(先端)	43.4	G5	13	13	
14	刺突具	シカ中手/中足骨	破片(基部)	36.4	G3	14	14	
15	刺突具	シカ中手/中足骨	破片(基部?)	26.6	攪乱		16	
16	刺突具	シカ中手/中足骨	破片(中間部)	44.3	SK33		15	基部に近い部分
17	刺突具	シカ中手/中足骨	半欠	47.8	G3		17	
18	刺突具	エイ尾棘	ほぼ完存	71.2	SK63		16	
19	刺突具	エイ尾棘	半欠	49.4	P193		19	
20	骨角製針	鹿角?	破片(中間部)	33.9	SK40		17	20 焼けて一部黒色化している
21	骨角製針?	鹿角	破片(先端)	12.3	G3		21	
22	ヘラ	シカ中手/中足骨	破片	35.2	SK36		18	22
23	スクレイパー	イノシシ?下顎犬歯左	ほぼ完存	82.6	G4		19	25
24	装身具	鳥骨	半欠	30.7	SK01A		20	26 鳥骨製玉
25	装身具	サメ類椎骨	完存	17.4	SB02		21	27
26	装身具	鹿角	一部欠	54.0	SK40		22	28 鹿角製腰飾
27	刀子の柄	鹿角	一部欠	96.3	住居址覆土		23	30
28	不明	シカ中手/中足骨	破片	39.3	G5		24	錐の柄部破片か?
29	不明	鹿角	破片	23.7	G2		23	
30	不明	イタボガキ殻	完存	91.2	SK37		29	

表3 骨角器・貝製品属性表



第51図 骨角器・貝製品

- 1～4. 根ばさみ 5. 骨角製鏃 6～16. 刺突貝 17. 骨角製針 18. ヘラ 19. スクレイパー
 20～22. 装身具 23. 刀子の柄

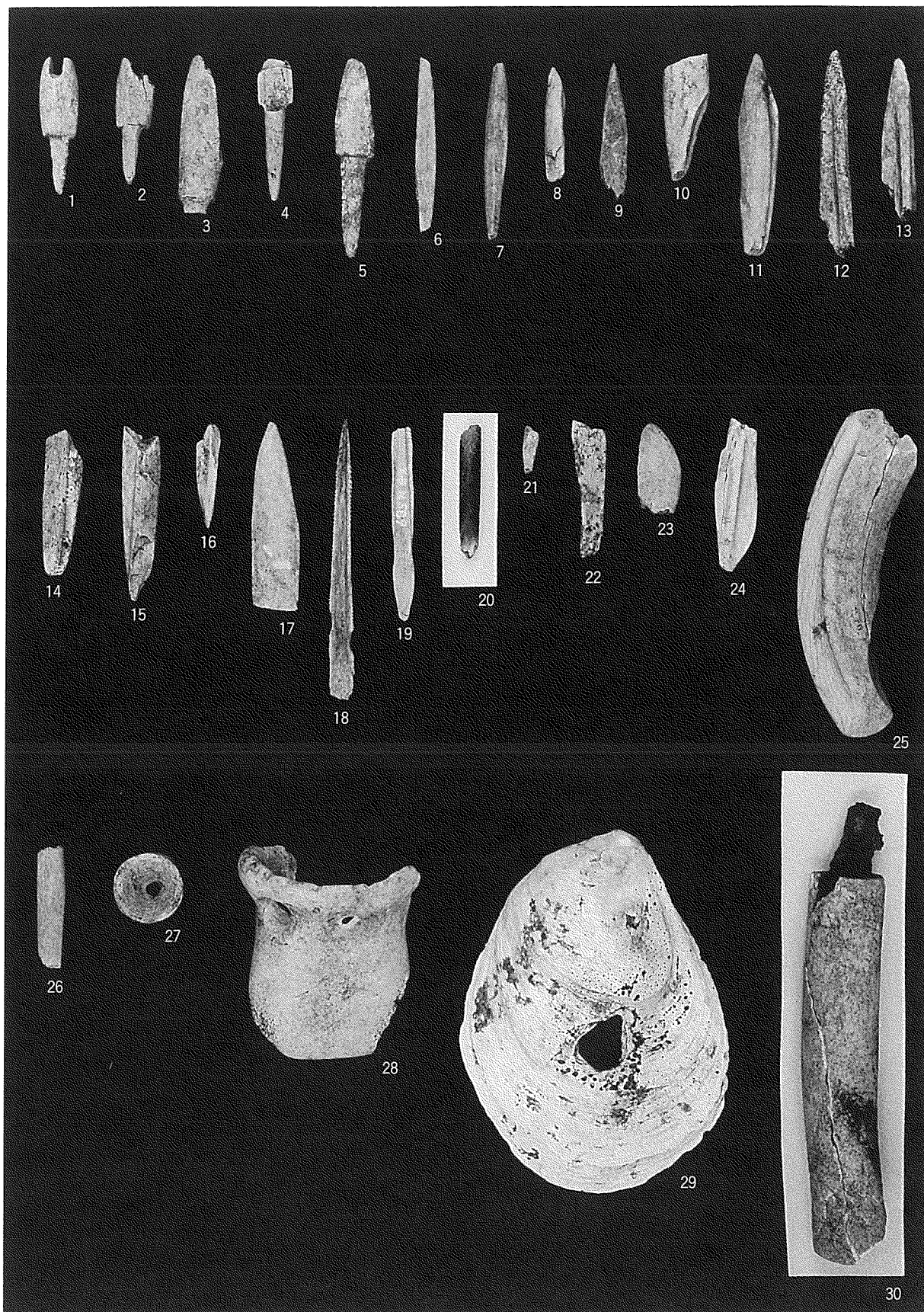


写真79 骨角器・貝製品 (約2/3)

- 1～4. 根ばさみ 5. 骨角製鎌 6～19. 刺突具 20・21. 骨角製針 22. ヘラ 23・24・29. 器種不明
 25. スクレイパー 26～28. 装身具 30. 刀子の柄

(2) 弥生時代～古墳時代

弥生時代から古墳時代の遺構は、確実なものはないが、遺物が少量出土している。弥生時代の遺物は、弥生土器がある(第56図1～5)。1(写真91-1)は、壺口縁部から頸部の破片で、復元口径25.2cmを測る。外面は橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。口唇部に黒斑がある。焼成は良好である。口縁部は外反し、口唇部はヨコナテ調整され面取りされ上端と下端に刻み目が入られる。頸部外面及び口縁部内面にハケ目調整されている。時期は中期貝田町式期と考えられる。G4混貝土層上面出土。2は、口唇部小片で、外面に刻み目を入れる。SK48西側付近包含層出土。3(写真92)は、高坏口縁部の小片である。にぶい橙色を呈する。外面に波状文を呈する。時期は後期山中式と考えられる。SD03出土。4は、高坏脚部片である。G4包含層出土。5は高坏の脚部片である。にぶい黄橙色を呈する。SK48の上位包含層出土。写真91-2、3は、壺頸部片である。2は2本の沈線の間列点文が入る。SK41出土。3は直線文の間に竹管文が入る。G4混貝土層上面出土。

古墳時代の遺物は、土師器、埴輪がある。6は、壺口縁部片で復元口径21.4cmを測る。外面黄橙色、内面灰黄色を呈する。頸部は粗いハケ目調整が残る。G4包含層出土。7は甕口縁部片でS字状口縁D類である。G7・SB03床近く出土。8は土師器甕の口縁部である。口唇部は肥厚し外反する。G8・P281出土。9、10は高坏脚部片である。時期は5世紀前半頃と考えられる。9はSK49出土。10はSK49の上位出土。11、12(写真93-1、2)は円筒埴輪片である。青灰色を呈し、堅緻な焼成である。内外面ヨコナテ調整



写真80 SB06

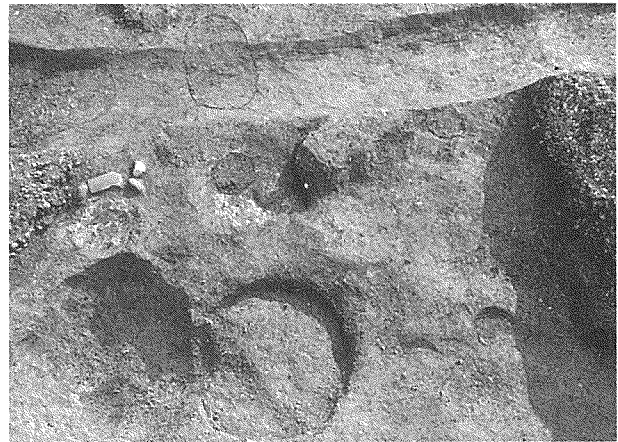


写真81 SB07

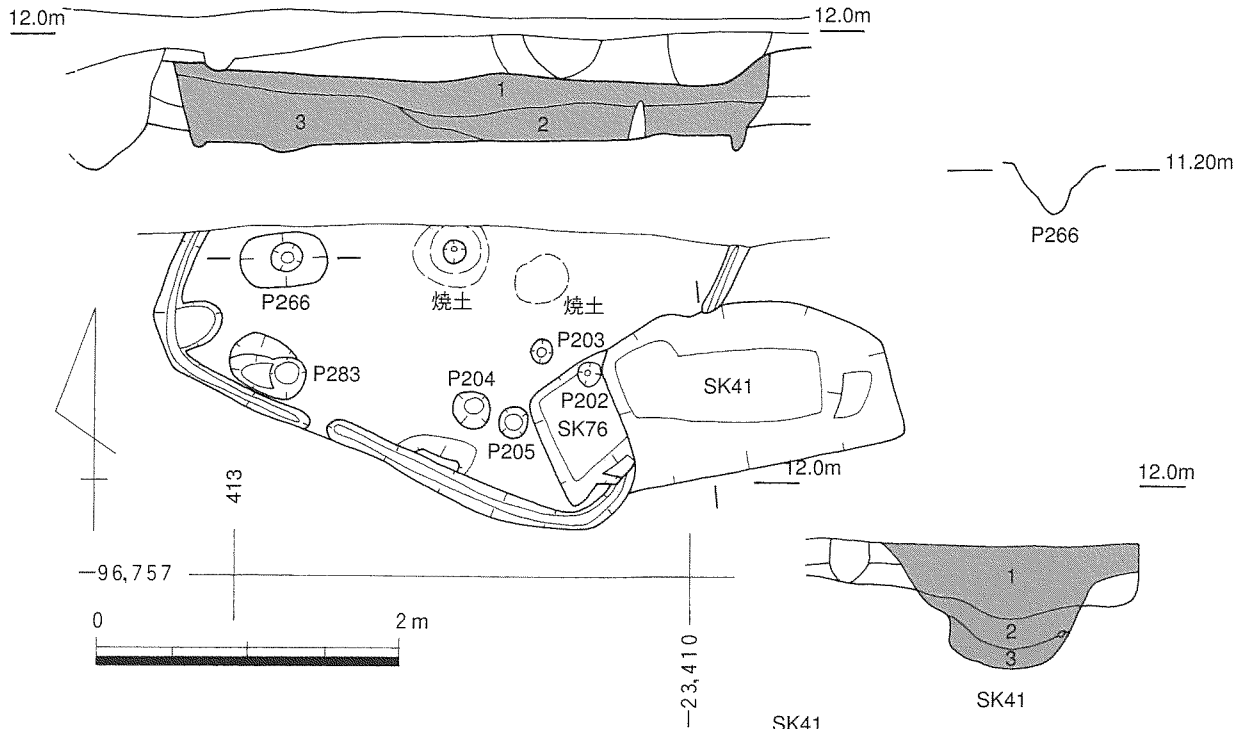


写真82 SB07 竈 東から



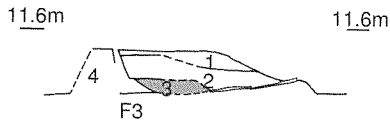
写真83 SB07 竈 (南から)

- 1 褐色土 やや赤味がかかる 地山ブロックをごく少量含む 炭化物、焼土粒をごく少量含む
- 2 褐色土 やや黒味がかかる 地山ブロックをごく少量含む 炭化物、焼土粒を少量含む
- 3 褐色土 2層に近似する 地山土が多く含まれる

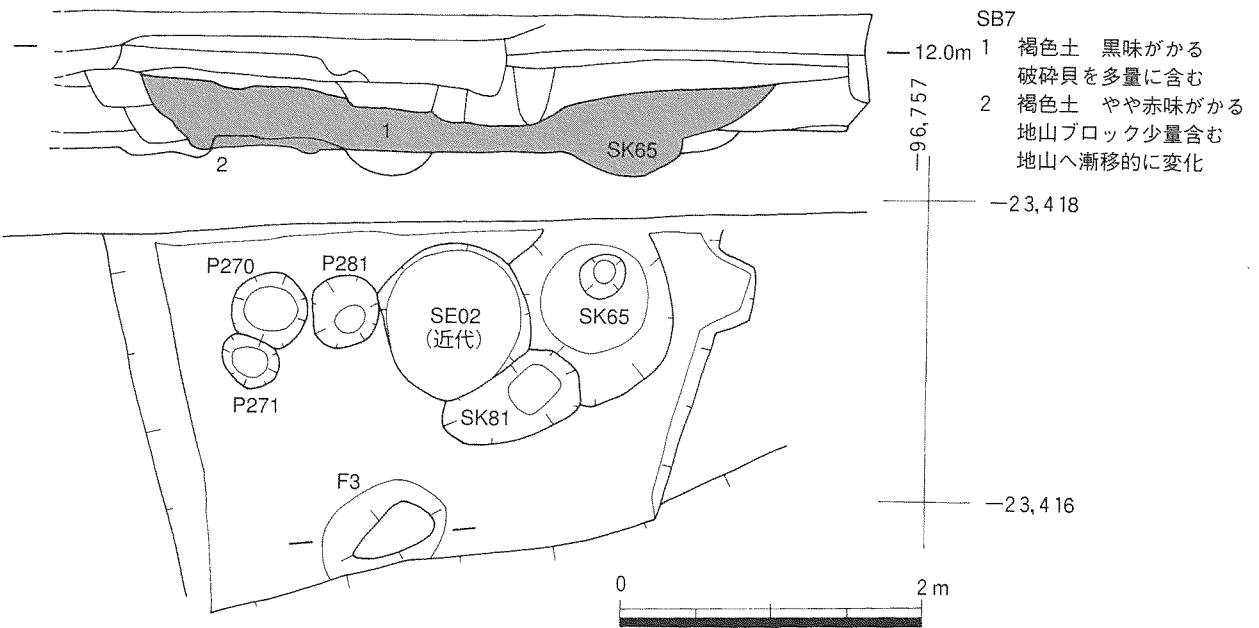


第52図 SB06 (S=1/50)

- SK41
- 1 褐色土 炭化物を少量含む 土器片多く含む
 - 2 褐色土 やや黒味強い
 - 3 褐色土 黒味が強い 地山ブロック少量含む



- 炉
- 1 暗灰色土 焼土(密)と細かな貝と炭化物を少し含む
 - 2 淡褐色土 暗灰色土ブロックと淡褐色土ブロックの混土
 - 3 橙褐色土 被熱を受けた土
 - 4 暗灰色土 橙色土ブロックと貝を含む



第53図 SB07

を施しているが、ハケ調整の痕跡がなくヨコナデ調整のみの可能性が高い。凸帯は、上端が上方へつまみ上げられている。1はG2・P103の上位層出土。2はG2・P88上位層出土。

(3) 古代

古代の遺構と遺物は、縄文時代に次いで多いと思われる。遺構としては、SB01・SB03・SB04、SB06、SB07、SB08、SK18、SK28、SK41、SK42、SK49、SK65、SK67、SK73、SD07・SD04、P271、P281、P303などが該当すると思われる。

住居状遺構 (SB01・SB03・SB04) G7で検出した。地表面から約50cm下で遺物が多く出土したため、遺構検出をしたところ、破砕貝を比較的多く含む褐色土層面 (SB03)、黒味の強い褐色土面 (SB01)、赤みの強い貝をわずかに含む面 (SB04) を検出した。層厚は約10cmである。柱穴や焼土面・竈等は明らかでなく、平地式住居の可能性はあるが、積極的な根拠は薄い。また、SB03の北辺は、地山面ではSD04の肩に一致する。SB03から鹿角製柄付刀子 (第58図91、第51図23、写真79-30) が出土した。把手部は直径約1.9cmを測り、長さ約8cm残存する。刃部は残存長5.0cm、幅約0.9cm、厚さ約0.2cmを測る。約3.2cm分が柄に差し込まれている。

6号住居 (SB06) G6で検出した。北壁にかかるため、全形は明らかでないが、東西約3.3m、南北2.2m以上を測る。検出面から床面までの深さは、10cm弱であるが、北壁土層断面図から約50cmであったことが判る。埋土は、大きく2層に分層されるが、上位層はやや赤味がかかる褐色土、下位層はやや黒味がかかる褐色土である。幅10~20cmの周溝が巡る。北壁寄り床面で焼土面2か所を検出した。主柱穴の一つとしてP266が考えられる。直径約35×55cm、深さ約20cmを測る。遺物は須恵器、土師器の小片が出土した。

7号住居 (SB07) G8で検出した (第53図 写真81~83)。G8では純貝層が2か所に見られ、その間に破砕貝層が堆積していた。この破砕貝層を掘削したところ、地山面で焼土面を検出したため、純貝層を掘り込んで造られた住居跡であることが明らかとなった。西側は調査区外に続き、東側はSD03に壊されているため、平面プランは明らかにできないが、南北約3.8mを測る。深さは約40cmを測る。焼土は、SD03に一部を壊されながらも約50×80cm、高さ約10cmの規模で高まりが検出された。竈の一部と考えられる。床面ではP281、P271、P270、SK65、SK81から灰釉陶器、土師器片などが出土した。SK65出土の灰釉陶器皿 (第58図76) は、9世紀末~10世紀初頭であることから、時期は平安時代と考えられる。

8号住居 (SB08) G2で検出した。地表下約12cmで層厚約8cmの破砕貝層を検出した。サブトレンチを入れ土層断面を観察したところ、掘り込みを確認したことから、破砕貝層は住居跡の埋土であることが明らかとなった。規模は推定で約3.0m四方である。G2では表土及び包含層掘削中、古代の須恵器が比較的多く出土したことから、これらの多くは住居埋土に伴う可能性が高い。土壙墓11 (SK27) の埋葬人骨は、この住居構築時に削平を受けたものと思われる。

SK03 G2破砕貝層面で検出した。地山面以下に到達していない。出土遺物は、縄文土器、骨鏃、埴輪 (11・12)、須恵器、土師器が出土した。土師器甕 (第57図49) は、口縁部は短く外反する。内外面は粗いハケ調整が施される。

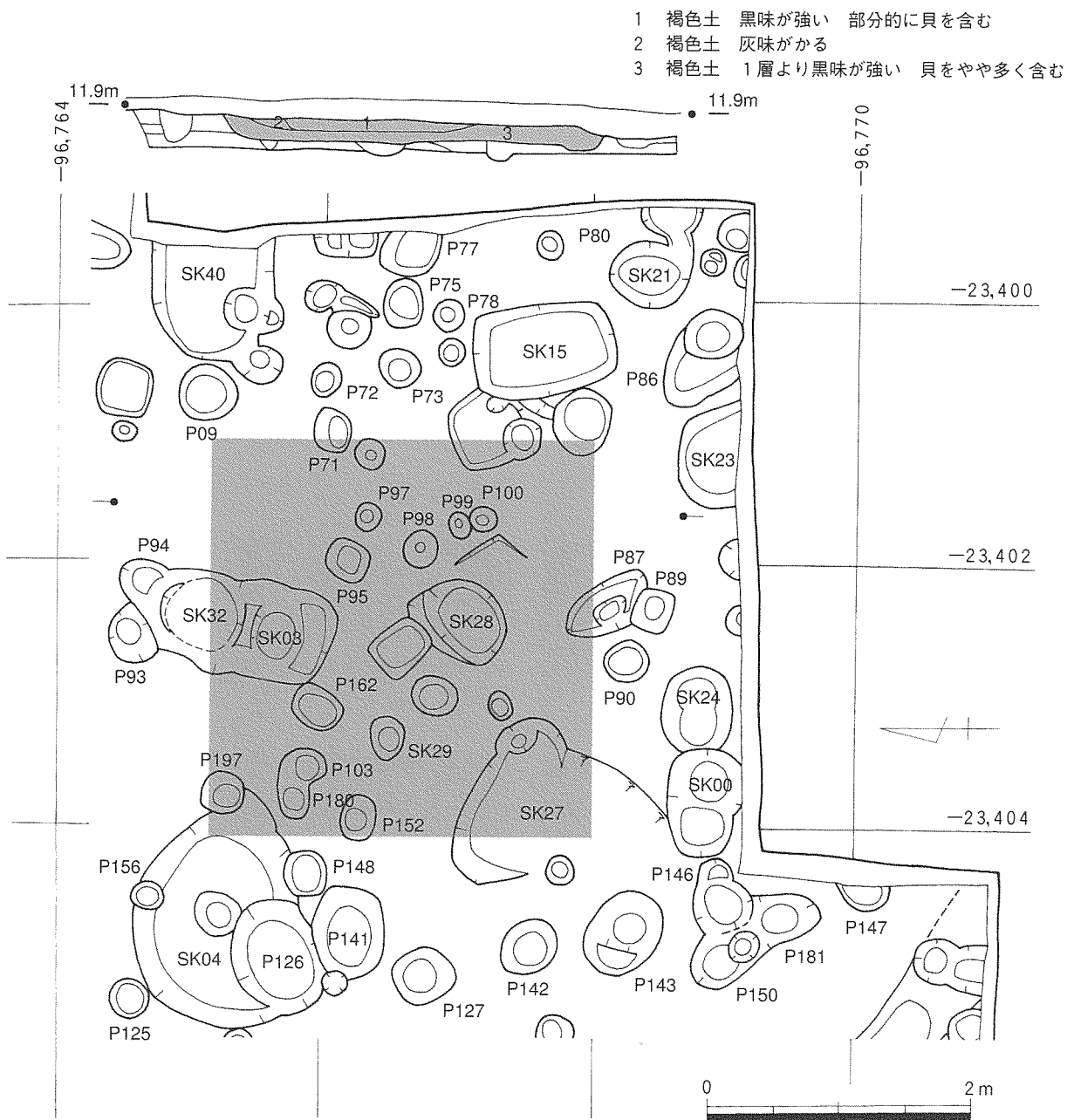
SK04及び北側 G2破砕貝層面で検出した。地山面での規模は、東西約1.6m、南北約1.3mを測る。深さは地山面から約15cmである。出土遺物は、須恵器、土師器がある。須恵器は長頸壺 (第57図52)、鉢 (53)、

坏(54)、碗(55、56)がある。52は灰色を呈するが、外面に自然釉が厚くかかる。復元口径10.4cmを測る。54は底部は回転ヘラケズリ調整が施される。55は、復元口径12.2cm、器高4.0cmを測る。底部は回転糸切り未調整である。56は復元口径12.0cm、器高4.3~4.5cmを測る。底部は回転糸切り未調整である。

SK18 G1で検出した。南北約0.9m×東西約55cm、深さ約16cmを測る。出土遺物は、須恵器、土師器、灰釉陶器がある。

SK28 G2で検出した。規模は、約0.7×0.5m、深さは地山面から約25cmを測る。出土遺物は、須恵器、土師器、土錘がある。須恵器坏(第57図45 写真96-2)は、復元口径11.6cm、底径5.1cm、器高3.8cmを測る。底部は回転糸切り未調整である。時期は9世紀前半と思われる。土錘(第58図88)は、一部欠損し、外面に傷が多数ついている。長さ約4.6cm、直径1.8cm、孔径0.4cmを測る。重量18.8gを量る。

SK41 G3・G5で検出した。平面プランは長方形を呈している。規模は、東西約1.9m、南北約1.1m、



第54図 SB08

地山面からの深さ約0.5mを測る。土層断面図で検討するとほぼ地表面から掘り込まれており、深さ約0.8mを測る。出土遺物は、弥生土器（写真91-2）、須恵器、土師器が出土した。土師器は、蓋？（58）、甕（61、62、63）が出土した。58は外面にヘラミガキまたはハケ調整の痕跡が残る。内面には板ナデ調整痕が残る。61（写真99-3）は口縁部の破片である。内面に粗いヨコハケ調整が施される。62は口縁部が緩やかに外反する。口縁部外面はナデ調整、体部は粗いハケ調整が施される。口縁部内面はヨコハケ調整、体部内面は板ナデ調整が施される。63（写真99-2）は底部片で外面粗いハケ目調整が施される。58、61、63は弥生土器の可能性もある。須恵器は、坏（59）、坏身または盤の高台部片（60 写真99-1）が出土した。59は、内外面にヨコナデ調整が施される。60は復元高台径18.7cmを測る。高台部は回転ヘラケズリ調整が施される。

SK42 G3で検出した。長方形プランで、規模は約1.25m×約0.8m、深さは地山面から約0.22mを測る。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK49 G7で検出した。規模は1.4m×0.5m、深さは地山面から約0.25mを測る。出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器がある。

SK65 G8・SB7床面で検出した。直径約1.0

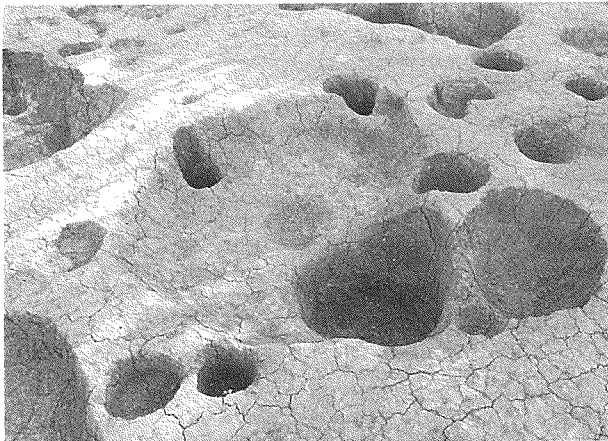


写真84 SK04

写真85 SD07 (SD04)・SK49 (東から)



写真86 SB01・SB03 (東から)

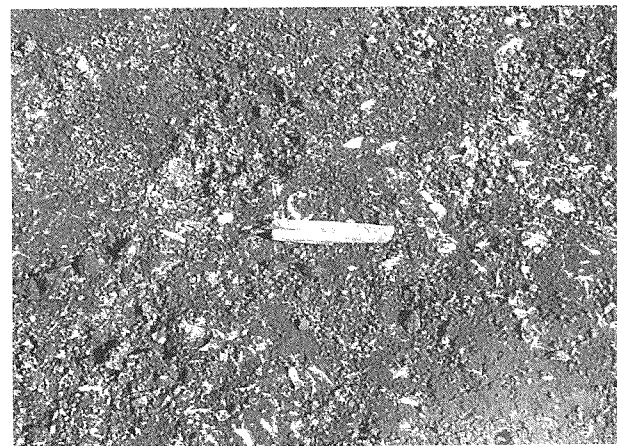


写真87 SB03 刀子出土状況

m、深さ約0.44mを測る。断面形はすり鉢状を呈する。調査区西壁土層図で検討すると、SB7埋土との切り合い関係は不明であったことから、SB7に伴うか同時期のものである。出土遺物には土師器、灰釉陶器(第58図76)がある。76は皿で、時期は9世紀末～10世紀初頭と思われる。

SK67 G6で検出した。SB06と重複するが前後関係は不明である。規模は、約1.3×0.6m、深さは地山面から約10cmである。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK73 G7で検出した。約0.75×0.45mを測る。深さは5cm程度である。出土遺物は土師器がある。

SD04・SD07 G7で検出した。SD03をはさんで東西に位置するため、本来は1条の溝状遺構であったと思われる。長さ約5.0m、幅0.5～0.8mを測る。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、土錘(第89)がある。89は長さ5.0cm、最大径1.6cm、孔径2.5～3.0mmを測る。重量13.4gを量る。

SD05 G7・縄文時代の包含層面で検出した。幅は0.2m程度で東西方向に走り、SD03で途切れていた。出土遺物は縄文土器、須恵器、土師器、骨、魚の歯が出土した。須恵器甕(第57図47)は、復元口径15.6cmを測る。端部は丸く仕上げられている。焼成は甘く、灰白～灰黄色を呈する。時期は8世紀前半と思われる。

P12 G2破砕貝層面で検出した。須恵器、土師器、灰釉陶器が出土した。須恵器には盤(第84図44)、灰釉陶器には瓶(77)がある。77は外面に灰釉が厚く垂れている。原始灰釉と称されるものである。

P13 G2破砕貝層面で検出した。出土遺物には土師器甕(第57図50)がある。

P168 G7・SK49の東端で検出した。不整形で0.3×0.3程度、深さは地山面から約8cmである。出土遺物は須恵器、土師器がある。須恵器坏(第57図48 写真104)は復元口径12.7cm、底径5.7cm、器高4.4cmを測る。口縁部端部は外反する。底面は回転糸切り未調整である。時期は8世紀前半～中葉と思われる。

P270 G8・SB7で検出した。直径約0.5m、地山面からの深さ約22cmを測る。出土遺物は須恵器、土師器がある。須恵器坏(66、67)は内外面ヨコナデ調整が施される。土師器は甕(64 写真101、65)64は口縁部が外反し、端部は面をもちながらもやや丸みをもつ。外面は粗いハケ目調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、頸部から体部内面は板ナデ調整により滑らかに仕上げられる。65は口縁部はく字状に外反する。端部は面取りされる。口縁部外面はヨコナデ調整、体部は粗いハケ調整、口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面は板ナデ調整が施される。

P271 G8・SB7で検出した。直径約0.4×0.3m、地山面からの深さ約20cmを測る。出土遺物は土師器、灰釉陶器段皿がある。

P281 G8・SB7で検出した。0.45×0.5m、地山面からの深さ約39cmを測る。出土遺物は土師器がある。

P303 G6で検出した。0.45×0.3m、地山面からの深さ約35cmを測る。出土遺物は須恵器(灰釉陶器か)、土師器がある。

表土・包含層 須恵器は、坏蓋、坏身、盤、高盤、鉢、手付長頸瓶、こね鉢、硯など(第56図13～26・28・29・第57図30～38・43・57・第58図68～72)がある。13～18は、坏蓋で宝珠鈕がある(17は欠損)。13(写真94-1)はほぼ完形品で口縁径15.1cm、器高3.4cmを測る。14(写真94-3)は口縁径14.2cm、器高3.3cmを測る。15(写真94-2)は口径13.5cm、器高3.5cmを測る。13、14、17は表土掘削中に出土した。15はG4出土。16はG3出土。時期は9世紀前半と思われる。17は復元口縁径18.0cm、18(写真95)は復元口

縁径15.0～15.5cmを測る。20、24は高台付坏身である。20はG 2 出土。時期は8世紀前半。19、23、25は碗で、19（写真98—2）は焼成前に底面に透かし状に十字の切れ込みが内側から外側に向かって入れられている。表土出土。23は復元口径12.8cmを測る。25は、復元口径17.1cmを測る。やや大型のものである。

21、22は盤である。21（写真98—1）は復元口径13.6cm、高台径8.1cm、器高2.8cmを測る。22は復元口径19.8cm、復元高台径8.6cm、器高3.3cmを測る。端部は鋭く外反する。26（写真98—3）は高盤の脚部片である。27は短頸壺である。8世紀後半～9世紀頃と思われる。28、29は鉢である。30～32は坏蓋、33（写真96—1）、35、37は碗、34は盤、36は硯、38は甕口縁部である。36は円面硯の脚部である。時期は甕が8世紀前半代、坏蓋、硯などが9世紀代と思われる。30～38はG 4 混貝土層出土。57（写真102）は手付長頸瓶で、口頸部を欠損しているが3段構成で接合していたと思われる。把手は肩部に1か所つく。時期は9世紀と思われる。53はこね鉢で、口縁部端部は外方へつまみ上げる。底面は回転糸切り後、ナデ調整が施される。復元口径15.0cmを測る。69（写真97—1）は復元口径12.8cm、底径5.3cm、器高4.8cmを測る。体部は平滑ではなく波打っている。底面は回転糸切り未調整である。70（写真97—3）は完形で口径12.2cm、器高3.8cmを測る。底面は回転糸切り未調整である。71（写真100）は硯脚端部で長方形透かしとその間は縦線が装飾として入る。G 3・4 間ベルト1層出土。72（写真97—2）は高盤の受部である。須恵器高台付坏（第57図46）は、土壙墓7（SK44）出土。



写真88 土錘（左からSK28、SD04、SD03出土）

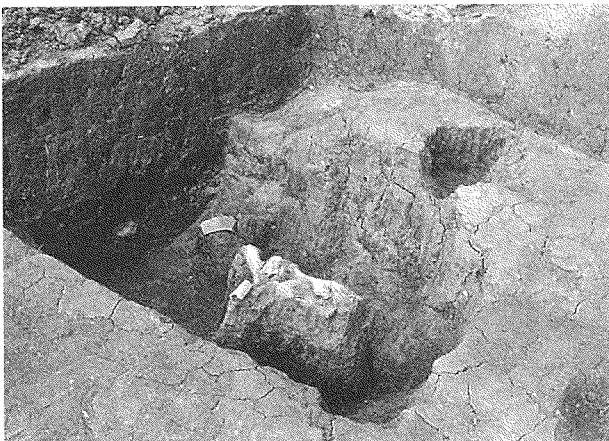


写真89 SK41



写真90 SD03

土師器は甕（第57図39～42・51）の口縁部片などがある。40は口縁端が短く外反する。内外面は粗いハケ調整が施される。41は口縁端部に刻み目が施される。51は口縁部内外面はナデ調整が施される。小片である。42は底部片で外面ハケ調整が施される。底面はナデ調整と思われる。

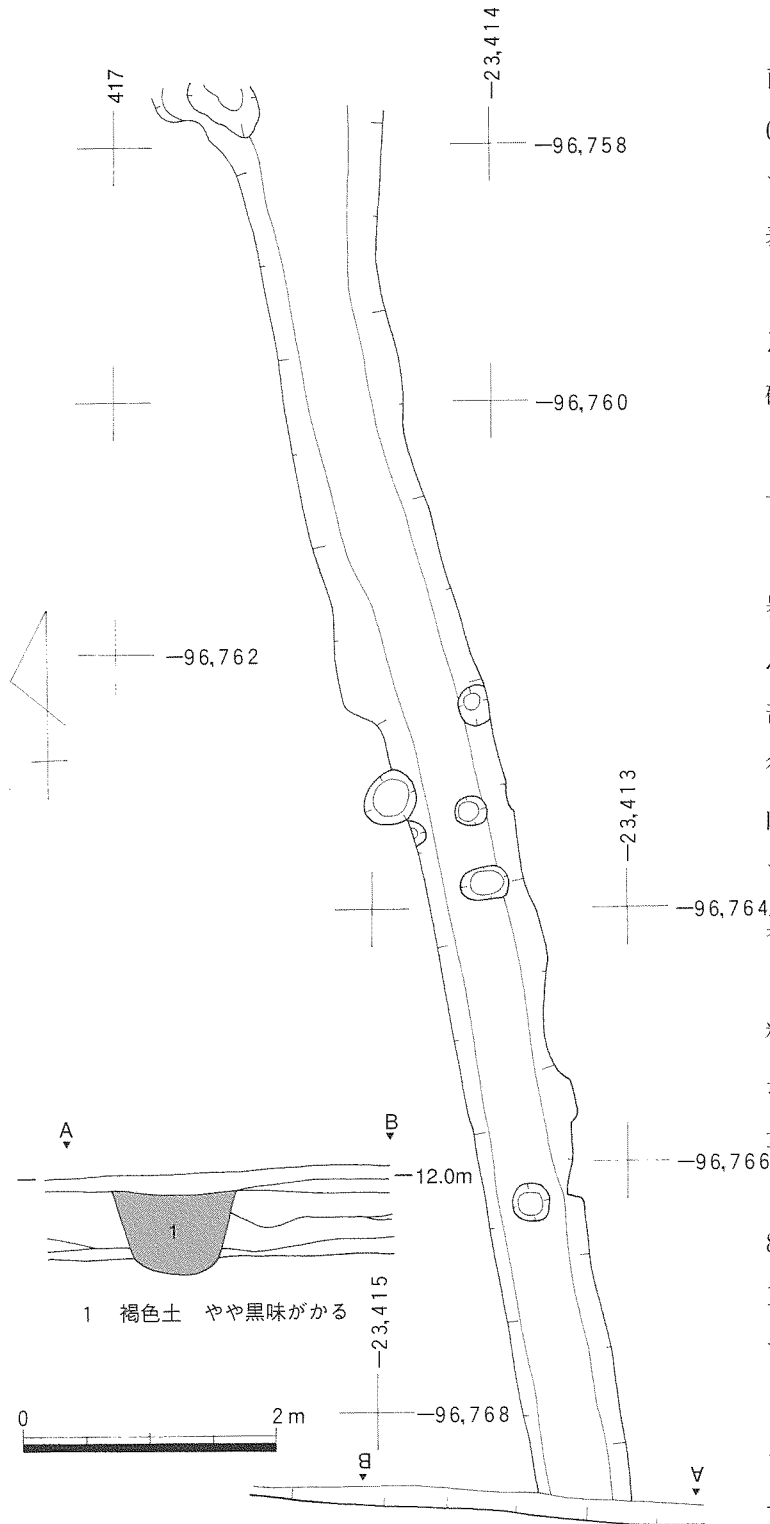
灰釉陶器は碗（第58図73～75）、短頸壺（第56図27）がある。

(4) 中世

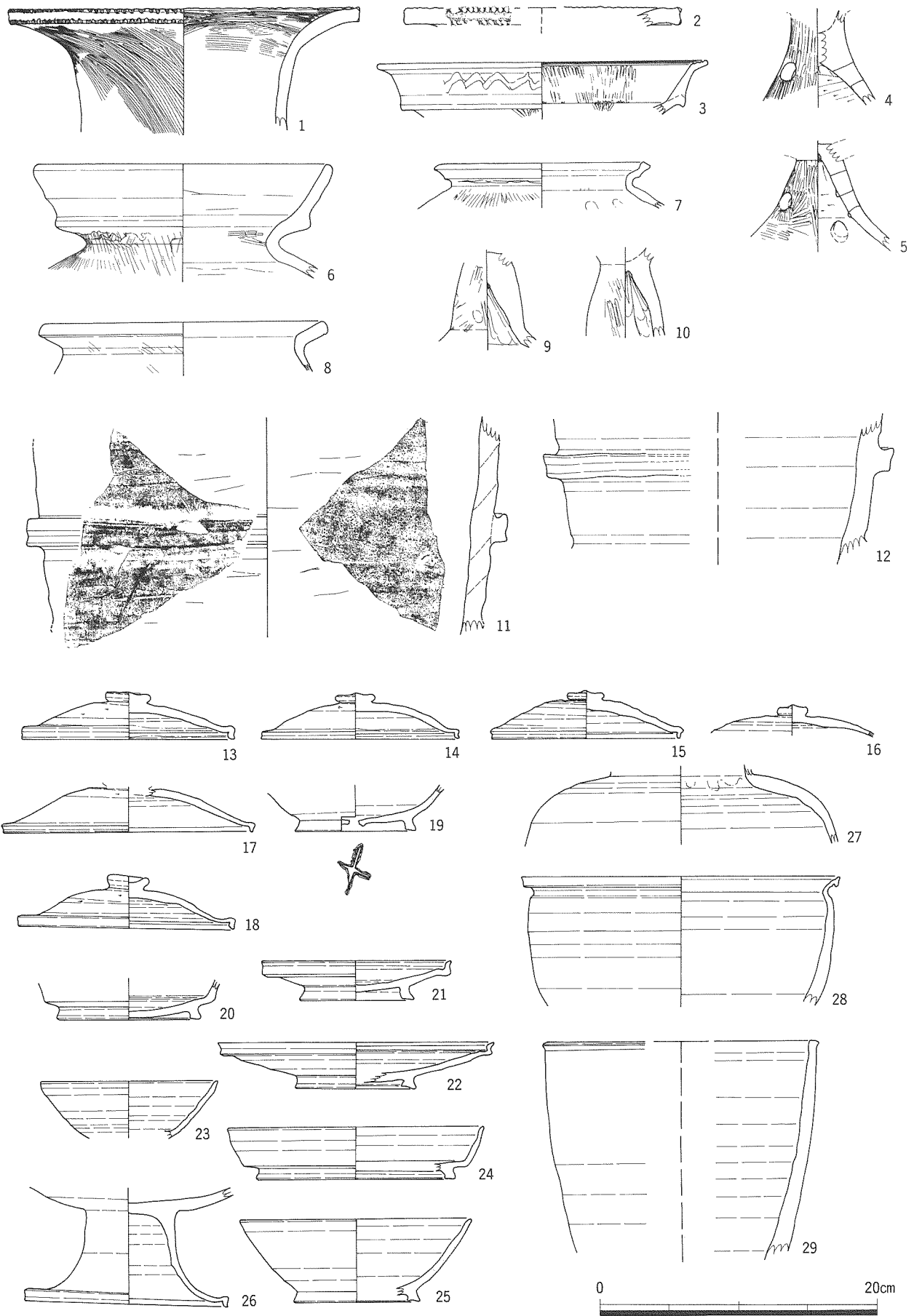
SD03 G 6・G 7で検出した。調査区を南北に走る。検出長は約111.0m、上幅約1.0m、底面幅約0.5mを測る。断面形は箱型である。調査区南壁土層断面で検討すると、表土層下から掘り込んでいる。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、中世陶器などがある。白磁碗片（78）は中国華南産で、見込みは釉はぎされている。時期は大宰府編年VIII類、12世紀と思われる。山茶碗・碗（79～82）のうち82（写真105—1）は復元口径15.8cm、器高4.0cmを測る。時期は斎藤編年7期IIIと思われる。小皿（83 写真105—3）は口縁部が一部欠損するほかは残存している。口径9.0cm、底径4.6cm、器高2.3cmを測る。土師器甕（84）は小片で、内外面とも摩滅しており器面調整は不明である。瓶（85 写真107）は古瀬戸瓶類で舟徳利型のものである。なで肩部に張花が付く。張花は2本の粘土紐を撚り、付けられる。土錘（90）は、長さ4.0cm、幅0.8cmを測る。重量は2.3gを量る。器壁はよく磨かれ滑らかである。

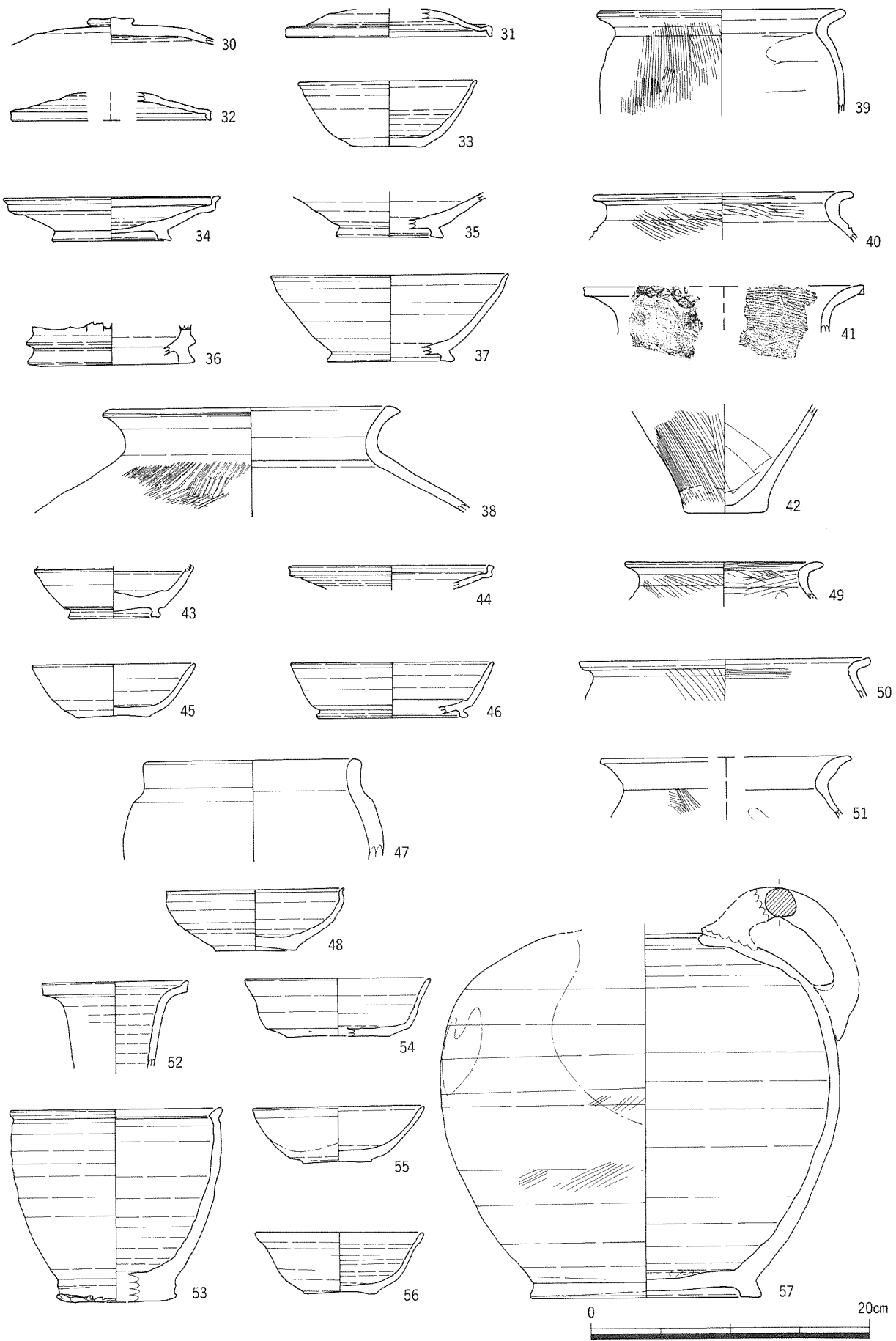
表土・包含層 中世陶器は、鉢（第58図86 写真106—1、2）、片口鉢（87 写真106—3）が出土した。86は碗で底部を欠損する。口縁部は短く外反する。片口碗になると思われる。87は外面灰褐色、内面濃灰～黒色を呈する。指押さえにより口縁部の一部が外面に曲げられ片口部を作る。



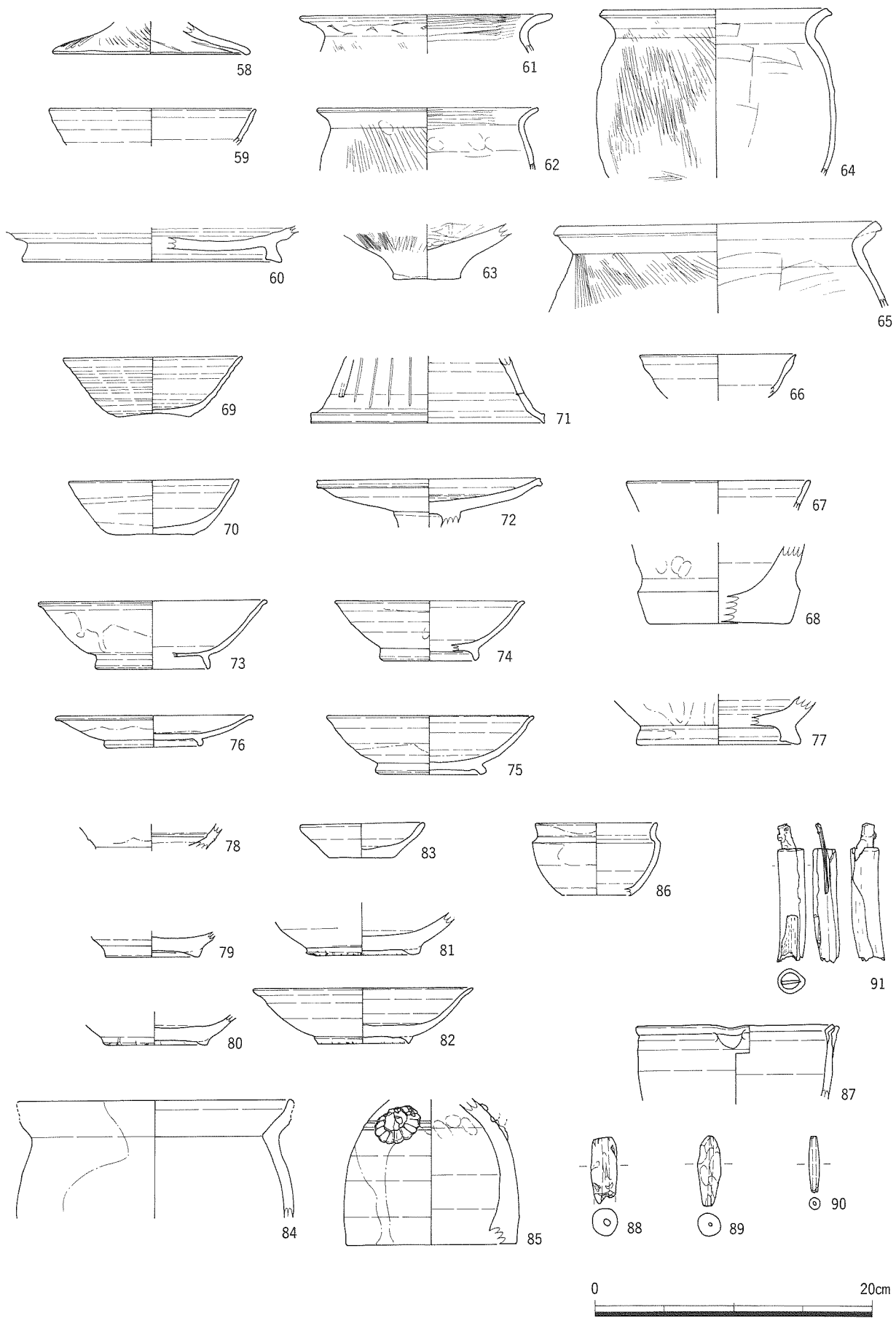
第55図 SD03



第56図 遺物実測図 (S=1/4)



第57図 遺物実測図 (S=1/4)



第58図 遺物実測図 (S=1/4)

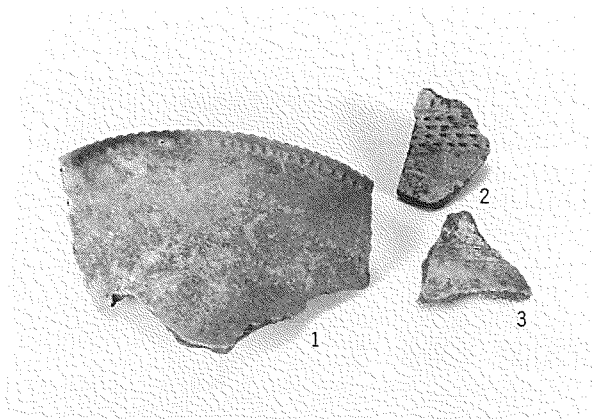


写真91 弥生土器



写真92 弥生土器

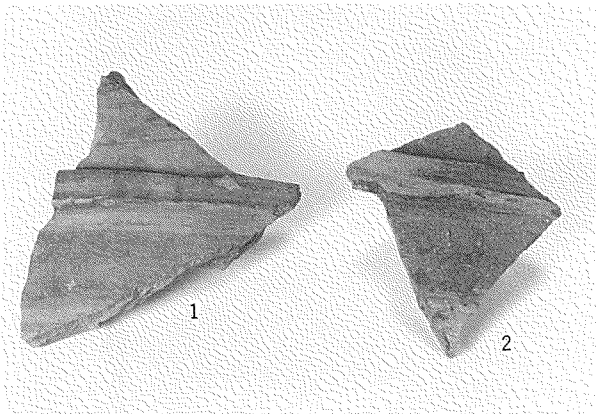


写真93 円筒埴輪

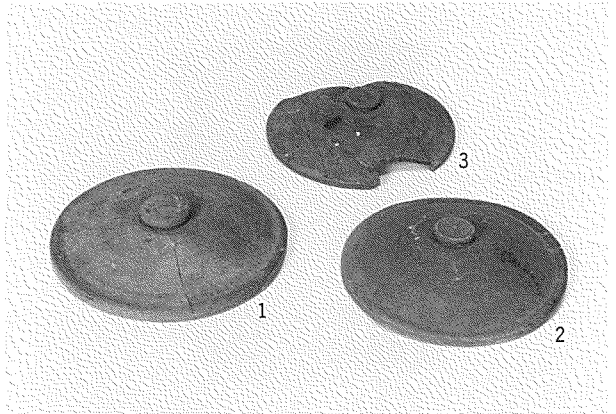


写真94 須恵器 坏蓋



写真95 須恵器 坏蓋

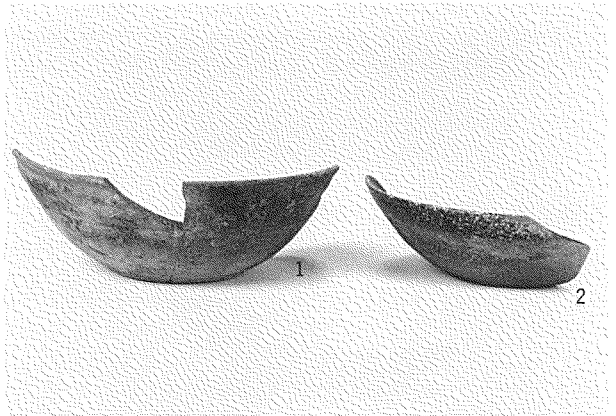


写真96 須恵器 坏身

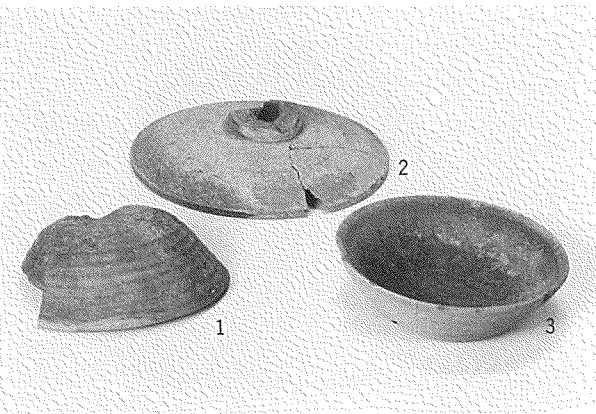


写真97 須恵器

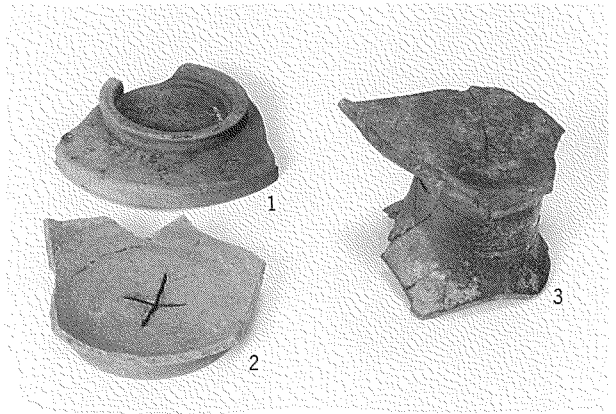


写真98 須恵器

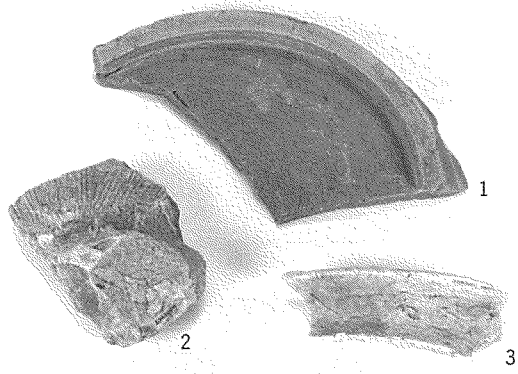


写真99 須恵器・土師器

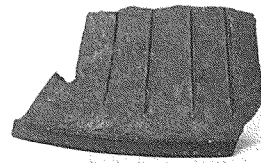


写真100 須恵器 碗



写真101 土師器 甕



写真102 須恵器 把手付瓶

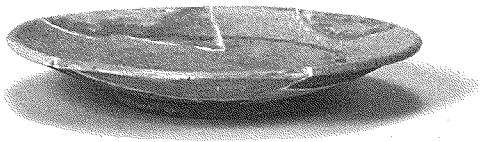


写真103 灰釉陶器 段皿

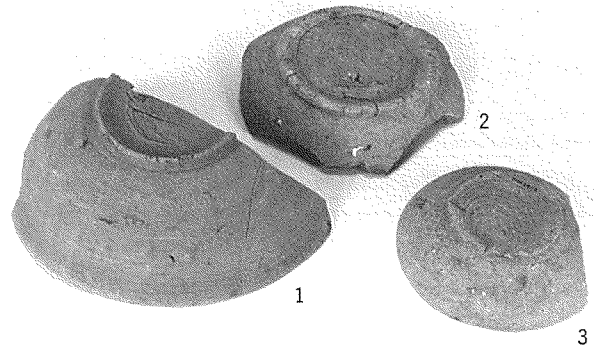


写真105 中世陶器 山茶碗 碗

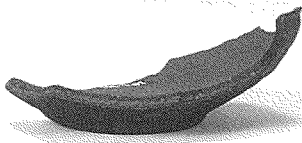


写真104 中世陶器 坏

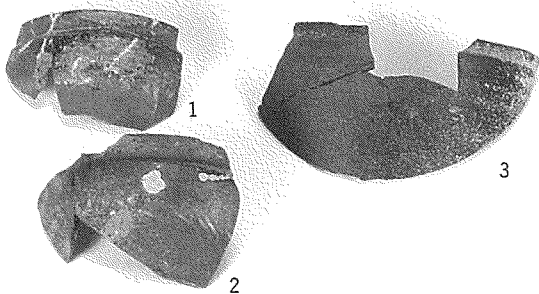


写真106 中世陶器

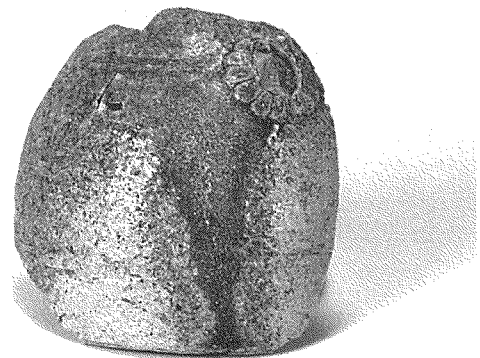


写真107 中世陶器 古瀬戸 瓶

玉ノ井遺跡 (第4次)



第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

玉ノ井遺跡第4次調査は、熱田区玉の井町内において平成14年4月22日から5月31日にかけて個人住宅の建て替えに伴って調査を実施した。4月23日より表土除去を開始し、包含層を順次掘り進めてゆく。包含層の上面において古代末中世の遺構が検出され、掘り下げと遺構の確認、掘削を平行して作業を進めた。中世土壙墓群の掘り込みの底面がそのまま住居址の覆土となっており、中世墓の調査終了後に住居址の覆土の掘り下げを進める。結果的に今回の調査面積の9割以上が住居址覆土であった。5月27日までに掘削に関わる作業を終え、遺構の実測、写真撮影を行い、5月29日までに調査を終了した。30日に埋め戻しを行い、31日までに機材撤去を終え、調査を完全に終了した。

調査終了後、注記、洗浄、実測等の室内整理作業を見晴台考古資料館において実施した。

第2節 基本層序

玉ノ井遺跡4次調査地点は、3次調査地点から50mほどの距離に位置するが、縄文時代の遺物の出土量は少なく、また貝層も認められず、破碎貝の混入もなかった。住居址の重複が激しく、調査区のほぼすべてが住居址という状況であった。そのため基本層序の把握は困難である。しかしながら、攪乱等は非常に少なく、住居址覆土も含めた包含層の残りも良好であった。住居址は弥生時代から平安時代に構築されたものがほとんどで、床面に高低差はあるものの、ほとんどの住居址が地山の熱田層に掘り込んで構築されている。平安時代以降の遺構は先述のよう住居址の覆土上面で検出できるものもあるが、検出作業時においても、調査区の壁面精査時においても掘り込み面の差としては検出不可能であった。

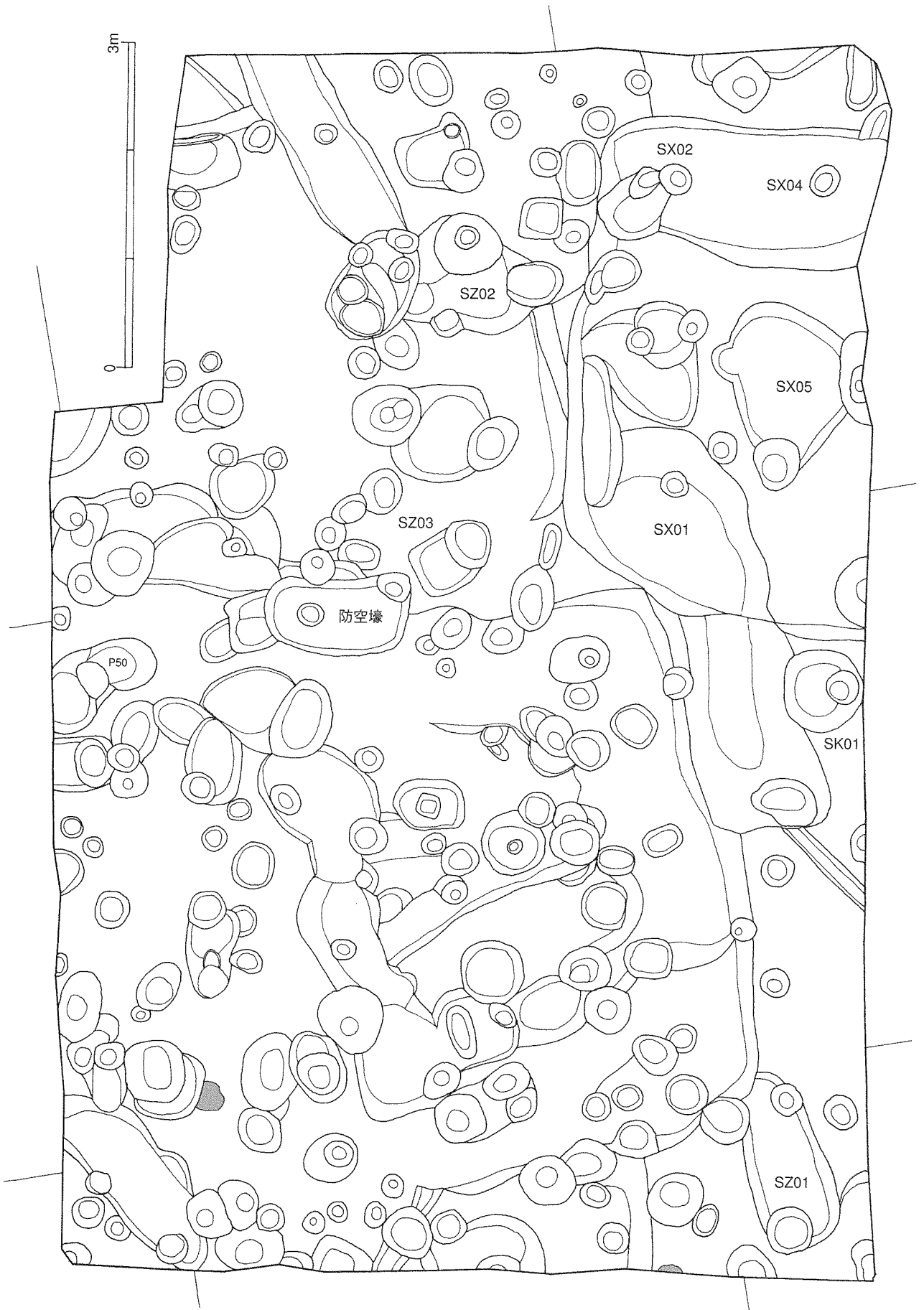
正確な基本層序は把握できないが、表土以下の土層は大きく二つに分かれる。上面は明るくやや砂質がかった土質で、下面は黒味の強い土層で、粘性が強い。下面の土からは多量の遺物が出土している。下面の土が住居址覆土にあたる上面土層の砂は熱田層由来のものではなく、表土等に認められる、客土由来のものようである。

3次調査地点では、熱田層上面の黒褐色から暗赤褐色の漸移層が残っていたが、4次調査地点では遺存しておらず、包含層の直下から黄褐色の熱田層が広がっていた。縄文時代の遺物もS B01覆土などから少量出土しており、遺構の存在も考えられるが、検出できなかった。熱田層上面の漸移層についても、弥生時代以降の土地利用によって壊されているのであろう。

玉ノ井遺跡においては、調査地点によってその包含層の状況は異なるものの、包含層の遺存状況はおしなべて良好である。



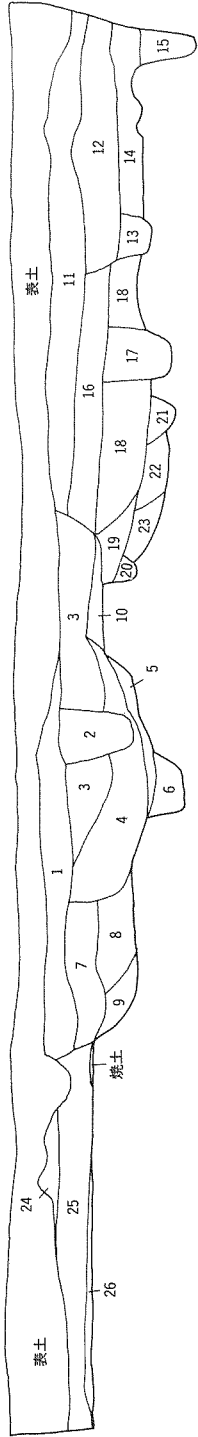
写真1 調査風景



第1図 調査区全体図

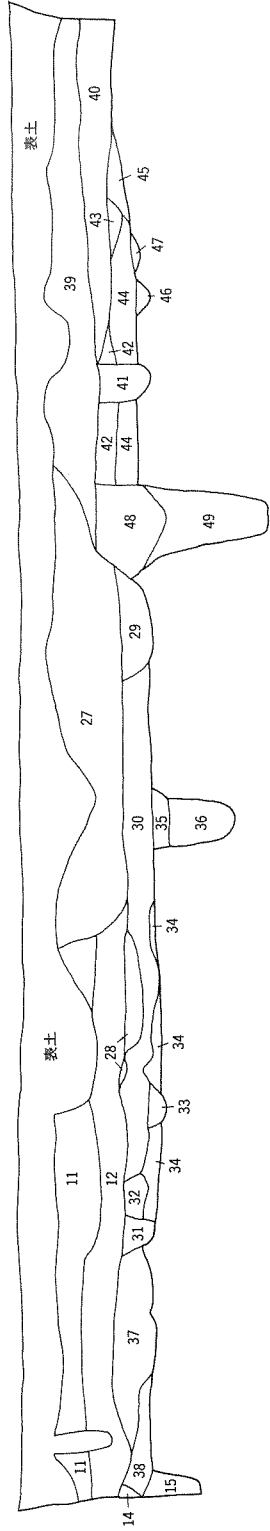
图 2 基本图

南面 10.500



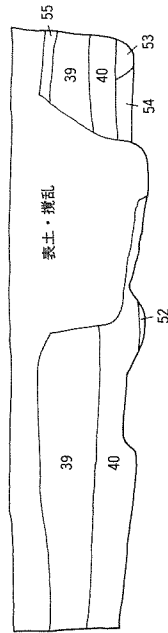
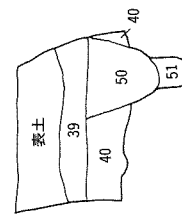
10.500

西面 A

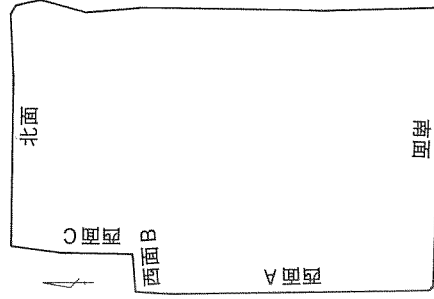
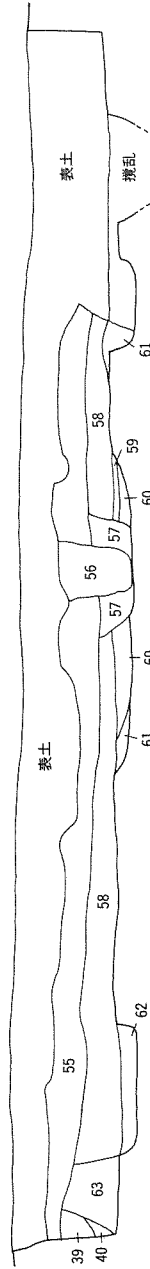


西面 B 10.500

西面 C 10.500



北面 10.500



- 1、褐色土 (やや明るい)：φ 1～2 cm 大の礫を含む。φ 1～2 mm 大の炭化物粒をごくまれに含む。粘性しまりともやややあり。
- 2、褐色土：φ 3～5 cm 大の地山土ブロックを少量含む。φ 2～3 mm 大の炭化物をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 3、褐色土：φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 4、褐色土 (黒味が強い)：φ 1～2 mm 大の炭化物粒をごくまれに含む。φ 5～10 mm 大の地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 5、褐色土 (やや灰色がかかる)：地山土多量に含む貼り土か。粘性しまりともやあり。
- 6、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 1～2 cm 大の地山土を少量含む。粘性ありしまりややあり。
- 7、褐色土 (やや黒味がかかる)：φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 8、褐色土 (やや黒味強い)：φ 2～3 cm 大の地山土ブロックをやや多量に含む。φ 2～3 mm 大の炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 9、褐色土 (やや黄味がかかる)：地山土を多量に含んだ土層。貼り土か。粘性しまりともやあり。
- 10、褐色土 (黒味が強い)：φ 2～3 mm 大の炭化物粒をごくまれに含む。φ 1～2 cm 大の地山土ブロックをごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 11、褐色土：φ 5 mm までの炭化物・焼土粒をごく少量含む。粘性弱く砂質がかりさらさらとした質感。
- 12、褐色土 (やや明るい)：φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 13、褐色土 (黒味が強い)：φ 1～2 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 5～10 mm 大の地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 14、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土を少量含む。粘性しまりともやあり。
- 15、(かなり黒味が強い) φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 5～10 mm 大の地山土を少量含む。粘性しまりともやあり。
- 16、褐色土：φ 5 mm 前後の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 17、褐色土 (やや灰色がかかる)：φ 5 mm 前後の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 1～2 cm 大までの地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 18、褐色土 (やや明るい)：φ 3～4 cm 大を中心に地山土ブロックをやや多量に含む。φ 1 cm 大までの炭化物・焼土粒を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 19、褐色土 (やや灰色がかかる)：φ 5 mm 大までの炭化物粒をごく少量含む。φ 5～10 mm 大の地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 20、褐色土 (やや黒味がかかる)：φ 5～10 mm 大の地山土ブロックをやや多量に含む。φ 2～3 mm 大の焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 21、褐色土 (やや灰色がかかる)：φ 5 mm 前後の炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。下面を中心に地山土を少量含む。
- 22、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 1～2 mm 大の炭化物・焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 23、褐色土 (やや黒味が強い)：地山土が多量に含まれ、全体には黄褐色を呈する。粘性強いがしまりは弱い。
- 24、淡褐色土：砂質土。土層の養生土か。
- 25、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 2～3 mm 大の炭化物粒・焼土粒、φ 1～2 cm 大の地山土ブロックをごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 26、褐色土 (黒味が強い)：25層と似るが、地山土ブロックの混入量が多い土層。粘性しまりともやあり。
- 27、褐色土 (やや明るい)：φ 5～10 mm 大の炭化物・焼土粒をやや多めに含む。砂質がかかるが粘性しまりともやややあり。
- 28、褐色土：30層とよく似るが地山土が多い。30層上面の貼り土か。
- 29、褐色土：30層とよく似るが炭化物の量が多い土層。粘性しまりともやややあり。
- 30、褐色土 (27層よりも暗い)：φ 5 mm 前後までの炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。
- 31、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 3～5 mm 大の炭化物粒を少量含む。φ 2～3 cm 大の地山土ブロックをごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 32、褐色土：(やや灰色が強い)：φ 2～3 mm 大の地山土、炭化物粒を少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土をごくまれに含む。粘性しまりともやややあり。
- 33、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 2～3 cm 大の地山土ブロックをやや多量に含む。粘性しまりともやややあり。
- 34、黄褐色土：地山掘りすぎ
- 35、褐色土 (やや黄味がかり明るい)：φ 5 mm 前後までの炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 36、褐色土 (黒味が強い)：地山土を50%ほど含む土層で全体には黄味がかかる。粘性しまりともやあるものも柔らかい。
- 37、(やや灰色が強い)：φ 2～3 mm 大の地山土、炭化物粒を少量含む。φ 1～2 cm 大の地山土をごくまれに含む。粘性しまりともやややあり。
- 38、黄褐色土：ほぼ地山土であるが、汚れが目立つ土層。
- 39、褐色土 (やや明るい)：φ 5 mm 前後の炭化物粒・焼土粒を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 40、褐色土 (39層よりも暗い)：φ 2～3 mm 大の炭化物・焼土粒を少量含む。φ 2～3 cm 大の地山土ブロックをごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 41、褐色土：φ 1～2 mm 大の炭化物をごくまれに含む。粘性しまりともやややあり。
- 42、褐色土：φ 5 mm までの炭化物・焼土粒をごく少量含む。φ 1 cm までの礫を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 43、黄褐色土：地山土を中心とした貼り床土。
- 44、褐色土 (42層より暗い)：44層上面に貼り土面が確認できる。φ 5 mm 程度の地山土ブロックをごく少量含む。
- 45、黄褐色土：汚れた地山。43層同様に貼り土か。
- 46、褐色土 (やや黒味が強い)：φ 5 mm 前後までの炭化物粒・焼土粒・地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 47、褐色土 (やや灰色がかかる)：φ 2～3 mm 大の炭化物・焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 48、褐色土 (やや灰色がかかる)：φ 5 mm 前後までの炭化物粒・焼土粒をごくまれに含む。φ 3～4 cm 大の地山土をやや多量に含む。粘性しまりともやややあり。
- 49、褐色土 (やや灰色がかかる)：49層に似るが、地山土の大きさが小さく (φ 1～2 cm 大)、炭化物・焼土粒の大きさが大きい土層。
- 50、褐色土 (やや明るい)：φ 1～2 mm 大の炭化物・焼土粒をごく少量含む。φ 5～10 mm 大の地山土をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 51、黄褐色土：地山掘りすぎ
- 52、褐色土：φ 1～2 cm 大の地山土をごくまれに含む。粘性しまりともやあり。
- 53、褐色土 (黒味が強い)：φ 2～3 mm 大の炭化物・焼土粒を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 54、褐色土：地山土の含有が多く黄味がかかる。φ 10 cm 大以上の地山土を多量に含む。φ 2～3 mm 大の焼土・炭化物粒を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 55、褐色土 (やや明るい)：φ 1～2 cm 大の礫を少量含む。φ 5 mm 前後までの炭化物粒・焼土粒をごくまれに含む。砂質がかりさらさらとした質感。粘性しまりとも弱め。
- 56、褐色土：攪乱ビット
- 57、褐色土 (58層よりも黒味が強い)：φ 2～3 mm 大の焼土・炭化物粒を少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 58、褐色土 (黒味がかかる)：φ 1 cm 大までの大振りの焼土・炭化物粒をやや多量に含む。φ 1 cm ほどの地山土ブロックを少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 59、褐色土 (黄味がかかる)：地山土を50%ほど含む湿土層。貼り床面が。粘性しまりとも強い。
- 60、褐色土：φ 2～3 cm 大の地山土ブロックをやや多量に含む。粘性しまりともやややあり。
- 61、黄褐色土：地山掘りすぎ
- 62、褐色土 (やや明るい)：φ 5～10 cm 大の地山土ブロックをやや多量に含む。φ 1～2 mm 大の炭化物をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。
- 63、褐色土 (やや黒味が強い) φ 1～2 mm 大の焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともやややあり。



第3図 豎穴住居址

第2章 検出された遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代から中世に至る土地利用の痕跡が確認された。縄文時代の遺構は直接確認されたものはないが、調査区内に縄文土器や石器の比較的多く出土する地点があることから、何らかの遺構が後世の土地利用によって壊されている可能性がある。ただいずれにしても、縄文時代の遺物の出土量は少なく、3次調査地点と比較して4次地点付近における遺物・遺構を残すような活動は低調であったようである。

遺構が残されているのは、遺物の量が増える弥生時代中期以降である。遺構の性格は時期により大きく二つに分かれるとかがえられる。一つは弥生時代の中期以降古代までで、盛んに住居址を構築している。今回検出された住居址はほぼこの時期のものである。一方平安時代以降中世にかけての時期には日常生活痕跡は希薄で、土壙墓群が構成されている。以下主要な住居址、土壙墓について順に述べていくことにしたい。

弥生時代から古代の遺構

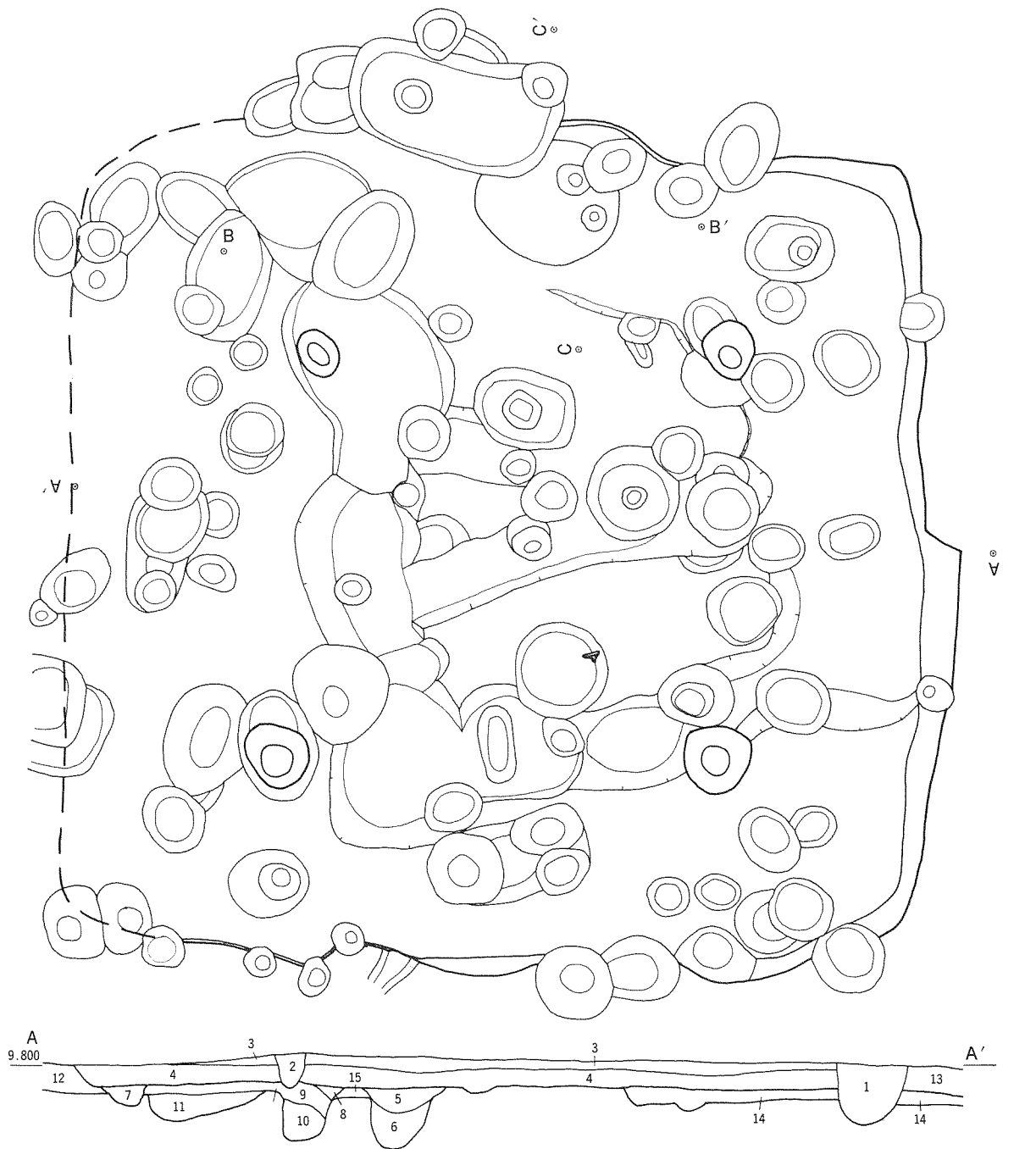
SB01

SB01は調査区の南半区に位置し、今回の調査で唯一住居址の全体が調査区内に収まる住居址である。調査区の南半分を精査中にSZ01などの遺構を確認したが、その際に調査区南東を中心に地山部分を確認し、その部分でSB01コーナーを確認した。遺構検出をすすめ、遺構のプランを押さえた上でトレンチをいれ、床面を確認した。

住居址の規模は東壁と北壁のラインについては不確定な部分もあるが、東壁と南壁については地山を掘り込んでおり、住居址の規模としては南北約5.4m、東西が5.4mの隅丸方形のプランを呈する。住居址南壁、東壁付近には一段下がった部分があり、床面で地山土混じりのプランとして確認されたことから部分的な貼床の可能性が考えられる。西側についても同様に一段下がるが、この部分は下面のSB09とした住居址についても同様であった。SB09については、SB01床面でプランを確認し、SB01の北西側に落ち込みとしてコーナーを確認したものであるが、SB01の西壁際に貼り床状の堀方が存在した場合、SB01プラン内ではほとんどが壊されていることになる。実際、プラン確認時には検出することはできなかったが、SB09出土として取り上げている第5図3の須恵器は、SB01の貼床からの出土の可能性もある。同様に住居址の覆土上面で検出された焼土集中についても、現場段階ではSB09東壁の竈ではないかとも考えたが、セクションベルトの観察等から、SB09がSB01を壊して構築された住居址とは考えにくく、また先述の貼床内出土遺物と竈内出土の土師器の間にそれほど大きな時間差もそれほど大きくないについても、SB01の北壁西よりの位置に構築された竈であったと考えられる。

住居址のピットについては、南東P27、北東P37、北西P165、南西P49を想定しているが、P165はやや小振りである。東側のピットは深さもあり、しっかりとしたピットである。ピットの状況から住居回数 of 想定はできない。

竈は名古屋市域の他の台地上の遺跡と同様に遺物を伴っての焼土集中として検出された。焼土の範囲が住居址の想定プランのやや内側になり、また床面よりもかなり高い位置にため、実際の竈の施設構造を

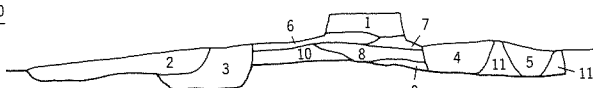


A断面土層注記

1. 褐色土 (P22覆土)
2. 褐色土: 4層に類似するが地山土が多い
3. 褐色土 (やや明るい): ϕ 1~2 mm大の炭化物粒を少量含む。やや砂質がかかる。
4. 褐色土: ϕ 2~3 cm大の地山土ブロックをやや多量に含む。
5. 褐色土 (やや黄味がかる): ϕ 2~3 cm大の地山土ブロックを少量含む。
6. 褐色土 (黄味がかる): 褐色土と地山土の混土。 ϕ 5 mm程の炭化物をごく少量含む。
7. 褐色土 (やや黒味が強い): ϕ 2~3 mmの炭化物を少量、地山土ブロックをごくまれに含む。
8. 褐色土: 2層類似だが ϕ 2~3 cm大の地山土のやや目立つ。

9. 褐色土 (黄味がかる): 褐色土と地山土の混土層。 ϕ 2~3 mm大の炭化物を少量含む。
10. 褐色土 (やや黒味強い): ϕ 1~2 mm大の炭化物粒をごくまれに、 ϕ 5~10 mmの地山土ブロックを少量含む。
11. 褐色土 (やや灰色がかかる): ごくまれに ϕ 1~2 mm大の炭化物を含む。 ϕ 1~3 cm大地山土ブロックを少量含む。
12. 黄褐色土: ややよこれが目立つが、基本的に地山土。
13. 褐色土 (やや黒味が強い): ϕ 1~2 mm大の炭化物、焼土粒を少量含む。
14. 褐色土 (やや明るい): ϕ 1~2 mm大の炭化物、焼土粒を少量含む。 ϕ 2~3 cm大の地山土ブロックを少量含む。

B
9.800

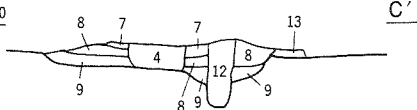


B'

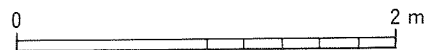
B・C断面土層注記

1. 褐色土 (SB01埋土)
2. 褐色土: 混ざり物のない、やや淡い色調。
3. 褐色土: ϕ 1 mm大の地山シルトが水平に堆積。シルト質で、粘性強め。
4. 褐色土: 灰色砂がやや多く軟質。 ϕ 1 mm大の地山土ブロックをまばらに含む。
5. 褐色土: ϕ 1~3 mm大の炭化物粒を少量含む。
6. 褐色土: 7層に近いが、 ϕ 5 mm大の焼土ブロックをまばらに含む。
7. 褐色土: ϕ 1~3 cm大の焼土塊が集中する。
8. 褐色土: 褐色シルトが目立ち、やや粘性が強い。
9. 褐色土: 8層の土に似るが、地山シルトブロックが目立つ。
10. 褐色土: 9層と同じ。
11. 褐色土: 9層に近いが、 ϕ 3~5 cm大の地山シルトブロックをまばらに含む。
12. 褐色土: 4層に似るが、地山ブロックをまばらに含み、焼土細粒を含む。
13. 褐色土: ϕ 5 mm大の地山ブロックが目立つ。褐色シルトが強くなる。

C
9.800



C'

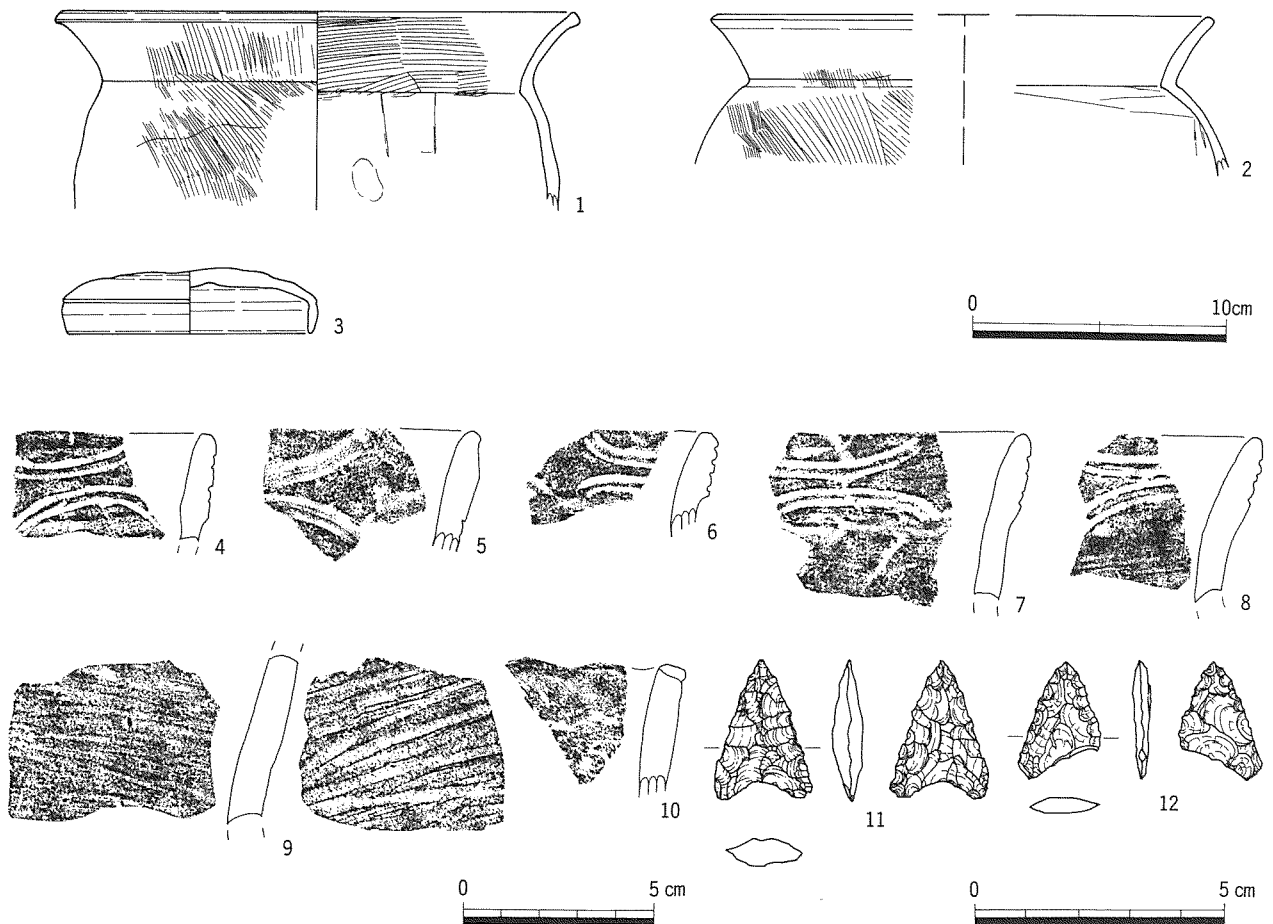


第4図 SB01平面図および土層図

想定することは困難である。

SB01の覆土中からは多量の遺物が出土しているが、図示可能な個体は少ない。住居址が激しく斬り合っており、そのためにSB01以前の住居址覆土や包含層由来の遺物が多いことと、後述のSB06のように床面近くから比較的遺存状況の良好な遺物の出土がまとまって出土していないみられなかったためであるといえよう。

第5図にSB01より出土した遺物を図示した。1・2は土師器の甕である。1は竈の焼土に伴って出土した個体である。2は覆土中からの出土である。やや肩の丸くなる長胴甕である。時期は細かく断定できないが、8世紀代以降の所産と考えられる。1の個体の方がやや古い要素を残しているといえるであろうか。3の須恵器はやや小振りの坏蓋ないし、薬壺の蓋と考えられるものである。7世紀代の後半以降にあらわれてくる器種といえよう。4～12はSB01出土の縄文時代遺物である。玉ノ井遺跡4次調査地点においてもっとも多く縄文土器が出土しているのはSB01の覆土である。4～8については半截竹管状工具の腹による平行沈線によって、対向弧線文を描いている。こうしたモチーフは晩期初頭の寺津式期の要素であるが、口縁部が外反気味で、縁帯部分が肥厚しており、またすべての個体に縄文や擬縄文が認められないことから、元刈谷式期の様相にかなり近いといえる。9は内外面ともに巻貝条痕文を施した胴部破片であり、4～8と同時期の可能性が高い。10は口唇部を指で押さえている。晩期後半の土器であろう。石鏃は2点出土しており、1は赤色チャート、2は下呂石製である。



第5図 SB01・09出土土器



写真2 SB01



写真3 SB01床面検出遺構

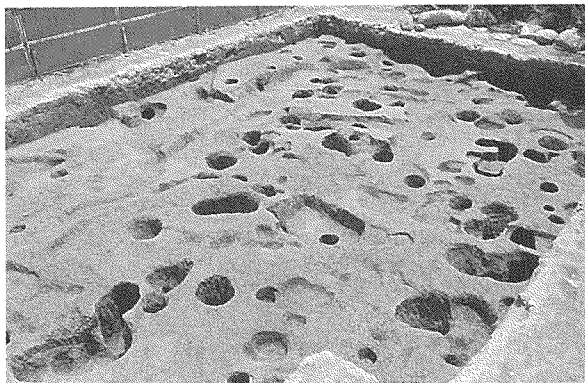


写真4 SB01周辺



写真5 SB01・09竈

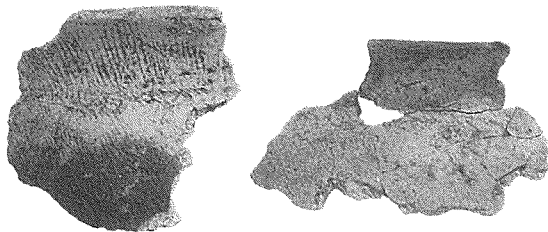


写真6 SB01出土土師器



写真7 SB01出土須恵器

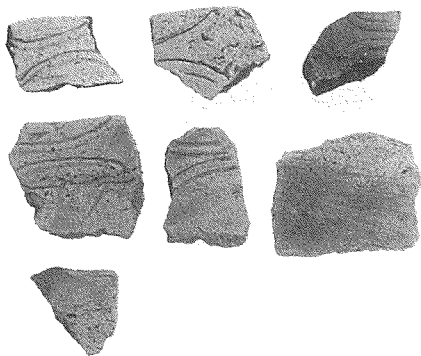


写真8 SB01出土縄文土器

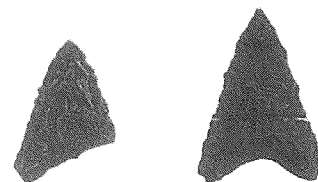


写真9 SB01出土石鏃

SB06

SB06は調査区の北東に位置する。表土除去後、調査区北東端のコーナー付近で地山が確認できたが、その際に住居址北壁のプランを確認した。西壁については、調査区北半の中央付近の焼土集中を竈ではないかと想定し、ほぼ隅丸方形のプランが想定できた。

住居址プラン検出後、住居址の東西にセクションベルトを設定し、トレンチを掘削したところ、住居址の床面が検出されたため、住居址覆土を順次掘りあげていった。住居址床面近くからは、依存度の高い遺物が出土し、また土錘が多量出土している。住居址の床面は壁面近くに何か所か貼床状に掘り込みが認められ、掘り込み内からも遺物が出土している。SXとしてこれらの掘り込みを彫り上げたが、不整形で深さもあまりなく、住居址の床面施設とは考えにくい。

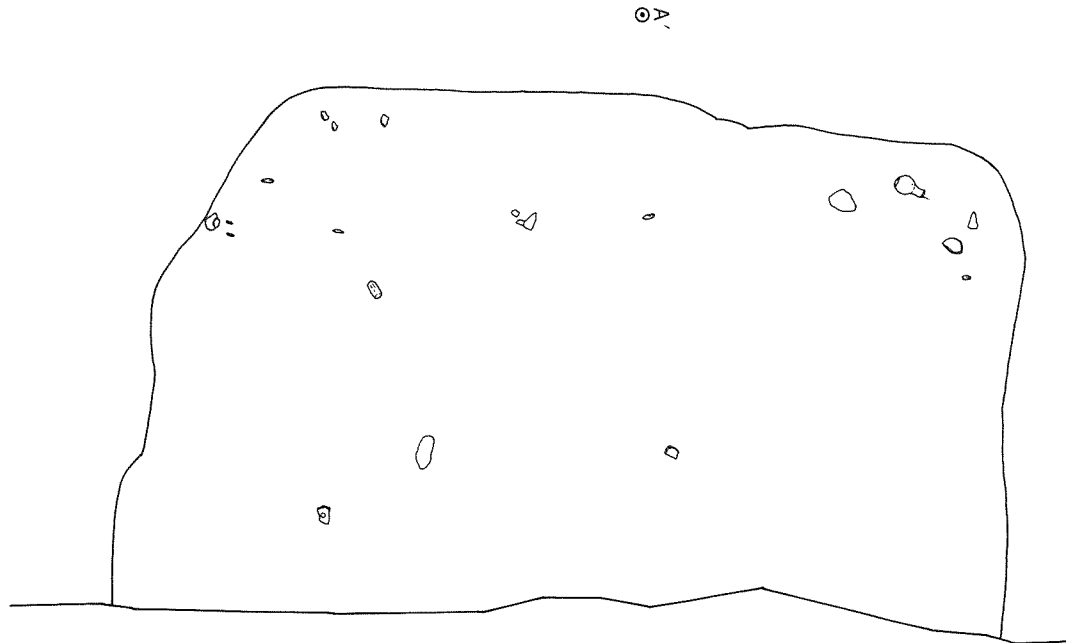
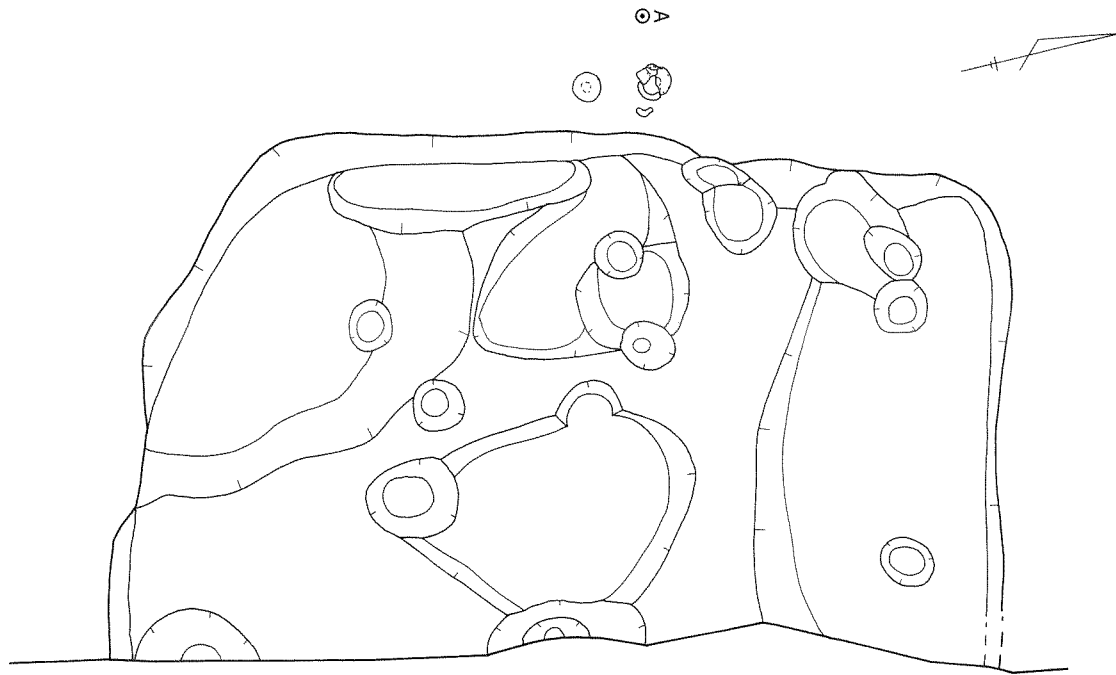
住居址の規模は南北は3.5m、東西に4.1mのほぼ隅丸方形をなし、壁の立ち上がりは、残りのよいところで30cmほどになる。ピットは北壁際と、南東側に認められるが、非常に浅いものであり、北側のピットもやや壁よりに掘り込まれており、住居址の柱穴として確定はしづらい。床面にはSX01、SX02とした施設は貼床と考えられるが、やや不整形である。

住居址施設としては、竈が西壁上に確認できた。この竈は焼土集中に伴って土師器の長胴甕の底部が逆さにおかれたものと、須恵質の坏が逆位で設置されたものである。焼土の焼込面は硬化した部分が認められ、長胴甕の内面にも焼土が詰まっていた。長胴甕と坏身がおそらく支脚として機能していたものと考えられる。坏身と長胴甕の底部は南北に並んだ状態で出土しており、両遺物が同時期に機能していたとすれば、横方向に二口を持つ竈ということになるが、熱田台地上における竈は遺存状況が悪く、類例を求めることはできない。完全に平行移動しての竈の作り直しも考えら得なくはないが、現地の状況からその痕跡を確認することはできなかった。

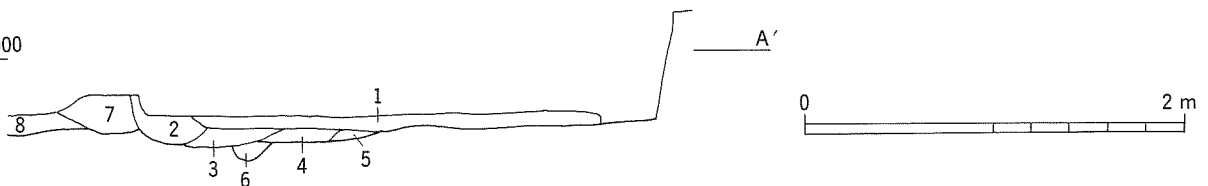
この竈については、住居址の西壁に竈を作る例が非常に少ないことや、竈自体の構造が遺構からはっきりしないため、現場段階でSB06の西隣のSB07等の住居址の東壁竈ではないかとも考えたが、SB07自体も不確定な住居址であり、遺物をもてもSB06の床面遺物とそれほど開きのない時期の遺物によって構成されていることから、SB06の竈として判断した。SB01も含めてなかなか良好な竈の検出に恵まれないが、今後、遺存状況から読み取れる情報の蓄積が重要となってくるだろう。

SB06からは比較的まとまった量の遺物が出土しており、遺存状況も比較的良好であった。調査地点の範囲でいえば一番新しい段階の住居址であり、他の住居址を切っているが、SB06自体は切られていないこともその状況に整合する。

13は竈に逆位で伏せてあった須恵器の坏身である。やや赤みがかった焼き上がりで、体部には回転ナデ痕が良好に残っている。底部には糸切り痕が残っているが、やや荒い糸切痕である。体部にはちいさな粘土塊が付着している。14は破片であるが同じく須恵器の坏である。15も竈からの出土で、支脚として転用されていた土師器の長胴甕の底部である。底部付近にナデ痕が顕著で、荒いハケメで器面調整を行っているが、タタキ痕様に深いハケメである。16は箱形の坏身である。やや黄みがかった焼成で、底部は回転ヘラ削りで整形している。17も16に似た高坏である。碁笥底状に中央部が浮き上がる。15は土師器の長胴甕の底部である。底部付近にナデ痕が顕著で、荒いハケメで器面調整を行っているが、タタキ痕様に深いハケメである。18も須恵器でややくらい褐色の胎土であった。19は住居址床面のSX01からの出土である。灰



A 10.000



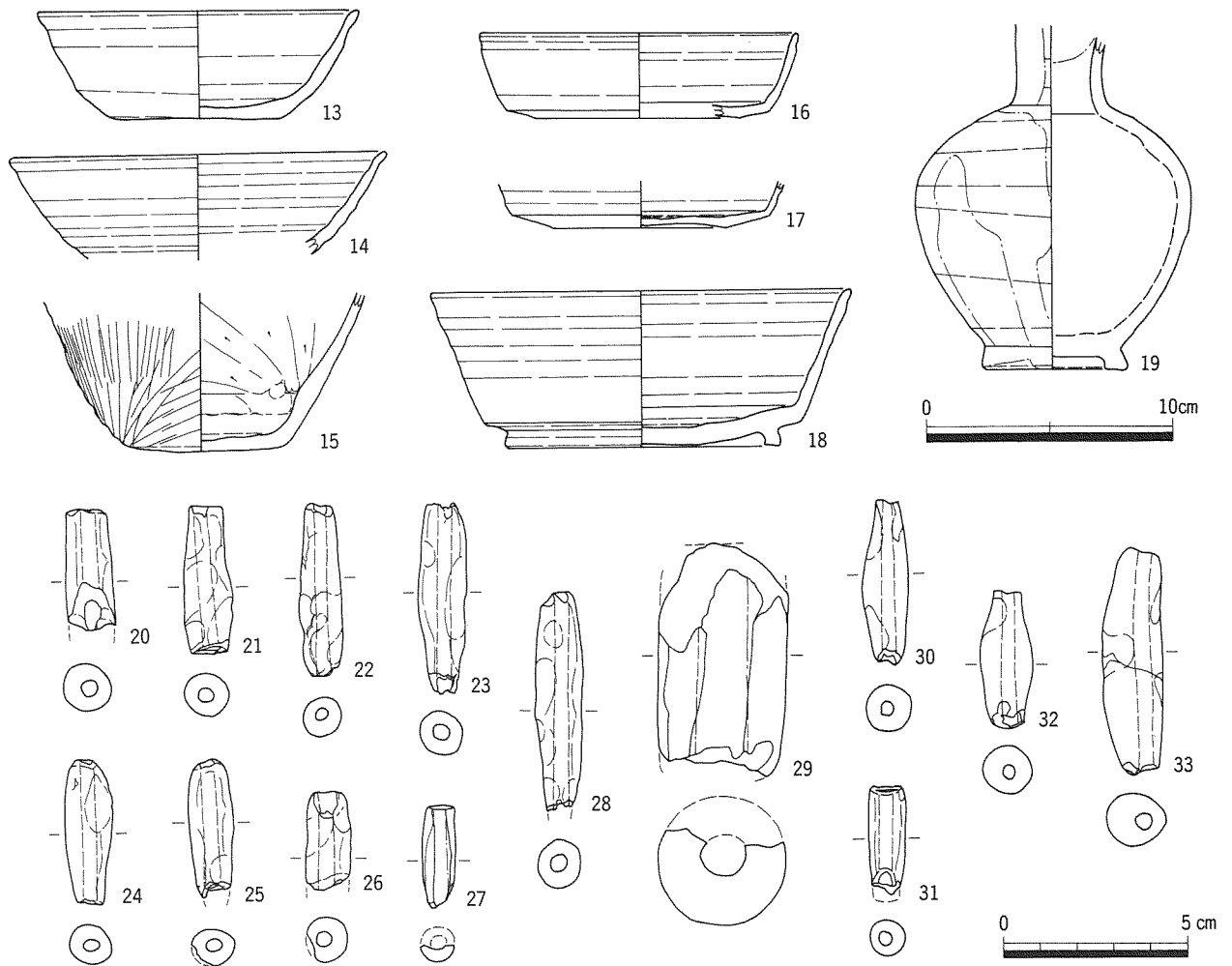
- 1層 褐色土（茶灰色がかる）：地山土を含まない。φ 1 cmまでの礫を含む。しまりややあり。
- 2層 褐色土（1層より暗い）：φ 5 mm程度の地山土ブロックを少量含む。φ 5 mmの焼土および炭化物粒をやや多量に含む。
- 3層 褐色土：2層よりも地山土ブロックが多くしまりある。
- 4層 褐色土：地山土ブロックをやや多量に含み、φ 1 cmまでの礫を含む。しまりややあり。
- 5層 褐色土：4層と似た土であるが、地山土の含有量が多い。
- 6層 褐色土：黒色シルトブロックが目立ちしまりがある。
- 7層 淡褐色土：2層の土と似るが、炭化物焼土が特に多く淡い色調。
- 8層 褐色土：シルト質が強い。地山土ブロック多くしまりある。

第6図 SB06平面図および土層図

釉陶器の長頸瓶である。頸部の接合は小型の個体のため判断がつきにくいだが3段の稜が確認できる。灰釉陶器の中でもやや古い部類の製品であろうか。器面には空気の混入のためか、ひぶくれを起こしている。以上の遺物はやや時期に幅があるものの、9世紀代の状況を表す遺物のまとまりと考えられるであろう。

21～33は住居址床面出土の土錘である。住居址の全体から散らばるように出土している。そのうち28・29は床面のSX01、30・31はSX02からの出土である。いずれも指で押さえながら整形がなされ、穿孔されている。ほとんどの土錘が10g未満であるが、29の個体は42gの重量があった。小型の製品は同様の作られ方をしていると考えられるが、重量や長さなどの規格性は低いようである。20・21については表面が橙色をしており、何らかの処理を施しているようである。

SB06についてはおおよそ平安時代の前半の住居址とすることができよう。後述のSK01に先行する時代の遺構であると考えられる。調査区の範囲内ではこの時期を最後に竪穴住居址の構築は認めらず、以後の時期は墓墳が構築されるのみである。



第7図 SB06出土遺物



写真10 SB06



写真11 SB06床面検出遺構



写真12 SB06遺物出土状況



写真13 SB06竈



写真14 SB06竈出土須恵器



写真15 SB06竈出土土師器

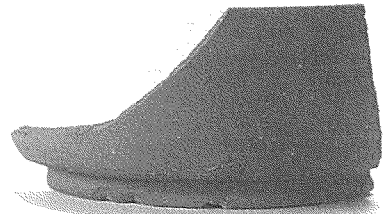


写真16 SB06出土須恵器



写真17 SB06・SX01出土長頸壺



写真18 SB06出土土錘

その他の住居址

SB02

住居址 SB01の検出時に、その西側の部分に位置し、SB01に切られる住居址としてプランを確認した。完掘時には遺構の形状は判断がつかなかった。SB09ないし SB10の覆土である可能性が高い。

SB03

SB01の南、SB04と SB10の間で検出された。SB04の炉址を切る形で構築されている。住居址としての覆土の残りは決してよくないが、地山に掘り込んでおり、SB04との境に低く壁が残っている。

SB04

SB04は表土除去後に地山上面の焼土として検出した。調査区の南壁際やや東よりに炉址が位置する。床面はほかの住居址よりも高く、SB03、SB01に切られている。検出時には床面に達しており、出土遺物は少なかった。

SB05

調査区の東壁際に位置し、住居址周溝が検出されている。SK01・SB07に切られる。床面は地山を掘り込んで構築されている。この住居址もそれほど遺物は多くない。

SB07

SB07は SB01と SB06の間に位置し、両遺構に切られる住居として想定した。上面でプラン検出しているが、掘り上がりにその痕跡はほとんど残らない。遺物はかなりの量取り上げているが、小破片で図示できるものはない。

SB08

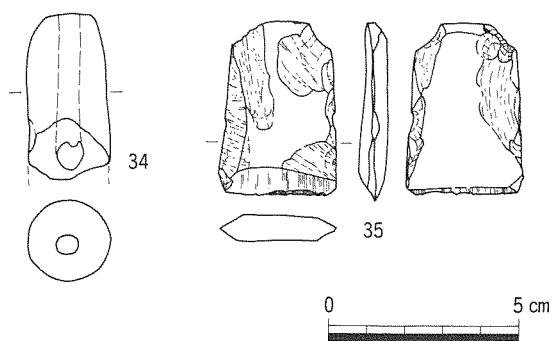
SB08は SB01の北に想定した住居址であるがプラン等の検出が困難であった。

SB10

SB01の床面と同レベルで、南西コーナー付近に地山の焼け込んだ炉址を検出し、SB10とした。SB03との境界付近に、周溝が確認できた。北側にどこまで範囲が広がるかは不明である。

SB11

調査区の北東側の地山を掘り込んだ遺構に対して、SB11と名付けた。SB07等の遺構との先後関係は確認できなかった。SB11からは扁平片刃石斧が出土している（第8図35）。



第8図 住居址出土遺物

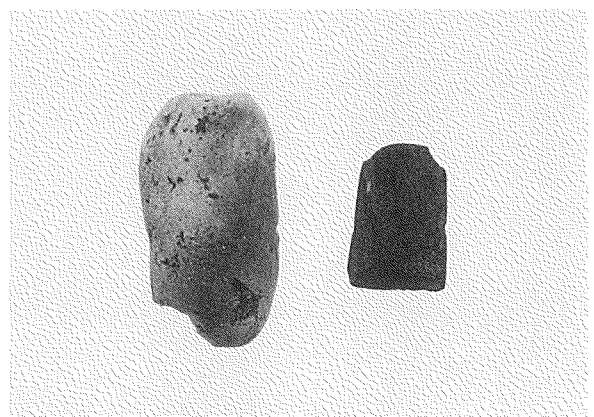


写真19 住居址出土遺物

古代末以降の遺構と遺物

SZ01

SZ01は調査区の南東部で検出した遺構である。住居址 SB01の東側に位置し、調査区南半の表土除去終了後、遺構検出作業中に人骨の上面を検出した。人骨を確認したため、墓壙としてSZ01とした。作業途中で遺構上面で土器を人骨の下半身付近で取り上げているがこの土器も墓壙に伴うものと考えられる。墓壙の形状は隅丸の長方形であり、確認できた範囲で、長軸が175cm、短軸で75cmほどの規模である。検出面が低かったこともあって、遺構の深さは深いところでも10センチに満たない浅い皿状の遺構となった。人骨の依存状況はあまりよくなく、頭骨付近と上腕骨、大腿骨等の太い骨が残るのみで、埋葬姿勢の判断は困難である。頭位はほぼ真北でやや西に振れる。頭骨の状況から仰臥姿勢での埋葬であることが判断される。下顎の位置から西を向いていた様に見えるが、埋葬環境での変化の可能性も捨てきれないため断定はできない。青年期の男性人骨である可能性が高いと長岡朋人よりご教授頂いた。

出土遺物は副葬品と考えられる物を5点図示した。36・37は龍泉窯系の青磁である。2個体とも埋葬人骨の頭骨のすぐ西脇に、ほぼ人骨と同レベルで出土した。37の上に36が重なるように出土した。兩個体ともに類似した線刻を施しており、同一個体の可能性もあるが、接合はしなかった。38・39が先述の土器である。38は回転整形で、底面を指でなでている。やや丸みの強い器形であり、台地上の遺跡でも散見されるタイプのかわけ皿である。39はやや直線的な器形である。底面は指で押さえられている。ほぼ38・39ともにほぼ同位置からの出土である。40は北宋銭「元祐通寶」である。初鑄年は1086年である。銭はやや古い時期の物であるが、遺物全体の状況から判断して、SZ01の構築時期は、およそ13世紀代の前半と考えられる。



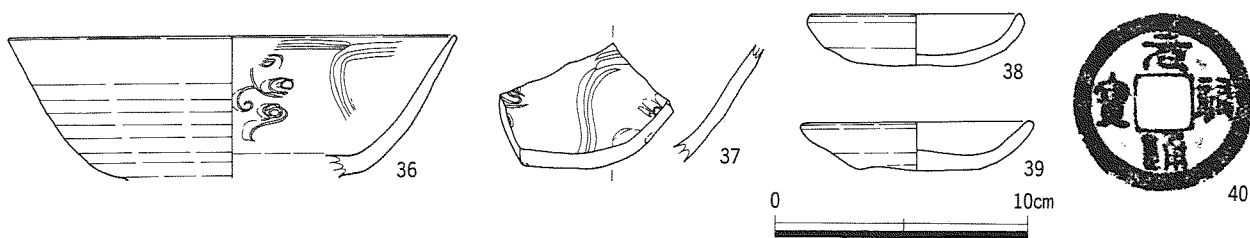
第9図 SZ01



写真20 SZ01



写真21 SZ01青磁出土状況



第10図 SZ01出土遺物（40のみ等倍）

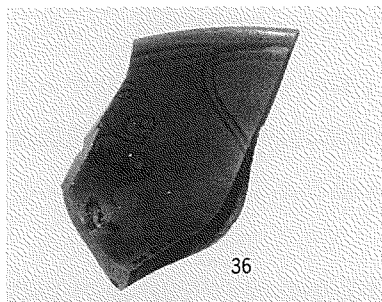


写真22 SZ01出土青磁

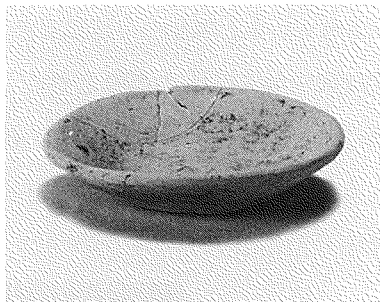


写真23 SZ01出土土器

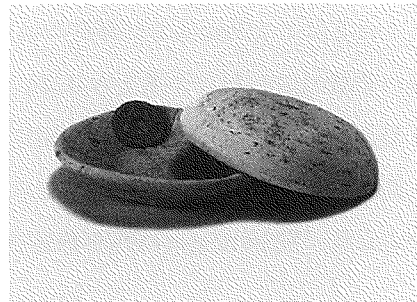


写真24 SZ01出土土器および宋銭

SZ02

SZ02は調査区の北、SB07・08の上面で検出した遺構である。表土除去後、遺構検出作業中に人骨らしき出土遺物があり、精査したところ、遺構のプランが確認された。SZ01同様掘り込み面が高いために、遺構の底面付近を検出したのみである。底面付近は地山にわずかに掘り込んでおり、遺構の範囲を確認できた。人骨は数点出土したが、上腕骨か大腿骨の様な太めの骨の一部が出土しているのみで、埋葬人骨の姿勢等に関しては、現状からは判断できない。

遺構の形状は長軸が約135cm、短軸が95cmほどである。遺構の主軸は北北西であり、現状での遺構の掘り込みは、約10cmほどである。SZ01と比べると遺構の長軸は短く、短軸は長くなっている。埋葬形態の差異を表しているのであろうか。

出土遺物はほとんどなかった。遺存状況のよくない人骨が出土したのみで、人骨の性別等についての情報もえられなかった。

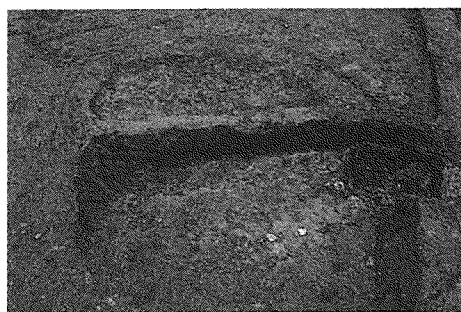
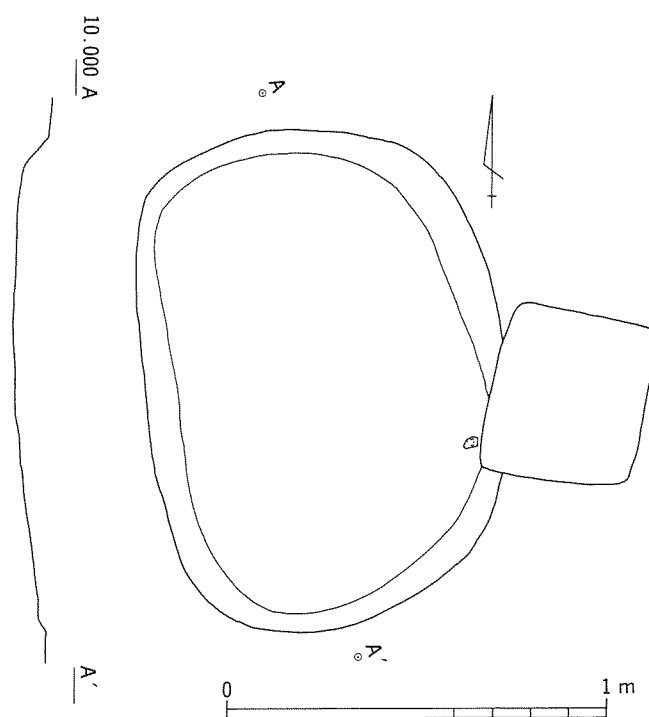


写真25 SZ02



第11図 SZ02

SZ03

SZ03は調査区のほぼ中央に当たる場所で検出した。表土除去後、調査区の南北にベルトを設定し、両脇から包含層掘削を始めたが、そのベルトの分層中にベルト上に遺構を発見した。遺構の南北は包含層掘削の際に掘り下げてしまったために、ベルト上にわずかにのこった範囲でのみ遺構を確認した。遺構の形状はわからないが、残存部の長さで、140cmほどになる。

ベルト上だけの確認であるが人骨のほかに、長さ8cmほどの石器の出土がみられた(第3図)。磨石と考えられる物で、側縁部には敲打の痕跡が認められる。側縁の一部に赤色顔料の付着が認められることから、顔料を磨つぶした物と考えられる。縄文時代～弥生時代の所産と考えられる製品である。しかしながら、この墓壙が古代の住居址覆土上面に構築されていることを考えると、構築時期は古代以降であり、遺物の時期との間に、大きな時期差が認められることになる。遺構の状況から中世墓である可能性が最も高いと考えられ、SZ01に近い時期が想定される。

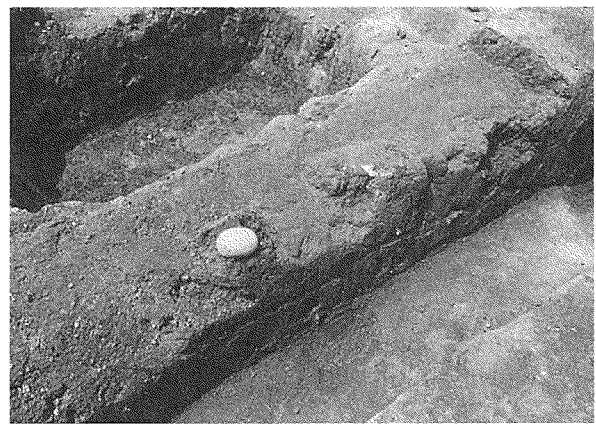
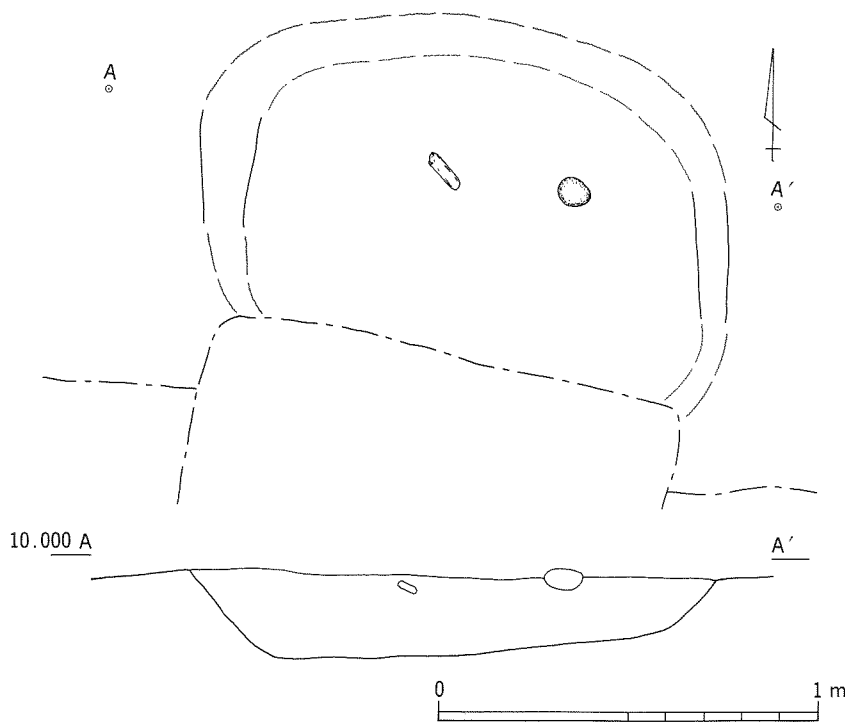
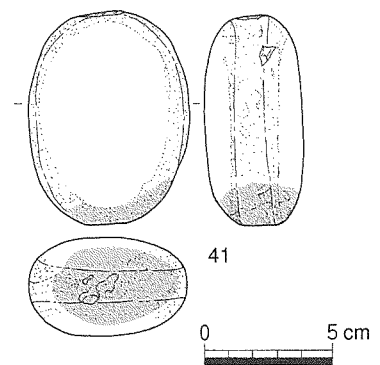


写真26 SZ03



第12図 SZ03平面図および土層図



第13図 SZ03出土遺物

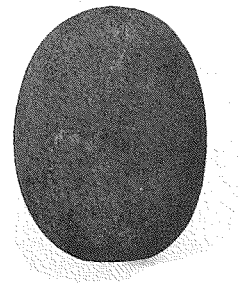


写真27 SZ03出土石器

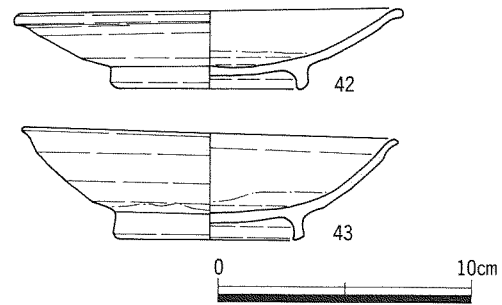
SK01

SK01は調査区の南東側で検出された遺構で、住居址SB05を掘り込んで構築された遺構である。底面に遺構が掘り込まれているが、SK01自体は検出面からの深さはそれほど深くならない。表土除去後の検出の際、灰釉碗の集中を伴って確認された。

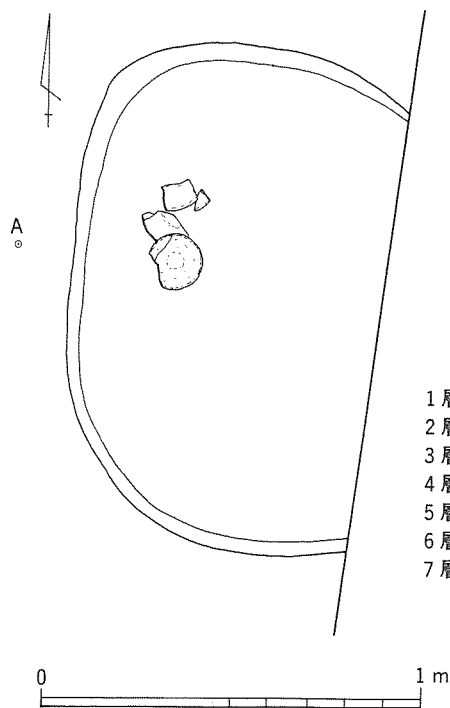
平面形態は隅丸長方形であることが想定される。長軸で135cm前後、短軸の現存部で80センチあり、およそ100cm前後の規模が想定される。

出土遺物は遺構底面に伴って42・43の灰釉陶器が出土した。42は皿で、体部が直線的に立ち上がり口縁部はやや玉縁状を呈する。高台の形状は三日月型である。施釉は刷毛である様だが、釉自体が薄く、あまり明瞭に掛かった様子がうかがえないが、内面縁に沿って施釉しているようである。43はやや器高のある碗で、こちらも刷毛による施釉であるが、43については比較的明瞭に刷毛塗りの跡が観察される。高台形も三日月に近い。およそO-53窯式の段階前後の製品であろうか。

この遺構は先述のSZ01に先行する時期の遺構であると考えられるが、墓の可能性もある。人骨の出土はみられないが、形状や出土遺物の状況から、灰釉碗が副葬品である可能性も考えられる。およそ、9世紀代に構築された遺構であろう。



第14図 SK01出土遺物



第15図 SK01平面図および土層図

- 1層 褐色土：やや砂質がかりしまりが弱い (SK01覆土)。
- 2層 褐色土：1層よりも褐色シルトを多く含む。やや黒みがかり、しまりある。
- 3層 褐色土：φ1cmほどの地山土ブロックを少量含む。しまりややあり。
- 4層 褐色土：3層よりも色調が淡く、地山土ブロックの含有量が多い。
- 5層 褐色土：地山ブロックが少ないがシルト質土をブロック状に含みしまりある。
- 6層 黄褐色土：地山
- 7層 褐色土：褐色シルトをやや多く含む。φ5mmほどの地山ブロックをまばらに含む。

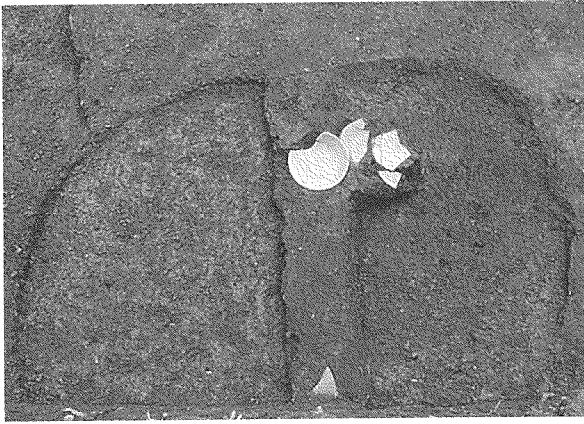


写真28 SK01

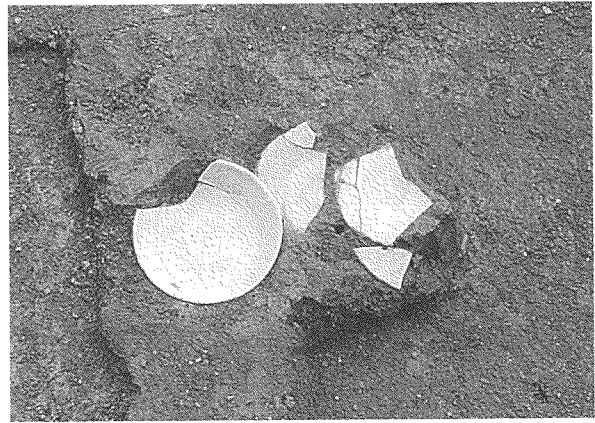


写真29 SK01遺物出土状況

その他の遺構と遺物

住居址が激しく重複した本調査地点において、各時期の遺構は地山まで掘り込んだもの以外は、壊されてしまっているものが多い。その中で、住居址の覆土に掘り込んだ遺構もいくつか確認している。

P08

竪穴住居址 SB01の覆土中に掘り込んだピットである。土師器の荒いハケメの長胴甕が破片の状態でもとまって出土している。はじめから破片の状態で埋没していたようであり、性格は不明である。SB01の埋没後の遺構であるので古代以降の時期のピットである。

P50

SB01の北西コーナー付近に掘り込まれたピットである。本調査地点では数少ない縄文時代の遺物を含んだ遺構である。第16図の55の土器は甲信越を中心に分布する晩期最終末の氷式土器である。浮線文間に赤色塗彩の痕跡が認められる。この遺物はピット底面近くから出土しており、二枚貝条痕調整の深鉢胴部破片を伴って出土している。

P98

P98はP50のすぐ北側に位置するピットである、このピットからは須恵器・甕が出土している。第16図の44である。小振りの製品で肩には厚く自然釉が掛かっており、頸部よりも上は欠損している。

SK14

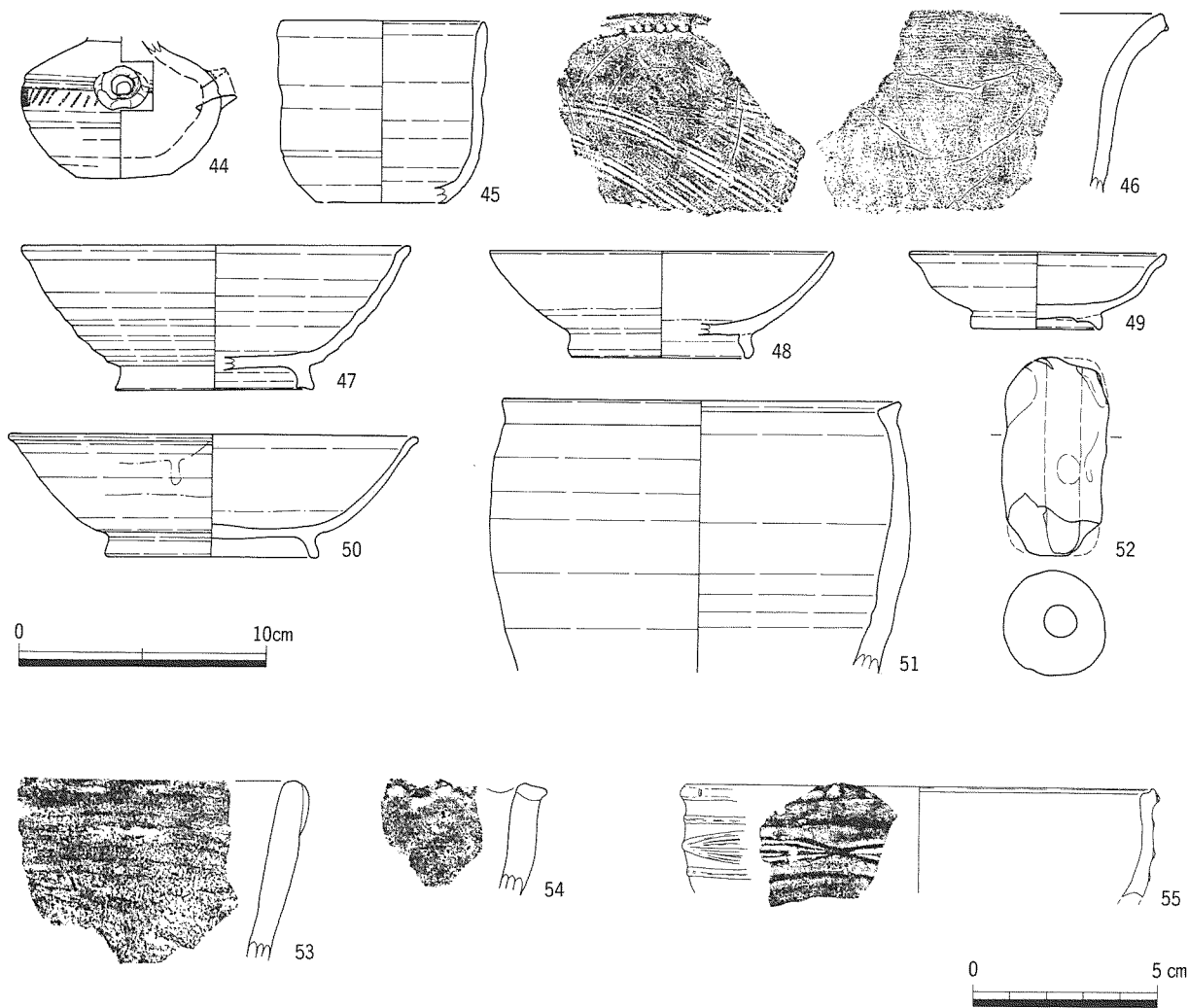
SK14は調査区の北西、SB07・08の覆土に当たる部分に掘り込んだ遺構である。この遺構からは第16図の皿状の須恵器が出土している。遺構の性格は不明である。

包含層等出土の遺物

遺構の集中度の高さからか包含層中に、多量の遺物集中が認められる。遺構出土遺物とともに第16図に示した。46は貝田町式期の甕の口縁部であると考えられる。口縁部を外につまみ出し、口唇



写真30 P08遺物出土状況



第16図 その他の遺構および遺構外出土遺物



写真31 P98出土遺物



写真32 SK14出土遺物



写真33 包含層出土遺物

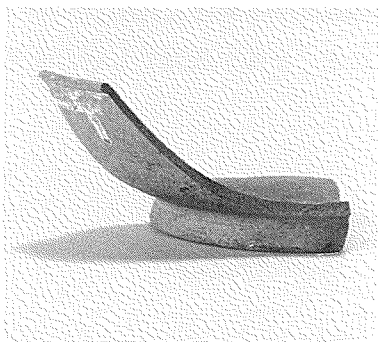


写真34 包含層出土遺物



写真35 包含層出土遺物

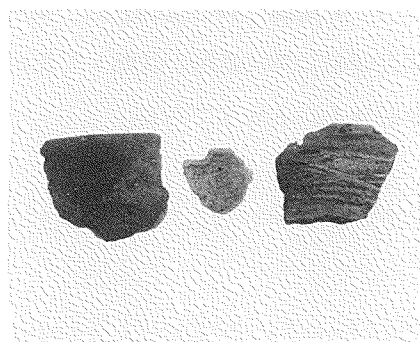


写真36 縄文土器

を四角く面取りし、口唇端部の外面に刻みを施す。胴部外面は二枚貝条痕、内面はハケ調整である。47～50は灰釉碗である。表土除去中や包含層掘削時に遺存状況の良好な灰釉碗が多いのはSK01のような遺構が比較的浅い深さに掘り込まれているためだろうか。51は須恵器の鉢状の製品である。52は大振りな土錘である。指頭による押さえやナデが顕著である。

縄文時代の遺物は包含層中を含めても決して多くはない。第3次調査地点で主体をしめた元刈谷式期の土器もSB01の覆土を除くとほとんど出土していない。53は口唇部外面に玉縁状に貼り付けを施し、胴部から全体に巻貝条痕調整を施している。縄文時代晩期前半の遺物であるといえよう。54の調整はナデのみであるが、口唇部を指頭により押さええている。晩期後半の所産であるといえよう。

まとめにかえて

今回の玉ノ井遺跡の調査では激しく重複する住居址を検出した。出土遺物が概して小振りであるのも、激しい重複の結果といえよう。包含層出土遺物の割に、確実に時期の決められる遺構が検出できなかったこともこうした状況からであろう。一方で玉ノ井遺跡周辺は古くからの住宅地で、戦前からの住宅の下には良好な包含層が残されていることが多い。今回の調査地点も包含層の遺存状況は良好であった。SB01やSB06の竈が残されていたの包含層が良好に残されていたためである。

弥生時代から古代にかけて、調査地点付近は集落域であったことが判断されるが、こうした集落も、連続と継続的に営まれた物ではない。たとえば古墳時代の遺構や遺物は比較的少ない。付近に断夫山古墳や白鳥古墳、すぐ北に高蔵遺跡の居住域が接していることを考えると不思議な感じさえする。こうした状況は3次調査地点にも共通する。

一方で古代末から住居が構築されなくなり、墓域として機能したのか、土壙墓のみが確認されている。熱田神宮の周辺地域にあたるこの地域が古代末から中世にかけての時代にどのように土地利用されてゆくのかが、非常に興味深い。中世の後半から近世、近代の生活痕跡が少ないこともふまえて考えてゆかなければならない問題といえよう。

遺構に関連しては、名古屋の台地部には珍しく、竈が比較的良好な状況で確認された。もちろん他地域と、比べれば残りはよくないが、検出の難しい台地部の竈の調査事例の蓄積は重要である。竈の高架体が他地域で検出される物と同じなのか異なるのかも含めて、今後の事例もふまえたうえで検討をくわえてゆかねばならない。掘り方の有無や焼土硬化面と住居址の床面の高さ、竈のすえ直し等、現状で確認できる情報を順次蓄積した上での検討が重要である。

玉ノ井遺跡における調査は、地点ごとに包含する遺物や、遺構の時期、内容は異なるがどの地点もその遺存状況は他の遺跡と比較して良好であり、我々に多くの情報を与えてくれる。今後の調査でもその成果が期待される地点である。

付 編

- 玉ノ井遺跡出土試料の炭素年代測定(小林謙一・今村峯雄・坂本稔) …140
- 玉ノ井遺跡出土の縄文時代晩期人骨(毛利俊雄) ……146
- 玉ノ井遺跡貝層ブロック・サンプリングについて(稲田望子) ……152
- 玉ノ井遺跡3次調査出土の動物遺体(新美倫子) ……156
- 玉ノ井遺跡の縄文時代(瀬瀬茂) ……161

玉ノ井遺跡出土試料の炭素年代測定

小林謙一（総合研究大学院大学博士後期課程 日本歴史研究専攻）

今村峯雄（国立歴史民俗博物館 情報資料研究部）

坂本稔（国立歴史民俗博物館 情報資料研究部）

1 測定対象資料と炭化物の状態

玉ノ井遺跡出土の土器付着炭化物・出土炭化材の炭素年代を求めた。玉ノ井遺跡からは、縄紋時代晩期の住居跡・墓壙・土器が出土している。試料番号は、ANTとした。合計で10点の縄紋土器から、おこげ・噴きこぼれと思われる炭化物を採取し、住居跡炉内焼土サンプルや、覆土内貝層から数点の炭化材を採取したが、殆どの試料は測定に十分な炭素量を確保できず、下記の3点の試料が測定可能であった。

ANT 1 SB02住居跡出土炭化材。8 G北西隅壁貝層中に包含されていた。顕微鏡観察によると、放射状の導管が認められる環孔材で、クリの可能性はある。

ANT 4 Pit177出土の元刈谷式（新）の口縁部土器片の付着炭化物である。口縁外側の刺突紋の中に、やや厚く炭化物が付着しており、調理の際の噴きこぼれの可能性がある。ただし、土器の口縁内部には、付着は認められなかった。

ANT12 SB02住居跡床面付近埋土出土の元刈谷式土器に伴う底部破片の土器付着炭化物である。底部立ち上がり部分内面に炭化物が付着し、調理の際の焦げ付きの可能性はある。

2 炭化物の処理

試料については、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において、以下の手順で試料処理を行った。

(1)(2)の作業は小林、(3)(4)の作業は坂本が行った。

(1) 有機溶媒による油脂成分等の除去。

(2) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA 処理）。

まずアセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA 処理として、80℃に保温しつつ各1時間で、以下の処理を行った。希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（0.1N-NaOH）でフミン酸等を除去する。今回は、3回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理を1回行い中和後、水により洗浄した（4回）。各試料は、採取総量、AAA 前処理を行った量、前処理後回収した量、ガス精製に供した量、炭酸ガスの量をそれぞれ測定してある。量が十分なものは、各段階におけるサンプルを保存してある。また、前処理のうち、最初のアルカリ溶液も保存してある。

(3) 炭酸ガス化と精製：酸化銅により試料を酸化（炭酸ガス化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(4) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AAA 処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。一覧表には、炭素換算量を、精製した炭酸ガスの量として表記した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。

これを電気炉で加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径 1 mm のアルミ製カソードに 60 kg f の圧力で充填した。

3 測定結果と暦年の較正

AMS による炭素14測定は、加速器分析研究所へ委託して行った。IAAA-の番号は、加速器分析研究所の測定機関番号である。

年代データの ^{14}C BP という表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代（モデル年代）であることを示す（BP または yr BP と記すことも多いが、本稿では ^{14}C BP とする）。 ^{14}C の半減期は国際的に 5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1 標準偏差、68%信頼限界）である。

AMS では、グラファイト炭素試料の炭素14/12同位体比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。本測定では、炭素14/12比測定と同時に AMS で測定された炭素13/12用を用いて、補正した。通常、標準体（古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの炭素13/12比）偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル，‰）で示される。補正した炭素14/12比から、炭素14年代値（モデル年代）が得られる。

〈暦年較正〉

測定値を較正曲線 INTCAL98¹⁾（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Program に準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal AD で示す。（ ）内は推定確率である。

番号	測定機 関番号	試料の重量 (mg)					炭酸ガス	炭素年代	
		採集	処理	回収	精製用	$\delta^{13}\text{C}$		補正值	補正年代
試料No.	IAAA-								
ANT 1	11630	8.3	8.3	2.59	2.31	1.39	-28.3‰	2890 ± 30	
ANT 4	11631	21.9	21.9	5.96	3.10	1.85	-24.0‰	3040 ± 30	
ANT12	11632	26.0	26.0	4.98	3.95	2.26	-25.1‰	2930 ± 30	

暦年較正 cal BC

ANT 1	1200-1190 (2.8%)	1190-1170 (3.8%)	1160-1140 (5.1%)	1130-990 (81.8%)
				990-970 (1.5%)
ANT 4	1390-1320 (34.1%)	1320-1210 (58.0%)	1190-1190 (1.4%)	1170-1170 (0.6%)
				1130-1130 (1.4%)
ANT12	1250-1230 (6.7%)	1210-1010 (88.7%)		

〈結果〉

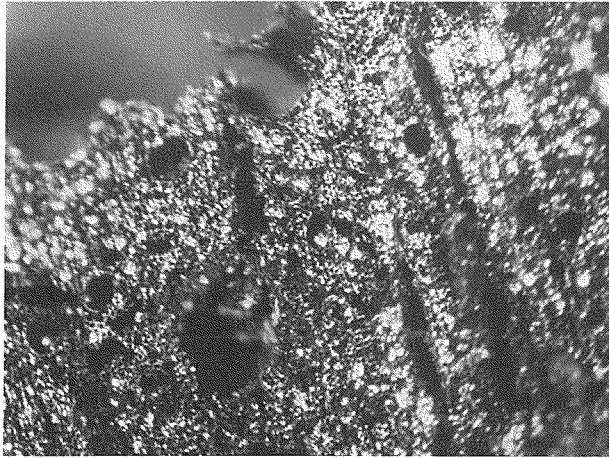
以上の測定結果は、おおむね一致しており、縄文時代晩期元刈谷式土器の実年代を検討していく上での重要なデータとなる。増子康眞氏は、名古屋市鳴海町雷貝塚の土器をまとめるなかで、「本刈谷式」について、半載竹管の沈線文土器と刺突文土器の組成比率で新古に区分されるとし、寺津式と大洞B式、「本刈谷式」と大洞BC式、桜井式と大洞C1式、稲荷山式が並行とした²⁾。東海地方晩期前半土器については、清水天王山式土器との関係を基軸にして、議論が盛んとなっている³⁾。設楽博己氏からも、元刈谷式と大洞BC式の並行関係を考えているとのご教示を得た⁴⁾。

今回の測定結果を見ると、較正暦年代は、SI02住居の炭化材 ANT 1 と SI02床面出土土器付着炭化物 ANT12の結果が良く合致し、1130-1010cal BCにおいて両者の暦年代が重なっている。刺突紋を主体とする点に新しい要素が認められる PIT177出土 ANT 4 は、測定結果ではやや古い年代となっているが、暦年校正すると、確率的には低いが ANT 1・12に重なる時期である1130cal BCの年代が含まれる。よって、元刈谷式の時間的位置は、1130-1010cal BCの年代を含むと考える。北陸地方の御経塚遺跡出土後晩期土器の炭素年代測定を行った山本直人・小田寛貴氏⁵⁾によれば、北陸地方後期末葉の八日市新保式土器(試料番号17OKD16)の付着炭化物の炭素年代は 3030 ± 90 ¹⁴CyrBP、晩期前葉の御経塚式器(試料番号17OKD07)の付着炭化物の炭素年代は 2950 ± 120 ¹⁴CyrBPであり、山本氏は後期と晩期の境を紀元前1000±100年頃としている。玉ノ井遺跡の分析結果からは、晩期の始まりはもう少し古い可能性が考えられる。御経塚遺跡の測定値を、玉ノ井遺跡と同じ解析方法で較正暦年すると、後期末葉試料番号17OKD16の較正暦年は1440-1000cal BC、晩期前葉試料番号17OKD07の較正暦年は1420-890cal BCでほぼ重なってしまう。今後測定結果を増して検討して行く必要があるが、これまでの測定例に今回の測定結果を加味して、晩期の始まりは1130cal BCよりも数十年は古い可能性があるとしておきたい。

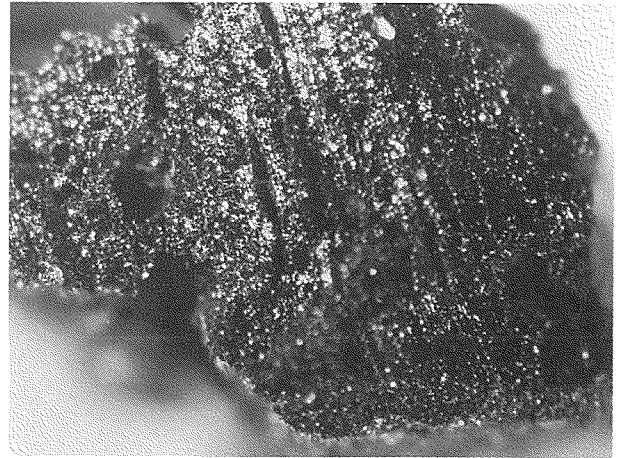
この分析は、日本学術振興会科学研究費 平成13年度基盤研究(A・1)(一般)「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」(代表 今村峯雄)の一部を用いている。

参考文献

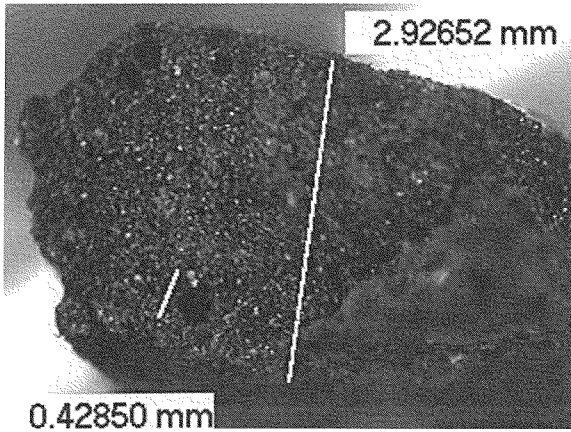
- 1) Stuiver, M., et. al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40(3), 1041-1083.
- 2) 吉田富夫・増子康眞 1966『鳴海のあけぼの』名古屋市文化財論集 名古屋市教育委員会
- 3) 百瀬長秀 2001「清水天王山式の終焉と周辺」『長野県考古学会誌95』をはじめ、戸田哲也、小野正文、奈良泰史らにより、土器群の編年的位置づけに関する議論が行われている。
- 4) 国立歴史民俗博物館の設楽博己氏に、土器についてご教示を頂いた。設楽氏は、清水天王山式の検討を通して、当該土器群の再検討を行いつつある。
設楽博己 1994「清水天王山式土器の成立」『平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果発掘調査報告書(課題番号04301049) 縄紋晩期前葉一中葉の広域編年』
- 5) 山本直人 1999「放射性炭素年代測定法による縄文時代の研究」『名古屋大学文学部研究論集134・史学45』



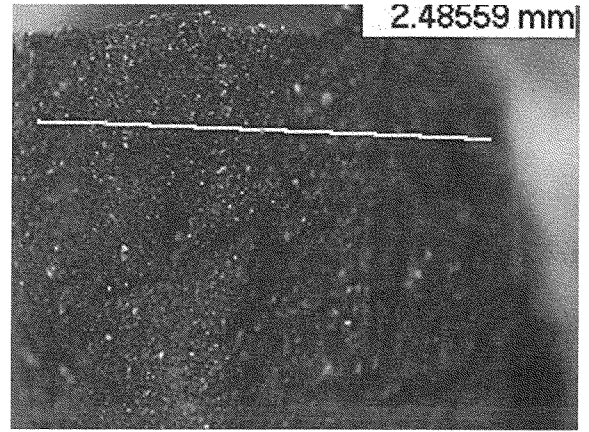
ANT 1 木口40倍



ANT 1 木口17倍



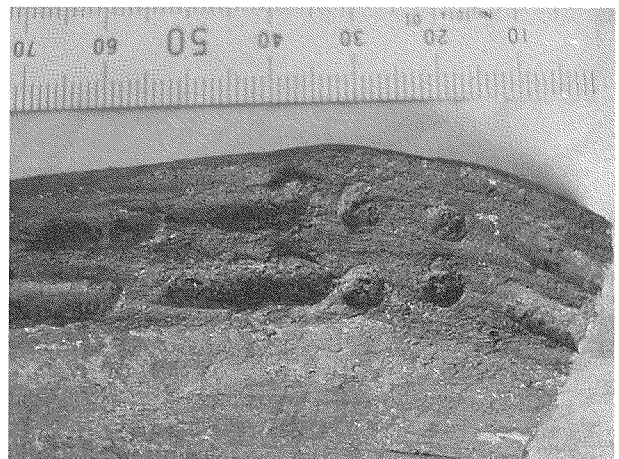
ANT 1 木口15倍



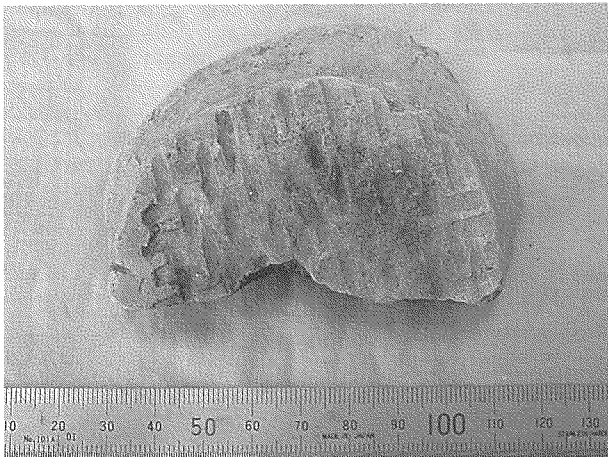
ANT 1 横24倍



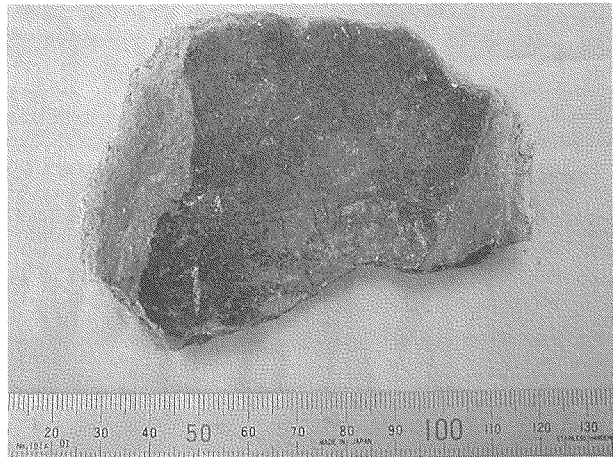
ANT 4 土器



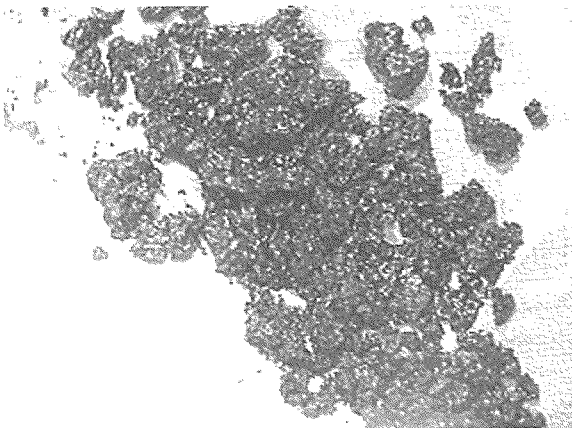
口縁外面炭化物付着状況



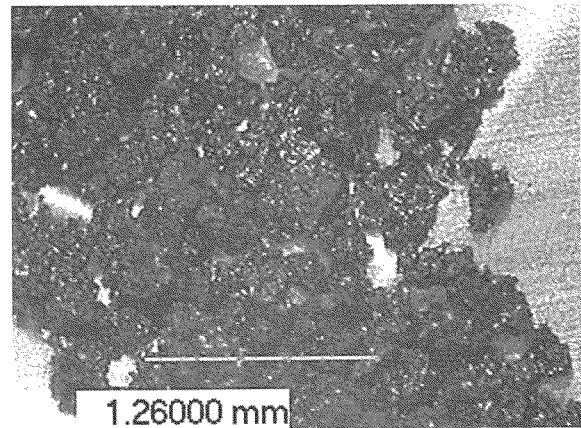
ANT12 年代測定試料



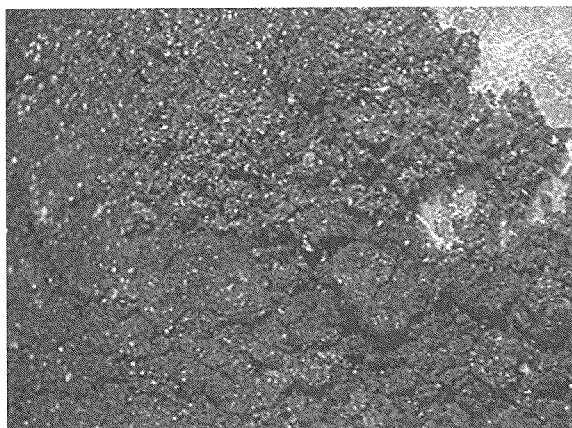
ANT12 底部内面炭化物付着状況



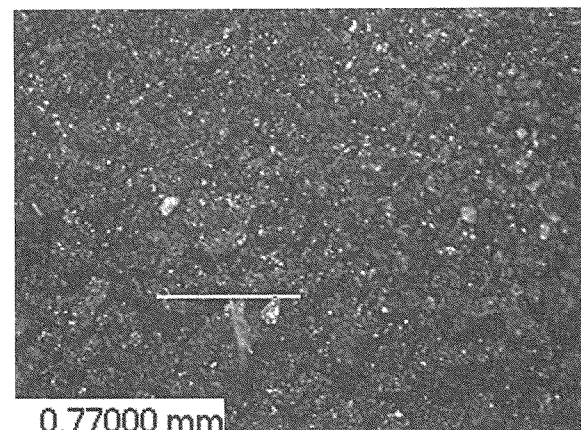
ANT 4 年代測定用炭化物試料AAA処理後11倍



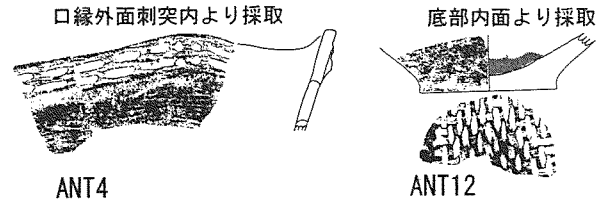
ANT 4 年代測定用炭化物試料AAA処理後24.5倍



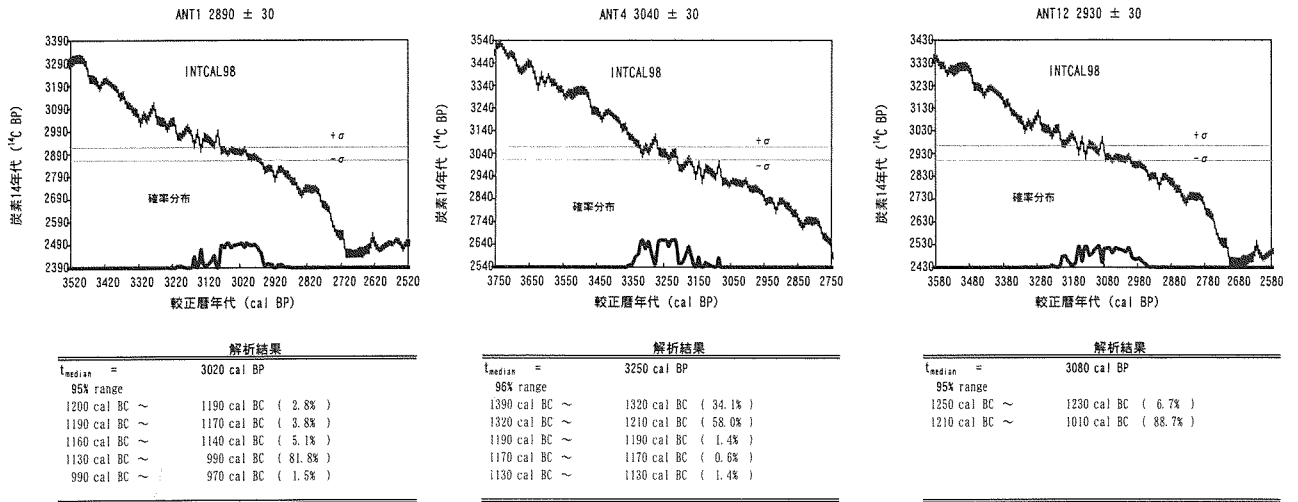
ANT12 年代測定用炭化物試料AAA処理前11倍



ANT12 年代測定用炭化物試料AAA処理後24.5倍



第1図 炭素試料採取土器



第2図 較正暦年確立分布

はじめに

名古屋市の熱田神宮にちかく所在する玉ノ井遺跡から平成14年度の発掘によって縄文時代晩期の人骨が出土した。これらの人骨は、後世の掘り込み等によって多少とも破壊されているものの、残存する部位はおおむね埋葬されたときの位置をたもっていた。骨の保存状態は概して良好である。しかし、地表のちかくに埋まっていたため、顔面頭蓋・椎骨・肋骨・長管骨骨端など繊弱な骨は地中で細片化したものがおおい。また、SK44とSK45のように隣接する土壌でもわずかな位置のちがいで保存状態がことなるものがあった。

小児と成人は土壌に屈葬され、3歳ごろまでの乳児（または死産児）は土器におさめて埋葬されていた。

これらの人骨で観察できた形態は基本的に縄文時代人の特徴をしめしている。また、顎部をのこす成人のすべてに抜歯が観察された。

人骨の概要

人骨に付された番号にしたがって、出土人骨の概略を記す。

○土壌墓1 (SK01a)

性別不明の成人。せまい範囲から規則性のない骨のあつまりとして出土した。列挙すると胸骨、左距骨、左舟状骨、左立方骨、右第1中足骨、右第3中足骨、足指の基節骨2ヶ、手指の末節骨1ヶである。胸骨以外は完全である。すべて成人に由来し、加齢変化（老化）をしめさず、距骨と舟状骨は関節するので、おそらく同一人物に由来する。

○土壌墓2 (SK01b)

熟年（または壮年後期）の女性。大坐骨切痕の形状から女性と判定される。出産を経験した形跡はみられない。歯の咬耗は咬合する歯の有無などにより変異がはげしく、下顎の右第一大臼歯などでは歯頸にたっしている。頭蓋縫合は矢状縫合の内面前半が癒合している。しかし、骨にいちじるしい老化的変化は観察されないので40歳代、あるいはそれよりも若い可能性もある。おそらく抜歯された歯がおおいために残存する歯の咬耗が年齢とは不釣合いにすすんでいるものとおもわれる。抜歯については施術の当座の意味がよく論じられるが、残存する歯の消耗のはげしさをみると、とくに抜歯が多本数におよぶ場合には、寿命を縮めたり、はやくに寸詰まりの老人的顔貌をもたらすなど、ライフ・ヒストリーへのより長期的な影響をかんがえる必要があるようだ。

左大腿骨の最大長は約400mm、右脛骨最大長は342mmで、身長は約152cmと推定される。

仰臥屈葬。頭部は左側を下にして横をむく。下肢は膝をつよく屈曲する立膝、上肢は体側にそい、左手は臍のあたりにのっていた。

○土壌墓 3 (SK01C)

性別不明の成人。右足の骨(第3楔状骨、第2から第4中足骨、基節骨3ヶ、中節骨、末節骨)。土坑墓1とは、右第3中足骨が重複しているので、同一個体ではない。

○土壌墓 4 (SK56)

未成年。切歯は永久歯に生え変わっているが、乳犬歯・乳臼歯は残存するので9歳前後と推定される。成長中であるため性別は判然としないが、恥骨下角や大坐骨切痕の形状は男性であることを示唆する。

一見すると二次埋葬をおもわせる出土状況であるが、せまい土壌に押し込むように埋葬されたものと解釈できる。下肢は股関節を90度、膝関節を180度ちかくにおりまげ、両膝をそろえて体の右側へかたむけている。首は精一杯前屈されていたものが、軟部の腐敗にともなって頭骨が胸郭のうえに倒れこんだのであろう。かなり窮屈な埋葬姿勢であるが、けっして不可能ではない。骨は解剖学的配置にしたがっているので、再埋葬ではない。

○土壌墓 5 (SK06)

壮年または熟年の女性。典型的な仰臥屈葬。下肢は膝をつよく屈して胸にのり、上肢は肘を曲げ手が首のあたりにきている。後頭部を下にする頭部の前半は(後世の削平により)取り去られている。歯は上顎の左第1大臼歯のみが出土した。歯根の分岐部をこえて歯石が付着しているので、歯槽はひどく萎縮していたらしい。身長は推定できないが、縄文時代の女性としては小柄なほうではない。

○土壌墓 6 (SK45)

熟年または老年の女性。年齢の判定はむずかしい。骨は軽く、老人性の骨増殖も所々に観察される。左恥骨結合面は海綿質を露出するが、生理的なものか土中での変化によるものか不明である。頭蓋縫合は癒合していない。歯(抜歯の項参照)の咬耗は歯種により歯根におよんでいるが、咬合する左側の第1大臼歯は上下ともまだ歯冠の半分程度をのこしている。歯がすくなく、上顎が退縮しているので、鼻の下にタテジワのよった老婆を連想させるが、それほどの高齢ではないかもしれない。前耳状面溝があるので出産経験者である。

右大腿骨最大長は397mmで、身長は150cmほどと推定される。仰臥屈葬。頭部はやや持ち上げられている。下肢は立膝が左にやや倒れている。上肢は破壊により不分明だが、体側にそっていたようだ。

脛骨は扁平である。頭頂骨は左右ともに頭頂結節の前方で外板が平面化(中央はやや凹)して(通常の曲面をもつ)内板に接している。左右にほぼ同一の変化がおこっているので、骨折など外因によるものとはかんがえにくく、なんらかの全身的疾患に起因する可能性が示唆される。

○土壌墓 7 (SK44)

壮年(または熟年)の女性。保存状態がわるく十分に観察できていない。大坐骨切痕から女性と判定できる。下肢をつよく屈曲した仰臥屈葬で、上肢は左右とも体側にそっている。

○土壙墓 8 (SK52・53)

壮年の男性。恥骨結合面の形状は27-30歳に相当する。

右を下にした側臥ないし仰臥屈葬。下肢は股・膝関節を十分に屈曲している。左上肢は体側にそう。右上肢の配置は不明である。残存する骨は埋葬時の位置をたもっているが、右上肢を中心に骨格の半分程度が失われている。

○土壙墓 9 (SK58)

壮年の女性。性別は大坐骨切痕から判定したが、年齢についての積極的な証拠はない。頭骨と右上肢を中心とする骨が消失している。仰臥屈葬で、両下肢は膝をつよく曲げた立膝が右に倒れた状態である。左上肢は体側にそい、手根が左寛骨の下にはいる。右上肢については不明である。脛骨はとくに扁平ではないが、蹲踞面をもつ。

○土壙墓10 (SK38)

壮年の男性。大坐骨切痕はやや女性的であるが、頭骨の形態や四肢骨の関節の大きさなどから男性と判定した。鎖骨も長い(右の最大長163mm)。左大腿骨最大長は419mmで、身長は約158cmと推定される。

仰臥屈葬。股関節の屈曲はわずかである。しかし、膝関節は強く屈曲され、足部は尻にしかれている。両膝は脊柱の延長線よりやや右に位置する。左上肢は体側にそい、手は骨盤の下に位置する。右上肢も残存部は体側にそう。首はやや前屈し、頭部はかるく持ち上げられている。

方形の掘り込みによって右上肢の肘から先、右胸郭下部、右腸骨翼などが破壊されている。

○土壙墓11 (SK27)

熟年の女性。側頭骨の乳様突起や下顎骨が小さく、鎖骨が短い(141mm)ので女性と判定される。年齢は下顎に残存する歯の咬耗から熟年と推定した。

すべて完全ではないが頭骨(後頭骨、左頭頂骨、左側頭骨、下顎骨)、脊椎(おもに椎弓)、肋骨、肩帯の骨、右上腕骨近位半、右大腿骨骨頭などが残存する。下半身は失われているので伸展葬か屈葬かは不明であるが仰臥姿勢の埋葬である。後世の遺構構築時に上半身の低い位置にうまっていた骨のみが残されたものようである。伸展葬であれば下肢骨の位置から、ほかの骨とはなれて出土した2片の骨のうち1片は左尺骨の近位半(もう1片は獣骨)で、本人骨のものか他人骨の混入か判断できない。

歯は左上顎第2小臼歯と下顎歯8本が残存する。下顎の左右第3大臼歯は先天性欠如、左右犬歯は抜歯、左右中切歯・右側切歯・右第1小臼歯は死後の脱落である。下顎左第2大臼歯は咬合面の遠心のみが深く磨り減っているため、おそらく上顎の左第1大臼歯は死亡よりずっとまえに脱落していたと推測される。下顎の右第1大臼歯は歯槽膿漏のため歯槽の遠心・頰側・底面から浮いている。この歯の近心面には歯頸部に齶蝕が観察される。

歯の咬耗は縄文時代人の通例のようにつややかな平面をなさず、デコボコ状である。抜けおちた歯がおおいため、上下の歯を水平に擦り合わせるができなくなっていたようである。

本人骨にかぎらず、今回発掘された人骨の歯には咬合面辺縁にエナメル欠け落ちがしばしば観察され

る。食物に砂が混ざったりしたのであろう。

○土墳墓12 (SK22)

歯の萌出状態から4歳前後と推定される。下顎では第2乳臼歯は咬合面にたつする直前、永久歯の第1大臼歯は歯冠が完成し、歯根の形成がはじまったばかりの状態である。性別は不明。

後世の掘り込みの周囲から頭骨の一部と、四肢骨・肋骨の破片が出土した。頭骨のうち原位置をたもっている右側頭骨を中心とする部位は頭蓋内面を上に向けているので、すくなくとも頭部は仰臥姿勢の埋葬である。骨の分布範囲がせまいので、おそらく屈葬であろう。

○土墳墓13 (SK15)

性別不明の成人。左右の前腕と手が出土した。埋葬にあたって、仰臥の姿勢で上肢を体側によこたえていたと推定される。前腕は回内され、手のひらを土壇の床につけていた。ほかの部位が破壊されたときに、左右上肢の肘から先だけが残ったのは、これらが胴に載せられたりせず低い位置に埋まっていたからであろう。左の橈骨最大長は235mmあり、身長は藤井の式から男性なら約161cm、女性なら約157cmと推定される。

○土器棺墓1 (U1)

新生児（または満期ちかくの流・死産児）。下顎歯の歯冠形成は新生児に相当するが、長骨骨幹長は鎖骨が約40mm、大腿骨が約75mmと新生児としては小さめである。性別については、左の腸骨が観察できるが、大坐骨切痕は女性的であるのにたいして耳状面は男性的であり、判然としない。

土器（棺）の壁面に胸郭の骨格が解剖学的な位置をたもって密着した状態で出土した。土器の内面に背をもたれさせた坐葬と推測される。

○土器棺墓2 (SK55、U2)

乳児。左大腿骨骨幹長は109mmで、生後6ヶ月ぐらいである。腸骨の形態は男性的である。土器棺に仰臥屈葬されていたようである。攪乱により多くの骨がうしなわれているが、下半身と左上肢の主要な骨が解剖位をたもって残存している。下肢は膝をつよく屈曲し腹部にのせられていた。左上肢は体側にそって伸展されている。

○土器棺墓3 (SK51)

土器棺に屈葬された幼児。四肢をまげて胴にのせ、頭部は左側を下にして横をむく。下顎の歯の萌出状態は3歳前後を示唆する。いっぽう、骨幹の長さは右尺骨が100mm、左大腿骨が149mmと、3歳にしてはみじかい。大坐骨切痕はすでに湾曲がつよく男性を示唆する。

今回の出土した人骨群では、本人骨の3歳前後とSK22の4歳前後を境界にして、埋葬に土器を使用するかどうかきれいに分かれているのは興味深い。この年頃に起きそうなことといえば離乳ぐらいしか思い浮かばないが、縄文人は離乳になにか特別な意味をあたえていたのであろうか。

抜歯

切歯、犬歯、小白歯で歯槽が閉鎖している場合を風習的抜歯であると判定した。この基準によって抜歯をあきらかにできた骨格は以下のとおりである。

- ・土壙墓2は上顎の左右犬歯・第1小白歯、下顎の左右犬歯、左第2小白歯、右第1小白歯と切歯1本(おそらく左中切歯)で、上顎4本、下顎5本、合計9本の抜歯をうけている。
- ・土壙墓10の抜歯は上下顎左右の第1小白歯・犬歯、それに下顎左の中切歯、合計9本である。
- ・土壙墓8は下顎の左右中切歯と左側切歯の合計3本を抜いている。上顎は抜歯されていない。

顎の一部しか観察できなかったけれども、観察できた部位に抜歯をみとめたものは以下のとおりである。

- ・土壙墓11の上顎は観察できないが、下顎骨は左右の犬歯を抜歯されている。
- ・土壙墓7は下顎の右第3大臼歯から左の犬歯歯槽部までを観察できる。この部分で歯槽が閉鎖しているのは左右の犬歯と右第2小白歯である。この下顎骨右側の犬歯と第2小白歯を抜くパターンは土壙墓2の下顎骨の左側とおなじである。右の上顎については不分明だが、おそらく犬歯が抜歯されているようである。

あきらかに抜歯をうけているが、抜歯以外の原因で脱落したとおもわれる歯もおおいため、どの歯が抜歯されたかを特定することが困難なものは以下のとおりである。

- ・土壙墓6の上顎第2・第3大臼歯は左右とも、上顎骨の後方が破損しているため確実ではないが、おそらく生前に脱落。それより近心では、左上顎に第1大臼歯、第2小白歯、犬歯(歯槽のみ)、中切歯が存在する。右上顎は中切歯のみ残存し、側切歯から第1大臼歯までの歯槽はすべて閉鎖している。

下顎で歯または歯槽が残存するのは左の第1大臼歯、第2小白歯、側切歯、右の側切歯(歯槽のみ)、第2小白歯である。下顎の左右中切歯については、あさい溝が歯槽突起上面の唇側を斜行している。2本の中切歯がまともに植立していた形跡はないが、それらが確実に脱落していたと即断することも躊躇される。ほかの9本の歯は歯槽が完全に閉鎖している。

まとめ

玉ノ井遺跡から9人の成人が出土した。その性別は男性が2人、女性が6人、性別不明が1人であった。未成年者は5人で、それぞれ9歳、4歳、3歳、0.5歳、0歳前後と推定された。ほかに番号を付された部分骨格が2ヶあった。

埋葬姿勢は判明するかぎりには屈葬であった。つまり下肢はつねに、程度のちがいはあるが、屈曲されていた。いっぽう、上肢は体側に伸展されたものが大半であった。

今回出土の人骨群では、埋葬にあたって遺体を土器に納めるかどうか、つまり通常の土壙墓と土器棺墓のさかい目が3歳と4歳にあいだにあって、重複することがなかった。3歳ぐらいまで(SK51、U1、U2)は土器棺墓に埋納し、4歳ごろ(SK22)からは土壙に埋葬された。例数がすくないので、これを過大に評価すべきではないが、それなりに重要な知見といえよう。

顎部を観察することのできたすべての成人に抜歯がみられた。上顎と下顎を区別しても、成人で抜歯が

みられなかったのはSK52-53の上顎のみであった。抜歯が高率に施行され、多本数におよび、様式が多様であることは、いずれも東海地方の縄文時代晩期遺跡に共通する特徴である。思春期の人骨がなかったことで抜歯の施行年齢について知見を与えることはできなかった。9歳前後と推定したSK56には、まだ乳歯がのこっているのが当然ともいえるが、抜歯は観察されなかった。

謝 辞

最後に、貴重な研究の機会をあたえてくださった額額茂氏をはじめとする名古屋市見晴台考古資料館の方々と歯の鑑定でお世話になった茂原信生氏に感謝します。

玉ノ井遺跡貝層ブロック・サンプリングについて

稲田 望子

1. はじめに

玉ノ井遺跡第3次調査において広範囲にわたる縄文時代の貝層が検出された。SK01とSB02北側でそれぞれブロック・サンプリングを行ない（第9・10図）、水洗選別を行なった結果を以下の通り報告する。

まず、採取資料数についてだが、SK01で8資料（カット1～8）を採取した。しかし様々な限られた状況の中で全てを水洗選別していくことが困難と判断、やむを得ず各資料から一定量（6,000cc）を抜き出し（抜き出しカット1～3）全てを水洗したカット1～3（各タテ40cm×ヨコ40cm×厚さ10cm）の選別結果と比較を試みた。その結果、抜き出しカット1～3とカット1～3の貝類の種類や腹足綱と斧足綱の割合などに大きな相違が見られなかったため、抜き出し資料（カット1～8）を有効資料として活用することとした。また、SB02北側では2資料（各タテ30cm×ヨコ35cm×厚さ10cm）を採取した。よって合計で13資料の結果である。

また水洗は10mm、5mm、3mm、1mm目のフルイを使用したフローティングである。

2. 水洗選別の結果

各資料から自然遺物と人工遺物を検出した。自然遺物は貝類が全部で23種8科（種の不明なもの）と陸産微小貝（キセルガイ科を含む）を検出した。この他に動物骨片、植物片(?)など。人工遺物は土器片、炭化物片、石器片などである（以上表1～4）。なお、動物骨片についてはその鑑定等を名古屋大学博物館新美倫子氏に依頼、玉稿をいただいたので本稿ではふれない。

2-1. 自然遺物〈貝類について〉

SK01：カット1～8はSK01の上層から順番に番号をつけ採取した。カット4を除く7資料で約14～35%が腹足綱（巻貝類）。約64～86%が斧足綱（二枚貝類）とかなりの割合を占める。腹足綱の中ではアカニシやイボニシといったアクリガイ科が多く、割合の約半数以上を占める。斧足綱ではハマグリ、オキシジミ、オオノガイ、シオフキが多く見られる。

ところが、カット4のみ割合が逆転し、約69%が腹足綱、約31%が斧足綱となる。腹足綱のイボニシが約48%とまともって検出。またこのカット4より上の層ではツメタガイが検出されるが下の層では検出されない結果となった。

腹足綱	Class GASTROPODA
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> GROSSE
イボニシ	<i>Thais clavigera</i> KUSTER
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> LISCHKE
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i> A. ADAMS
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> BRUGUIERE
ホソウミニナ	<i>Batillaria cumingii</i> GROSSE
ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> RODING
アラムシロ	<i>Hinia festiva</i> POWYS
キサゴ	<i>Umbonium (Suchium) costatum</i> KIENER
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> LAMARCK
タマキビ	<i>Littorina brevicula</i> PHILIPPI
スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i> RE-CLUZ
アクリガイ科	Muricidae sp.
ウミニナ科	Potamididae sp.
タマガイ科	Naticidae sp.
タニシ科	Cipangopaludina sp.
斧足綱	Class PELECYPODA
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> RODING
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> GMELIN
アサリ	<i>Tapes Amygdala japonica</i> DE-SHAYES
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i> REEVE
オオノガイ	<i>Mya Arenomya arenaria oonogai</i> MIYAMA
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> THUNBERG
イワガキ	<i>Crassostrea nipponia</i> SEKI
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
マテガイ	<i>Solen strictus</i> GOULD
アカマテガイ	<i>Solen gordomis</i> YOKOYAMA
ウネナシマヤガイ	<i>Trapezium Neotrapezium japonicum</i> PILSBRY
マルスダレガイ科	Veneridae sp.
バカガイ科	Mactridae sp.
マテガイ科	Solenidae sp.
フネガイ科	Arcidae sp.

表1 貝類種名一覧

種名	カット1		カット2		カット3		カット4		カット5		カット6		カット7		カット8		計	%		
	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数	左殻/右殻	最小個体数				
アカニシ		4	3.36	4	4.17	4	4.30	10	9.71	9	9.38	9	12.00	4	8.00		44	6.81		
イボニシ		5	4.2	4	4.17	13	13.98	49	47.57	17	17.71	8	10.67			1	97	15.02		
アキガイ科		1	0.84			1	1.08	6	5.83	1	1.04			2	4.00		9	1.39		
フトヘナタリ		2	1.68	1	1.04									+			5	0.77		
フトヘナタリ片		+															+			
ホソワミナ		1	0.84			1	1.08			1	1.04	2	2.67	1	2.00		1	0.15		
ウミニナ		+		+				1	0.97			+					5	0.77		
ウミニナ科		4	3.36	10	10.42	6	6.45							+			1	0.15		
ツメタガイ		1	1.04	1	1.04	7	7.53	5	4.85	1	1.04						20	3.1		
アラムシロ										1	1.04						14	2.17		
キサゴ																	1	0.15		
イボキサゴ																	1	0.15		
タマキビ												1	1.33				1	0.15		
不明のもの										+							+			
巻貝の蓋						1	1.08													
小計		17	14.28	20	20.84	33	35.50	71	68.93	30	31.25	20	26.67	7	14.00	2	14.28	200	30.93	
ハマグリ	45/51	51	42.86	36	37.50	14/13	15.05	12/9	11.65	33/34	35.42	32/25	42.67	21/27	54.00	4/8	57.14	214	33.17	
オキシジミ	13/21	21	17.65	17	17.71	16/9	17.20	5/2	4.85	1/1	1.04	1/3	4.00	2/-	4.00		65	10.06		
アサリ										1/-	1.04							1	0.15	
マルスグレガイ科	-/4	4	3.36	2	3.13			-/1	0.97			1/-						9	1.39	
(不明のもの)				2																
マルスグレガイ科				3		1	1.08													
(左右不明のもの)			1	1																
シオフキ	2/-	2	1.68	3	3.13	8/1	8.60	3/1	2.91	3/4	4.17	5/3	6.67	3/2	6.00	2/1	14.29	30	4.65	
ハカガイ科						1	1.08			+								1	0.15	
ハカガイ科片																				
オオノガイ	20/12	20	16.81	15	15.63	19/16	20.43	7/7	6.80	10/11	11.46	9/3	12.00	4/7	14.00	1/-	7.14	89	13.78	
ヤマトシジミ	4/2	4	3.36	1	1.04													5	0.77	
マガキ				1	1.04	1	1.08	3/4	3.88	15/8	15.63	1/3	4.00	4/3	8.00	1/1	7.14	29	4.49	
マテガイ				1	1.04	1	1.08	3/4	3.88			-/1	1.33					1	0.15	
マテガイ片										+		1/-	1.33					1	0.15	
小計		102	85.72	76	79.18	60	64.52	32	31.06	66	68.76	55	73.33	43	86.00		12	85.71	446	69.05
合計		119	100	96	100.02	93	100.02	103	99.99	96	100.01	75	100.00	50	100.00		14	99.99	646	99.98
微小貝		70		59		43		24		45		17		32		9	299			
キセルガイ科		2																		
骨片		+		+				+											2	
植物片(?)																			+	
不明のもの						1				4		1		1					2	
土器片		26		8		3				2		1		2					10	
炭化物片		16		11		18		21		19		34		22		3			39	
石(下呂石)				1															144	
																			1	

表2 SK01 (抜き出しカット1~8) 検出遺物構成表

種名	カット1		カット2		カット3		計	%				
	左殻/石殻	殻小個体数	左殻/石殻	殻小個体数	左殻/石殻	殻小個体数						
腹												
アカニシ		23	4.34	27	4.27	97	8.79	147	6.48			
アカニシ片		+						+				
イボニシ		13	2.45	13	2.05	93	8.42	119	5.25			
イボニシ片		+						+				
フトヘナタリ		7	1.32	12	1.90	21	1.90	40	1.76			
フトヘナタリ片		+						+				
イボウミナ		4	0.75	2	0.32	5	0.45	11	0.49			
ウミニナ		1	0.19	3	0.47	5	0.45	9	0.40			
ウミニナ片		+				6	0.54	7	0.31			
ウミニナ科		22	4.15	62	9.79	118	10.69	202	8.91			
ツメタガイ		+						+				
タマガイ片						1	0.09	1	0.04			
タマガイ科		4	0.75	10	1.58	25	2.26	39	1.72			
アラムシロ						1	0.09	1	0.04			
キサゴ		2	0.38	1	0.16	5	0.45	8	0.35			
キサゴ片		1	0.19	14	2.21	2	0.18	17	0.75			
タニシ科		1	0.19	1	0.16	1	0.09	4	0.18			
巻貝の蓋		1	0.19	2	0.32	1	0.09	4	0.18			
不明のもの								1	0.04			
小計		78	14.71	148	23.39	380	34.40	606	26.72			
ハマグリ		252/253	47.74	216/225	35.54	271/257	24.54	749	33.04			
オキシジミ		87/94	17.74	79/77	12.48	179/180	16.30	353	15.57			
アサリ						2/1	0.18	2	0.09			
マルスグレガイ科 (不明のもの)		4/5	1.70	6/4	1.90	1/3	0.91	31	1.37			
マルスグレガイ科 (左右不明のもの)		7÷2	4	12	18÷2	13÷2	10	7				
シオフキ		7/10	1.89	12/14	2.21	37/33	3.35	61	2.69			
バカガイ科 (不明のもの)		1/-	0.19			3/5	0.54	7	0.31			
バカガイ科 (左右不明のもの)						2÷2	1	0.04				
オノノガイ		63/43	11.89	144/136	22.75	194/182	194	17.57	401	17.69		
ヤマトシジミ		17/16	3.21	4/2	0.63			21	0.93			
マガキ		3/2	0.57	6/1	0.95	20/-	20	1.81	29	1.28		
イワガキ				-/1	0.16			1	0.04			
マテガイ												
マテガイ片								+				
マテガイ科								2/4	4	0.36	4	0.18
マテガイ科?		1÷2	0.19					1	0.04			
フネガイ科		1÷2	0.19					1	0.04			
小計		452	85.31	485	76.62	724	66.56	1661	73.31			
合計		530	100.02	633	100.00	1104	99.96	2267	100.03			
網								+				
キセルガイ科		7						+	7			
骨片		+						+	+			
植物片(?)									0			
不明のもの		1							1			
土器片		73							123			
炭化物片		74							144			
石器片									2			

表3 SK01 (カット1~3) 検出遺物構成表

種名	カット1		カット2		計	%			
	左殻/石殻	殻小個体数	左殻/石殻	殻小個体数					
腹									
アカニシ		53	14.40	41	9.17	94	11.3		
アカニシ片		+				+			
イボニシ		4	1.09	5	1.12	5	0.61		
フトヘナタリ		1	0.27	4	0.89	8	0.98		
ウミニナ		2	0.54	2	0.45	3	0.37		
ウミニナ科		5	1.36	4	0.89	9	1.10		
アラムシロ		1	0.27	2	0.45	2	0.25		
キサゴ						1	0.12		
キサゴ片						1	0.22	2	0.25
小計		67	18.20	59	13.19	126	15.46		
ハマグリ		232/203	63.04	218/262	58.61	494	60.61		
オキシジミ		17/18	4.89	23/22	5.15	41	5.03		
アサリ		2/-	0.54	3/2	0.67	5	0.61		
マルスグレガイ科 (不明のもの)		1/2	1.36	5/1	2.01	14	1.71		
マルスグレガイ科 (左右不明のもの)		5÷2	3	8÷2	4	9			
シオフキ		14/12	3.80	39/49	10.96	63	7.73		
バカガイ科 (不明のもの)		6/-	1.63	7/2	1.57	13	1.6		
オノノガイ		5/3	1.36	4/7	1.57	12	1.47		
マガキ		14/5	3.80	20/7	4.47	34	4.17		
マテガイ		2/2	0.54		0.25	2	0.25		
マテガイ科				3/-	0.67	3	0.37		
マテガイ科?		+		1/4	0.89	4	0.49		
ウテナントマヤガイ		-/3	0.82	1/-	0.22	4	0.49		
小計		301	81.78	388	86.79	689	84.53		
合計		368	99.98	447	99.98	815	99.99		
網						+			
キセルガイ科						+	0		
骨片						+	+		
植物片(?)							0		
不明のもの						1	1		
土器片		20				16	36		
炭化物片		51				59	110		
石器片		1				1	1		

表4 SB02北側 (1・2) 検出遺物構成表

SB02北側：資料1・2ともに検出された種はSK01とあまり変わらない。腹足綱が約15%前後で斧足綱が約80%以上である。腹足綱の中ではアカニシが多く、他にツメタガイやフトヘナタリなどのウミニナ科が検出される。斧足綱ではハマグリが圧倒的に多く約60%を占める。SK01と比較して割合に片寄りが見られた。他には順にオキシジミ、シオフキ、マガキなどが検出される。

2-2. 人工遺物

SK01、SB02北側ともに土器片、多数の炭化物片、石器片(下呂石含む)を検出する。今回の発掘調査では多数の骨角器・骨角製品が出土しており、ブロック・サンプリング資料の中からの検出も期待したが結果は得られなかった。

3. まとめとして

今回のブロック・サンプリング資料は、名古屋台地の縄文時代の遺跡ということ考えると非常に恵まれたと言え、全ての資料で残存状態がすこぶる良好であった。ハマグリやアサリなどの殻表模様が見てとれるものも多数ある。これを受けてか、近年ブロック・サンプリングをした三王山遺跡(弥生時代後期)、西志賀遺跡(弥生時代中期後半後期前半)、春日野遺跡(中世)などで検出された内湾水域に生息する、感潮域群集のヤマトシジミ・フトヘナタリ、干潟群集のオキシジミ、内湾泥底群集のアカニシ、内湾砂泥底群集のハマグリ・オオノガイ・ウミニナ、内湾岩礁性群集のマガキなどの代表的な貝に加えて、タマキビやキサゴといった湾の外側、沿岸水域に生息するような貝を選別できた。

今後の課題は、貝層ブロック・サンプリング資料の増加と、時代ごとの相違や遺跡の立地場所による相違の検討、貝自体の成長線分析や使用痕の有無の検討などを試み、当時の環境や生業の復元の一助となるような成果を積み重ねていくことにある。

参考文献

- 水野裕之他『埋蔵文化財調査報告書30 三王山遺跡(第1～5次)』名古屋市教育委員会 1993
- 伊藤正人他『埋蔵文化財調査報告書39 西志賀遺跡(第2次)』名古屋市教育委員会 2001
- 伊藤正人他『埋蔵文化財調査報告書39 春日野遺跡(第3次)』名古屋市教育委員会 2001

玉ノ井遺跡 3 次調査出土の動物遺体

名古屋大学博物館 新美倫子

玉ノ井遺跡 3 次調査では墓坑等の遺構内で貝層が検出された。それらから出土した動物遺体のうち、ここでは貝類以外の資料について報告する。貝類以外の資料では魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が出土しており、これらには発掘時に目に付いた資料を取り上げたものと、貝層を土ごと取り上げたブロックサンプルから抽出されたものがある。出土量はあわせてコンテナ (34cm×55cm×15cm) に約3箱分であり、その大部分は哺乳類であった。資料の所属時期は大部分のものが縄文時代晩期であるが、一部はそれ以降と考えられる。ここでは、魚類についてはブロックサンプルの内容を中心に述べ、爬虫類・鳥類・哺乳類については発掘時に取り上げられた資料の内容を報告することとした。表 1 に出土種名を示し、表 2～5 に出土内容を示した。

なお、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、名古屋市教育委員会の伊藤厚史氏と頼瀬茂氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。また、名古屋大学大学院生の北川千織氏には資料の集計を手伝っていただいた。ここに感謝いたします。

1、魚類 (表 2)

ブロックサンプルは、SK01と SB02の埋土中の貝層部分でそれぞれ底面が40cm×40cmと30cm×35cmの柱状に採集されている。SK01・SB02サンプルは、それぞれ上から順に10cmずつを1カットとしてNoをつけて採集され、各カットごとに1mm目のふるいを用いて動物遺体が水洗選別・抽出されている。SK01サンプルでは上からカット 1～8 の 8 サンプル (それぞれ縦40cm×横40cm×厚さ10cm) が、SB02サンプルでは上からカット 1・2 の 2 サンプル (それぞれ縦30cm×横35cm×厚さ10cm) が採集されているが、時間的な制約のためにこれらに含まれていた魚骨のすべてを分類することはできなかった。そこで、今回はそのうちで最も出土魚骨量の多い SK01サンプルのカット 3 の内容を報告することにする。残りの資料についても、機会を改めて報告したいと思う。

種を同定することのできた資料240点中ではスズキが89点と最も多く、次に多いのがアイゴ類で44点であり、以下多い順にフグ類25点、イワシ類21点、カレイ類15点、ヒラメ10点、コチ類 8 点、アジ類 8 点、サメ類 5 点、サヨリ類 3 点、サバ類・エイ類・フナ類・マス類が 2 点ずつ、タイ類・アナゴ類・ウナギ・マグロ類が 1 点ずつ出土している。これらの他に種不明資料が、体長が10数cmと思われる小さな個体を中心に154点残ってしまった。

スズキは頭部の部位が56点と椎骨が33点出土した。これらには体長40cm程度の方骨も 1 点含まれていたが、それ以外の資料は10数cm～35cm程度の個体のものであり、小さなものが多い。アイゴ類は鰓蓋骨 1 点と椎骨43点が見られ、鰓蓋骨は体長26cmのシモフリアイゴ現生標本より少し大きい、椎骨は標本よりひとまわり小さいものがほとんどであった。椎骨側面の形態はシモフリアイゴと非常によく似ている。

フグ類は歯板・関節骨・方骨と椎骨が出土しており、比較的大きな歯板も見られたが、大部分の資料は体長21.5cmのトラフグ現生標本と同程度の大きさであった。イワシ類は椎骨のみが見られ、体長10数cmのものが多い。カレイ類は体長30cm程度の資料が多いが、10数cm～20cmほどの小さな個体も見られた。ヒラメは体長30～60cmの小～中型個体である。

コチ類は体長10～20cm程度の小さな個体であり、アジ類も体長15cm前後の小アジである。サメ類はホシザメタイプの椎骨が見られた。サヨリ類は体長20～30cm弱程度である。サバ類は体長10cm台の小型の個体であり、フナ類も小さな個体であった。マス類は体長が20cm弱の個体であろう。タイ類については、発掘時にはマダイやクロダイの大型の前上顎骨・歯骨などがしばしば目についたが、ブロックサンプル中の出土量は少なかった。マグロ類は小型のものである。

2、爬虫類

カメ類が24点見られた。これらの多くはウミガメ類で、四肢骨破片7点と背甲片5点・腹甲片5点・背甲または腹甲片1点が出土した。陸ガメ類は背甲片4点と腹甲片2点が見られ、腹甲片の一部分は焦げていた。

3、鳥類（表3）

鳥類の出土量は少なく16点であった。このうち、種の判明した資料はキジ類2点、カモ類2点、カイツブリ類1点の計5点である。キジ類は上腕骨と中手骨、カモ類は中小型種の上腕骨と中型種の尺骨、カイツブリ類は鳥口骨が見られた。カモ類の中小型種とした資料はマガモよりは小さいが、ミコアイサよりは大きい種であり、中型はマガモ程度の資料である。種不明破片のうち、1点は骨質から見て幼鳥のものである。

4、哺乳類（表4・5）

哺乳類は陸獣類が823点と海獣類が1点出土している。陸獣類の大部分はシカとイノシシであり、シカが288点、イノシシが47点、シカまたはイノシシの椎骨・肋骨等が392点見られた。シカは角破片や角座骨等の44点を除いても211点出土しており、シカの割合が高い点が当遺跡の資料の特徴である。全身の部位が見られ、同じ愛知県の縄文時代晩期の伊川津遺跡出土資料と比べると、いずれの部位も小さい資料が多かった。同様の傾向は愛知県の弥生時代の朝日遺跡でも見られる（新美2000）。中手・中足骨は後面が骨角器として利用された後の残片が多く、角にも加工品として利用するために切り取られたあとを持つものが目立った。イノシシも全身の部位が見られたが、シカとは異なり現生標本よりも大きな資料が多い。頭蓋骨や下顎骨・環椎の資料数が少ないのではっきりしたことはわからないが、家畜化に伴うと思われる形質の変化は見られなかった。

シカ・イノシシ以外にはイヌ・ウマ・ウシなどが見られた。イヌは6点の資料が散乱した状態で出土した。このうち5点は現代柴犬標本と同程度かやや小さい資料で、縄文犬のものであろう。残りの幼獣の上腕骨1点には解体痕があり、中型犬のものと思われる。これは形質から見て中世以降の資料である可能性が高い。ウマは4点、ウシは2点が出土し、ウマの大腿骨には解体痕が見られた。これらは出土状況から古代～中世に属するものと思われる。ウシの完存大腿骨は長さ32.8cm±であった。他にはタヌキ・ウサギ・ムササビ・モグラ類が1点ずつ出土し、種不明陸獣破片が80点見られた。また、陸獣以外では種不明海獣類破片1点と、細かく割れているために陸獣か海獣の区別もつかない種不明破片が4点出土した。

〈引用文献〉

新美倫子 2000「朝日遺跡出土の動物遺体」『朝日遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター、438-457頁

- | | |
|---------|-----------|
| I 魚類 | II 爬虫類 |
| 1 サメ類 | 1 カメ類 |
| 2 エイ類 | |
| 3 イワシ類 | III 鳥類 |
| 4 ウナギ | 1 キジ |
| 5 アナゴ類 | 2 カモ類 |
| 6 マス類 | 3 カイツブリ類 |
| 7 フナ類 | |
| 8 サヨリ類 | IV 哺乳類 |
| 9 スズキ | 1 モグラ類 |
| 10 アジ類 | 2 ノウサギ |
| 11 タイ類 | 3 ムササビ |
| 12 サバ類 | 4 ホンドタヌキ |
| 13 マグロ類 | 5 ニホンイノシシ |
| 14 アイゴ類 | 6 シカ |
| 15 コチ類 | 7 イヌ |
| 16 ヒラメ | 8 ウシ |
| 17 カレイ類 | 9 ウマ |
| 18 フグ類 | |

表1 出土動物種名

種	部位・出土量
キジ類	上腕骨右中間部 1 中手骨左 1
カモ類(中小型)	上腕骨左下 1
カモ類(中型)	尺骨右上 1
カイツブリ類	烏口骨左 1
種不明(大型)	橈骨中間部 1
種不明	破片10
計	16

註 表2参照。上：近位端、下：遠位端。
上・中間部・下のないものはほぼ完存。

表3 鳥類出土量

種	部位	椎骨	前上顎骨	上顎骨	歯骨	関節骨	方骨	鰓蓋骨	その他	計
スズキ		33	L5、R6	L3、R6	L7、R4	L3、R6	L4、R5	L2、R1	鋤骨4	89
アイゴ類		43					R1			44
フグ類		11	L3、R1		L3、R2	R2	L1、R1		歯板破片1焼	25
イワシ類		21								21
カレイ類		13	L1、R1							15
ヒラメ		8				R1	R1			10
コチ類		7		R1						8
アジ類		8								8
サメ類		5								5
サヨリ類		3								3
サバ類		2								2
エイ類		2								2
フナ類		2								2
マス類		2								2
タイ類		1								1
アナゴ類		1								1
ウナギ		1								1
マグロ類		1								1
種不明		147	L1	L1、R2	L1		L1、R1			154/394
同定不可破片		208								208

註 L：左、R：右、焼：焼けた資料。

表2 魚類出土量

種	部位・出土量	計
シカ	後頭骨左(後頭顆あり)+側頭骨左1、後頭顆右1、頭蓋骨破片6 切歯骨左1、右1 環椎2、軸椎3、肩甲骨左4、右3、破片1 上腕骨中間左1、1焼、右1幼、下左2、右1、1若(骨端なし) 橈骨上左3、1焼、右4、中間右1、下左1、右1若(骨端なし) 尺骨左2、1若、上1、右2、寛骨(腸)左2、右2、(坐)右1 (腸+坐)左1 大腿骨上左2若(骨端なし)、右1、中間左3、右1、1若 下左2、右1、若1(骨端のみ)、若1焼(骨端のみ) 脛骨上左2、若1(骨端のみ)、右2、中間左3、右1、下左1 距骨左1、右5、踵骨左10、右8、1焼、1若 中手・中足骨中間破片20、下2、1焼、若2(骨端のみ) 中手骨上左3、右3、1焼、中間1、破片15、下3 中足骨右若1、上左2、右1、中間2、破片19、下3、若1(骨端なし) 基節骨7、下1、1焼、中節骨10、1若、末節骨3、手・足根骨1 四肢骨破片2、椎骨3 角座骨左2、角座骨+角左1、右3、角座部分左2(落角、うち1は焼) 右3(落角)、角破片29、4焼	255
イノシシ	頭蓋骨破片4 環椎2、肩甲骨左2、右1、上腕骨中間左1、右3、下左1 橈骨上右1、中間右1、下左1若(骨端なし) 寛骨(腸)左1、大腿骨上左1、中間右1 脛骨上左1若(骨端のみ)、下右1、1若(骨端なし) 腓骨中間左2、右1、左右不明1、膝蓋骨左1、距骨右1、踵骨右1、1焼 中手・中足骨1、上1、下1、基節骨1、末節骨1、椎骨1	37
シカ or イノシシ	上腕骨中間右4、中間破片1、四肢骨破片279、13焼、椎骨5、6若 手・足根骨3、肋骨破片39、破片42	392
イヌ	上C右1、上腕骨左1、下1幼(骨端なし)、橈骨中間左1 大腿骨下左1、椎骨1	6
ウマ	上P3 or P4右1、下P2右1、下P3 or P4右1、大腿骨中間右1	4
ウシ	大腿骨左1、脛骨上左1	2
その他 の陸獣	ウサギ脛骨下右1、モグラ上腕骨左1、タヌキ下顎骨左1(歯なし) ムササビ上I1右1、種不明破片79、1焼	84
海獣	破片1	1
不明	破片4	4
計		785

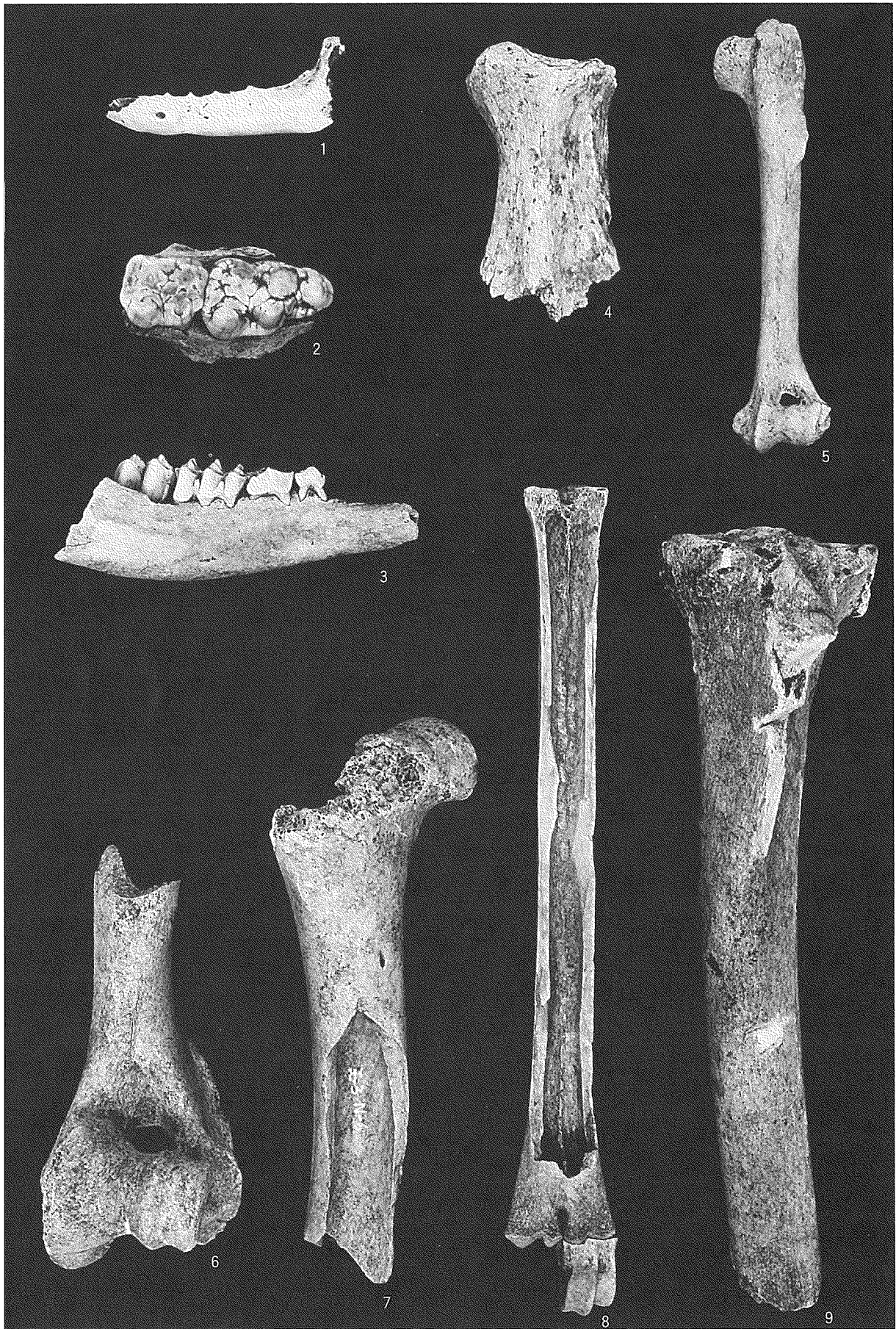
註 表2・3参照。C：犬歯、P：前臼歯、Pに伴う数字は歯の順番を示す。腸：腸骨部分、
坐：坐骨部分、中間：中間部、幼：幼獣、若：若獣、幼・若のないものは成獣。

表4 哺乳類出土量(シカ・イノシシの上顎・下顎以外)

種	部位・出土内容	計
シカ	上顎骨右(M12)かなり摩滅 上M3左1 下顎骨左(××××P①②③M12③)若、M3萌出始め、m3あり 左(×××××P23M123)M3最後まで摩滅 左(P12×) 左(×)P1部分 左(P3M1)かなり摩滅 左(M1)若、M1少し摩滅、M2萌出途中でであろう 左(M1)かなり摩滅 右(××××)I1~C部分 右(m123M①)幼、M1萌出途中 右(m123M1)幼、M2は歯槽開くか 下M2右2、下顎関節突起左1幼、右1、1焼、2若、下顎骨破片14	33
イノシシ	上顎骨右(M23)、下顎骨左(C)♂若? 上I1左2、下i2右1、下C右1♂、下C破片1♂、下顎骨破片3	10
計		43

註 表2~4参照。I：切歯、M：後臼歯、i：乳切歯、m：乳臼歯。×は歯が脱落していることを示し、○
は歯が未出または萌出途中であることを示す。

表5 シカ・イノシシの上顎・下顎出土量



動物遺体 (約 2/3)

1. タヌキ下顎骨 2. イノシシ下顎骨 3. シカ下顎骨(若獣) 4. イノシシ肩甲骨
 5. イヌ上腕骨 6. イノシシ上腕骨 7. シカ大腿骨 8. シカ中足骨(後面、骨角器原材をとった後)
 9. シカ脛骨 1・5・6・9は左側 2~4・7・8は右側

玉ノ井遺跡の縄文時代

額額 茂

今回報告した玉ノ井遺跡の第3次・4次調査において、特に3次調査地点において、縄文時代の遺構が良好に遺存していた。人骨をともなった確実な土壙墓が13基、土器棺墓が3基確認された。住居址も竪穴住居址1軒、平地式住居を1軒それぞれ検出した。出土遺物は縄文土器のほか、貝層をともなっていたため、骨角製品等の出土が認められた。ここでは今回の調査地点の遺構・遺物の内容について確認し、今後の課題を確認しておきたい。

1. 墓壙群

3次調査地点における人骨出土の土壙墓は13基、土器棺墓が3基であった。そのほかにも土壙墓の可能性の考えられる土坑が数基検出されている。成人墓はすべて土壙墓であり、土器棺内からは幼児骨が確認されている。今回の調査範囲において確実に再葬墓であると確認できる遺構はない。

墓壙群の形成時期

土壙墓中からの遺物は非常に少なく、個別の墓壙に時期を与えることは非常に困難である。今回の土壙墓でも土壙墓8は2個体の土器をともっておりおおよその時期を想定できるものの、それ以外の土壙墓からは小破片の土器が出土するのみで、時期は決められない。当然切り合いのある遺構以外はその先後関係についても不確定である。そんな中で土器をともなった墓壙をみても、土壙墓1は巻貝条痕調整の土器をやや多量に含む貝層にパックされており、元刈谷式以前の可能性が高い。土壙墓2からは元刈谷式期の土器片が出土しているが小破片のため、直接土壙墓の時期を表すものであるとは考えにくい。土壙墓3は切り合い関係から、土壙墓2以降であると考えられる。土壙墓4は直接時期を考える材料に乏しいが、以降の脇に立っていた土器(511)が、土壙墓4に関連するものなら、元刈谷式～稲荷山式期に位置づけられるであろう。土壙墓5、6、7についても土器は小片のものばかりで、遺構の時期を直接表す遺物は少ない。土壙墓8については土器を2個体確実に伴出しており、しかもほぼ同じ特長を備えた土器であるため、土器が遺構の時期を表していると判断できるが、この土器が第III群2類であり、土器自体に詳細な時期を付与できないのが残念であるが、元刈谷式の最終末から稲荷山式の段階の土器であるといえようか。土壙墓9も時期については判断が難しい。土壙墓10もおそらく元刈谷式期と思われる大型個体をともなっているが、口縁部を欠き確実な時期判断はできない。土壙墓11～13についても土器から時期を決めることはできない。

土器棺墓については土器棺の土器によっておおよその時期は決められる。土壙墓1はおそらく口縁部文様を持たない土器であり、元刈谷式期から稲荷山式期にかけての時期が想定される。土器棺墓2は確実に元刈谷式期の土器であり、非常によく似た作りの土器2個体が組み合わされた状況から、土器の時期がほぼ遺構の時期であると考えていだろう。土器棺墓3の土器は元刈谷式期末から稲荷山式期にかけての時期が想定される。不確定な部分も多いが今回検出した墓壙はおおよそ元刈谷式期から稲荷山式期に形成されたことがわかる。この段階は5号住居址の機能していた時期よりも下り、2号住居址が機能時には墓域は形成されつつある状況であったと思われる。

墓域の立地環境

玉ノ井遺跡の立地は熱田台地の南端に位置する。その中でも第3図に示したように台地の東より、台地上のもっとも高い場所に位置するが、その中でも西側に向かって流れる小谷の谷戸にあたる。東側に向かって開け、湧水点に近い立地であるが、これは墓地の占地として考える以上に集落としての立地としてとらえるべきであろう。

晩期前半には墓壇と住居址がそれほど時期を分かつずして重なって検出されることが多い。岡崎市の新宮遺跡や市内牛牧遺跡でも住居址と墓域が同一面で検出されている。晩期でも後半になると市内でも墓壇は散見されるが、単独の土器棺として確認されることが多く、居住域と墓域が重ならない状況が認められる。今回の墓域の構成も、居住域の脇に立地するものと考えられる。狭い面積であり全体の状況は捉えきれないが、居住域は西で墓域が東に位置する。高低差はそれほど大きいものではないが、墓域がより高い位置になり、台地の中でももっとも高い場所に位置することとなる。

墓壇の遺存状況と墓壇の認定

今回の調査地点は貝層が遺存していたこともあり、墓壇内の人骨の遺存状況が良好であった。その土壇墓の認定は容易であった。一般的な台地上の遺跡において一つの土坑が墓壇なのかそうではないのかの判断は非常に難しい。墓壇と認定するためには数多くの手順を踏まねばならないし、限られた条件下でしかその判断も下すことはできない。今回の様な貝塚遺跡において、人骨はかなりの確率で残存しており、人間を埋葬した土壇であればかなりの確率で、人骨は残ることになる。一方で人骨の中には部分的にしか人骨を残さないものがある。今回検出した土壇墓の中でも土壇墓1や3などでは遺構内に残された骨はかなりしっかりしているのに、それ以外の部分は跡形も無く消えてしまっている。はじめから存在しなかったのか、途中で滅失して滅失してしまったのか、詳細は判断できない。土壇墓9や11のように後世の攪乱により壊されたものは確認できるが、現在無くなっている部分がもともと無かったものなのか、それとも埋葬後の環境によるものなのかは、判断できない。埋葬方法を考える上で、残っているものがすべてなのかの判断は非常に重要である。

逆に言えば本調査地点における骨が出土してない土坑のすべてが墓壇で無いのかの判断もまた難しい。この問題は貝層の形成時期の問題とも大きく関わる。本調査地点内でプライマリな貝層は、土壇墓1の貝層と、2号住居址の覆土にあたるG8の貝層とSK63であるが、この堆積時期はいずれも元刈谷式期をさかのぼらない時期であると考えられる。これは、住居址2よりも新しい段階の形成であると考えられる。一方で5号住居址の段階では貝層はそれほど顕著に発達していなかったと考えられる。この段階で墓壇が掘り込まれていたなら、一般的な台地上の遺跡と同じ条件となるはずである。人骨の遺存状況に大きな影響が考えられる。もちろん後に貝層が形成されるため、その段階まで遺存していれば、その後の環境は安定するであろうが、それまでの段階に熱田層の強酸性環境下において骨が溶けてしまった場合には、縄文時代の土壇墓であっても、人骨をとまわらない可能性がある。

墓域の全体像と、時間的な変化の姿を確認するためには多くの問題をクリアしてゆかなくてはならない。土壇墓1～3だけがなぜ土壇墓として重複するのかという問題も含めて、墓域の全体的な構成については今後検討してゆくこととしたい。

遺構名	旧遺構名	土坑規模	底面高	土坑主軸	頭位方位	顔面方位	性別	推定年齢	推定身長	埋葬姿勢	人骨残存部位	抜歯	出土遺物・その他	平面図ポイントA	平面図ポイントA
土壙墓1	SK01a	155×80	11.50	N-E 51°	—	—	不明	成人	不明	不明	胸骨・左肋骨左・左立方骨・右中肋骨ほか	不明	土器・骨角器	X=-97763.54 Y=-23402.61	X=-97763.68 Y=-23400.19
土壙墓2	SK01b	120×55	11.60	N-W 68°	N-W 62°	N-E 28°	女	40歳代以下	152cm	仰臥屈葬	ほぼ全身	有	土器	X=-97763.54 Y=-23402.61	X=-97763.68 Y=-23400.19
土壙墓3	SK01c	100×65	11.50	N-E 1°	—	—	不明	成人	不明	不明	右足楔骨・基節骨・中節骨・末節骨ほか	不明	他の個体混じる	X=-97763.54 Y=-23402.61	X=-97763.68 Y=-23400.19
土壙墓4	SK56	50×30	11.50	N-W 75°	N-E 115°	N-W 162°	男か	9歳前後	不明	座葬か	ほぼ全身	無		X=-97759.99 Y=-23401.74	X=-97759.68 Y=-23402.48
土壙墓5	SK06	105×65	11.45	N-E 38°	N-W 146°	—	女	熟年	不明	仰臥屈葬	頭部前半欠損	不明		X=-97761.33 Y=-23404.06	X=-97760.41 Y=-23403.46
土壙墓6	SK45	130×85	11.30	N-E 76°	N-E 76°	N-W 103°	女	熟・老年	150cm	仰臥屈葬		有		X=-97758.93 Y=-23405.05	X=-97759.20 Y=-23406.59
土壙墓7	SK44	95×55	11.20	N-E 94°	N-E 96°	N-W 161°	女		不明	仰臥屈葬				X=-97759.53 Y=-23407.77	X=-97759.38 Y=-23406.67
土壙墓8	SK52・53	不明	11.60	—	N-E 114°	N-E 128°	男	27~30歳	不明	横臥屈葬	右上半身欠	有		X=-97763.61 Y=-23407.18	X=-97763.11 Y=-23406.08
土壙墓9	SK58	90×50	11.40	N-E 12°	N-E 19°	—	女	壮年	不明	仰臥屈葬	頭骨および右上肢欠損	不明		X=-97768.09 Y=-23409.19	X=-97769.20 Y=-23409.45
土壙墓10	SK38	125×70	11.55	N-W 35°	N-W 35°	N-W 176°	男		158cm	仰臥屈葬		有		X=-97769.37 Y=-23408.91	X=-97770.63 Y=-23408.41
土壙墓11	SK27	130×60	11.45	N-W 66°	N-W 95°	N-W 120°	女	熟年	不明	仰臥姿勢	頭骨の一部・脊椎・肋骨右 上腕ほか	有		—	—
土壙墓12	SK22	40×35	11.20	—	—	—	不明	4歳前後	不明	仰臥屈葬か	四肢骨・肋骨・頭骨ほか	不明		—	—
土壙墓13	SK15	110×70	11.40	N-W 11°	N-W 11°	—	不明	成人	157~ 161cm	不明	左右上肢の肘から先	不明		X=-97767.50 Y=-23440.80	X=-97767.42 Y=-23400.03
土器棺墓1	U-1	60×50	11.35	—	—	—	不明	0歳	不明	座位	ほぼ全身	無		X=-97762.92 Y=-23403.80	X=-97762.38 Y=-23403.78
土器棺墓2	U-2	50×40	不明	—	—	—	不明	0.5歳	不明	仰臥屈葬	ほぼ全身	無		X=-97764.49 Y=-23400.69	X=-97764.49 Y=-23401.33
土器棺墓3	SK51	不明	不明	—	—	—	男	3歳前後	不明	仰臥屈葬	ほぼ全身	無		X=-97762.50 Y=-23407.58	X=-97762.31 Y=-23406.85

表1 縄文時代の墓壇

2. 住居址

住居址は、竪穴住居址として2号住居址 (SK02)、平地式住居址として5号住居址 (SB05) がそれぞれ検出された。市内の調査で縄文時代の住居址が縄文時代の住居址が検出されるのことは多くない。確実な調査事例としては、瑞穂遺跡4次調査のSB04の中期末の山の神式期の住居址、同じく中期末の屋外炉が検出されている片山神社遺跡、遺存状況はあまりよくないが前期の竪穴住居址2軒と、晩期の住居址6軒が検出されている。守山区の牛牧遺跡では1968年の守山市の調査時に添え石炉をもつ周堤帯をともなった住居址が検出されている。寺津式期の住居址とされたものである。牛牧遺跡では近年の愛知県埋蔵文化財センターの調査時に、晩期の平地式住居址の可能性のある遺構が報告されている。そのほか不明な点が多いが、下内田遺跡の縄文時代後期の住居址や、名古屋大学で調査した長戸町遺跡でも住居址が検出されていたようである。このように名古屋市内での縄文時代住居址の検出例は少ないが、晩期の住居址として比較対象となるのは、牛牧遺跡例であるといえよう。

愛知県下の縄文時代住居址の集成は岩瀬彰利氏によって試みられているが、岩瀬によると縄文時代晩期前葉から中葉については、竪穴住居址は置き石炉(添え石炉)、平地式住居址は地床炉であることが多いとのことであるが、本調査地点の2軒の住居址もその指摘のとおり、竪穴住居である2号住居址の炉は置き石炉であり、平地式住居の可能性が高い5号住居址は地床炉であった。各時期の遺構が重なっており柱穴の判断は困難であるが、5号住居址は4本以上の柱穴が想定できる。

2号住居址の炉址は炉1が添え石炉、炉2は添え石炉の炉石が抜き取られたものであると考えられる。これは同一住居址内における炉址の据え直しが行われた可能性が高いといえよう。また炉石はくぼみ石の転用が認められる。今回の調査地点から出土した石器は全体に少ないが、その石器が炉石として用いていることは、石器石材資源の有効な活用であると考えられる。熱田台地の南端に位置する玉ノ井遺跡では、大型の石材は獲得が困難である。機能停止後の石器を炉址に転用し、また炉址の据え直しにともなって再利用されている状況からそうした様子がかがえる。

今回の調査地点では、2軒の住居址を確認したが、上面が弥生時代から平安時代にかけての生活面であり、平地式住居址は床面がとばされてしまっている可能性がある。実際、5号住居址は焼土と周辺の遺物集中として確認されており、他の遺跡で確認されている周堤帯は確認できなかった。当然当調査地点内に、上面を後世の土地利用によって削り取られてしまった住居址が存在する可能性も否定できない。各時期の遺構が重複している本調査地点では、柱穴から住居址を復元することは困難であり、いかに上面で検出作業が行うことができるのかが住居址を検出する上で重要であるといえよう。

今回の調査地点では帯状貝層が検出されているが、検出当初は住居址の周堤帯との関係も考えて上面で炉の焼土集中など、住居址施設が無いか検出作業を行ったが、住居址としては確認できなかった。平地式住居の存在が想定される時代の調査にあたっては、当然後世の土地利用にともなって遺構自体が壊されている可能性も大きいですが、検出時には慎重に作業を進める必要があるといえよう。玉ノ井遺跡では今後も今回調査した晩期前半の遺構を調査する可能性があるが、その際にも包含層掘削や遺構検出作業を慎重に進めてゆく必要があるといえよう。

3. 縄文土器

今回出土している土器は、晩期中葉を中心にした時期の土器である。この時期は晩期縁帯文系の土器と、晩期後半にかけて主流を占める、器面調整のみの無文深鉢とが共存する時期である。紙数の都合上、詳細な検討は後日に譲るが、縄文土器についての今後の課題をいくつか指摘してまとめにかえたい。

無文土器の問題

今回の調査地点内で出土した有文の土器は下別所・寺津下層式期から元刈谷式期にかけての時期のものであった。そのうち後期末から晩期初頭の土器は調査区内でも5号住居址付近など、限られた場所からの出土であり、調査区の全体から出土していた有文土器は元刈谷式期の土器であった。この時期の有文土器の比率の高さは増子康眞氏が雷貝塚の報告時にも指摘しているが、今回の調査地点内では、有文土器の多くを図示しているにもかかわらず、元刈谷式の有文口縁部破片は少ない。一方で無文土器の中で巻貝条痕を口縁部付近から施す土器がかなりの量出土している。この巻貝条痕調整のみの土器の大部分は、元刈谷式期に位置づけられるのではないかと考える。巻貝条痕自体は後期末より使い続けられている調整原体であるが、本調査地点において後期末から晩期初頭に位置づけられる有文土器の出土範囲の狭さを考えると、元刈谷式期土器であることが想定される。ナデ調整のみの無文土器とできる土器の一部も元刈谷式期に組み入れることができ、また数は少ないが二枚貝条痕の土器についても元刈谷式期にさかのぼる可能性があることを考えると、本調査地点における有文土器の比率は著しく低いことになる。もちろん稲荷山式期の土器もかなりの数になると考えられるため、無文の土器大部分が稲荷山式期に属し、元来元刈谷式期の遺物自体が少ないと考えることも可能であるが、出土遺物の状況からそれも考えにくい。

縄文晩期前半において、有文土器の比率が下がり、順次器面調整のみを施す土器が増加する傾向にあるのは事実であろう。稲荷山式期以降、有文土器は異系統の土器を除きほとんど姿を消すことになる。こうした状況から、おおよその時期判断として、有文土器の比率で時期判断することは可能であろう。しかしながら、有文土器、無文土器の比率だけでは個別の土器の時間的な問題は解決できない。遺構単位のまとまりなどをとらえる場合など、資料数が少ない場合にも問題が残るであろう。時間軸のどこに線引きをするのかも、不明確となる。

こうした無文土器の問題を解決してゆくためには、調査時に可能な限り無文土器の資料化を進め、層位的な情報を積み重ねてゆくとともに、無文土器についても順次分類可能な要素の比較を進めて行かなくてはならない。今回図示した無文土器と有文土器の時間的についてはその分類も含めて今後の課題としてゆきたい。

主要参考文献

岩瀬彰利 1991「縄文時代の住居址」

岩瀬彰利 1997「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文時代住居の変遷について（I）—三河・尾張編—」『三河考古』第10号 三河考古談話会

佐野元 1999「東海地方西部縄文晩期縁帯文土器様式の様相 瀬戸市大六遺跡出土晩期前葉遺物を中心として」『瀬戸市埋蔵文化財センター紀要10』瀬戸市埋蔵文化財センター

川添他 2000『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

増子康眞 1964「雷貝塚の研究」『鳴海のあけぼの』名古屋市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	玉ノ井遺跡 (第3・4次)
巻次	44
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	58
編著者名	伊藤厚史・額額茂・稲田望子・毛利俊雄・小林謙一・今村峯雄・坂本稔・新美倫子・平井義敏
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178
発行年月日	西暦2003 (平成15) 年 3 月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たまのいいせき 玉ノ井遺跡 (第3次)	あつたくたまのいちよう 熱田区玉の井町921番地	23100	12-10	35° 37' 39"	136° 54' 35"	2002.1.15 ~2002.3.15	228m ²	個人住宅 建設
たまのいいせき 玉ノ井遺跡 (第4次)	あつたくたまのいちよう 熱田区玉の井町9番5号			35° 37' 40"	136° 54' 34"	2002.4.22 ~2002.5.31	80m ²	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉ノ井遺跡	散布地	縄文時代	墓地	縄文土器、人骨	第3次調査
玉ノ井遺跡	散布地	古代	竪穴住居	土師器、須恵器、灰釉陶器	第4次調査

名古屋市文化財調査報告58
埋蔵文化財調査報告書44

2003年 3 月31日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47番地
TEL 052-823-3200

発行 名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
TEL 052-972-3268

印刷 西濃印刷株式会社

